
Find a Meaning of Life

蓮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Find a Meaning of Life

【Nコード】

N2965R

【作者名】

蓮

【あらすじ】

※再構成中

10/9……大学始まってすぐ、という事でちょっと忙しくなってますが少しずつ、ぼちぼち進行中。まだ失踪してないよ↑

死後の世界にある巨大な学校、そこは生前叶えられなかった夢を果

たし無事成仏することを目的にした世界であつた。

しかしそこには理不尽な人生を過ごし、そんな人生を強いた神に子ども達が「戦線」をつくり、反抗していた。

結末を知っていたとしても戦線メンバーにドン引きされつつ今はこの生活を楽しむ事にする……

Another Departure

ここは…どこだ…

目の前にはただ綺麗な夜空が広がっている…

「よっと…」

寝ていた体を起こす…

「此処…どこだ？」

大きな校舎の隣りに校庭が見える。少なくとも俺がいた高校ではなさそうだが

ええい…まずは状況を…

「目が覚めた？」

「は？」

突然掛けられた声に反応して、振り向いた。

そこにいたのはデカイライフルを構えた紫のショートヘアの女の子

…目の前にいるのはどう見てもゆりっぺ…コスプレ…？

「ちょっと聞ってるの？ まあいいわ。ようこそ、『死んでたまるか

戦線』へ

突然だけどあなた、入隊してくれないかしら」

……あれか、ドッキリか。

最近まで自分が見てたアニメの世界に迷い込むなんてどんな三流設定があつていいものだろうか、なあ？

「……カメラどこ？あと自分でちよつと痛いなあ……とか思わな「殺すわよ」ゴメンナサイ。銃ハヤメテクダサイ、サー。」

ゴリツと押しつけられる銃、モデルガンのハズだけどやけに冷たい。細かいところにまで凝ってるんだなあ……

「私は女。で、入るの？……えーと」

「岩沢だ。まず戦線ってのはなんだ」
まずは流れに従っておいた方がいいだろう……

「へえ……岩沢、君ね。私はゆりよ。

みんなはゆりっぺとか……まあ呼び方はどうでもいいわ。戦線っていうのは死んでたまるか戦線、まあ元は死んだ世界戦線、でも死んだ世界戦線って死んだ事を認めることに——————」

……今は夜だ、健全な人間なら眠い。

……何が言いたいかって説明が長い

「————やっぱ死んでたまるか戦線はとつと変えたいわ、あ

なた考えといて！」

「そうか……なあゆりっぺ——」

「いきなり馴れ馴れしいわね、最初は普通ゆりさん、とか言うもんじゃない？」

「……まあ順応性が高いのは良いことよ、あるがままを受け入れるのが大事で——」

「……んじゃゆり、その銃は……」

「ああ、ここに来た奴はみんなそういう反応なのよね」

「なんて名前だ？」

「……訂正するわ、あなたみたいなのは初めてよ……というかそんなことどうでもいいわ」

しかし順応性を高めてあるがままを受け止めろと言われても……どうやら撮影ではないようだし……

受け止めたら『アニメの世界に迷い込んだじゃいました』って事になる。グレイト、どこの二次小説のテンプレだ。

「————そしてアレが戦線の敵、天使よ

……ってアレ？ いない？」

『新入生の滝沢光君ね。』

うおびつくりした!!

……いつから後ろにいらっしやったんですか天使ちゃん

む、つか本名知ってんのか……まあ名簿もあつたしわかるか…

「ハア？ 滝沢ってあなた岩沢君じゃ…」

「ああ、だがそれは仮の名前……！ 岩沢光は魂の名だ！」
将来はなりたい名字 No. 1、文句があるかね。

……そんな「ああ……アホなのか」みたいな目で人を見るんじゃないよ。

まあいいや、振り返って天使……立華奏との会話を続ける。

「会っていきなりで悪いんだけどとりあえず疲れたんだ……寮ってどこ？」

「寮ね、案内するわ。ついてきて」

「ああ、わかっ

「はあ！？ なんで！？ わけわかんないわ！！ どうしたらそんな思考にいたるの！？ さっきの話聞いてた！？ いっぺん死んだら？」

……」

「……これは死ねない世界でよく使われるジョークなんだけど……ってそんなことはどうでもいいの！

な、ん、で

天使の方に行こうとするのよ!？」

「いややっぱ寮の場所知りたいし…」

「……順応性がありすぎるのもどうかと思うわね」

「仲村さん もう時間も遅いんだからあなたも寮へ帰りなさい」

クールに対応する天使ちゃんと脱力するゆり

「もういいわ…また明日で…」

「おやすみなさい仲村さん」

「おやすみゆり」

「……はあ」

After the night

「……こういうのを『知らない天井』っていうのか」

昨日の夜見たとかそんなのは些細な事だ

……どうやらお決まりの夢オチとかじゃないらしい……

……さて、まず何をするにも状況がわからん。

この世界の事も知りたいし……やっぱりSSSの本部に行ってみるのが一番手っ取り早いだろうな……

だが何処にあるんだ？

たしか校長室だったような気がするがだからと言って位置なんてさ

っぱりだ。

腕を組ながらどーしたものかと思いつつシャワーやら何やら色々身支度をしてから寮から出てみると……

「どうかしたの？」

「……で、どうしてあなたがここにいるのかしら？」

「滝沢君が校長室に来たいっていうから案内したの。」

渡りに船、とはこの事だ。まあ呉越同舟でもあったかもしれないわけだが。

呆れるゆりを尻目にひとまず礼を言っておく

「サンクスだ天使ちゃん」

「ええ……でも私天使じゃないわ。

それと授業、始まっちゃうわよ？」

……別に転校生紹介、みたいなイベントがある訳でもない。

「先生にお腹痛いから休むって言うておいてくれるか？」

一時間を見事に過ごすならこの時間はフケてしまおう。これが不登校への第一歩だ。

「そう、お大事にね」

そう言うとき彼女は教室へ歩いていった

……あまりに人の言うことを鵜呑みにし過ぎではなからうか。

悪い人について行ったりしないかとても不安である。まあもう死んでいるんだけど

「てめえゆりっぺを無視するたあ良い度胸だな……」

そう脅さないでください。ハルバードが刺さってる。痛い。

「痛い痛い…で、昨日の続きなんだが…
俺としてはそっちの提案を受け入れたい」

脱力したままのゆりに向き直ると表情を正してそう言った。

ゆ「…まあ細かいことはいいわ。私たちはあなたを歓迎する、ようこそ…」

藤「死ぬのはお前だ戦線」

日「走馬灯戦線」

松「決死隊戦線」

岩「絶対絶命戦線」

「」「へ！」「」

息あってねえなオイ…

ゆ「…そうだ！こいつにも考えさせてあったのよ！

時間はたっぷりあったわ。聞かせていただきましたでしょうか」

……………？

滝「何を？」

ゆ「死んでたまるか戦線に変わる新しい部隊名よ！」

ふむ……

正直特に考えていたわけでもない

滝「日本解放戦線」

ゆ「パクリだし日本解放しないし」

滝「……ネーミングセンスなんて俺にはない」

ゆ「……そのようね」

その後戦線メンバーが改めて自己紹介。

またもや野田に襲われ殺されそうになるが……コイツ入隊する人全員にこんなことやってるのか？

そしてみなが解散していく時岩沢がゆりに話しかけた

……可愛い。

岩「なあゆり……滝沢なんだが陽動班にもらってもいいか？」

……

ゆ「……何故かしら？」

体力はありそうだし戦闘班にいれようかと思っていたのだけれど」

岩「つまりは、それだ。ガルデモは女子だけだし楽器運んだりだとかでどうしても人手不足だからな」

ふむ、とゆりは顎に手を当てながら考える。

ゆ「一理あるわね…滝沢君はどっちが――
「陽動班がいいです、ママ」…あ、そう。いいわ、なら今後は岩沢さんの指示に従いなさい」

滝「イエス、ママ」

ぶっちゃんけあんな人外との殺し合いなんて勘弁だ。

岩「OK、決まりだ。んじゃメンバー紹介するからついてきな」
滝「了解」

それに比べてガルデモのライブを…間近で見られるってんなら俺はそっちを選ぶね

――移動中

何気なしに岩沢は俺に話しかけてきた。

岩「なあお前…楽器は何かできるか？」

滝「ん？ いやよくわからない…何か弾けたような気はするんだが…
……ある意味期待通りの内容だ

しかしなんかこう……モヤっとするな……自分の事がわからんっつ
ーのは……

岩「ああ、記憶が無いパターンか……幸せだな」

滝「岩沢は……あるんだよな、その口調からするに。
あ、いや辛いだろうし……言わないでくれ」

岩「……気をつかせてわるいね」

どこか自嘲するような笑みを浮かべるとそう言った。

やがて空き教室の一つの前にくるとこちらに向き直る

岩「あたしたちが普段使ってる教室はここだよ」

――
――
――
――
――
――
――
――

扉を開けると何人かの人影が見える。

岩「みんなー、新人連れて来たからあいさつでも……」

関「ギャー！！あの音楽キチの岩沢さんがオトコ連れ込んできた！
」

……………思わず頭を抱えた。

入「ほんとだー。誰ですか？岩沢さんのコレだったり？」

そして赤髪の少女は2人を捕まえると制裁をくわえるのだった

ひ「…で、誰なんだいそいつ」

関根と入江が岩沢に頭をグリグリやられている中ひさ子が口を開いた

岩「新入りだよ。昨日来たらしいんだが陽動班に貰ってきた」

関「つーかこいつよく見たらケツコイケメンじゃねーっすか！音楽しか見えないとおもってたうちのまさみもやっぱり恋する乙女なのか、っていいだいいだだだだだ！！頭が割れちゃいます
！！」

岩「やかましい関根！

……やっぱりアタシら女子だけで機材もったりと力仕事はなにかと大変じゃない？だから、さ」

入江が、体のいい奴隷ですね、と笑顔でいったのは流しておく

ひ「なるほどね…

でもあんたはこっちでいいのかい？」

滝「ああ。争いは得意じゃないしさ、むしろありがたいよ

…まあこんなに可愛い子達に囲まれるなんて予想外だったけどね」
嘘だ。知ってたとも。

入「可愛いだなんて……」

ひ「ま、まあ言われて悪い気はしないな」

関「姉御には最初で最後でしょーぜ」

ひ「関根お前後で顔貸せよ」

岩「滝沢にベース弾いてもらうか…」

関「まさみィ……あたしを捨てるのかー!？」

入「タンバリンならあるよしおりん」

関「お前もかみゆきちィッ!？」

滝「……ハハ」

……途切れる事を知らない会話に思わず苦笑してしまう
仲のいい女子同士、会話が始まってしまえばそこに初対面男子が入
る困難さを考えてみて欲しい

その後ガルデモのみんなは場所を岩沢&ひさ子ルームに移し小規模
だが歓迎パーティーを開いてくれた。……女子寮でやる事について

不安はありまくったが断りきれず今に至る。

最初は軽いお菓子パーティーのような感じでワイワイやってたんだが…

滝「…おい酒はいいのか酒は？」

関「男が細かいこと気にすんなよう…私だって酔いたい時くらいあるのさニユフフ」

いや学生だとかそんな事を五月蠅く言うつもりは無いが…何故あるんだ…？売ってるとは思えないし作ってるのか？
というか関根、男子の前で入江の胸揉むとかやめろ

ひ「なんだあ？お前だけは私に最後まで付き合ってくれと信じてたのによおー」

入「ひさ子さん、わたしもう無理ですー…

しおりんもやめてー」

岩「ちゃうねん…うちはただあったかご飯が食べたいんや…」

関根もひさ子も絡み上戸という面倒なやつで同じくもう真っ赤になっ
っている入江になだれかかっていて…岩沢は1人なんかちびちび
飲みながら壊れている…

ぐでんぐでんの死屍累々。悪い酔い方をしたようだ。

……かくいう俺もだいぶ飲んでしまったんだろう……頭がズキズキ

と痛む

滝「……ちょっと風にあたってくるわ」

そう言うのとフラフラとおぼつかない足取りでベランダに向かう

漫画とかならここで1人近くに来てロマンチックな展開になるんだ
ろうが……

ほろ酔いどころか完全に酔いが回っている彼女らじゃ期待するだけ
無駄だろう

まあ素直に今は酔いを覚ますことに専念する

滝「ふう……女子のパワーってすげえな……クタクタだ
……ってかもうこんなに暗く……」

そしてそこまで言って気づいた。

この時間帯、寮は当然閉まっている。
そしてここは女子寮。

滝「……………」

嫌な汗が流れ出す……

どう考えても絶望的なシナリオしか浮かばない……

女子の部屋にお泊まりでキャッキャウフな展開？ バカヤロー。
そんな事より戦線メンバーに朝見られるだとか……

コンコン ガチャ

『周りの生徒から苦情が出てるから静かに……ってここお酒臭いわ』

……最悪のパターンのようだ……

————————————————

関「ゲェっ！ 天使！」

奏「中を見せてもらおうわよ」

チラッと覗くと関根が抵抗していたが……酔っ払いのアテにならない
い守備じゃ突破は時間の問題だろう……他のヤツら寝てるし……

ゴスッ

あ、撃沈した

奏「やっぱり……没収ね……」

でもなんでコップが5つあるのかしら」

……拙い。

ベランダには身を隠せそうな場所もないし…
ガタッ

奏「誰かいるの？」

—翌朝—

少し飲み過ぎたかな……頭が痛い……

とりあえずひさ子達を起こして……って滝沢どこいった？

ひ「……頭いってえ……」

岩「……滝沢は？」

ゆさゆさ揺すってみんなを起こすと早速聞いてみた。

関「襲われてませんよ？」
違う。

入「……ああ、いませんね」

まあいいか……帰ったんだろ

—女子寮前—

奏「滝沢君、どうしてここで寝てるの？」

滝「……………落ちた」

奏「そう……女子寮から？」

滝「……………」

奏「昨日女子寮にいたのね？」

滝「……………」

奏「そう、滝沢君は変態なのね……」

視界がブラックアウトする直前、ハンドソニック、と言う声が聞こえた気がした。

Departure

滝「どうして殺した!？」

周りの奴らがビクツつと俺を見る。

……周りの奴ら？

滝「あー……なんで本部？」

岩「寮の前に全身バラバラで転がってたから松下も呼んで運んだんだよ。」

想像したくないな……

滝「ん、松下……も？」

岩「ひさ子と関根にも手伝ってもらって……アタシは頭」

恐ろしい光景だ。出くわしたら絶対精神が病んでる人だと思って逃げてすぐ110にコールするに違いない。

滝「……今度何か奢るよ」

日「だいたい何があったんだよお前……」

滝「いや言わないけどとりあえず天使ちゃんは誤解させない方がいい……」

きつと変態には赤目モードになるんだ……

ゆ「はいはい話戻すわよ！」

ゆりはビシィッと机を叩いて注目させるとまた話し始める。

ゆ「私達『死んでたまるか戦線』は、つい先日『死んだ世界戦線』に戻ったり『生きた心地がしない戦線』

に改名したものの、明らかなネタだったため再び『死んでたまるか戦線』に戻ってしまったわ。

ここは戦線メンバーの士気をあげる為にも、個性のかつネタにはしり過ぎない新たな戦線名を考えるべきよ」

ああ……そういやそんなのもあったな

……ん？

ふと視線を感じた方向を見ると

（音無いるじゃねえか。

…っーことはいわゆる本編はここからか…）

ゆ「何かないかしら？ちなみに前に滝沢君が来た時に言ったものは全部却下ね」

滝「西部戦線」

ゆ「異常無し……って何言わせるのよ！」

大「じゃあ無敵艦隊！」

ゆ「今度は戦線じゃなくなってる」

岩「ガルデモと愉快的仲間達」

ゆ「ガルデモのオマケみたいじゃない」

藤「玉碎戦隊！」

ゆ「殴るわよ」

日「ライト兄弟！」

ゆ「大喜利か！」

我慢の限界か、ゆりの手刀がはしった。

ゆ「んもう、最後は戦線なのよ。これは譲れないわ。
あたし達はこの戦場の第一線にいるのよ？もっとマシな案はないの？」

そんな時、大山が何かに気付いた様子で声をあげる。

大「ねえ、その人もう起きてるんじゃない？」

彼が示した先には、ソファで横になる少年の姿があった。

ゆ「え？ ああ、気がついた？」

そうだ、コイツにも考えさせてあったのよ。

時間はたっぷりあったわ、聞かせてもらいましょうか？」

音「何を？」

少年が不愉快そうに尋ねたがゆりは尚も続ける。

ゆ「死んでたまるか戦線に代わる、新しい部隊名よ」

音「勝手にやってろ戦線」

藤「ほお、ゆりっぺに刃向かうとはいい度胸じゃねえか」

長ドスを背負いつつ音無に近寄る

音「勝手にやってろって言ってんだよ！」

音無は怒鳴りながら立ち上がると、少年は戦線メンバーを睨みつけた。

藤「んだと！？」

音「何なんだよお前らは！俺を巻き込むなよ！」

俺はとっとと消えるんだ！」

高「消えたい？今ここに存在しているのにですか？」

音「ああそうだよ！」

ゆ「その説明はしたわ」

高「抗いもせず消されることを望むと？」

音「ああ」

高「……抗いもせずミジンコになると？」

音「ああ……あ？ミジンコ？」

滝「…予想外の名称にずいぶんアホな顔になってるな」

藤「は、魂が人間だけに宿るもんとでも思ってたのかよテメエ？」

椎「浅はかなり」

野田、そして部屋の片隅に立っていた椎名も言う。

松「次はふじつぼかもしれない。ヤドカリかもしれない。フナムシであるかもしれない」

岩「クラゲかもしれないし、磯巾着かもしれないね」

音「はあ？そんなまさか？」

高「何故浜辺に集中してるのかと突っ込む余裕もなさそうな顔です

ね。因みに意味なんてありません」

藤「ほおら、とっととここから出ていけよ。天使のいいなりになつて無事成仏するんだろ？」

ふじつぽになつて人間に食われでもすんだな。幸せな来世じゃねえか」

音「……ふじつぽ？」

音無は頭にクエッションを浮かべつつ戦線メンバーは

大「ええ！？ふじつぽって食べれるの？」

高「食用のものもあります」

藤「栄養価は高いらしいぜ」

滝「そーなのかー」

椎「浅はかなり」

不毛なやり取りをしていた…

ゆ「まあまあ皆、そんな追い出すような真似はしないであげなさい。可哀相に、この我が……あゝ……今何だっけ？」

滝「ガルデモと愉快的な仲間達」

ゆ「そうそう♪ガルデモと……」

次の瞬間、爆音と共にの俺の顔面に足跡がつく。

ゆ「もとに戻す。死んだ世界戦線！」

滝「サンクスゆり」

日「……お前キャラ変わったか？」

岩「……馬鹿」

ゆ「この戦線の本部にいる間は安全なんだから、彼はそれを知って逃げ込んで来たんでしょ？」

音「いやぁ知らないし、入ろうとした途端吹っ飛ばされたし、って言うか来世があったとして人間じゃないかもしれないなんて冗談だろ」

松「冗談ではない」

音「だって、そんなの確かめられないじゃないか。誰か見てきたのかよ」

ゆ「そりゃあ確かめられないわよ。」

でも仏教では人に生まれ変わるとは限らないと考えられてるわ」

藤「人にだけ生まれ変わるってのは、よく考えればおかしい理屈だしな」

宗教観なんて人それぞれ、国が違えば地域でも異なるしな

……ちなみに宗教と政治の話、及び好きな球団とかの話はあまりしない方がいい。そう、ツバメの応援はこっそりでいい……っってもう死んでるから応援できないんだな……

ゆ「……まあ宗教なんて人間の考えたものなんだけど……でもね、良く聞きなさい。ここが大事よ。」

あたし達がかつて生きてきた世界では、人の死は無差別に無作為に訪れるものだった。だから抗いようもなかった。

でもこの世界は違うのよ。」

天使にさえ抵抗し続けられ、存在し続けられる。抗えるのよ」

音「でも待て、その先にあるのは何なんだ？ お前らは、何をしたいんだ？」

ゆ「私達の目的は天使を消し去ること、そしてこの世界を手に入れる。」

まだ来て間もないから、混乱するのも無理ないわ。順応性を高めなさい。」

そしてあるがままを受け止めなさい」

音「そして、戦うのか？ 天使と」

ゆ「そうよ。共にね」

ゆりが手を伸ばす

音無はその手を見つめ、そして力強く……

音「……………」

野「早まるな！ ゆりっぺあああ……………」

握ろうとしていた所で、野田がドアを蹴り開け入ろうとしてきた。その瞬間ハンマーによって消えていたのは言うまでもないが。

ゆ「…まあ良いわ。メンバーを紹介しとくわね

私はゆり、この戦線のリーダーよ。

で、彼が日向くん。

見た目通りちゃんぽらんだけど、やるときはたまにやるわ」
一瞬誇らしげな表情をする日向だが

日「つて、フォローになってないぜ！」

直ぐに気付いて突っ込む。

ゆ「彼は松下くん。柔道五段だから、敬意を持って皆は松下五段と呼ぶわ」

松下は音無に握手を求める。

それに応えると、今度は大山が続いた。

ゆ「彼は大山くん。特徴がないのが特徴よ」

そんな時メンバーの1人が音無に絡む

TK「Come on, let's dance！」

音「いや、踊らねえけど」

ゆ「この人なりの挨拶よ。皆TKと呼んでいるわ。本名はだれも知らない謎の男よ。」

眼鏡を一々持ち上げて知的に話すのが高松くん。本当はバカよ」

否定することもなく、高松は眼鏡を持ち上げる。

「後彼が藤巻くん。」

で、さっき飛んでったのが野田くん。

影で浅はかなりって言い続けているのが椎名さん。

こっちに座ってるのが岩沢さん。陽動部隊のリーダー。その隣にいるのが新入りの滝沢君。彼も陽動部隊よ。」

岩沢と共に軽く会釈しとく。

ゆ「後、ここにいないだけで、戦線のメンバーはまだ何十人も校内に潜伏してるわ。」

……そう言えば、あなた名前は？」

すると、少年はしばらく考え込む、

音「ああ……えっと、お……おと……音無。」

ゆ「下は？」

音「思い出せねえ。」

日「記憶のないパターンか」

滝「まあないならむしろ幸せなんだろうさ……」

岩「だろうね……でも思い出した時は辛いだろうけど知っておくべきでもあるし……正直難しいかな」

— — — — —

と、あらかた紹介も終わってゆりが声を上げた。

ゆ「それじゃあ、役者も揃ったところで、今回の作戦を説明するわ

久しぶりにオペレーショントルネード、行くわよ」

そーいや音無が入ってすぐのオペレーションはトルネードだったな
……

今やつの頭の中では竜巻のイメージが浮かんでいるのだろう。

音「そのオペレーションは何をするんだ？」

ゆ「生徒達から食券を巻き上げる！」

ゆりがガッツポーズをして断言する。

音「その巻き上げるかよー!!」

やるな主人公……もう馴染んでツツコミとは……

音「なんだよそれ！イジメかよ！失望したぜ！武器や頭数だけ揃え
やがってよ！」

野「貴様！それはゆりっぺに対する侮辱発言だ、撤回してもらおう！」

ハルバートを突き付ける野田。

ガッ！

俺は野田の後頭部を殴った。

滝「違うぞ音無！あれはいわば岩沢達の努力の結晶！それは岩沢に対する侮辱発言だ、撤回して貰おう！」
構える俺。

ガッ

岩「ややこしくしないでいい」

岩沢に殴られた。

松「我等フジツボ絶滅保護戦線は数や力で一般生徒を脅かす真似など決してしない！」

大「あれって絶滅するの」

松「いつかはするだろ」

音「でも巻き上げるって言っただろ！」

滝「まあやれば解るさ」

ゆ「あんたも初体験でしょうに…」

そんなこんなでオペレーションは始まった

わけなんだが…

滝「ライブ見てていいんだろうか、良いよね！」

楽器の準備は大変だったが逆に言えば始まればもうやることがないのだ。

『息継ぎさえ出来ない街の中』

しかし……やっぱりライブってのは良いもんだ。熱気とかハンパない……

NPCは今までずっと生で聞いてたのかと思うと羨ましくてしょうがないぞ

そして終焉、巨大扇風機と舞い散る食券…もともとはガルデモメンバーへライブチケット代わりに渡す、というものだったらしい……

それがこの紙吹雪の正体だ。

さて…やるか…

滝「うおおおおおおお！！！！！！」

巨大な…所詮虫取り網を持って走り回る俺。

関根曰わく『好きなもんが食いたいだろ？だから私たちの分数集め
といて！！』
だそうだ

走り回って網はほばいっぱいになったし…そろそろいいだろう

…ふとガルデモメンバーを見ると俺見て笑ってた。おい関根、お前
がやれって言ったんじゃないやねえか

滝「ライブお疲れ様、最高だったぜ！」

岩「サンキュ。お前もお疲れ、な」

関「マジであんなアホみたいなさるかフツ？アホだなーお前」

滝「お前が言ったんじゃないかよ！？」

入「お疲れ様です…集め過ぎじゃないですか？」

ひ「お疲れ。…確かに集め過ぎだな…まあ遊佐がやつらの分集めてるし大丈夫だろ」

滝「んで、何食うんだ？」

リュックサックいっぱいに詰めた食券を渡す

関根はから揚げ定食とパフェ

入江はチンジャオロース

岩沢は肉うどん

ひさ子は…カツ丼と牛丼…よくはいるな…

んで俺は…

「」「それはやめとけ（いた方が）」「」

全員から反対される中麻婆豆腐を選択。

いや、それでも一度は味わうべきだと俺の中の何かが伝えているんだ……

滝「ゴクリ……」

たとえ辛いものが苦手でも……バーモンド中辛ですら食べられないとしても！

パク

バタ

辛い辛い辛い辛い痛い、辛い、っーか痛い！！！！いやしかしこの風味は……！でも痛い！！！！

倒れてジタバタして悶絶する俺。

岩「いわんこっちゃない……ほらやるよ」

岩沢は飲んでいたB O I V I Cを投げてくれた。ありがてえ！キャ

ップを開けてラッパ飲み。半分以上あった水を全て飲み干した

滝「死ぬわ、コレ。だが辛さを乗り越えた先には素晴らしい味もあった。だから」

ドバツ

俺は関根のご飯とから揚げに残り全部をかけてあげた

関「滝沢 あああー！！！！何してくれてんだああー！」

滝「いやいや物欲しそうにマーボを眺めていたからプレゼントだ。何、遠慮はいらない。」

関「…私が見てたのはまさみの飲みかけウォーターだぜ…」

ピシッ、っと軽く叩く

…飲みかけ？

入「直前まで岩沢さん飲んでましたね、B o l v i c」

岩沢を見ると……うどんをすすっているのか顔が見えない。

ひ「……もう入っていないじゃねえか」

ビクッ

岩「……その……なんだ。忘れてた。」

滝「へ？」

岩「いや……だから……凄くつらそうだったから……あんまりそういう事考えてなかった。悪いね。」

悪いどころか大歓迎です

あとなんでまだ井で隠してんすか

つか横の2人何覗いてんだ俺にも見せろ

関「うい、ういやつじやまさみ」

ひ「こいつあやベーぜ……」

どんな表情!?

岩「なあ、結局お前夕飯食べてないだろ?買ってきなよ」

滝「いや俺は」

岩「買ってきなよ」

滝「おかずはここに」

岩「買ってきなよ！」

滝「イエス、ママ」

「……いねえし……」

天井を持って帰ってくるとメンバーの姿は既になかった。

まあ1人で食うかと思ったら音無が寄ってくる

滝「どうした音無？ちなみにこの天井はやらんぞ」

音「いや違う違う。：お前も新入りなんだろう？妙に慣れてるというか…疑問は感じないのか？」

滝「まず順応性を高めときな。

あともしかなくても『あんな可愛い子をよってたかって撃って』とか考えてんだろ？

まあその点は俺にはよくわからん…陽動班だしな…」

音「……やっぱ話し合いとかも大切だと思わないか？」

滝「お前がそう思うならまずやってみるといいさ。彼女がなんで俺たちの邪魔をするのか、ゆりの言うことが全て正しいとも限らないだろ？」

まあ食い終わったし俺は帰るからゆっくり考えな」

そう、お前は間違っていない……でも自分で考えて結論をださないと、
な

Angel

校長室

ゆ「……全員揃ったみたいね……皆、これより作戦会議を始めるわ！」

部屋の明かりが落とされ、ゆりの背後にスクリーンが展開する。

ゆ「高松くん報告お願い」

高「はい。」

武器庫からの報告によると、弾薬の備蓄が尽きるそうです。次一戦交える前には、補充しておく必要があります」

大「新入りも入ったことだし、新しい銃もいるんじゃないの？」

ゆ「そうね……分かったわ。」

本日のオペレーションは、ギルド降下作戦といきましょう」

音無は何かを想像したらしく身震いしていた。

日「どうした音無？」

音「高いのは、得意じゃないっつうか……」

ゆ「何言ってるのよ。」

空から降下じゃないわ。此処から地下に降下よ」

音「なんだ、地下か…って地下!？」

ゆ「あたし達はギルドと呼んでる、地下の奥深くよ。そこでは、仲間達が武器を作ってるの」

音「じゃあ、天使にバレないようにってことか」

ゆ「そうね。ギルドを押さえられたら武器支援がなくなり、私達に勝ち目はなくなるわ」

説明し終えると彼女は通信を繋ぐ。

『へーいつ』

ゆ「私だ、今夜そちらに向かう。トラップの解除を頼む」

『了解、今晚だな。待ってるぜ』

ゆ「よしっ。今回はこのメンバーでいきましょう」

大「あれ? ねえ、野田くんはいいの?」

藤「あのバカはどうせまた単独行動してんだろ」

TK「All right let's go.」

滝「ゆりー、このメンバーって言うけど俺と岩沢もいくのか？」

ゆ「ええ、そのつもりだけど？」

滝「…むしろこの作戦こそ天使を見張ったりするべきだと思うんだが…」

というかあんな鬼畜トラップなんて味わいたくない

松「確かにそうだな……」

藤「トラップ強制発動したらシャレなんねーぜ……」

ゆ「い、今それを言おうとしたのよ。

んじゃ改めて…陽動班は天使を監視、場合によっては足留めもお願い。」

椎「浅はかなり…」

顔をひきつらせるゆりであった

一 廊下

岩「でも監視とか足留めとか…どうするのさ？」

滝「まかせろ岩沢…俺に良い考えがある」

ククク…おれってば天才じゃなからうか…

音楽室

ひ「……で、なんでこうなったんだ？」

ひさ子の目の前では入江、関根と天使：奏がお菓子を食べつつ談笑していた

入「あ、ひさ子さんもどうです？」

関「ちよつとみゆきち、ひさ子さん来たら無くなっちゃうよ？」

入「それはひどいんじゃない？ふふ…」

奏「美味いわよ？」

ひ「滝沢：説明しろ」

滝「ゆりがギルド行くから来ないように天使ちゃん監視しとけて言ってるさー

コソコソするのも面倒だから連れてきた。」

岩「まあ邪魔ならないしなんら問題ないよ」

岩沢も曲作りの時間が監視で動き回って潰されたりしなくて機嫌は良いようである

ひ「それはまあいいとして：作戦開始は夜だろ？今からずっと一緒にいるのか？」

…16時2分

岩「…………まあ関根達がなんとかするだろ」

関「天使ちゃん…このうまい棒くわえて首を少し横に傾けて…
そう…いいいいいよ」

パシヤ

パシヤ

奏「わらひへんひひゃはいは」

入江「しおりんいけない…それはいけないよ…」

ひ「…………だな」

入江と関根は鼻血を流しながら…ダメだこいつら…

岩「ひさ子はどうする?」

ひ「あー…暇だし2人があれじゃ練習も出来ないだろうし藤巻達と
卓囲んでくるわ
岩沢も来るか?」

岩「いや…あたしはいい
一応見てなきゃいけないからね…それに…」

もう少しで出来そうなんだ」

滝「出来そうって…新曲？」

岩「うん、ガルデモにはちょっと合わないかもしれないけどね……
バラードなんだ」

俺とひさは岩沢からルーズリーフ——1番上にはmy son
gと書かれている——を受け取る

岩「んじゃ…ちょっと聞いてみてくれるか？」

そうやって岩沢は歌い出す

……その歌声を聞けば聞くほど……

……俺の脳裏に『あのシーン』が蘇り……そして気づくと涙が零れ
ていた

そして岩沢が歌い終えた、ありがとう、と……

関根や入江、奏も聞き入っていたようだ…

滝「良い曲だよ……ゴメンなんか泣けてきた

それに、岩沢には…ロックよりバラードの方が似合う、な」

ひ「あたしもそう思う……凄く…良かった」

関根、入江も同じ心境のようだ。

そして奏も……

奏「……岩沢さん、あなたたち毎日ここで練習してるのよね？」

岩「ああ……いつでも来なよ」

ひ「いや……天使は授業があるだろう？……いやあたしたちも無くはないけど」

奏「確かに生徒会長として領いちゃだめよね……でも……休み時間、あと放課後にまた弾いてくれたら嬉しいわ
あとライブ……次はいつ？」

奏は普段から想像つかないほど嬉そうに微笑んで聞いてきた
……というか止めないのか

滝「……ライブ止めないのか？」

ひ「確かに、いつも止めにくるよな」

奏「今回だけよ……『ハーモニクス』」

そう呟くと奏が2人に分身した
…なるほど、それなら止めにいきつつライブも見れるな……
……というかそこまでして見たいのか

関「ええっ!?!ど、どうなってるの?天使が2人!?!」

入「……ひ、一人お持ち帰りしていいですか?」

ひ「なんでもアリだなおい…」

岩「滝沢……次の曲のテーマはドッペルゲンガーと萌えにしようと思っただが……」

滝「止めといたほうがいいと思うぜ」

そして奏Sがしゃべりかけてきた

奏A「これなら会長としての責務を果たしつつ」

奏B「ライブを見られるわ」

滝「で……どっちが見るんだ?」

奏A「大丈夫、どちらも同じ私だから」

奏B「戻った時にはわかるわ」

奏A「そして止めに行く方は」

奏B「あまりやる気を出さないようにするわ」

滝「…とりあえず戻ってくれ。カギカッコ使いまくるのは面ど…って何を言っているんだ俺は…」

まるで何者かの意志が働いた様な…

奏は頷くと1人に戻る

ひ「…しかしあっさり過ぎて今までののはなんだったんだろうって思うね…」

岩「それはほら、奏もやっぱり音楽が好きなんだろ」

一瞬の沈黙

奏「好きよ、でも…」

ひ「岩沢には負けるだろ」

入「音楽キチ……」

関「いつか絶対「アタシ音楽と結婚する」とか言い出すね」

滝「好き勝手言ってるなおい」

岩「……まあいいよ

ところで天使に聞きたい事があるんだけどいい?」

奏「繰り返すけど天使じゃないわ。奏、立華奏。…ちなみに何？」

……まさかこの序盤でゆりに代わって核心に触れるような事、聞いちゃうのか？

岩沢の真剣な表情にガルデメンバーも息をのむ……

岩「奏、あんた……………」

楽器は弾ける？」

……

「」「音楽キチッ……！」」「」

ひ「てっきり天使の能力とかそういう事聞くんだった……」

入「岩沢さんが音楽キチだって忘れてました」

関「てっきりそういう道に走るのかと思ってたよ」

滝「これが岩沢が岩沢たる所以か……」

またも好き勝手言い始めるメンバーと

奏「ピアノなら弾けるわ」

シンプルに返す奏

岩「オーケイ、決まりだ。次のライブでマイソウル ユアビーツ演奏しよう。
奏にはピアノ弾いてもらう」

「「「「ええっ!?!」」」」

全員が全員啞然としている、普段感情を出さない奏でさえ目と口を開きっぱなしである

岩「……? どうかした?

さあそうときまったら練習だ…楽しみだな……ピアノ弾くならギター弾くよりむしろ静かめな感じで…ヴァイオリン…いやキーボード

でいけるか…

あ、ひさ子、楽譜どこに置いたっけ？」

ひ「いやいやいや待て岩沢。勝手に自己完結するな」

入「音楽…！」

関「キチツ…！」

滝「…というかガルデモにキーボードいないだろ？」

岩「…：頼めないか？」

小首を傾げて眉を下げて困ったような…

滝「E a s y c o m e , e a s y g o ! I k i s s y o u !
やるよ…！」

関「はやっ！！ていうかお前TKかよ！？」

奏「…ライブ見るとは言ったけど…弾くとは言ってないわ」

岩「…もしかして迷惑だった？」

眉を下げて困っ（略

奏「問題ないわ」

天使ちゃんからサムズアップいただきましたッ！！

そして練習で夜は更けていく…

ゆ「なんか私たち空気じゃない？」

日「言うなよ」

藤「ひさ子のやつ…麻雀来なかったぜ…」

松「うむ、モチベーション下がったな…」

椎「浅はかなり」

My Song

校長室

バラード調の曲が演奏されると集まっていた戦線メンバーはそれに聴き入る。

俺ひとり涙だだもれ。

日「おい滝沢、良い曲だからって人前で泣くなよ。ほら胸貸してやる、泣くならここで思いっきり泣け」

滝「だってマジで良い曲じゃねえか…というかお前…コレなのか？」
せっかくの感動ムードが台無しである

日「ちげえよ！」

日向がアホしてる横でゆりはゲンドウポーズを崩さず聞く

ゆ「何故新曲がバラード？」

岩「いけない？」

ゆ「陽動にはね」

ゆりが答えると、今度は俺と音無が声をあげた

滝「ゆりっぺてめえ岩沢にペケつけるたあどう「その…陽動ってのは何なんだ？」」

ゆ「トルネードの時に聞いてなかったの？」

彼女は校内でロックバンドを組んでいて生徒の人気を勝ち得ている。

私達は直接彼らに危害は加えないけど時には利用したり、妨げになるときはそこから排除しなくてはならない。

そういう時、彼女達は陽動をするわ」

音「NPCのクセにミーハーな奴らだな」

滝「野田やめて痛い、まだ大事な事言っていない」
ハルバード刺さってるがな

滝「つまり岩沢達のバンドにはそれだけの実力と魅力があるってことだ。語ると長くなるがそれでも言うならば例えば
日「実際に戦線の中にもファンは結構いるしな」

音「へー」

遮る日向、音無も適当な相槌を打つ

貴様等…いつかシバいちやる！

岩「……で、ダメなの？」

ゆ「……うーん…バラードはちょっとね……しんみり聴き入っちゃったら、私達が派手に立ち振る舞えないじゃない」

それを聞くと岩沢は残念そうにギターをケースにしまう

岩「そう…じゃあボツね…」

周りのやつらに聞こえないように小声で喋りかけた

滝（岩沢…曲は最高なんだから気にすんなよ？）

岩（ああ、ありがとう…でもあんたはちょっと涙腺緩すぎじゃない？）

滝（うん？）

俺は苦笑いをしてゆりに向き直る

ゆ「気を取り直して、総員に通達する。

音無くん、カーテン閉めて」

ゆ「今回のオペレーションは、天使エリア侵入作戦のリベンジを行う。決行は三日後。」

暗くなりスクリーンが展開された校長室にゆりの声が響く。

その場にいた戦線メンバー達は思わず歓声をあげる。
高松が問題点を挙げようとするがゆりは手で制する。

ゆ「今回は彼が作戦に同行する」
そう言うとき後ろに隠れていたオカッパ頭で度の眼鏡の小柄な男子が前に出た。

「よろしく」

野「ゆりっぺ、何の冗談だ？」

藤「そんな青瓢箪が使いもんになるのかよ？」

高「眼鏡被り…」

ゆ「まあまあ、そう言わないでくれる？」

それを聞いてもアホはハルバードを構えた

野「はっ！ならっ、試してやろう」

音「……お前、友達いないだろ？」

滝「触れないであげて……」

するとハルバードを構えられたまま彼はしゃべり始める

「3・ 1 4 1 5 9 2 6……」

松「ハッ……まさか円周率っ！」

男子生徒が円周率を口にすると野田は苦しみ出す！

高「眼鏡被り……」

大「止めてあけて！その人はアホなんだ！」

それを見た音無は、心底呆れ果てた様子だ。

ゆ「そう、あたし達の弱点はアホなこと」

音「リーダーが言うなよ」

ゆ「前回の侵入作戦では、我々の頭脳の至らなさを露呈してしまった。

しかし！今回は天才ハッカーの名を欲しいままにした彼：ハンドル
ネーム竹山くんを作戦チームに登用、エリアの調査を綿密に行う」

高「……今のは本名なのでは？」

竹「僕のこと、クライストとお呼び下さい

そこカギカツコの前をクに！」

「竹山」はどや顔で指を突き出し高らかに言った

藤「見ろ：カツコいいハンネが台無しだ：流石ゆりっぺだぜ：」

音「そういや天使エリアってなんなんだ？」

日「天使の住処だ」

音無はラヒ○ユタ的な物を想像しているんだろう：顔がアホや：

日「中枢はコンピュータで制御されてんだ」

今度はハウ○的な物を想像しているんだろう：

ゆ「そのどこかに神に繋がる手があるはずよ」

大「こいつはとんでもない作戦だあ！」

ゆ「二度目ということもあって天使も前以上に警戒しているはずよ
ガルデモにはいっちょ派手にやってもらわないとね」

岩「了解」

TK「catch a some luck！」

そして解散…岩沢にガルデモメンバーのところに一緒に行こうと誘われるが…

すまない俺はやるべき事があるんだ…

学習棟B棟 掲示板

来てみると掲示板の前で案の定ピンク色のツインテがガルデモのポスターを貼りまくっていた。

滝「オイそこのピンク色のアホ」

ユ「誰がアホじゃコラアア！」

って、変態さんじゃないですか」

滝「ん？初対面だよな…って変態？」

ユ「斧持ったアホっぽい先輩が「あいつは岩沢目当てで陽動班に入った極度の変態だから気をつけろ」って。本当ならいてもうたろかコラ！」

あいつか…！

……音無といいあいついつも悪口言ってるのか？

滝「違う…違うぞ…イヤチガワナイカ」

…ってそんな事はどうでもいい、早くコレはがせ、全部。」

ユ「な、なんでですかあっ！？陽動班でしょ！？むしろあなたも岩沢さん達のライブ宣伝すべきじゃないですか！？」

思わず耳を塞ぐ…騒がしいなオイ…

滝「違う違う、流石に先生達にバレるだろ。配るんだよ、手渡しで。体育館に先生乗りこんで来たらどうすんだ？」

ユ「あつ、そっか！先輩頭いいですね」

滝「とりあえず不安要素は極力少なくするべきだ。

：頼んだぞ。ライブに人が来るかどうか：岩沢が笑えるかどうかはお前にかかっている！」

指をビシッ！と指す

ユ「岩沢さんのため！！わかりました！ユイ頑張ってきます！！！」

そう言うやいなや掲示板のポスターをあつという間にはがし教室へ走っていくユイであった：

俺はそれをアホだと思いつつ：見送った、手を振った、アホだなあと

さて：あとはなんか飲み物でも買ってってやるか：

――学習棟A空き教室

ここではガルデメンバーがライブに向けて最後の調整をしていた

ひ「おっと」

ひさ子のギターの弦が切れた。

ひ「悪い、直ぐ張り直す」

岩「ふう…じゃあ休憩」

岩沢が言うともみんなは楽な体勢をとる。
そしてふと廊下の方を見ると影が見えた

岩（滝沢…って音無か？）

――

飲み物を買って鼻歌を歌いながら練習場所の空き教室の前に行くと

（誰だ？…まさか覗き見か？）

滝「滅せよ変態っ！」

スパコーン

――

音無が視界から消えた

岩「……気のせいかな？」

――

そして俺は何食わぬ顔で教室に入っていた

滝「遅れた！」

岩「ああやっぱり滝沢だったのか」

一瞬遅れて

音「いてえよ！滝沢か！！」

岩「？」

滝「いやいや俺は影でひさ子様の荒ぶる胸や岩沢のなまめかしい美脚に目を奪われてた変態を成敗……ってなんだ音無か」

岩「滝沢……お前後でちょっとツラ貸せよ？」

音「というか気づいてなかったのかよ？！俺は上手いなあって聞い

てただけだ!」

滝「……てっきり覗き見る変態がいるのかと……」

岩「ん、それ自白してる?」

滝「……泣けるぜ」

その様子を見てみんな笑っていた

笑うのを止めた岩沢がひさ子に向き直って言う

岩「あ、ちょっと抜けるから弦張り終わったら教えて?」

ひ「ん、分かったー」

音「でもすげえ熱だった…確かに一般生徒が熱狂的になるのもうなずけるよ」

滝「やっと気づいたか」

岩「ありがとう…」

そういや…あんたら記憶無いんだってね？」

滝「だな…」こっちの記憶はあるのに

音「まあ…」

岩「そりゃ二人して幸せだ…」

滝「だな…」

音「あんたの記憶も…その…」

岩「誰かの記憶、聞いた？」

音「ああ、ゆりの…」

岩「ああ…あれは最悪ね、あたしのはそこまで酷くない…」

音「そこまで？」

……

滝「おい岩沢……」

俺が言うのを岩沢は手で制す

岩「いいんだ……むしろお前には迷惑かもしれないけど聞いて欲しい

うん……好きな歌が歌えなかった、……それだけだよ」

そして岩沢は語り出す……自分の生きた人生を……

「……両親はいつも喧嘩ばかりしていた。

自分の部屋もなく、その怒鳴り声の中……隅で小さく丸まって耳を塞いだ。

自分の殻に閉じこもるしかなかった。

どこにも休まる場所はなかった。

そんな時出会ったのが「SAD MACHINE」というバンド。
そのボーカルもあたしと同じ恵まれない家庭環境にいて、精神的に
辛い時期は耳をイヤホンで蓋して、音楽の世界に逃げ込んだと聞いた。

あたしもそうしてみた。

世界が吹き飛んでいくようだった、
ボーカルがあたしの代わりに叫んでくれる、

訴えてくれる。

常識ぶってる奴こそが間違っていて…

泣いてる奴こそが正しいんだと…

孤独な私たちこそが人間らしいんだと

理不尽を叫んで叩きつけて、破壊してくれる。

……私を救い出してくれた。

こいつと出逢ったのは雨のゴミ捨て場、あたしは歌い始めた……

何もないと思っていた私の人生にも歌があったんだ……

バイトをしてお金を貯め、レコード会社のオーディションを受け続ける日々。

卒業と同時にあたしは絶対あの家を出て上京して……

そして音楽で生きて行くんだ……！

…そう思った…

・

・

バイト先で倒れて……

次に目覚めた時、
あたしは言葉を話せなかった。

頭部打撲

脳梗塞による失語症

原因は両親の喧嘩のとばっちりだった……。

運命を呪った。

どこにも逃げ出せなかった。

そのまま…

私の人生は、ここで……終わった」

気づいたら俺は岩沢を抱きしめていた

岩沢は俺の胸を濡らしつつ訴える

岩「私は……幸せになりたかった……」

滝「……ああ……」

岩「ただ……ただ歌いたかったただけなのに……それが……っ！……出来
なかったんだ……っ！」

そして1人、孤独なまま……」

滝「………岩沢……」

岩沢の涙を拭う……

潤んだ瞳がこちらを見つめる……

そして彼女は目を瞑って……

だんだん顔が近づいて……

いーつーもひーとりーで
あーるいーてーたー

はあ…

そして俺は立ち上がった、なるべく音を立てないように…音無だけに……

音「……チーズ蒸しパンになりたい……」

ひ「……新人クン、ちよい……」

教室の空いたドアから頭だけ出したやるせない表情のひさ子から手招きされ教室に入る

音「ひさ子……？」
だったか、

ひ「……どうしてあんなった？」

ふと見渡すと入江も負のオーラを撒き散らしている
関根に至っては口からエクトプラズムが…

音「……傷を広げないでくれ……」

ひ「……こっちだって弦張り終わったのに出るに出られず……」
関「まさみが私の手を離れる時がきたか……」
入「岩沢さんには負けなと思うってたのに……」

ふーりかえるーとー
みんーなーはとおーくー

Singing For You

滝「落ち着いたか？」

……あー……なんだ…その、ごめん」

岩「いや……何謝ってるのさ……」

うん、でもなんか泣いたらすっきりしたよ、ありがとな滝沢

さて、最後の練習しようぜ？」

岩沢が教室に入ると死んだ魚のような目をしたメンバーがいた…

岩「……みんなどうした？」

これからライブなんだからテンション上げていかないと」

「「「おー」」」

駄目だなこれは……仕方ない…

滝「ライブ頑張った奴にはこの岩沢が飲みかけにしたB o l v i c
を贈呈しよう」

ひ「お前らノってるかアアア??!!」

関 入「「オオオオオー!!!!」」

…もうダメだこのバンド

関「あと滝沢お前ライブ終わったらあたしらのオモチャだからな！
覚えてろよ！」

滝「何故っ?！」

入「拒否権なんてありませんよ！」

……俺が何をした…

一一一 体育館

ゆ「いい？今回は最小限の人数で作戦を行う。

作戦決行は本日、1900——オペレーション、スタート！」

私は相棒のアコギを舞台の中央後ろの方にたてかける。

「特等席だぜ？」

それだけ言って、私はいつも演奏する立ち位置につく。

「さあ……派手にやろうぜ！」

前奏が始まると同時に舞台の幕が上がり観客の顔が見えた

————side takisawa

crow songがちょうど終わり、体育館の入り口で見ていた
が満員御礼とは言えない状況だ：

ユイがポスター頑張って配ってたし、ファン達の反応をみるともつ
と来てもいいと思っていたのもあり、正直素直には喜べなかった。

滝「どうした：もっと集まれよ：」

そして流れるあの独特な入り方をする曲、ガルデモの曲の中でもト
ップクラスの人気がある……

滝「alchemy：やっぱりそうなるか：

ピー…ガチャ

あー遊佐ゆっさゆさ聞こえますかー？」

トランシーバーで遊佐に連絡をとる

遊「はい、こちら遊佐です。何か？」

…スルーされた

滝「…そっちで音響いじって廊下にalchemy軽く流しちゃつてくれ。聞いたら集まりよくなるだろ」

遊「了解、そちらは気をつけてください」

そして廊下の方でも曲が流れ出すと思った通りNPC生徒が堰を切ったように体育館に流れてこんでくる…alchemyが始まる前の2倍にはなったんじゃないか…？
満員御礼ってやつだな

そして…来たな…

滝「こちら滝沢、先生が来た。これより扉を閉め体育館を物理閉鎖する。

あ、はいれなかった子達がかawaiiそうだから廊下の音量上げといてあげてな」

カッコつけたが要はカギかけるだけだ。

…うし、鎖に南京錠つけて…完了。

『歩いてきた道振り返らない
嫌な事ばかりでも前へ進め』

そしてalchemyもいよいよ終盤へ…

滝「奏、俺達も準備しようか」

奏「ええ、いきましよう」

準備も終わり…気づけばライブはいよいよ終わりに近づいていた
そしてステージ上に上がって岩沢を見ると…満足感に満ち溢れて…
そう、とても輝いて見えた

岩「ん、来たな…

次、最後はゲストにも弾いてもらう！
my soul your
beats！」

奏がピアノを弾き出す：

岩沢とひさ子はギターを置いて：ってひさ子も歌うのか！

『『目覚めては繰り返す 眠い朝は
襟のタイをきつく締め

教室のドアくぐるとほんの少し胸を張って歩き出せる

そんな日常に吹き抜ける風』』

『聞こえた気がした』

『感じた気がしたんだ』

『震え出す今この胸で』

『もう来る気がした

幾億の星が消え去ってくのを』

『見送った』

『手を振った』

『『よかったね、と』』

俺と奏もバッチリ弾けていて観客もノってきた……つーかひさ子も
歌声結構良い感じ

そして岩沢とひさ子が二番を歌おうとしたその時……

けたたましく……その場にそぐわない嫌な音で体育館の扉が開いた

「こら！お前達！」

教室達が、体育館に入ってきたのだ。

滝「馬鹿な……鎖に南京錠だぞ……どうやって……」

奏「そういえば……あの鎖……若干緩くなってた所があったわ……
でもだからといってあの体育教師……力強すぎね……」

滝「マジかよ……」

その後ろについて入館する奏Bを見ると、

遊「……天使が出現しました」

ゆ『了解』

そして生徒達はその身でバリケードを作るがものともせず教師はステージの上に踏み込む……

そして……みんな取り押さえてしまった

遊「陽動班、取り押さえられました」

ゆ『了解、ここまでね……』

捕まったガルデメンバーを目にしてNPC生徒達が騒ぎ出す

「離してあげて！かわいいそうよ！」

「そうだそうだ！！」

それに対してガツチリムキムキの体育教師が声を張り上げた。

「今までは大目に見てやってただけだ！
頭にのるなっ！」

そして体育教師は岩沢のギターを掴む

「これは捨ててもかまわない？」

おい……止めろよ……

滝「…触るな」

岩「…触るな」

「…なに？」

『……それに……それに触るなあ！！！！』
『』

俺と岩沢は押さ付けていた教師を振り払い……俺は体育教師に体当たりして押し倒し……岩沢はその隙にギターを奪い取る

同時にひさ子も教師を振り払い、ステージ裏へと走り出し、教師達はそれを追いかけてようとするが、遊佐と奏がその足を掴んで転ばせた。

そして、俺達は体育教師に壁際に追い詰められていく…

「ほら、よこせ」

俺は岩沢の前で手を広げ彼女を庇いつつ、振り向いて叫んだ。

滝「歌え岩沢！！お前が好きな歌を！お前自身の歌を！」

彼女は小さく…それでも確かに頷くと凜とした声で歌い始める

『常識ぶってる奴が笑ってる 次はどんな嘘を言う？』

岩沢がギターの弦を弾くと、その音はスピーカーを通じ学校全体に響き渡った。

その演奏が始まった瞬間…全校生徒が岩沢のその歌に聞き入る…

『それで得られたもの

大事に飾っておけるの？

でも明日へと進まなきゃならない』

好きだったのに……歌いたい歌を歌えなかった彼女の一生をこめた
歌詞。

『だからこう歌うよ

泣いてる君こそ 孤独な君こそ

正しいよ 人間らしいよ』

その歌は、彼女が今まで歌ってくれたどの歌よりきれいで……

『落とした涙が　こう言うよ

こんなにも美しい…

嘘じゃない

本当の

僕らを

ありがとう……』

滝「……そうだ……それがお前の人生なんだよ……」

岩沢が音楽に救われたように……岩沢の音楽も誰かを救って
いけるんだ……」

俺の前の体育教師が振り上げた拳を止め目を見開く

その瞬間……

「なあ」 見たくない

ガタツと音をたて……

「そうだろ？」 振り向きたくない

岩沢のギターが床に落ちた。

「……………岩沢？」

――校長室

ゆ「……………なんで?……………」

滝「…………ライブの途中に教師達に制圧されそうになって逃げてきた」

ゆ「違うわよ! どうして天使がここにいるかって聞いているの」

ゲンドウポーズを崩さずゆりは二人に聞いた

奏「岩沢さんのギターを……………運んできたわ」

ゆりは頭を抑え俺の耳元で言う

ゆ（……………そもそもなんで天使を陽動するライブで天使が演奏してるのよ！！）

滝（細かい事は気にしないでいいし変装してたから大丈夫だぜ、気づいてる奴はいなかった）

ゆ（あんたらどおんだけアホなのよ！SSSの制服に帽子かぶっただけじゃない！！）

椎「浅はかなり」

ゆ「まあでもこっちの作戦も……………上手くいったわよ」

滝「そいつは良かった」

奏「……………美味いわ」

まさか本人の前で「天使ちゃんの部屋荒らしてました☆ミ」なんて言うわけにもいかず……………言いよどむゆりをよそにB o l v i cを飲みまったりする奏……………

奏ちゃん……………アカンそれは俺のや

岩「事前に大きく宣伝したからかな…

それに校内放送までしちゃったしね。バレて捕まりそうになったよ」
ソファから体を起こした岩沢は言う

ゆ「起きたの？」

…ライブお疲れ様、でも倒れるまでやるのはどうかと思うわよ?」

歌い終わった後……岩沢は疲れてたんだろう、一安心したのか歌い終わった瞬間に気を失ったのだ

岩「ああ……うん……でも、凄く、最高に気持ち良かった」

——一本音を言うとおえるかもしれないと思った

最後の曲を歌ったとき、あれだけ騒がしかった会場がそのときだけ……私だけのステージになって……皆、私の歌だけを聞いてくれた

(……でも)

……歌い終える直前、私は誰よりも強く……そう、アイツに響くように歌っていた事に気づいたんだ

(……もう……消えられないかな?これは……)

ゆりはその表情に思わずドキッとする……

ゆ（お、落ち着きなさい私……ゆりが百合だなんて面白くもなんともないわ……）

岩「……？」

椎「……浅はかなり」

Day Game

―――校長室

野「こいつがガルデモに参加したいってやつか？」
藤「あり得ねえ…」

……

一同渋い顔をしている

日「誰こいつ？」

高「良いですか？ Girls Dead Monsterはロックバンドですよ？」

岩「バラードもゆりから許可はとったけどね」

野「アイドルユニットにでもするつもりか……」

ユ「いやちゃんと歌いますから！どうか聞いて判断してください！」

滝「歌うって……岩沢、お前解雇だそうだぞ」
岩「……え？」

ユ「そ、そんな恐れ多い事できません！ただ歌うので聞いて判断して欲しいだけです！」

ユイはというとマイクスタンドを握る

野「まあ形だけは様になってるな……」

———

ユ「イエーイ！みんな今日は来てくれてありがとう！」

ユイはそう言っているとマイクスタンドを蹴り上げて……スタンドは天井に突き刺さりコードで首吊り状態に……

「「「うわっ……」」」

高「何かのパフォーマンスですか……？」

野「デスメタルだったのか……」

TK「Crazy Baby!!」

ユ「し、死ぬ……」

音「…事故のようだぞ？」

———

ゆ「とんでもないお転婆娘ね…クールビューティーな岩沢さんとは正反对。」

高「Girls Dead Monsterの…ボーカル希望ですか?…いかがなものかと」

日「というか岩沢で充分だろう…」

岩「でもあたしが動けない時とかあるかも……」

藤「いや、ひさ子も岩沢が出来ないならやらないだろうぜ」

ユ「コラァー!ちゃんと歌えてただろ!

これでも岩沢さんの大ファンで全曲歌えるんだからな!!」

日「心に訴えるものがなかったな」

高「ありませんね」

藤「ねえな」

滝「全曲歌えるとか当たり前だろ」

野「いや、それはどうだ…?」

岩「へえ…後で聞かせろよな?」

ユ「コラァー!そんな曖昧な感性で若い芽を摘み取りにかかるな!無視するな!それでもお前ら先輩か!」

日「うるさい奴だな」

野「既に言動に難ありだな」

大「どうするの?」

ゆ「…やる気だけはありそうね」

藤「単にミーハーなだけだぜ」

埒があかない、そう考えたゆりは言う

ゆ「……後はバンドメンバーに任せましょ？」

岩「……え？」

投げやがった……

それを聞いてユイは瞳を輝かせて歓声をあげる

「ホントですかぁ！？やったぁ♪

ギターの岩沢さんやひさ子さんと組めるう♪

岩沢さんのあのクールで深い歌声、そしてひさ子さんのあの殺人的なリフ捌き、たまんないッスよねえ？

2人してあったまどうなってんスカねえ♪」

戦線の一部から声があがる。

野「まだ岩沢了承してないぞ」

藤「クビだな」

高「クビですね」

日「まあ、クビになるだろうな」

滝「岩沢、今度は音楽、のつかないキチガイ扱いされてるぞ」

岩「……生きてる事が不幸で

こんな僕なんて誰も……」

last songッ?!

滝「岩沢！俺は必要としてるぞ！」

岩「滝沢……」

滝「岩沢……！」

椎「浅はかなり」

ゆ「……バンドがこんなんじゃ、球技大会で大々的な作戦は行えないわね」

岩「ゆり、あたしの体……何処も悪くないぜ?」

ゆ「楽器、今人を手配して奪還作戦中よ」

岩「…………」

没収されてたのか……そりゃドラムとかアンプとかとっさに持つの無理だもんな……

音「球技大会？そんなものがあるのか？」

ゆりの言葉に若干空気だった音無が尋ねる

ゆ「そりゃあるわよ。普通の学校なんだから」

日「大人しく見学か…」

ゆ「もちろん参加するわよ」

音「参加したら消えてなくなるんじゃないのか？」

滝「ゆりがこう言うんだから普通に参加する訳がねえ…」

ゆ「流石滝沢君は順応性があるわね。

もちろんゲリラ参加よ。

いいあなた達？

それぞれメンバーを集めたチームを作りなさい
一般生徒にも劣る成績を納めたチームには

……死よりも恐ろしい罰ゲームよ」

そして不敵な笑みを浮かべるゆりに
音無以外全員がガタガタ震えて怯えていた…

— — —

死よりも恐ろしいとか冗談こうむる…

みんながこの世の終わりのような顔をしている中、日向が音無の肩をつかんで耳打ちをする

日「音無…俺にはお前が必要だ!!」

音「なんだ？お前…これなのか？」

音無は手の甲を頬にあてる…

日「ちげーよ!! チームの話だ!! いいか？ゆりっぺは本気だ…負けたらえらいことになる…」

音「いいけど…メンバーの当てはあるのか？」

日「心配するな、俺は人望だけで生きてきたような男だぜ？」

浅はかなり…

俺は小声で藤巻に話しかける

滝（藤巻…一緒にチーム組もうぜ）

藤（あ？なんだ珍しいな俺に声かけるたあよ…お前んとこ入って俺に何のメリットがある？）

滝（ひさ子に良いカッコ見せたいだろ？岩沢も呼ぶからぜってえ来るぜ？）

日向が音無を口説いている、その間に俺は藤巻を説得する事に成功、岩沢の手を引き食堂へと向かう。

Balls Up!

―――食堂

俺達：俺と岩沢、藤巻はガルデモのメンバーと合流し、席につく。

滝「どうやら野球大会にゲリラ参加するらしい。ゆりは「負けたら死より恐ろしい罰ゲームよ!」とか言っていて：このままだとヤバイ。

そこで、」

お馴染みゲンちゃんポーズで俺は続ける。

滝「まずメンバーを集めよう、幸いにも頭数はだいぶ揃ってるからあと3人だ。頑張ろうぜ!」

岩「ああ…」

ルールブック片手に相槌をいれる岩沢と

藤「ひさ子：カッコ良いとこみせてやるぜ…」

ひ「：なんであたしに言うんだよ…」

……アホと…

関「みゆきち野球やったことある?」

入「ないよ」

……………

：不安だ。って、む!

あれは松下五段!

滝「やあ松下、球技大会…俺らのチームに入らないか？」

松「滝沢か、すまん。もう高松に誘われてしまったんだ。断る理由も…」

滝「肉うどんとチャーシュー麺でどうだ？」

そして松下とガシッと握手を交わした
…次の奴は誰にしよう

そう考えていると向こうから高松とTKがやってきた。

松「高松、すまんが滝沢のチームに入る事にした」

食券片手に謝る松下

滝「そういうわけだ、むしろお前らも入らないか？」

高「……そうですね、メンバーが集まらなくて苦戦していた所ですし……」

TKもサムズアップ。

オーケー、メンバーは集まった。

――――グラウンド

滝「というわけでオーダー発表しまーす。

一番シヨートひさ子

二番サードTK

三番ピッチャー藤巻

四番センター松下

五番キャッチャー高松

六番ファースト俺

七番セカンド岩沢

八番レフト関根

九番ライト入江

これで行く。何か質問は？」

高「何故私はキャッチャーなのです？」

滝「それっぽいから。」

藤「なんで俺がピッチャーなんだ？」

滝「ひさ子が一番見れる位置に置いてやった。活躍しなけりや悲惨だな」

滝「あと松下にはガルデメンバーをカバーしてもらいたい。囲まれて羨ましいぞ畜生」

松「うむ、わかった。」

そして試合開始、

対戦相手はかわいそうなモブキャラども…

一回表

ひ「藤巻、頑張れよ！」

藤「うおおおおお！！！！！！」

藤巻が鬼気迫る投球をし三振、三振、ファーストゴロ、チェンジである

裏

ひさ子 綺麗に合わせレフト前へ

TK ホームラン！流石TK生前何してたか想像がつかないぜ！

藤巻 「おおおっしやあ！！！！」

またホームラン…ヤバイこのアホ使える…っ

松下…期待を裏切らず三者連続アーチ

高松、あたりは良いあたりだが真正面、アウト

そして俺の打順…バットを小指余らせず持ち素振りをする……

相手チームはさっきからホームランばかりなうえ今の素振りを見て
内野外野全員深めに守備をしいている……

セーフティ余裕でした

岩沢もセーフティバント…いや怪我したくないのか…手はそのまま
にコツンとバットに当てただけで……足は速いようでこれもセーフ、
むしろ俺が危なかった

関根、三振……まあ初めてならしやあないよしおり嬢。

入江もお疲れ様…次の試合また頑張れば

：

カキーン

遊「……滝沢チーム一回コールド勝ちです」

無線から勝利報告が入る、ゆりは望遠鏡で見ていたので正直意味無いのだがそれはそれでおいとく

ゆ「うわエグ……でもまあ順当に戦線チームが勝ちあがってきているわね……」

みんな死よりも恐ろしい罰ゲームとやらを恐れて必死……滑稽だわ」

この女、悪魔である

遊「戦線ではユリッペさんの罰ゲームを受けた人は発狂し人格が変わると有名ですから」

ゆ「そうね……ってどんな罰ゲームよ!？」

……っと炙り出しに成功ね」

グラウンドはに奏と直井が向かっている

ゆ「こっちは武器もなし、あるのはバットとグローブ……はたしてどんな平和的解決を求めるのかしら?見物だわ」

――――

奏「貴方たちのチームは参加登録していない」

滝「別にいいじゃないか奏ちゃん。参加することに意義があると思うぞ」

岩「：野球部の参加は駄目なんじゃなかったの？」

藤「おい……いくらなんでも勝てるわけねえよ……」

関「はアッ！！足洗って待っておけよな！！」

指を指す関根はひさ子にめられていた

こいつ頭は ユイか……

――――

「竹山チーム：コールド負けです」

無線機から届く悪報に顔をしかめる。いくらなんでも強すぎる……

ゆ「くく！！あんなの反則じゃない！！」

遊「私達も充分反則なんですがね」

ゆ「私達はいいのよ！！残るは2チームか……ああ、もう！天使をギャフンと言わせるつもりだったのに使えない連中ね！！」

遊「ギャフンと言わされちゃいましたね。」

準決勝

一回の攻防で4点先取するが裏に2点とられる

藤「クソッ流石に野球部のレギュラー相手じゃ抑えきれねえ…！」

藤巻の闘志は燃え盛っているのだが流石に相手が悪い…

滝「いやむしろよく抑えてるよ」

ひ「そうそう、なかなかカッコよかったよ？」

関「ひさ子様がおデレになられた…ありがたやありがたや」

ひ「うるせーよ、不純なたとえ動機でも素直な感想だ。てかお前また三振とか良いところ無しじゃねーか」

関「いやあたしはひさ子みたいに脳筋じゃ、っていいいいいい！！」

そしてその後は点をとったり取られたり…

ゆ「この調子なら勝てる！やるじゃない連中！こんなフェアによ？

天使の思うままにならないことなんてかつてあったかしら！ いい気味ね！ オーホッホッホッホッ」

試合は9回裏1点差で2アウトを迎えた。

滝「……最終回、1点差、2アウト、満塁……いけるか？」

奏「タイム、代打私。」

松「大丈夫、天使でも詮は女の子、力は……」

藤「……おい、バットどころか腕が見えねえぞ……」

岩「そして……私の試合は終わった」

つか銃弾見て弾く奴抑えるのが無理だよ。

それよりなんだあの打球。ライナーで校舎に刺さってたし（比喻に非ず）バットはくの字に曲がってたぞ。ヘタしたら死者が出る

―――そして決勝戦

日向チーム対生徒会チーム

日向達のチームがあまりにアレなので急遽松下が助っ人に行くことに……

ゆり「この調子なら勝てる！やるじゃない連中！こんなフェアによ？天使の思うままにならないことなんてかつてあったかしら！いい気味ね！オーホッホッホッホッ……」

遊「ゆりっぺさん、その台詞2回目ですよ？」

そして、試合は9回裏1点差で2アウトを迎えた。

滝「(勝てるかもしれない…。最終回、1点差、2アウトランナー2・3塁…)

……ってあれデジャヴ？」

音無がタイムをかけたようで日向のもとへよっていく……

藤「……早くしやがれ、いつまで話してやがる……」

奏にサヨナラ打たれて藤巻は多少荒れているようだ

再開、運命の1球が投じられた…

カキン

そして……打球は日向のいるセカンド周辺へフラフラとあがり…

音無とユイが日向に猛ダッシュ。

そして

ユ「スキあり！！よくも正固めにしまくってくれたな！このオオオオ！」

音「…」

審判「ホームイン！」

日「おめえはこんな時に…何キレてんだよ…！」

審判「ホームイン、試合終了！」

その様子を俺達は呆然として眺めていた…

岩「……ユイは…とりあえず保留にしよう。私は歌い終わる、あの最高の瞬間に押し倒されたくない」

「「あたし（私）も」」

滝「……」

ゆ 「もう2人とも消えてくれ……」

S t a i r w a y t o H e a v e n

――――校長室

ゆ「みんな集まったわね…

これよりオペレーション、ハイテンションシンдрームを行う!」

スクリーンにはOperation High Tension Syndrome!と現れる

その言葉に校長室の空気が固まる

音「…え!?!何でノーリアクション?」

高「それは初めて聞くオペレーションですね…」

戸惑うメンバーにゆりは続ける

野「ゆりっぺ、そいつはどんな作戦なんだ?」

ゆ「まあ、簡単に説明するわ。

一日中ハイテンションな行動を取り続けるの!

何をするにもハイテンション！

移動の時は全力疾走！

ジュースを飲む時は一気飲み！

話しかける時は大声で！

笑顔も忘れないでね！」

またみんな一瞬固まり…

岩「ごめん、アタシはそういうのパスで……」
いち早く再起動した岩沢は立ち去ろうとする

が俺は岩沢の腕を掴む

滝「…岩沢…心配するな

メイン回にしてやるからな！」

岩「そんなのアタシのキャラじゃないよ!!」

滝「だからイイ!!」

音「……いつにも増して病的だなこのアホは……こいつのコレはハイテンションの分類でいいのか……?」

野「少なくとも何かの症候群だろ、病気でひとくくりにしていい」

藤「つかずつとハイテンションとか罰ゲームだぜ……何が目的なんだ?」

ゆ「そう……それは私達にとって苦行でしかないわ。というかわば前回の罰ゲームよ」

でもまあ天使はお人よし様だから、そんな私達を見て、

『どうしてこんなに楽しそうに学園生活を謳歌してるにも関わらず、成仏して消えないのか』

と不思議に思うはず。

すると天使はどう出るのかしら？」

藤「どうにか出るのか？」

ゆ「出るわよ、

あたし達が学園生活を喜んで送っている。

それは成仏の条件のはず。

なのに、あたし達が一向に消えない。

『一体全体どういうことなの？』と、これまで一度もなかったイレギュラーな事態を混乱し始める。

すると彼女は、コンタクトをとろうとするはず……」

「まさか！？」

ゆ「そう、神にこの世界に異常が起きてることを伝えにいくはず！
その後を追って行けば、あたし達は導かれるのよ。」

神の元へ！」

「「「うおおおお！」」」

メンバー内から歓声上がる。

日「だが確かにそいつはステージ作戦だが、俺達はどれだけ頑張ればいいんだ？」

ゆ「今日の午前9時から作戦スタート、午後9時をもって作戦終了とするわ

……因みに作戦が失敗したら……皆で一週間断食、因みに私は天使の監視役だから除外ね。

皆、よろしく♪」

「「!？」」」

高「……悪魔のような人だ」

日「つかそれ以外の何もんでもねえぜ……」

ゆ「では、オペレーション……スタート!!」

————音楽室

ひ4「……ハイテンションって……私らも？」

遊9「……はい、つまり本日午前9時：つまり今から戦闘班陽動班に関わらず、ハイテンションな行動をとってもらうことになります」

ひ2「マジかよ…」

関96「オイ！ひさ子オ！！」

そんなテンションでどうすんだよおっ！？」

ガシィ！と後ろからひさ子を鷲掴みである

ひ123「うひゃあっ！！！？？」

入74「流石しおりん！どうなるか結果が見えてる事やるなんてアホすぎるよ！」

関62「痺れて憧れたかいみゆきち！つーかなんなんだよコレ！悲しくなってくるよチクショー！」

ひさ子は指をポキポキ言わせながら関根を捕獲する

関1「……」

ひ77「ハイテンションでやりゃいいんだろ！
ナァ関根？」

入93「ジャイアントスイング…！」

しおりんパンツ丸見えだよ！

ひ80 「あ」スルッ

関89 「やあああああ……あ……あ……へふっ！？」

窓の下落ちちゃった？！」

ガラッ

滝99 「待たせたな！」

お姫様抱っこでただいま到着！ああ……怖いものなど何もないよう
だ……

岩255 「ひっひさ子っ？！お願いだから見ないでっ！！」

ひ99 「good:！」

ひさ子様サムズアップ

岩85 「誰？！キャラ変わってるよ？！」

入92 「キャー大胆！>ワ<」

関99 「おい滝沢テメーまさみが欲しかったらあたしを倒していき

な!!!!」

関根も窓から血まみれで這い上がってきた。正直怖い。

入42「しおりんはどうでもいいとして、

岩沢さんはいいですね、12時間滝沢さんとイチヤイチヤしてればいいんですから」

岩98「イチャ…っ!違う、違うよ入江!

しかもなんでアタシだけ違うみたいな言い方するんだよ!ライブしようぜライブ!」

岩沢は顔を真っ赤にして否定するがガルデモどころかSSSに素直に聞く奴がいるはずなく…

ひ74「いや礼はいらないよ岩沢、こんな作戦だし今日のガルデモのギターとボーカルはユイで我慢しとくから。

よっしゃグラウンドでライブやるぞ!関根、ユイ呼んでこい!!」

関63「アイ、ママ!」

岩18「理不尽だ……」

滝92「さあ行こう、見せつけてこよう!」

岩80「お願いだから離して!!」

――グラウンド

ガルデモがライブするからってついてきたら……なんか一般生徒も集まってきてねえか？

、とそこに日向ら戦線メンバーも到着

日52「ここで今から俺たちが野球すんだよ！打って走って守って青春の汗をかくんだよ！この仲間に囲まれて幸せそうなバンド大好きっ子めが！」

ユ62「野球よりもバンドの方が青春じゃろうがあ！この野球好きすぎて、幸せな野球バカ人間がー！！」

藤67「いやいやー。青春と言ったらダンスだぜー！みんなで踊るのが一番幸せになれるぜー！」

TK2「…L e t s : d a n c i n g …」

野球組、ライブ組、そして異常な程腹の膨らんだ藤巻と大山、それにやせ細ったTKが割って入る。

それぞれの意見がテンション高くぶつかり合い……

音9 2 「ならもう運動会でいいんじゃないかあー！ー！ー！ー！ー！ー！」

音無が声を張り上げてそう提案する。

2
4

日5 2 「いーじゃねえか運動会！青春の香りだー！」

高6 2 「ええ。この肉体は運動会のために作ってきたようなものですからー！！！」

藤7 2 「いい腹ごなしになるじゃねえか。めっちゃ幸せになれるじゃねえかー！」

大7 4 「なれるなれるー！」

ユ89 「いくぞお！お前らあ！！」

『オオオオオ！！』

ユイの言葉に反応し、NPC達も声を張り上げていた。
そして、運動会は始まる。

リレー競走、棒倒し、玉入れ、組体操、パン食い競走と続いていき
……次の競技は応援合戦。

女子がチア姿で入場すると、大歓声があがる。

『うおおおお！！！！！！』

かくいう俺もその1人である

滝96 「チアさわキタアアアアア！！！！！！」

日50 「……すげえ……ルパンダイブで2mは跳んでるぜ」

ユ45 「要はアホですね」

……れに……

滝72「ん？」

ひ97「それに…触るなあアアアアア！！！！！」

バキッ

日47「……人って飛ぶんだな」

ユ42「……ひさ子さんの腕どうなってるスカねえ？」

最後に俺は、珍しくオロオロしている岩沢の眩しい姿とデルタ地帯……そしてその様子を見てさらにその真っ黒オーラを増幅させたポニーテールがトドメを刺しに来るのを見て、

遊33「こちら、物凄い盛り上がりを見せております。天使の方はどうでしょう。呼んでみましょう。ゆりっぺさーん」

学習棟A棟 生徒会室前

ゆ77 「はい！こちら中継のゆりっぺです！」
ノリノリで答え……

ゆ13 「って何やらさんのよ！」

マイクを床にたたきつける

ゆ34 「今、天使は生徒会室で話し合いの様子。もう少ししたら終わると思うわ」

――――

体育倉庫にやってきた生徒たち。

彼らは運動会に使う道具をグラウンドに持っていこうとしたのだが、その一つに椎名がそこで黙々と作っていた特製ぬいぐるみが引っ掛かっており……

—
—
—
—
—
—

滝3 「……ん？」

岩3 2 「気がついた？」

いってえ……

ひさ子のやつ目がやる気だったぞ……

滝1 「……死ぬかと思った」

岩3 1 「……死んでたね、ひさ子と関根とユイ、お前が気絶した後
も色々してたからな。

入江なんか微笑みながらコンクリのブロック頭に落としてたし」

………

滝2 5 5 「……ところでいくつか質問いいかな？」

岩
4
0 「ん、なに？」

S t a i r w a y t o H e l l

あ、あくまでさり気なく会話の波に乗せた感じで…

滝255「あー……とりあえず今運動会種目なに？」

岩40「今は…これから騎馬戦が始まる所だね」

滝255「んじゃ……」

何故膝枕してくれてたり…？」

ああ、全然流れ乗れなかった

岩81「ん？！いい、いや、なんだ。前のライブの時のお礼というか…その、ね…」

正直カッコ良かったし…」

赤面してうろたえる岩沢は普段とギャップがあってまた素晴らしいわけで、俺も頭を支えてくれてる太ももの感触にいつまでもこうしていたいんだけど……

ひ「ほお」

……目があつた。

反射的に顔を後ろに背ける…

とまあ背けるまで今膝枕してもらってる状況というのを忘れてたわけです…

岩99「ふぁ……!!…って

こ、っくら!! お前膝枕してて普通こっちみるかぁ?!」

眼前には頭動かしたせいでただでさえ短いスカートが捲れてデルタ地帯が…

関44「ねえねえタツキー。銃と斧どっちがいい?」

滝13「(誰だ…!?) ……ベースかな」

ユ44「どいてください岩沢さん、そいつ殺せません」

岩7「え…っと、ユイ? 光は何も悪くないよ?」

入44「下の名前! いつからそんな関係になったんですか?」

滝13「…ごめんなさいむしろ俺が聞きたいです。初めてです。何故このタイミング…」

……いつの間にかさっきのメンバーもいるし……

ひ44「……そう、あんたは何も悪くないよ。ただね、こうしないと気がすまないんだ」

い…

滝79「嫌だぁー!!!!!!」

飛び起きて脱兎のごとく逃げ出す俺

タァン タァン

滝79「(ヒイツ! 撃ってきた!!)」

だ、誰か助けてえっ!!」

凄まじく情けない姿である。

しかし騎馬戦に椎名が乱入し……その声を聞いた者もいなかった……

そしてグラウンドの惨状に奏も気づいていたのかこちらへ歩いてきた

奏20「……………あなた達、なんてことをしてくれたの？」

流石にひさ子らも銃を持ったままとはいかず隠す
その光景に俺はハッとして岩沢の下へ走り出す

椎82「これを見ろ」

そんな奏に対し、椎名はお手製ぬいぐるみを見せる。

奏20「それが？」

椎9999「キューーーーーーット!!」

椎名の唐突な行動に対し奏は展開していたハンドソニックを収める。

奏30「……………戦意はなし……………か」

そう言って奏はハンドソニックをしまう

滝64「待て、奏！これを見ろ！」

皆が一斉にこちらを向き、

岩沢をお姫様抱っこしているのを見て「ああ、またか」という顔をする

岩54「…あたしは何でここにいるんだろう」

奏40「…それが？」

滝9999「キューッ……」

ざくり

岩「お前はアホか！お前のエレキギターにガットギターの弦張ったろか！」

ひ「話が繋がってねーよ！」

岩「そか、でうちが消えた夜は宴会か！飲めや騒げやの岩沢成仏祭か！」

ひ「んなことしてねえよ！」

入「すみませえん、してました、テヘ♪」

滝72「うおっ！」

なんだ、なんだ今のは！

…夢か？

岩—99「…あ、起きた…？」

.....

滝3 「…ひさ子、何が起きた？」

岩沢が死んだ魚のような目をしてたので近くにいたひさ子に聞いてみる事に

ひ24 「あ？…お前が椎名の二番煎じやらかした後奏がハンドソニックスでざくりと…わかるな？

んでその後イロイロあって……作戦は失敗。戦線の一週間断食が決まった。ちなみに岩沢は一週間音楽禁止、ゆりが「そっちの方が罰ゲームになるでしょ？」って

滝49 「うわあ…

つか岩沢かわいそうに…」

ひ15 「んでお前は一週間岩沢の半径5mに近づくの禁止な」

滝20 「はい？」

ひ15 「ゆりが「死んでくれ」ってさ」

滝1 「……………」

五日後

滝 「……夢も希望ありません」

バタツ

そして最後に残っていたユイもついにピックを落とした……

ユ 「みんな……ごめんなさい……」

一人でここまで頑張ってきんですが……このあたしも……もう……限界だ、よ……」

バタツ……

バ
タ
ツ
：

遊「ガルデモメンバー……全滅です」

ゆりは普通に水を飲みながらその報告を聞いていた。

ゆ「別に死にゃあしないわよ」

周りは死屍累々といった状況であるが……

遊「やはり悪役は……ゆりっぺさんが一番お似合いですよ……」

遊佐は瞳を閉じることもできないままにその意識を手放した

B
A
D E
N
D

F a v o r i t e F l a v o r

――――校長室

ゆりは毎度お馴染みゲンドウポーズで戦線メンバーに口をひらいた

ゆ「ついに、この時期がやってきたか。」

音無「なんだ？　なんか始まるのか？」

ゆり「天使の猛攻が始まる！」

音無「天使の猛攻…猛攻ってどうしてなんだ？」

音無は奏の大軍と戦う戦線メンバーを想像したようで不安そうに聞いた

ゆり「……テストが近いから」

音無「あー、何故？」

高松「考えれば分かるでしょう？授業を受けさせることも大事ですが、テストを受けさせていい点数を取らせることそれも大事なことです。天使にとっては…」

ゆり「けど、このテスト期間、逆に天使を陥れる大きなチャンスとなり得るかもしれない。」

藤巻「何か思いついたみたいだな、ゆりっぺ！聞かせてもらうぜ！」

ゆり「天使のテストの邪魔を徹底的に行い赤点を取らせまくる。そして、校内順位最下位に突き落とす。」

大山「それがなんになるの？」

岩「奏がかわいそうなだけじゃない？」

ゆり「……名誉の失墜、生徒会長として彼女は威厳を保っていられるかしら？」

野田「それで弱くなると？」

ゆり「少なくとも教師や一般生徒の見る目が変わるわ。その行いは今までなかった変化が生じる。」

松下「どんな？」

ゆり「さあ？そこまで私には読めない。」

松下「じゃあ、意味がないんじゃないか？」

メンバーから乗り気でない声があがる

「―――けど、彼女がもし神の創造物である天使なんかではなく…

その精神が鋼ではないなら、私たちと同じ人の魂であるなら…

その名誉の失墜は彼女に精神な打撃を与えることになる――

ゆ「……まずは今回の作戦メンバーを決める。

天使のクラスでテストを受けるための根回しは既に完了しているわ」

藤「じゃあ、メンバー全員で固めちまったらいいんじゃないか？」

ゆ「じゃねーか、じゃないわよ！、ミスは許れないんだから！！

作戦が途中でバレたら、私たちはすぐに別の教室に移されて天使に赤点を取らせる細工ができなくなるのよ？！」

野「なるほど、じゃあオレはパスだ。

そういうのは女々しい奴らの出番だろ」

ゆり「そこで今回のメンバーは、岩沢さん、滝沢君、高松君、日向君、大山君、竹山君、音無君よ」

岩「あたしもか…了解」

音「また俺かよ…」

竹「僕のことはクライストと…」

ゆ「見た目が普通の奴らを選んだだけよ。それじゃあ、オペレーションスタート!!」

――――学習棟B棟 教室

ゆ「テストの席はその日の朝くじ引きで決定される…

これで天使の席の近くの席でないと細工は一気に困難になるわ。いい？あの席の前を引き当てなさい！」

滝「無茶だろ……」

そしてくじを引く面々…

日向、駄目

岩沢、駄目

高松、駄目

大山、駄目

俺、駄目

音無、駄目

ゆり、駄目

失敗か、とみな思ったが：

竹「36、天使の前です」

ゆ「よっくやったわ！！」

答案用紙が配られる際、2枚持っておきなさい。その一方を回収する時に天使の物と掬り替える。

そっちの答案用紙は白紙に：いや、白紙じゃあ逆に不自然に取られるわね。馬鹿みたいな答えを並べておいて！」

竹「と、言われましても：」

ゆ「上から将来になりたいものを書き連ねておきなさい！」

竹「物理のテストですが？」

ゆ「いいのよ！」

飛行機のパイロット♪とかイルカの飼育員♪とか書いておきなさい！」

滝「馬鹿どころかもはや哀れだなあ：」

高「回収の時はどうするんですか？」

確かにそれは問題だ、とゆりに視線が集まる

ゆ「…日向君！タイミングを見計らってアクションを起こしなさい！全員がそっちに注目するように！」

日「んな、無茶な…」

ゆ「あなたを何のために入れたと思ってるのよ？」

日「ええっ？まさかそんな道化師役とは…」

滝「…：頭数か！頭数揃えたかったんだろ！」

岩（…歌えばいいか）

ゆ「で、その瞬間を見計らって竹山君が後ろの席から回収し終えた答案用紙から天使の用紙を引き抜き偽物とすり替える。とにか想定外の出来事が起きても慌てず、みんなでフォローしあっていくのよ！いい？」

竹「でも待ってください。名前の欄にはなんて書けばいいのでしょう？」

ゆ「・・・」

高「天使。」

日「アホか！生徒会長で通るんじゃないかね？」

大「そうだね。どうせイルカの飼育員とか答えるぐらい馬鹿なんだから…」

音「いやいや、自分の名前くらい書けなきゃアホすぎだろ。つーか、お前らが名前知らないのが驚きだよ！」

岩「奏だよ、立華奏。」

滝「立つ、中華の華、音を奏でる、だ」

ゆ「…ああ、そんな名前だったわ」

音「…知ってたんじゃないかよ」

ゆ「…忘れてただけよ」

――――1時間目、物理

……原子番号 Z 、質量数 A の原子がありその原子核 X 、陽子、中性子の質量を M 、 m_a 、 m_b とするとき、結合エネルギーはどのように表されるか。

えー…と、中性子の数は $A-Z$ 個で…質量欠損 Δm は $Zm_a + (A-Z)m_b - M$ だから結合エネルギー $E \parallel \Delta mc^2$ で… $(Zm_a + (A-Z)m_b - M)c^2 \dots$

と、まあ物理はそれなりにとけたと思う。教師が回答用紙を集めよう指示を出す

…さっきの要は $E = mc^2$ がわかるかだろ… $E = mc^2$ …

滝「Eイね まさみの C カップ!!!!!!」

日「な、なんじゃありゃ!! グランドから超巨大な筈がニョキニョキと!!」

突然叫ぶ俺、そして日向も立ち上がって叫ぶ

岩「……」

音「アホ……」

ゆ「…仕方ないわね」

ゆりが何かのリモコンのスイッチを押す

いーっもひーとりーで

あれ、なにこの浮遊感…

日向と俺の椅子は爆炎を吐き出しつつ、飛び上がり天井に激突、ク
ラスの視線をくぎ付けにした

一時間目終了後俺達はゆりの下へ駆け寄って抗議した

日「おいおいなんなんだよあれは！」

滝「飛ぶのは日向だけで充分じゃねえか！」

ゆ「日向君がしくじったから手伝ってあげたんじゃない、あと約一
名予定外のアホしたのだからお仕置き」

岩「……………なんで知ってるんだ…………？」

ゆりは呆れつつ言い、岩沢は自身の胸に手をやり考えている

ゆ「……………まあ次からもっとまともに頼むわよ」

――2時間目、世界史

ガタッ

テストが終わり急に立ち上がる高松

高（やるしかないか……!!）

先「どうしたのそこの君？」

高「先生、実は私……」

着痩せするタイプなんです！

どうですか？」

先「分かったから座りなさい。」

高松は錐揉みしながら飛翔した

――――3時間目「英語」

ガタッ

今度は大山が立ち上がり叫ぶ

大「立華さん！！こんな時に場所も選ばず、ごめんなさい！！あなたのことがずっと好きでした！！付き合ってください！！」

天「じゃあ、時と場所を選んで。」

ガタッ

滝「岩沢！こんな時に場所も選ばずすまない！まさみの事が好きだ！！」

毎日俺に曲を聞かせてくれ！！」

岩「……うん、知ってる。

いいけどみんなの前で叫ばないで」

先生「そこ座れ……」

「「はい」」

そしてまた例の椅子が点火し……

滝「そろそろ首が痛いぞ」

岩「ちよっと待ってよゆり」

ゆ「何よ？ 寄って来ないでよ！！」

岩「何であたしまで飛ばされるんだ！！」

ゆ「だって大山君は十分心に傷を負ったじゃない。

なんか岩沢さんもギャグキャラ化してたしいかってね」

岩「だからってどうして窓の外に……」

ゆり「スカートの中見られたら嫌でしょ？

それよりもみんな、お昼にしましょ♪」

そして昼食をとり午後……岩沢はギターをかき鳴らし alchem
y を歌い、高松は下も脱ぎ、日向と俺は何度も天井に突き刺さって
テストは終わった

I W i s h

翌日

ゆ「流れ始めたわ」

音「何が？」

ゆ「天使の全教科0点の噂」

音「マジかよ…」

ゆ「しかも教師を馬鹿にしたような解答ばかりだったと。

あと『ガルデモ岩沢はC』『恐怖、空飛ぶ椅子』『公然猥褻変質者出現』の噂も流れてたわね」

岩「……そんなことまで？」

野「何をやってきたんだ、貴様らは？」

露骨に嫌な顔をする岩沢と、訝しげに聞く野田に日向が泣きながら訴える……

日「飛んだり、錐揉みしたり、終いには窓から飛び去ったさ！」

音「でも教師はそんなの天使自身じゃなく誰かの仕業だって分かるだろう？」

ゆ「何度言わせるの？そんなことは教師に分からない。現実と同じ、生徒会長が不真面目な答案を提出してきた。なら天使自身を呼び出して叱るに決まってるでしょ？」

日「教師からしてみれば、まっ、ひとりきりの反乱ってところだろうな。」

――――体育館

そして、数日後。それは全校集会で告げられた…

教頭「――――というわけでありまして、立華奏さんは本日をもって生徒会長を辞任

つきましたは副会長の直井君が生徒会長代理として…」

ゆ「辞任じゃなく解任ね……

果たして一般生徒に成り下がり大義名分を失った彼女に私たちを止められるかしら？

今夜、オペレーション・トルネード決行よ！」

一一一音楽室

岩「……あまりいい気はしないね」

関「いくらなんでも今回の作戦はかわいそ過ぎると思うよ……」

入「奏ちゃん……落ち込んでないかな……」

：俺もあの時は馬鹿やってたが、その後起こった出来事を考えると
とたんに罪悪感が湧いてきた。

……この世界は……奏もだいぶ俺達に近い存在になっている……音
無が言ってたように……奏ときちんと話をさせた方が良いんじゃない
か……？

そんな風に考えていると音楽室の扉が開いた

奏「……お邪魔するわ」

「「「「「奏^{ちゃん}！」「」」」」

みなが驚いているなか、奏はゆっくりと口を開く

奏「……岩沢さんの歌……聞きに來ただけど……いいかしら」

岩「ああ……」

岩沢が頷いて、ギターを手に my song を歌うと奏は静かに目を閉じて歌を聞く

ありがとう、と岩沢が歌い終えた時、奏を見ると……その両目には涙が浮かんでいたそしてペコリと頭をさげる

奏「……ありがとう、わがままを言ってしまったってごめんなさい」

岩「いや、前約束しただろ？聞きたくなったら何時でも来い、ってさ」

奏は小さくありがとう、と言うと岩沢の胸に顔をうずめた

岩「泣きやんだか？」

……なあ、今夜またゲリラライブやろうと思ってるからこいよ?」

奏「わかったわ

……もう生徒会長じゃないし」

また悲しそうに視線を下げる奏

滝「……奏、もう誤解されないように話してみたらどうだ？」

お前がみんなに消えてもらいたい理由を、さ」

ひ「おい滝沢、お前知ってるような口調じゃないか？隠し事はナシだぜ?」

俺がそういうとひさ子が疑問の声を上げる。……だが今はまだ言わない方がいいと思い誤魔化しておく

滝「ゆりの言う事が全部正しいと思うか？推測の域を出ない事ばかりだろ？」

奏本人に聞いてみるのが一番いい」

奏「……ええ、わかったわ

消えてもらいたい、というよりみんなの未練を晴らして欲しいのよ」

——そして奏は語り出した、この世界の意義を、みんなの未練を晴らしてあげたいだけなんだと……

関「なんか、さ……奏ちゃんってすごい不器用じゃない？」

ひ「ああ、また新しい人生も悪くない、って知ってもらいたかっただけなのにな」

岩「誰もここにいたくているんじゃない。

人生の理不尽に抗っているだけなんだ。それを奏は、そうじゃない、とね……」

滝「理不尽じゃない人生を教えてあげたくて、人並みの青春を送らせてあげたくて、ここに留まろうとする彼らを説得してきた」

つまりそれだけの話。

入「それが対立して武器まで作って…」

全員が苦笑いして息を吐く

関「でもさあ……真面目に授業受けたり部活動したら幸せで満たされるってんじゃないでしょ？」

奏「だって、ここにくるのはみんな青春時代をまともに過ごせなかった人たちだもの」

「「「「……………」」」」」

すげえ空回りで不器用なんだなあ……

滝「うん、…いつか消えなきゃいけないってのはわかるけどさ……その時はみんな一緒にいいな」

岩「……………うん、

あたしもね、告知ライブの時……実を言うと消えそうだったんだ。みんながあたしの歌を聞いてくれてさ…

でも…滝沢や…みんなを残していけないな、って…そう思った

消えるならあたしだけ、あいっただけじゃなくて…みんな一緒がいいよ」

みんな頷いて、奏も優しく微笑んで…時間は過ぎていった

そしてライブ終了後…奏と俺達ガルデメンバーは楽しく夕食をと
もにし、1日は終わった…

— — — — — 第二コンピュータ室

滝「……だから、さ。いつか……自分たちの意志で……きちんと消

えるからさ。

野暮な事はしないで欲しいんだ」

？「……君がどうしてここがわかったのか、とかは聞かないよ。

でも耐えられるのかい？今からずっと先、……その時がきたら……
」

滝「わからないよ……わからないけどさ、
離れていても、また逢えるかわからなくても、俺は————」

？「そうか、わかった

じゃあ……こんな世界で生まれた愛、僕も少し見守るとしよう……
幸福を祈るよ」

I n t e r m i s s i o n

— — — — —

えんじえる月びーつ日

私達が練習してると”あの”岩沢さんがオトコを連れてきた！滝沢
というらしい

こりや明日はお赤飯か？（みゆきちに気が早いつて言われた）とか
思ってたけど機材運んだりの手伝いで新入り引き抜いてきたんだっ
て。

んでトルネイド。あいつ網持って散ってる食券集めてんの。あたし
がやれっていったんだけど何あれマジウケる！

つーかまさみの『聖水』飲みやがって：テメエ新入りがいきなりス
トロベリってんじゃねえよ！！

まあこれで私の芥川賞確定な日誌もマンネリ化せず更に面白いのが
書けることだろう：って滝沢テメエあたしのからあげクンに何して
やがるっ！！！？？？

P・S・隙間から見えたまさみの顔、あれで私はあと一週間は戦える

— — — — —

えんじえる月まじえんじえる日

なんか岩沢さん達がいきなり天使連れてきた！正直ビビったよ！びつくりして岩沢さん達ごとバスーカでぶっ飛ばしちゃった、テへ☆シメられた

とうか一緒にしゃべりしたら天使ちゃんマジ天使。あの可愛さは反則だよ…

そして二人に増えた。何あれ！椎名っちの親戚なの？！

あと岩沢さんが新曲発表！すごい良い曲なんだけど…：ガルデモじゃなく岩沢さん自身の曲、のつもりで書いたんじゃないかな？歌詞が凄く…響いてきたもん

そして岩沢さんはやっぱり音楽キチだった。私もあそこまで思われないよチクショー！

あ、あと告知ライブするんだって。みんなが私のベース聞きに集まることだろうねニユフフ！！

言ってみただけだよ！！！！

— — — — —

まさみ月たつきー日

ライブの日

空き教室で練習してたんだけどひさ子さんの弦切れて休憩してたら……何？

何で岩沢さんと滝沢が、ち、ちゅーなんてしちゃってんの？

ひさ子さんとみゆきちと私、三人ともテンションぶっ壊れた。再起不能。

……なに？聖水くれる？それ聞いてみんな復活、現金や。つか音無あの距離で見るとかマジかわいそうだね。ウケる（空元気）

で、ライブ。私達も、途中参加のたつきーも奏ちゃんも完璧に演奏出来てたよ。でも教師がいつぱい止めに入ってきた。捕まったけど岩沢さんや滝沢（ひさ子さんもだったね忘れてた）が振り払ってさ、岩沢さんが歌い出したんだよ。滝沢も必死で岩沢さんの事庇ってさ正直カッコいいね、男だった。

でも、歌い終えた時の岩沢さん本当に満足そうにしててさ……もしかしたら消えちゃうんじゃないかって思った。でも消えないで、疲れたのか倒れちゃって滝沢が岩沢さん担いで逃げたから私達もみんな逃げた

ライブ楽しかったよ、凄く。

……でも、おいてっっちゃだよ？

ずっとみんなでいっしょにしようよ

すごく月あっつい日

SSSで野球大会に乗り込むらしい。

んでメンバーなんだけどガルデモでチーム組もうぜってたつきーが
言って、追加で藤巻っち（ヤの人っぽい）TK（YO!）たかまっ
つん（ムキムキ）松下五段（食券で買収されてた）が入るみたい
で、試合は順調に勝ったよ！みんながダメダメで私のホームランで
勝ったようなものだけどね！ ウソ、逆。

でも準決勝で負けちゃったんだよね……相手全員野球部とか無理だ
よ。というか奏ちゃんやバすぎ、勝てるわけない。
ひなっちたちも負けちゃったみたい、残念。

……というかアレだね。藤巻、アレ絶対ひさ子さんに惚れてるね。
ひさ子さんの方も満更じゃ……

お前ら4人消えろよ！私とみゆきちの事考えろよ！

————

ひさ月ちち日

なんか今日1日ハイテンションで過ごせて遊佐ちゃんがいつてき
た。ゆりっぺは毎回わっけわかんないけど……こういうのって私の
庭じゃね？

とりあえずひさ子さんの胸後ろから揉みしだいた

ブチギレられてジャイアントスイングされて窓の外に……ってオイ
ひさ子オオッ！！???

なんとか這い上がってきたら（ギャグシーンは偉大だね）たつきー
が岩沢さんを……お姫様だっこ……?

……もうクールな私は突っ込まないで（前の方見返すなよ?!）

目の前の砂糖だだ漏れの巨悪を排除しなければいけないんだよ
むしろあのピンク頭呼んでも誰が歌わせるかあっ！（私怨

んでなんかいつの間にか運動会やるっぽい事になった

応援合戦の時なんかみんなでチアの服きたんだけどもうヤバイ。あ
れか男子ども、おめーらひさ子のロケット目当てか。帰れ、帰れよ
お！

たつきーも予想通りだったからみんなでシメた。そんな時のみゆきち
まじきち。ドSやでアレ。

そして、一週間断食。今……お腹が空いて動けないまま……私、関
根しおりは時間潰す為にこれ書いてますが……もうだめです……筆
を置きます

ユイ……お前そーいやなんで当たり前のようにずっと一緒に弾いて

.

Family affair

――校長室

――岩沢が本部につくと朝から戦線メンバーがぐったりとしていた

藤「くぅー、やっと解放された。あんな堅ってえ床で寝かされて首痛ってえ！」

高「天使を失墜させれば、私たちの楽園となるんじゃないかってんだですか？この学校は……」

大「なんで脱いでるの？」

楽園でも脱いで良いってわけじゃないでしょ……
とりあえず光に何があったか聞いてみる

岩「……どうしたのアレ？」

滝「いや、なんか俺達が昨日晩飯食ってる時に違反行動云々で直井にしょっぱかれて反省室で一夜過ごしたんだってさ」

岩「ふーん……」

私らにはなんで気づかなかったんだろ……？

日「つーかなんなんだあの連中は！」

野「今度来たら天使同様返り討ちにしてくれる！」

ゆ「一般生徒だからダメよ！」

日「あーあ。返り討ちができない分、天使より厄介だぜ…」

松「どうする？ ゆりっぺ？」

ユ「色仕掛け行きますか！」

日「お前のどこに色気があるんだよ…」

ユ「んだと！？ 見たことあんのか！？」

日「上着越しても十分分かる」

ユ「揉んだことあんのか、ゴラァ！！」

絶妙の柔らかかさなんじゃい！！」

日「知るかよ！！」

滝「…微乳だな、岩沢の美乳とは読みは同じでも全く違う」

岩「…見たことないよな？」

滝「上着越しても十分分かる」

岩「揉んだこと…って言わないぞ？！」

滝「んじゃ絶妙の柔らかさかどうか俺が確かめ」

バキッ

ユイは跳び上がり空中で回し蹴りを見舞った

ユ「岩沢さんに何しようとしとんじゃゴラァ！！」

椎「浅はかなり」

もはや締め of 挨拶となつてきた浅はかなりを聞いてゆりが言つた、
ゆ「…まあ試しにちよつと動いてみましょう。とりあえず、好き勝
手に授業を受けてみて。」

あつ、一般生徒の邪魔はあんまりしないように！以上、解散！」

一一一一一 学習棟A棟 教室

大山は凄まじい緊張の時間を味わつていた

大（すごいドキドキする……授業中にお菓子を食べるなんて……）

……ぱくり

大（食べた！今食べた！僕授業中に堂々とお菓子食べちゃってるう！
なんて思ひきつたことしちゃってるんだあつ！）

ひ「ロン、リーチチートイドラドラ、満貫」

しかし、そんな大山よりも遥かに堂々としているのがひさ子、藤巻、松下、TKの4人……教室の後ろで闘牌を繰り広げている

ユ「先生！トイレ！」

「…行ってこい」

音「あいつは何をしてるんだ？」

日「1分おきにトイレに行く生徒だとき。アホだな」
音無と日向は適当にだべっている。

そして椎名ははさみ、箒、定規をそれぞれ、親指、中指、薬指の上に絶妙なバランス感覚で立て、

高松は腕立て伏せをし、

岩沢は楽譜を書いており、

滝沢はその岩沢を膝の上に座らせて悦に入って、

野田は机の上で寝ていた。

ユ「先生トイレ！」

ユイが再び出ていこうと教室のドアを開けたところ、直井が表れる

直「そこまで貴様ら」

しかし……これから直井らに襲撃くらうわけだろ……
……不自然すぎるけど……怪我させるのもやだし……

岩「野田のやつあんな堂々として大丈夫かな？」

滝「ああ……なあ岩沢、銃、あるか？」

岩「あるよ？ 私は普段は持ち歩かないけど……本部とか行けばいく
つかは」

……よし

滝「んじゃちよつとガルデモメンバー集めてきてくれ……先行つて
る」

岩「光？……なんなんだよもう……」

——————

————校長室

校長室に來るとゆりも含め誰もいなかった
たしか直井の様子を見に行ってるんだったか……？

と、そこへガルデモメンバー、ユイも到着

岩「みんな連れてきたけど……どうしたんだよ急に」

滝「あー……しばらく銃を携帯してくれ、出来れば小銃……は無
理か。あ、マシピならスカートの中にも……」

ひ「まず説明しろ、ちよつとわけわかんないぜ？」

滝「……直井だ、なんかヤバい気が……」

バアアアン！！！！

そこまで言った時校長室の扉が開けられ直井、そして自動小銃を構
えた生徒会メンバーが現れ……

直「おや、貴様らだけか。まあい——」

ぶおん、ドカツ！パリーン！

……ハンマートラップに全員吹っ飛ばされた

岩「……どうやら当たりみたいだね」

みんな頷くと各々銃を手取る：俺はM870、みなはMk. 23
やコルトを手にとって部屋を後にする

――――昇降口前

雨が土砂降りのように降り：

タアン タアンと連続して：校庭の方から音が聞こえる

俺達は無言で足を早める：

そして校庭につくと：そこは、赤、朱、紅に染まっていた

――――「NPCに危害を加えてはならない」

やつらの服に弾痕はない……笑えるくらい律儀に守ってんだなお前
ら……

入「そんな……ひどい……」

関「一方的に……反撃できないのかよ……」

そのときグラウンド中央戦線メンバーが流した血で真っ赤に染まった
そこで直井は誰かを蹴飛ばしていた

ひ「…藤巻!？」

全身血だらけで転がっているのを見てひさ子は走り出す

ひ「おい!大丈夫か藤巻!」

藤「……真っ先に俺に駆け寄ってくるなんて……惚れたのか?」

ひ「馬鹿野郎!んなこと言ってる場合かよ!」

俺達も直井達のいる場所へと近づく

すると音無が倒れた日向の下へ駆け寄っている、奏の姿も見えた

直「……あそこからどうやって出てきた？」

奏「扉を壊した」

直「何年かかって作ったと思ってる……生徒会長代理として命じる……」

大人しくもどれ」

滝「奏……この現状を見て……それが正しくないってこと……わかるよな？」

こくり、と頷くと奏はハンドソニックを展開し応える

直「逆らうのか……神に……」

僕が神だ」

馬鹿かコイツ……と音無の近くにいる日向が呟く
皆全く同意見のようだ……

直「愚かな……ここが神を選ぶ世界だと誰も気づかないのか？
生きていた記憶がある。みな様に酷い人生だっただろう、それこそが神になる権利だからだ。生きる苦しみを知る僕等だからこそ神になる権利を持っているからだ」

滝「神になってどうする？」

直「安らぎを与える」

藤「ふざけたことぬかしやがって……」

直「神は決まった。なら僕はお前たちに、安らぎを与えよう」

そう言うとき直井は倒れたゆりを無理矢理起こさせた

音「これ以上何をする気だ！」

音無はゆりのもとに駆けつけようとするも多数の生徒に銃口を向けられる

：俺は岩沢に目配せして銃を渡すとひさ子にも合図を送る：

岩沢が銃を空へ向け発砲、爆音が鳴りCPUの注意がそちらへ向く！
俺とひさ子は駆け、CPUに肉薄し、喉に一撃、悶絶する相手から銃を奪い：その銃で残ったやつを弾き飛ばす
そして近づき、一撃。

：まるで映画のように戦い、CPUらはそのほとんどが意識を手放した：

だがそれを見ていた直井はどうでもよさそうにしゃべる

直「：使えないな：所詮人形か：まあいい、君は今から成仏するんだ。

岩沢まさみ、貴様は生前声を失い歌う夢を断念。酷い家庭環境の下、

惨めに死に至ったんだろう。だがこの世界でその夢を叶えたかけた。成仏しかけたんだよ」

岩「ッ！」

ひ「なっ…!?!?」

直「貴様は今から成仏するんだ。幸せな夢と共に…」

ゆ「……あなたは……私の過去を知らない。」

直「知らなくても可能なんだ。僕が時間をかけて準備してきたのは天使の牢獄を作ることだけじゃない、催眠術だ。」

ゆりは夢を見た

それは優しい笑顔、嘘の記憶

ゆ「!?!?」

滝「ふざけんな!!」

音「ダメだああああああ!!」

音無は直井を殴り倒す。

音「そんな紛いものの記憶で消すなあ!!」

音無は訴える、

俺達の生きてきた人生は本物だ!

何一つ嘘のない人生なんだよ！

みんな懸命に生きてきたんだよ！

そうして刻まれてきた記憶なんだ！

必死に生きてきた記憶なんだ！

それがどんなものであろうが、俺達の生きてきた人生なんだよ！

それを勝手に……嘘の記憶で塗りつぶすなんざやっていい行為じゃねえだろ！！！！

てめえの人生だって、本物だったはずだろ！！？

そして音無は直井を抱きしめる

音「頑張ったのはお前だ！

必死にもがいたのもお前だ！違うか！」

直「何を知った風な……」

滝「…わかるよ。ここにお前もいるんだから」

他でもない、直井自身が言った。

”生きる苦しみを知る者”こそが、神になる権利を持ちこの世界にいる、と

直「なら……認めてくれんの？この僕を……」

音「お前以外の何を認めろってんだよ。

俺が抱いてるのはお前だ、
お前以外いない……お前だけだよ……！」

直井文人は思い出していた……

兄の健人と渋柿を取ろうと競ったこと……

採ったってどうせ渋柿じゃぞ？

やった！兄さんに勝った！うわあああ……

喜び父に見せる文人、それに対して父は言う。

渋柿ごときで何を……

……だが、文人もやりおる

一番聞きたかった、

直井”文人”を認めてくれた言葉

雨雲に覆われた空は晴れ……そこに一滴の雫がこぼれ落ちた

A l i v e

――――校長室ユイは日向に新技をかけさせてくれるよう頼んでいた

ユ「名付けて、逆二十字固め！」

藤巻は何か髪留めだろうか、ゴムをいじってボーっとしている

滝「あー…そこ……」

岩「了解…痛かったら言って……」

滝沢は岩沢の膝に頭を乗せ耳掃除、

TKと松下はダンスを踊り、

高松は大量のメガネの手入れをし、

大「可愛いですねえ……ね、椎名さん」

椎「浅はかなり」

椎名と大山はぬいぐるみをいじり、

野田はハルバードの手入れをしている

みながまったりしていた

そんな時日向が口を開く

日「ったく、ここは小学校かよ……ガキばっか増えてくな」

直「貴様。僕に言ってるのか？」

僕は神だぞ？」

日「音無に抱きついて大泣きしてたくせによ……」

直「誰が泣いたって？」

……泣くのは貴様だ。

さあ、洗濯バサミの有能さに気付くんだ。洗濯バサミにも劣る自分の不甲斐なさを、嘆くがいい……」

直井は日向にギアス…げふん催眠術を使う

日「せ、洗濯バサミ……。挟める……。挟んで落ちない……。洗濯物が汚れない！」

素晴らしいっ！ああ！クリップ代わりに髪を挟んだりとか応用も利く使える！ それに対して俺は何なんだ！」

俺は直井の衿を掴んでもちあげた

音「お前。催眠術を腹いせに使うな」

日「音無さん。おはようございます」

音「あれはなんだ？」

直「あっちから先に突っかかってきたんです。僕は出来るだけ穏便に……」

滝沢も言う

滝「どこが穏便だよ……洗濯バサミ手に大泣きしてるじゃないか……」

直「あ、滝沢さんもおはようございます。

耳掃除僕がしましょうか？」

滝沢が露骨に嫌そうな顔で断ると、ゆりが俺と直井、滝沢に話があるそうだ……

――――

――教員棟3階 空き部屋

ゆ「直井君。音無君と滝沢君の失われた記憶を戻してみせて」

ゆ「僕に命令だ？ さっきから貴様何様のつもりだ！」

音「てめえのリーダーだ！ 上司だよ！ 大人しく言うことを聞け！ ……」

って俺たちの記憶?!」

ゆ「そうよ、あなたたちの記憶。」

直井君の催眠術は本物よ…あなたの失われた記憶も取り戻せるはず」

滝「……」

直「うん、なるほど。それは僕の手でなんとかしてみたいですね。」

音「ちよつと待てよ!勝手にそんなこと決めんなよ!」

ゆ「どうして?まさか忘れたままでもいいの?」

＜音無「…それは…」

——もちろん思い出したい。

でも不安だ……それはもしかしたらこの生活が終わってしまうんじゃないかと…

ゆ「滝沢君?」

滝「ああ…」

音「そうだな……んじゃ直井、頼む」

直井「どんな過去を見てもどうか自分を見失わないで。もしあなたがどうなっても僕だけは味方ですから。あ、滝沢さんもですよ」

音「……」

直「何か言ってください…。」

ゆ「あたしも味方だから安心しなさい！」

音「ああ、頼もしいよ！」

直「ええーっ？何この差？まっ、いいです…。まず音無さん、どうぞ座ってください」

直「では、始めます。」

音「うん。」

どのくらいの時間がたっただろうか、音無が肩を震わせ鳴き始めた

滝「思い出したか？」

音「ああ…」

ゆ「素晴らしい人生だったとは言えそうもないわね。」

音「しばらくひとりにしてくれ…」

音無を残して、俺達は部屋を後にする、と部屋の中から慟哭が聞こえてくる

『惰性で生きて、無気力だった俺は、自分の生きる理由を、お前に教えてもらって、見つけて……。それで……

夢半ばで死んだのか？何も成し遂げずに死んだのか？

そんなのってねえよ……。ねえよ……。死にきれねえよ……。！

……初音……!」

————教員棟3階 空き部屋2

直「次は……滝沢さんですね……」

滝「ああ……」

直「では……始めます」

俺の家は、それなりに幸せな家庭だった。

俺は両親に苦労はかけまいとしっかり勉強はしていたが息抜きに友人らとゲームしたりアニメを見たりもしていたし不自由など何もなくだった

父さんはとある工場で働いており、母さんも昼はスーパーでレジ打

ち、両親共に忙しく働いていたが三人が集まる夜は疲れもないように明るく、楽しい日々が続いていた

あの日までは……

――――では、次のニュースです。

今日の午後3時過ぎ、爆発事故が発生しました。事故が起こったのは―――県にある―――工場で、爆発は突然起こったという事です。

この事故により、当時作業をしていた滝沢文紀さん、真田遼一さん他、17名が死亡、重軽傷者は31名ということです

父さんが死んだ

俺と母さんは夜そのニュースを聞いて目の前が真っ白になった気持ちだった

翌日、工場の爆発事故のニュースは、新聞の1面を大きく飾った。それだけでも母さんと俺を打ちのめすには十分だったのだが、新聞にはさらにこう書かれていた。

——『原因は不注意か？』

警察の捜査報告によれば父の遺体は爆心地に近い場所、他の人は離れた場所にいたそうだ……

テレビをつけると父さんのせいで事故が起きたのではないか、とマスコミは騒いでいた

そして、突然。

ピーン、ポーン……ピーン、ポーン……

インターホンが鳴った。

「あ、はい……」

必死で涙を拭き取り、気丈な様子を作り、母さんが玄関に向かった。

ガチャリ。

「人殺し!!」

その人は母さんに対してありったけの非難をぶつけ……やがて罵り
疲れたのか、ふらふらとした足取りで帰っていった。

母さんも俺も悔しかった。

その後、何人もの人間が、玄関のドアを開け、応対に出てきた母さんに非難の言葉をぶつけては帰っていった。

数日もすると、母さんは心身共に疲れ果てていた。

俺は大学に進学しようとしていたが母さんの負担を少しでも減らそうと就職先を探すことにした

そしてなんとか働き口を見つけ、母さんを支えられると思った
母さんは辛い思いをさせてごめんなさい、と俺に謝った。俺は母さんを落ち着かせようと肩を抱いた、…酷く痩せていた……

そしてある朝、いくら待っても母さんは一階に降りてこなかった。
俺は母さんの、父さんと母さんの寝室の前まで行った

ドアを少し開けると部屋は暗かった

俺「……母さん？」

返事はない。

そして……

ごめんなさい、だそうだ

希望なんてなかった

母さんを、大切な人を支えていこうとした矢先に母さんは自殺した

俺は好きだったエレクトーンやギターを弾いたり、アニメDVDを繰り返し見たりして気を紛らわして……惰性の日々をすごしていた
そんな俺を友人達は少しでも慰めようと必死になって……ドッキリ

と称してスキー旅行に連れて行ってくれた。

周りの人が俺を心配してくれている事に感動して、久しぶりに心から楽しめたんだ。

こいつらが俺を救ってくれたんだから…俺も誰かに尽くしていく、そんな人生をこれから送ろうと思った

だが、帰りのバスが事故にあった。

雪道でタイヤを滑らせ、反対車線に出たバスはトラックとぶつかり
…

友人の下半身はなくなっていた、それでもあいつは俺の心配ばかり。

「無事か？なら良かった…」だの「お前これから頑張れよな」だの
…自分のことなんか何一つ考えずに…

あいつも息を引き取った

俺も…

滝「……終わるか」

直「…大丈夫ですか？」

滝「ああ……ありがとう」

生きてた間…出来なかった事…
誰かの為に生きる…

Hot Meal

――――校長室

ゆ「で、報告って何？」

高「本日の食券が不足しているとのことですよ」

岩「了解、新曲出来たからお披露目してくるよ」

藤「どうする？トルネードいっとくか？」

ゆ「いや、今日のオペレーションは『モンスターストリーム』よ！
！」

大「うわあああああああああああ！」

岩「えっ？」

松「ついにきおったかァー！」

TK「絶望のcarnival!!」

歓声をあげる戦線メンバー

音「なんなんだ、その作戦は！？」

モンスターなんてのがいるのかよ、この世界には！？」

高「ええ、川の主ですよ。」

音「川の主！？」

岩「……ゆり、最近ライブしてない」

日「ちよつと歩いたところに川があるだろ？そこで食料の調達だ。」

音「そ、それってもしかして単なる川釣りなんじゃ…」

日「そうだけど？それがどうかしたか？」

滝「あれか？カプ○ンのなモンでも想像してたか？」

音「ああ、いや…」

岩「……」

こうして戦線メンバーで魚釣りに行くことになった

――――植物園

道中音無は奏を見つけた

音「そんなとこで何してんだ？」

天「草むしりとか…いろいろ。」

奏は答えると手の中の蝶をやさしく逃がした

音「そ、そうか！あつ、そうだ！お前も来いよ！」

天「え？」

音「今からみんなで川釣りに行くんだ。」

天「川？あそこに行くのは校則違反よ？危ないから。」

音「いいじゃないかよ。お前だってもう生徒会長じゃないんだし、破ってやれよ！」

天「でも生徒だから…」

音無が奏の手を握るが……

岩「いいところにいた奏！新曲出来たんだ！聞かないか？いや、聞いてくれないか！？」

岩沢は音無を突き飛ばし、奏の両手を握り懇願する

日「……最近キャラ変わったよな？」

つか滝沢、今回は味方しねえのな」

滝「……断腸の思いだが次は水辺だから……
何か事故が起きないとも限らない」

デジカメ（チャーから借りた）を見せる

日「ああ……男だな、後で一枚くれ」

松「うむ……水辺は最高だ。」

藤「何のためにひさ子達誘ったと思ってやがる……」

男子の間では奇妙な連帯感が出来ていた。

奏「……ごめんなさい、音無君に先に誘われたから……また今度、必ず聞きに行くわ」

岩「……そうか」

高「まあ現生徒会長代理もありますし……今更問題ないでしょう……」

直「そのとおりです。が、その前に僕は神です」

日「なんかすごいメンバーになりつつあるな……」

俺達が到着するとそこには釣り人がいた…

音「彼は？」

日「ああ、斉藤って奴だ。

銃にも詳しいが、ギルドではフィッシュ斉藤と呼ばれる釣りマニアでねえ、このオペレーションの時だけは大量の釣り道具を荷車で引いて地上まで上がってくる。」

滝「ほりゃほりゃうまうー」

あの距離を歩くとかどんだけ釣り好きなんだろうな…

ユ「要はアホですね！」

松「よし！始めるか！」

「「「「「オオーツ!!!!!!!!!!!!!!」」」」」

そして各々釣りを始める
みな基本竿を使っているが、野田はハルバードを使い、椎名はクナイを使って魚をとっている

ひ「あたしらもやるか…って岩沢、持つのはギターじゃなくて竿だろ…」

岩「あ、そうだね…」

……ダメだこのリーダー……
関

皆が魚釣りを楽しんでいる中俺は反応するトランシーバーを手取る

チ「こちらチャー。目標を視認したぜ」

滝「こちら滝沢、了解。

オペレーション、スタート！」

…女子も良い感じに纏まっている……

俺はデジカメを構えつつ……映研部のNPCから借りたビデオカメラを固定し録画を開始する

そして、空は晴れているというのに戦線メンバーの上に水が降り注ぐ

ゆ「ちょっと！なんなのよ急に！」
入「やだーびしょびしょだよー！」
関「ここが桃源郷か」

悲鳴をあげる女子達と

野「……ゆりっぺ……」

大「生きててよかったあっ！あ、死んでるか」

TK「Good boobs……」

歓声をあげる男子達であった

チ「よーし、放水終了！後は双眼鏡でも直でも好きなだけおがみな
！」

「「「よっしやあー！！！！！！」」」
連絡橋上ではチャー率いる工場班が消化ホースの水を拡散させてバ
ラまいていたのだ
ゆ「あれは……チャー！？何やって……」

ザバァン！

ナイスだぜチャー！

俺も……岩沢……発見！

……ん？なんだ今の音

デジカメで連写しつつに突撃する俺……目標まであと40m、30m、
そして……

微かに見える水色を確認し、人差し指でボタンを押し込んだ瞬間、

ドシャツ！！！！！！

世界が真っ黒になった

—
—
—
—
—
—

……歌も歌えないし服びしょ濡れになるし今日厄日かな……

あたしがそう思っていると奏の竿に当たりがきたみたい

岩「奏、弾いてるよ?」

奏は頷くと竿を思いっきり上げた

ザバァン!

斎藤「出やがった!主だ!」

岩「というかお前……すごい力だな」

奏「オーバードライブはパッシブだから」

関「可愛さもパッシブだよぉ」

そして天高く放り上げられた魚が落ちてくる……って光?

ドシヤッ！！！！！

ひ「おい、滝沢のやつ食われてっぞ」

岩「……………」

奏「助けなきゃ」

奏はハンドソニックを展開するとあっという間に主を解体してのけた、……光は…無事っぽいけど……

関「うわ、すげえ滑ってる」
入「ちよっと気持ち悪いね……」

……ヌメヌメのテツカテカになっていた

大「滝沢君！」

松「無事か!？」

滝「お前ら……コレなのか？」

野「アホめ、カメラだ」

日「あーあ……ダメだこりゃ完全に壊れてら」

藤「使えねーヤローだぜ」

――戦前男子メンバーは見た目ズタボロな滝沢に容赦なく蹴りを浴びせている

滝 「お、おめえら……ちったあ俺の心配も……」 ゴキッ

あ、死んだ……

グラウンド

その後、主は食べきれないし保存も出来ないとの事でNPCにも振る舞う事となった

滝「……酷い目にあった……」

俺が全身洗い終えて帰ってくると皆魚料理に舌鼓を打っていた

正直俺もお腹ペコペコだ…

だが、大鍋を見つけて寄ってみると中身は空だった

滝「……あれ、俺の分は？」

ゆ「あー、ごめん滝沢君。

思ったより盛況でね…無くなっちゃった」

滝「……マジかよ……」

「……学校から毎月お金を渡されてはいるがもうお菓子などを買って全て使い切ってしまった……食券を買うことも出来ない

滝「小遣い日は明日か……余ってる食券は？」

ゆ「……実はもうないわ」

……釣れなかったらどうする気だったんだよ……

ゆ「一週間食べなかったことあるし大丈夫でしょ？」

……悪魔め

————男子寮、自室

仕方ないから俺は寮へ戻る事にしたが……

冗談抜きで腹が減って仕方ないから部屋の隅で寝て時間を潰すそう
と思う……

つか誰かに奢ってもらえばよかった……

誰かに奢ってもらえばいいじゃねえか。

そうと決まれば善は急げだ、と靴を履いて玄関のドアを開ける

岩「うわ！びっくりした……」

……と、岩沢がいた

滝「どうした？ここ男子寮だぞ？」

岩「……………くり……きた」

滝「ん？」

俺が聞くと岩沢はボソボソと何か呟いたが……よく聞こえない

岩「だから、簡単なんだけどご飯作りに来たんだよ」

岩沢はビニール袋を見せながら言った……って何ですと!?

滝「……すげえ嬉しい」

岩「恥ずかしいからあまり言うな…

…あ、ちょっと待っててくれる?」

そんなにかかんないから……と、いや待ちますとも、ええ。待たせてください

そして……暇だから、あまり使わない台所で調理中の岩沢に聞いてみた

滝「なあ、でもどうしていきなり作りに来てくれたりしたのさ?」

岩「いや大変そうだなって……た、ただの気まぐれ。
簡単な物で悪いね」

そう言って鍋を振る……炒飯かな？

滝「つか材料とかどうしたんだ？売ってたっけ？」

岩「…関根が食堂のおばさんと話して……どうやったのかわかんないんだけどさ、貰ってきたんだよ」

……関根か

ああ……明日冷やかされるんだろうな……

その後、部屋には彼女が調理する音だけが響いていた

……しかし、今更ながら凄い状況だな……もし戦前メンバーに見つかったら……

って関根が関わってるならもう駄目だな……

と、岩沢が炒飯と卵スープを持ってきた

岩「出来たよ、

口に合うかはわからないけどね」

彼女はそう言って苦笑するが…見た目は食堂とかで出されてもおかしくない、

というか非常に美味しそうだと思う出来だ

滝「おぉー、いただきます……って美味しいな！岩沢料理出来たんだ？」

岩「あ、バカにしたな？1人で上京しようとしてただぜ？」

まあバイト先で覚えたんだけどさ、と岩沢は頬を朱に染めつつ少し胸を張る

滝「……正直音楽以外からっきしかと思ってた」

岩「……お前があたしの事どう思ってるのかわかったよ」

大げさに肩を落として拗ねたように彼女は横を向く
俺は笑いながら炒飯をスプーンで掬って差し出した

滝「冗談だって、つか食ってみろよ？この味俺大好きだぜ？」

岩「いや、あたしは……」

滝「いいからいいから」

そこまで言うなら…と岩沢は　ぱくり　と差し出されたスプーンを
口に含む

滝「な？美味いだろ？」

そう言って俺ももう一口、うん、美味い。毎日でも食いたいなこれは…

そして完食。

滝「ごちそうさま」

岩「お粗末様……んじゃルームメイト帰ってくる前にあたしは帰るよ」

滝「あ、ちょっと待って」

なに、と言おうとしたその唇を奪ってやった

滝「二回目…は俺からって決めてたんだ。これでヘタレ扱いはさせないぜ？」

岩「……だからってこのタイミングですか？炒飯の味がしたよ」

……台無しだな、そう言っ二人で笑った

一一一一

岩「んじゃ、おやすみ、光」

滝「ああ、おやすみ岩沢」

岩「違うだろ？」

滝「……おやすみ、まさみ？」

……ってめちゃくちゃ恥ずかしいんだが」

岩沢は満足げに微笑むと返答はせず振り向いて後ろ向きのまま手を振って去っていった

そして俺は唇にまだ残る感触を感じながら眠りへと落ちていった

Hot Meal (後書き)

近々また関根嬢にまた依頼して補完予定ー

あと書いてて恥ずかしい、すごいやっちゃった感

と、3／12、2000時現在地震の影響で未だ真っ暗な東北より
……寒い

Sabbath

———音楽室

岩「……で、だ。新曲なんだがタイトルはH o t M e a lでいいと思う」

入「ああ、前言ってた「ご飯の歌」ですか？」

関「いやー、実際に歌詞見るまであの岩沢さんがどんな腹ペコソング歌うのかハラハラでしたよ」

ひ「うん、良い歌詞じゃない？」

演奏は前聞いたのと変わらないようだし…今合わせる？」

音楽室に行くと岩沢が新曲の楽譜をみんなに配っていた

滝「おはよう、新曲もう聞けるのか？」

岩「おはよ。

これから合わせるとこ…みんな大丈夫だよな？」

「おーけー」「大丈夫です」「いつでもいいーぜ」

岩「よし、派手にやろうぜっ！」

と、演奏を聞いてみたんだがやっぱりみんな息合ってるな……
ミスらしいミスもなく演奏終了

岩「ふう、どうだった？」

滝「いいんじゃないかな？」

ただあえて言うならベース前面に押し出してるからちよいと関根が焦ったところは目立つかな、っていう感じ。」

ひ「だよ」

関「あーやっぱりわかる？」

関根はだらあーっとうなだれていた

そして今日はもともとそんなみっちり練習する日でもないしメンバーで息抜きしようぜ、という話になった

滝「……いつでも息抜いてねえか？」

関「固い事言うなよ」

岩「で、何すんの？」

ひ「麻雀しようぜ？」

麻雀か……いいかもしれない、と思ったが他のメンバーが口を尖らせる

入「麻雀はひさ子先輩の独壇場じゃないですか……」

岩「……それで天ぷらうどんのエビとられたのは忘れてないからな」

関「というか5人じゃないですかー」

ひ「ま、まあいいじゃねえか。藤巻達もう呼んじまったし……
8人なら二卓いけるぜ？」

岩「やる前提かよ……」

ひ「あ、一位の奴が他のやつに命令一個可、で。」

岩「…またか」

関「ひさ子さんと同じ卓にならないのを祈るよ……」

ほお

くじ引きの結果俺、岩沢、ひさ子、藤巻で打つ事に

ひ「さて、滝沢のお手並み拝見だ」

東1、東2とひさ子があがり俺の親……ひさ子は相変わらずの激運を発揮している……が、俺も好手がきている。ここは勝負に行くべきだろう

滝「俺もそろそろ……リーチ」

河はソーズで染まっているが実は1ソー、東のシャボ……どうだ？

ひさ子は……回して現物を打ってきたもののテンパイしているようだ……岩沢も現物。

藤巻は……

————————

ヤツの捨て牌は……

九、西、6、4、3、7、？でリーチか……

相手が悪かったな……こちららこの順目でマンズのチンイツ5面待ちテンパイだぜ……東切って……

藤「追っかけリーチだ！」

滝「高めだな。リーチ一発、ダブ東、トイトイ、三暗刻、三連刻ドラ3…裏…でも3枚乗ったな。数え役満、終了だ」

ひ「うわ…お前エグい待ちすんなあ…ホニイツでいいじゃねえかよ…」

岩「ひさ子並だね…」

藤「久しぶりに悪夢見たぜ…」

向「こうも関根が振り込んで終わったようだ

…っではええなオイ

松「むう……」

TK「Thirteen Orphans…?」

関「マジかよ!？」

入「勝っちゃいました」

滝「さて、罰ゲームだな」

入「楽しみにしてたんですね」

ひ「よりによって一番やらせちゃいけないコンビだな……」

岩「まったく、嫌な予感しかしねーぜ……」

入「んじゃ……」

松下……今晚のご飯無し。

TK……英語使っちゃ駄目。

関根……一週間みんなに敬語。

ひさ子……ポニテ解いたとこ見せる（入江にだけ、だチクショー）。

岩沢……一週間語尾に「にゃん」。

藤巻……刀携帯禁止

素晴らしい。

藤「……個性が……」

岩「……」

関「滝沢……お前はもう少し優しくするよな？　つか2人が全員にかよ！」

滝「滝沢様、だろ関根クン？」

関「覚えていやりませ滝沢様……」

帰ったら食べて忘れよ……」

俺は入江のに付け足す形にしてみよう……

松下……今晚食堂でみんなと一緒にいること。

TK……しばらく武士っぽい話し方で話せ

関根……一週間糖類摂取禁止。

ひさ子……ポニテのゴム食いちぎらせて。

岩沢……一週間ネコ耳＋ユイのしっぽ装備

藤巻……思い浮かばないから免除

松「……」

TK「解せぬ……」

関「ストレス溜まりまくるだけだよ！つかTKとかもはや誰だよお前！日本語喋れたのかよ！」

ひ「もはや変態じゃねえか……」

と食いちぎられたゴムを新しいのと変えながら滝沢の顔面を踏みつける

ポニテ解いたひさ子は地上に舞い降りたエンジェル（岩沢談）だったそう……チクショー見たかった……

というかひさ子様踏むの止めてめざめちゃう

岩「……」

ユ「最高ですよ岩沢先輩……滝沢先輩マジグッジョブです」

ユイはカメラを連写しながら悦んでいる。

岩「ユイ……やめろ……」

滝「……まさみ……語尾は……?」

……我ながら意地悪だな俺

当人は顔を髪のように真っ赤にして今にも泣きそうである

岩「ユイ、やめ……にゃん」

…ありがたやありがたや

隣を見るとガルデメンバーも悦に入って、ユイなど今にも消えそうだった

と、ここでひさ子が戻ってきて口を開いた

ひ「……ん? 滝沢、お前今なんつった?」

滝「……語尾は?」

ひ「その前」

滝「……まさみ」

ひ「……いつからだ?」

岩「いや、その。my song 歌った日から……名前は昨日からです、ひさ子様」

死んではいるけども命の危機を感じて直立不動で答える

滝「まさみさんをくださいお母さん！」

ひ「誰がお母さんだ」

グーで殴られた

入「別に良いじゃないですかひさ子先輩」

関「モテてるんですから邪魔するのは止めましょ？ あたし泣きますよ？」

ひ「……まあいいや。そんなかり泣かすなよ？」

ああ、と答えつつ関根達に向き直り

滝「……後で食堂でパフェおごっちゃる」

関「わかってるじゃん」

入「でもホントに泣かせたら怒りますよ」

わかってるって……俺が岩沢を泣かせるわけ…

岩「ひかるーパフェあたしも食べたいな」

滝「にゃん、は？」

ごめんなさい。反省してますから3人とも蹴るのを止めて。

――――食堂

滝「悪かったって……そろそろ機嫌直してくれよ……」

岩「……………」

ムスツとしてパフェを食べる、いや食べさせる事を強要する岩沢とその口にせつせとスプーンでパフェを運ぶ俺。

入「最低です」

関「言ったそばからアレだもんね」

岩「だいたい光が意地悪なのが悪いんら……」

………いや、だからって食堂でアルコール片手にパフェ食うってのはどうかと思うぞ

岩「…最近ーひさ子とかばっか見てるんじゃない？
あたしなんか飽きちまったってーのかー？」

ひ「……出来上がっちゃってるな」

滝「誤解だぞ、俺はまさみ一筋だから心配すんな」

岩「んじゃちゅーしてよー……」

ジャキッ

………なんで3人とも無言で銃に弾こめるんですか？

滝「……今は、ほら食堂だぜ？公衆の面前でガルデモの人気ボーカルがそんな事しちゃ……」

岩「んじゃ昨日みたいに、部屋で？」

ごりっ

後頭部に冷たい物が押しつけられる

ひ「仲の良いこったな…」

そして後ろにいるひさ子がボソリ、と呟いた

滝「や、やましい事は何も…」

岩「そうだよひさ子、あたしのライトハンドが光の（部屋にあった）熱いの（フライパン）を動かしたり、光があたしに熱いアレ（チャ―ハン）を口に頬張らせたりしたただけだぜ？」

…スプーンをいじりながらニヤニヤ顔で言ってる所を見ると絶対狙ってるよなコレ……って、ん？

俺が殺気を感じて頭を下げた直後、

ガン！ バキッ！

ひさ子が拳銃をぶっ放しテーブルに穴が空いた。

……頭下げなければ穴はもう1つ増えていただろう

近くで晩御飯を食べていた他戦線メンバーが何事かとこっちを見て、

ああ、またか

といった感じで食事に戻る

直「貴様、神さえも配下におさめるにふさわしき存在たる滝沢さんに銃を向けるとは何事だ！」

貴様は今から洗濯バサミの……」

滝「止めろ」

なにやら物騒な事しかけている直井をデコピンで止める

入「でもひさ子先輩も危ないじゃないですか」

まったくだ……

入「跳弾が岩沢さんにあたったらどうするんです？」
関「やるなら床に押し倒して抑えて、0距離ですぜ」

……岩沢の心配だけか

頭を抱えていると……

のしっ

っと岩沢にのしかかれて床に押さえつけられた

岩「ひさ子とかー関根なんかには押し倒させねーよー」

なんて眉を下げて言うもんだから…

—
—
—
—
—
—

ヤバい。コレはヤバいです。破壊力高すぎですよ岩沢先輩。
横見たらひさ子先輩もしおりんも鼻血ダラダラです。

滝沢先輩なんてもう気絶してます

岩「……起きろよー」

無理やり立たせちゃ危ないですよ岩沢先輩……っでああ、鼻血出しすぎて目眩が……

岩「……お持ち帰りだー」

――
――
――
――
――翌朝

頭痛い……

番外編；タイトルなんて自分で考えなさいな（前書き）

飛ばしてもらって構わないです。
何のネタかわかるかな？

番外編；タイトルなんて自分で考えなさいな

— — — — — 音楽室

もとい、今は被服室状態だ。

「岩」

いつもと違う服に違和感を覚えつつ岩沢は考えていた、

どうしてこんなことになったのだろう、と

きっかけはゆりの一言だった……

――――校長室

みな何をするわけではなくただそこにぼけえーっとしているとゆりが
眩いた

ゆ「……暇ね」

おー、だなー、と気のない返事が続く。

r r r r r ……

と、机の電話が鳴りゆりがそれを手に取る

チ『おー、ゆりか？』

ゆ「もしもし、チャー？

何かあったの？こっち今すつつつごい！暇だから手伝うわよ？」

チ『いやな、うちも暇でな。暇潰しにうちのバカどもがイロイロ作
ったから試着して貰おうか、ってな。』

電話の向こうのチャーが楽しそうに喋り始める

ゆ「……試着？」

チ『おう、今斉藤がそっちに向かつてるから見た方が早いだろ。』

Bannon

斉藤「来たぜ、確かに届けたからな！」

野「なんだ、これは……」

大「可愛いなあ……」

斉藤から渡されたのは服。

それももはや日常生活では着なさそうな所詮、そういう、服ばかりである

斉「あ、滝沢、日向。つか男子ども全員聞け

チャーから伝言だがな、『今度はしくじるなよ兄弟』ってさ。

んじゃ俺は釣りしてくるからな。健闘を祈るぜ」

斉藤はそう言うのと、カメラを滝沢と日向に渡しつつサムズアップして帰っていった

日「滝沢……」

滝「ああ、ガルデモは任せろ」

腕をガシッと組み、男子の間ではまた友情が生まれていた

—
—
—
—
—
—
—
—
—
—

その後ゆりも面白がって椎名や遊佐に着させ始め、岩沢は練習があるからと逃げてきたが滝沢と関根、入江が結託し……

ひさ子まで着るよりマシだと滝沢について今の事態に至る

つまりアタシは結果的に狼の群れの中にいる羊なわけだ

岩「……裏切り者……」

ひ「ごめんごめん。あ、これなんか可愛くない？」

入「ひさ子さんも良い趣味してますね……ふふふ」

関「しっかしあいづら何考えてんだろうね。カツラまであるよ?」

滝「まさみーこっち向いてー」

カシャ カシャ

今のアタシの格好は……赤いゴスロリ風なドレスに金髪ロングのウィッグを着けさせられている。

入「何かお人形さんみたいですネ」

……死にたい

滝「はい、次コレで。」

なんだこの……セーラー服か?なんかところどころプロテクターが……

関「ガーター! ガーターベルト! 岩沢先輩がガーターベルト!」

入「さ、誘ってるんですか? そのスリットは……」

ひ「……黒髪ロングもありだな」

着てみたら（着させられたら）……なんだよコレは……まるきり変態じゃないか……

滝（ツンツン←）

（カンペ）『濡れるッ！って大きな声で』

岩「言うか！！」

何故か渡された刀で光を真っ二つにしてやろうと思ったけどひさ子に止められた……

岩「というかどうしてアタシだけなんだ……酷いんじゃないか？」

滝「……………匙は投げられた。」

ひ「匙投げてどうする、賽だろ」

関「いや、合ってるっぽいですよ？」

その後、白髪ショートで背中開いた服でベレッタ持たされたり蒼髪ショートでエルフ耳つけされられたりして……今は薄いピンクのロングにスカーフをしている

岩「……今度は何て言えばいいんだ？」

もはや諦めておもちゃになっている……

滝「こんな感じに…」

カンペを渡された。

ドSな感じに…って……

岩「……お前早く仕事しろよ、アリの方がよっぽど働いてんぞ」

滝「ウグッ……陽動班の事ツスヨネ？」

岩「すいませんもうちょっとはつきり喋ってもらえますう？」

滝「……」

ひ「……岩沢が壊れた」

岩「蚊もお前の血だけは吸いたくないってさあ」

滝「……もう、やめ」

岩「わぁー膝が笑ってるーお前みてー」

滝「ゲフッ……」

関「滝沢アッ！」

岩「チャック全開なのもーファッションなの？」

入「岩沢先輩！オーバーキル、オーバーキルです！」

$$\begin{array}{c} \sim \\ \sim \\ \sim \\ \sim \\ \sim \\ \sim \end{array}$$

~~~~~

岩「最近のゴミって技術が発達してるねえ、歩くんだもん

「……と、みんな何で寝てるんだ？」

関「……ありがとうございました」ガクツ

•

—  
—  
—  
—  
—  
—  
—  
—  
食堂



トルネードにて

ひ『これ、滝沢が最後に握りしめてた曲なんだ……』

岩『そんなのアタシが歌っていいのか？』

ひ『ああ……第1期（略）』

ってなんか頭の中に変な光景が……

岩「次の曲いくぜ、『タイトルなんて自分で考えなさいな』！」

結果から言っていると今回も無事にトルネード終わらす事が出来た  
ただ光を筆頭に「踏んでください」って言ってくる奴が出始めた……

……もう二度とあの服着ないしあの歌も歌わない。

終われ。

# My Desire

校長室

ゆ 「……夏ももうすぐ終わりね……」

音「そーいや四季、あるんだっただな…」

松「焼き芋がうまい季節になるな」

滝 「やはり季節ってのは移り変わるのがいいな。」

俺はあいつの前に立っていた  
そして真面目な顔で宣言する

滝「俺はまだ水着を見ていない」

？「……君はそんな事を言いになぜわざわざここに来たのか!？」

……何故呆れる。ロマンだろう

滝「夏が終わってしまうなら終わらせなければいいとは思わないか  
」

？「そりゃここなら気温弄るくらい……って僕はやらない、やらないぞ

というか君、自分で消えるって消える気ないじゃないか!」

確かにその通り……だが

滝「そりやお前卒業式は3月ってもんだろう？  
……満足出来ないが消えられないしな」

？「クソっ！やればいいんだろう、やれば！」

もはやキャラなんてしつた事ではない、とヤケになっている

そして、

――――校長室

ゆ「あー！何だってこんなに暑いのだよ！」

ゆりが帽子を床に叩きつける

日「やっと涼しくなったと思ったらこれかよ……」

直「神は暑くない……」

音「ええいあつついからお前らひつつくな！」

滝「両手に華じゃないか……」

音「……ゼラニウムみたいな臭い花に思えるぞ

つかそう言うなら変わってくれよ……お前の華は綺麗な花じゃないか……」

滝「お断りだね、まさみがお前にひつつかれる事喜ぶわけがない」

岩「……いや、冗談抜きで暑いから光も離れて」

椎「あさはかなり」

メンバー全員だらけきっているとゆりが遂に念願の一言を発した

ゆ「……プール行きましょう。」

音「プールなんてあるのか！」

そりやあるだろ……普通の学校なんだから……と日向が突っ込む

他のメンバーはと言うと、

野「よっしやああ！」

藤「……………」

高「この肉体は水泳の為に鍛えてきたのです！」

大「暑さからやっと逃れられるね」

露骨に嫌がってる奴が約1名いたが、ほぼ全員が歓声を上げていた。いくつになっても泳ぐ事は楽しいと思う

音「藤巻は嬉しくねえのかよ？」

藤「……俺カナヅチなんだよ」

滝「藤巻、俺らは楽しんで来るから…お前も男としての義務を果たすんだ……」

毎度お馴染みのカメラを藤巻に渡し藤巻と男の友情を感じつつ抱き合った。余談だが服着せ替えした時の写真（日向の物のみ渡した）でチャー達は歓喜の声をあげたそう

音「お前ら……コレなのか？」

「「ちげえよ！」」

って合わせんな！音無がひいてっぞ！！

岩「……息ぴったりだね」

滝「な、何故そんな悲しそうな顔をするんだ！違うって！」

椎「浅はかなり」

ゆ「そこ、毎度毎度馬鹿やってんじゃないわよ。んじゃプールに行くって決めたわけだけど……個人で水着、持っていないわよね？」

「「「あ」」」

……マジかよ

ゆ「まあ授業はサボりが基本だったからね……売店で各自購入の後、プールに集合よ。」

遊佐さん、授業日程は？」

ゆりの椅子の後ろから遊佐が現れる  
……待ってたのか

遊「今日は……午後、体育のあるクラスが2つありますがどちらも授業は球技です」

炎天下の中球技とか死者がでそうだな……死んでるが

ゆ「最高ね、んじゃそういう事だから、13時30分に現地集合で解散！」

――――――――――売店

俺と岩沢らいつものメンバーは水着を買いに来たわけだが授業中であるからやはりというか店内は戦線メンバーを除きガラガラだった

滝「つかなんで売店で水着が売ってんだ……って広いし……！」



学校の中にしま〇らがあるみたいだ…

と、関根らは早速水着を選んできたようで試着して見せにきた…

関「たつきーコレどう思う？」

入「似合いますか？」

関根と入江の2人は標準的ないわゆる三角ビキニだ。

布面積も広く健全なタイプ、形も同じのを選んだようで関根は黄色、入江は水色が、2人にとってもマッチしている。

滝「良いんじゃないか？」

つかお前ら結構着痩せするのな…」

その癖出るところでている…

関「ちょっと、視線がエロいよ？」

入「岩沢先輩に報告ですね♪」

お前らが見ろって言ったんじゃないか…つかなんで嬉しそうなんだ

ひ「おーい滝沢、あたしは？」

後ろから声がしたので振り返ってみるとひさ子がいた…

ホルターネックの赤いビキニは布面積がそれなりにあるが彼女の豊

満な胸を隠しきることは出来ておらず、その水着が絶妙なバランスで胸を強調している、これを見たら男子ならば丹田に感じるものがない奴はいないだろう、素晴らしいだいなまいとばでいだ。

ひ「……そうか、正直な感想どうも」

あれ？何その夏場の放置された生ゴミを見るような目は。やめて感じちゃう

入「…滝沢先輩全部声出ちゃってますよ……」

滝「む……どこからだ？」

入「ホルターネックから、やめて感じちゃうまでです。」

ホントに全部じゃねえか…

関「報告ですね♪」

だからなんでそんな楽しそうなんだ

滝「で、まさみは？」

岩「ん、こんな感じ。どう？」

岩沢は後ろをジッパーで止めるチューブトップの黒いビキニだった。黒といってもセクシーさというより下も同色のハーフパンツを合わ

せて来たからかカッコ良く収まっている。

そしてひさ子のように『巨』という程ではないにしろ普通に制服の上からでも見えたその膨らみは全体的に華奢な体付きが露わになったということでした。自己主張しており、形のよさも相まって素晴らしいの一言に尽きる。

更に彼女が恥じらって視線を少し下げながら聞いてきたあの瞬間、頬を少し染めてモジモジしながら…最高に可愛いね、女神だね……俺あ正直死んでもいいと思っただわ……

関「……だから喋ってるよ。ひさ子のように、から死んでもいいと思っただまで全部。」

岩「うん、まあありがとう」

滝「……すげえ恥ずかしい」

ちなみに俺の水着は割愛。普通のトランクスタイルだ。  
今までのノリで男水着の説明描写とかブーイング必至である

そして俺らは水着を購入。  
水着の上から制服を着て食事をとることにした

……このスタイルに小学校を思い出したのは俺だけではないだろう

・

————プール

そして現地に到着してみると他の面々は既に到着していたようだ。

うん、遊佐はワンピースで可愛らしいし、ゆりもビキニが眩しい……まあみんなも普通の水着……

じゃないのがチラホラいるな

例えば竹山。

横ストライプの全身覆われているタイプのダイバーズスーツのような  
水着だ…

あと椎名。なんであんな上サラシなんですか。隣の大山とか目が釘  
付けですよ。

そしてやっぱりというか高松。

全身ムキムキマッチョなのはわかっていたが黒の布地の少ない……  
Tバックブルーメランパンツとか勘弁してください。台無しだよ。

ゆ「よし、全員揃ったし入りましょうか」

ゆりが足を交互に上げつつ言う。

地面、コンクリがアツアツなのでさっさと入りたいらしい

藤「……楽しそうだなオイ」

—  
—  
—  
—  
—  
—  
—

アタシはひさ子達と顔をだして手だけ平泳ぎのようにしてまったり泳いでいた。

というか泳いで思ったんだけどこのプール、相当大きい。50mが10レーンあるサイズで水深も遊佐が言うには4mあるそうだ。

ひ「いやー最高だね」

岩「ああ、ホントに気持ち良いな」

言いながらザバン、とひさ子が背泳ぎを始める。

そして、水面に浮かぶのは、

.....

入「……岩沢先輩、もはやあれは憎らしいと思いませんか？」

岩「うん、いっぺん死ねばいいのに」

死んだ世界ジョークをとばしながら自分の胸に手をやる……やっぱり大きい方がいいのかな……

入「ポロリもある、というのを思い知らせてやりましょーぜ……」

……やめとけ、死ぬぞ。

と、ここで水中からいきなり椎名がイルカのように跳び出してきた。

……アレ、ホントに人間か？

あたしはすげえなー、と見ていたがどうやら着地場所が悪かった。

頭からひさ子のお腹に直撃したっぽい。

んで関根と入江も巻き添え食らって一瞬溺れかけてた。

ひ「しっ、椎名テーマ待ちやがれ！」

椎「あっ、浅はかなりー！」

関「ふっざけんな椎名っちー！」

……あーあ、あいつら追っかけ出したよ……

岩「浅はかなり……ってか？」

……っーか光どこだ？

またなんかいやらしい事考えてんじゃねーよな？」

入「あはは、まさかあ。

滝沢さんもそこまで露骨にスケベじゃないですよ」

——  
——  
——  
——  
——  
——  
——



ところが俺は露骨にスケベだったのだ

うん、水の中って結構声響くのな…と岩沢の下で思っていた……

息もヤバいし、目標へ一気に突撃させてもらおうか……っ！

俺は白い背中に手を伸ばした

――――――

向こうではまだ追いかけてっこしてるよ……

岩「元気だな、あいつら」

入「ですねー……」

相槌をうって入江も混ざりにだろうか、向こうに泳いでいった

岩「……っつかあんなにアホやっててよく疲れナッ!？」

な、なに!？

滝「捕まえたー」

岩「光！？お、お前どこ触ってんだよ！」

滝「ん？腰抱きしめてる、かな」

岩「~~~~ッ！！」

コイツは…！

滝「まさみは何時でも初々しいよな」

岩「こっ、こらへそいじんな！」

滝「よいではないか」

岩「……やめっ……あっ……」

ひ「ほお」

光、顔真っ青になってる……というか戦線メンバーもいつの間にか全員集まっちゃってるし……

日「よくプールのど真ん中でなあ……男だぜ」

大「あ、続けて続けて？僕たち邪魔はしないからさ」

ゆ「岩沢さんも大胆になったわねえ……」

ユ「恋人がいるって素敵ですねー」

ああ、もう、だめ……

滝「ま、まさみさん？気絶すんな！俺を置いてかないでくれ！！」

その後戦線メンバー全員に囲まれ、滝沢が岩沢を抱えたまま質問責

めにされる事を余儀なくされたのはまた別のお話

## Fall of Spring

――――校長室

ゆ「……夏ももう終わりね……」

松「焼き芋がうまい季節になるな」

音「……デジャヴ？」

と、皆がまったりしていると校長室の扉を開け遊佐が入ってきた。

遊「ゆりっぺさんゆりっぺさん。

チャーさんから伝言を受け取ってきました」

チャーらはギルドが破壊されずに残っているからか非常に積極的に行動している。

デジカメ制作など余裕がある証だろう

ゆ「ん？なんで遊佐さんを通してくるのかしら……」

遊「いえ、すぐそこで会ったので」

日「地上に出て来てんのか？なんでまた……？」

遊「内容は

『ギルドの廃熱でお湯沸かしたんだがな。

それで銭湯作ってみたぜ。戦線の資金源になるんじゃないかねえかってなあ。

おめーらも一度来いよ、すげえ良い出来だから』

との事です。」

無表情に淡々と、言われた事を本当に繰り返したようだ

しかし無表情でも全身をゆさゆささせていて、行きたいオーラが満ち満ちている：誰の目から見ても明らかだろう

ゆりもそれに駄目とは言えないようで、というか本人も乗り気のようだ。

ゆ「……あいつらも暇ね……

まあ、戦線のみんなもレクリエーション施設として使えるなら問題ないわ。

資金源ってのもなかなか良いアイデアね……

さっそく今日行くわよ！」

「「「「「おおー!!」「」「」

————第二連絡橋、階段

銭湯は連絡橋にある階段下の河川敷、その上流に作ったそうだ。  
明日から宣伝する、と言っていたがちらほらと戦線メンバー以外の  
姿も見える……NPCとかどっから情報仕入れてくるんだか……

関「でも残念でしたね」

関根がニヤニヤしながら話しかけてきた

岩「何がだよ？」

関「男女別々だそうですよ？」

………

岩「いや、お前が何考えてるかはわかるけど……そういうのは期待  
とか以前に望んでないから」

まったく……周りはすっかり秋めいてきたというのにコイツの頭の  
中は年中春なんだな……

ひ「まあ、そのおかげであたしらは安心してデカイ風呂に入れるっ  
てわけだ」

基本小さなユニットバスですし大きなお風呂とかわくわくします」

まあ今日はゆつくり疲れをとろうかな……



日「って待てえい!!」

野郎共の裸なんか描写したのなんか誰も望んでねえだろうが!!」

いや、思ったより長くなったため残念ながらお楽しみは尺の関係上次回に回すことになりました。今回はほぼ野郎だけです

日「認めねえ、認められるかよ!」

音「日向さっきから誰と話してんだよ...?」

男性諸君は今回の話、見るのをやめてもらって次の話が更新されるまでまってもいいだろう。むしろ右上の×ボタン、並びに携帯ならブラウザバックを推奨する

日「だからいらねえつつってんだろ!」

アホやってる日向らを横目に俺や藤巻は体を洗い、湯船へと浸かつ

た。

湯はちょうど良い湯加減で

そして高松は湯船の中央に立つと、腰のタオルを取って肩にかけポーズをきめた。

……ちょうど股間が俺の目と鼻の先、同じ高さにある……

高「……どうですか？」

滝「……脳みそとろけてるんじゃないか？」

俺は目を閉じて、岩沢の姿を思い出し必至に中和作業に入る。俺には男のソレを凝視するような趣味はない

高「いえ、絵になるでしょうこの筋肉」

藤「失せろ」

野「くたばれ」

日「地獄に落ちろ」

俺の隣、同じ目線のラインで見せられたこいつらも同じだろう

高「むう……残念です」

高松はしぶしぶ湯船に浸かる。

俺達も普段馴染みのないデカイ湯船に足を伸ばしてまったりとしている

改めて周りを眺めると男湯だけでもなかなか巨大だ。サウナも、露天風呂もある。

中央には露天風呂の部分も含め壁で仕切られている……向こうは女湯だろうか

滝「露天風呂もあるんだな……いつてみるか」

音「だな、俺もいくぜ」

直「あ、お二人がいくなら僕もいきます」

日「つかおめーなんでここにいんだよ……」

結果的に男子全員で露天風呂へきたのだが……

滝「なかなかどうして良い眺めだな」

うん。隣の風呂にまでハルバード持ってきたアホがへりの上にあがって「おーこりやすげえ」とかほざいてなきや最高の景色だろうそのモンスタークラスのきたねえのを早くしまいやがれ

……他には松下くらいか？負けそうなのは……

とか考えていると塀の向こう側から女子の声が聞こえてきた

入『良い眺めですねえ』

ゆ『お湯に浸かりながらこの風景！最高ね』

遊『……ゆりっぺさんはしたないです。

へりの上にタオルも巻かずに立たないでください』

野田と同じかてめえは……と聞こえてくる声に心の中で突っ込んだ

ゆ『気にしないわようせ私達くらいしかないんだし

……それはそうと……ひさ子さんやっぱり胸大きいわね……何食べたらしんなになるのよ……』

岩『ホント。憎たらしいくらい。』

ひ『お前らな……岩沢だって結構あるじゃねーか、オラオラ』

岩『やつ、ちよつ、ちよつとひさ子やめ……っ！』

べしっ！

ひ『あいたっ！』

椎『浅はかなり……』

ゴクリ。

俺だけではない。壁の向こうから聞こえてくる言葉に全員が生唾を飲み込んだ。

日「……なあ、俺は思うんだよ。  
お約束には従うべきじゃないかってな」

滝「だな、その行為を行わないのはむしろ彼女らに失礼にあたる」  
俺たちはなんとか向こう側を覗こうと、壁にへばりついて僅かな突起等がないか探していた

音「……なあ、やっぱりやめようぜ」

少し離れた所からそれを見ていた音無がうんざりしたように言う

日「何言ってやがる音無。臆病風に吹かれたか」

……だがこの壁、3mはあるな……とてもじゃないが1人じゃ無理だ。ここは協力しよう」

全員（音無と直井を除く）が何か決意した表情を浮かべた

松「……むう、ここは俺が下になろう」

「」「」「松下五段……」

松「俺が上に上がれるとは思っておらん」

そして皆（2名除く）が抱き合って松下の自己犠牲の精神に涙を流した

野「よし！俺から行くぞ」

野田は松下の肩の上に足をかけ、立ち上がる。

ただ思ったより高くまだ届きそうにない……そして野田は壁のてっぺんに跳び顔を出した

ベチッ

顔を出した野田はゆりが投擲した濡れタオルによって撃墜されたのだった

ゆ『全部聞こえてんのよ！』

日「くそお……マジかよ……だが俺は諦めねえぜ……  
おめえら、風呂からじゃなくライフルのスコープ越しでいいからあ

っちの山から覗くぞ」

……

日向、野田、藤巻、松下、高松らはその声に続いて続々と風呂を後にしていった……

滝「流石に付き合いきれねえぜ……」

音「珍しいな……お前にしちゃ、やけに諦めがいい」

滝「だってあっちにつく頃にはぜってー誰もいねえし……」

ドーンと山の方から爆発音と煙が上がる

滝「……ゆりがそっちに気を向けてないとも思えねえ」

# Arcadia (前書き)

悔いはない



## Arcadia

――――銭湯内大浴場 女湯

空は青く、山は紅く染まり、そんな場所から眺める景色は格別のものだ

だがそれ以上に美しいのが一糸まとわぬ姿で、お湯と戯れる8人の美少女達である

こんな場面はそうそう訪れないだろうからいつもより気合を入れ  
て書かせていただく

あまりいいとは思いますが女性読者はやはり右上の×ボタンか携帯の  
電源每落としていただいて構わない。どうしても読みたいなら「男  
ってバカね……」とか「ドン引きだわ……」等と思いつつ冷ややかな  
目で読んでいただきたい

以上。

――――露天風呂

入「良い眺めですねえ」

順にいく、入江は全体的に色白でありその陶器のような肌はいやらしい気持ち無しに見るもの全てがすりすりしたくなるだろう。

（無論見る者にいやらしい気持ちがあったら余計すりすりしたくなるだろうが）

ゆ「お湯に浸かりながらこの風景！最高ね」

ゆりはスタイルが良い。女性ながら戦線メンバーを率いているその身は引き締まっており、かつ豊満な部類に入るその胸も相まってナイスバディの一言に尽きる。

芸術的、かつ男の丹田やらリビドーやらにズンツとくる肢体なのである

遊『……ゆりっぺさんはしたないです。

へりの上にタオルも巻かずに立たないでください』

遊佐は全体的に張りがあるとはいえまだあどけなさが残る小柄な体つきであり、それとアンバランスな程落ち着いた物腰、喋りのギャ

ップがまた素晴らしく見るものを魅了している。

ゆ「気にしないわようせ私達くらいしかないんだし  
……それはそうと……ひさ子さんやっぱり胸大きいわね……何食べたら  
そんなになるのよ……」

岩「ホント。憎たらしいくらい」

岩沢はたびたび触れてきたが、全体的に華奢である。くびれた腰、スラッと伸びた脚でありながら……胸も決して小さくない。

いつもひさ子やゆりと一緒にいるから小さいような印象をうけるかもしれないが彼女もまたナイスバディ、と言える。

そんな彼女はお湯の中でクールに足を組んでいるが、頬を上気し、いつもより無防備にまったりしているのだ。

流石ヒロイン、私なら飛びつく。私じゃなくても飛びつきたくなる美しさだ。

ひ「お前らな……つか岩沢だって結構あるじゃねーか、オラ」

次、ひさ子。

彼女ははっきり言うてしまうが戦線女子一である。何が、とは言わない。その体形はまさにどこぞのグラビアアイドルと言われても疑う者はいないだろう。

そして何より彼女は今ポニーを解いており、たわわに実った胸を隠すように張り付く髪がまた見るものをたまらない気持ちにさせる

岩「やつ、ちよっ、ちよっとひさ子やめ……っ！」

べしっ！

ひ「あいたっ！」

ここで狼藉に及んだひさ子に椎名の手刀が入る。

椎『浅はかなり……』

椎名は素早い動きからは想像も出来ないが「着痩せするタイプ」だ。引き締まった肉体でありながらたっぷり量感のある胸。

またうなじにまとわりついた髪をはらうその仕草は我々に「日本人に生まれて良かった」と涙を流させるだろう

そして日頃の騒がしさは何処へいったか2人でまったりとしている

関根、ユイ。

関根も入江のようにすらっとした体形ではあるが出るところはちゃんと出ている。仰向けにうつとりしている彼女の胸は水面につややかな光沢を放っておりなんというかもうたまらない

ユイは一番小柄な体つきであり、これまた発育途上だ。胸もお尻も小さいが、むしろその筋の方々にとってはほぼ理想的バランスを保っているだろう

普段と変わり静かな彼女はまさに今、華である

松『……むう、ここは俺が下になろう』

『『『『松下五段……』』』』

と、ここで男湯の方から不穏な言葉が聞こえてきた……

ゆりは全員を見渡すとタオルをつけるよう指示、ゆりは……小さなタオルを投げる体勢に入っている……

野『よし！俺から行くぞ』

どうやらあたりだったらしい。野田が飛び出して来ると同時にゆりはタオルを投擲。顔に直撃して撃墜した、お見事……

ゆ『全部聞こえてんのよ！』

だけど……よくみたらこちらへんかなり見晴らしがいいしアイツらアホだからそっち行くんじゃないか……？

ドーン、タタタタッ

あたしがそんな事を思っていると山の方から爆発音と……銃撃音まで聞こえてきた。

岩「……なんだアレ」

ゆ「ああ、覗けそうな場所に地雷とセントリーガン仕掛けておいたのよ。設置は竹山君に頼んだら「喜んで」やってくれたわ  
しかし本当にかかるなんて……滑稽ね」

遊「悪役の顔ですよゆりっぺさん」

……不気味な笑みを浮かべるゆりに、とりあえずあたしは竹山と男  
子どもの不幸を哀れんだ

――――

滝「ぷっはぁー！ やっぱ風呂上がりはコレだぜ」

食堂が遠くない事もあり俺はズタボロになって帰ってきた日向達と  
ビン牛乳を買って飲んでいる。

日「あー、まったくあそこまでするかよフツー。3回は死んだぜ」

音「お前らがアホな事するからだろ…つか1回で諦めろよ」

日「だっとそれがロマンってや……がアっ!？」

爆音と共にユイが日向に飛びついて……そのせいか日向は牛乳ビン  
が口の中に勢いよく入って歯で割れて、なんというか大惨事である。

と、日向すかさずジャイアントスイングで反撃。ユイは何故かジャージ姿だから遠慮無くぶん回している

日「てめえ殺す気か!!」

ユ「ギャーギブギブ! って痛あ!？」

……周りの椅子にぶつかってるけどユイのヤツ大丈夫かアレ?

岩「あ、光牛乳あたしにも。」

滝「ん。…つか何でお前らジャージなん?」

飲んでいた牛乳をこれまたジャージ姿の岩沢に渡しつつ聞いた  
一緒に来たひさ子もジャージだ

ひ「スカート穿いてたら冷えんだろ」

ああ、なるほど。俺は一生分からだろうが確かにスカートって冷えそうだ……

滝「なるほど……お前らのスカートなんか特に短いしな」

岩「うん。あ、ごちそうさま」

カラになった牛乳ビンを受け取ってゴミ箱に捨てる。

……というかジャージ姿も可愛いなチクショ。大きめのサイズなのだろうジャージは袖から指だけ出ている……  
で、胸元はかなり開放的に感じるというか……

ピシッ

岩「どこ見てんだよ

牛乳じゃ足りねーぜ？」

ニヤリと笑いながらデコピンをして岩沢はジャージのチャックを一番上まで上げた。

でもやっぱり大きいわけで……チャックを上げたせいで立った襟の中に口が隠れ気味になり……凄い可愛い絵になっている。

俺がまだニヤけてるのを不審に思ったのか切れ長の目を更に細め、いやジト目か？にして首を傾げる（無論口は隠したまま）岩沢。ああ、だめだ更に顔がニヤける……

ひ「……おめえのツラすげえ事になってるぞ」

おっと失礼……

いや、でも、というかさつきから岩沢から感じるシャンプーの匂いとか、濡れたままの髪とか……少し変な気分になる。

はっきり言うに興奮する。

掘り返すようで悪いが……つまりさつきまで彼女は壁一枚隔てた向こう側で生まれたままの姿になってたわけつまり……



ユ「……先輩全部声に出てます。」

む…またか。そこ、退くなひさ子。

ユ「でも確かに岩沢さんやひさ子の素肌……とっても綺麗でした。すべっすべで形も良くて、なんというか天使ですよ天使」

ゴクリ。いつもより大きな音が出る。

滝「すべすべ……だと？ お前…なんという羨ましい事を……」

日「お前の無乳はともかく……」

そいつは、最高に気持ちがいいだろうな……」

球技大会以来こいつこのフレーズ気に入ってるようでしみじみと言う日向。

台無しだよ。

ユ「んだとおっ!？」

あたしだってやあらかバスト持ってるんだぞー！興味あるだろ、揉んでみたいだろ!？」

日「どうでもいいわ」

ユ「このやろおーっ!？」

滝「興味あるぞ？」

岩「……お前ももう少し落ち着けよ！」

滝「ひさ子は揉んだんだろ！？」

岩「いや、ひさ子とお前は違うだろ！」

岩沢の両肩に手をおいて真面目な顔して言ったんだが、彼女も普段眠そうな目見開いてすげえテンパってる

……俺の肩にもトントン、と手が……

ああ、またこのオチか……

振り向いた瞬間、頭への衝撃と共に俺の意識は刈り取られた

## Arcadia (後書き)

やっぱり少し悔いある

## I n t e r m i s s i o n

— — — — —

椅子月飛翔日

今日はテスト！こちらがテスト受けるなんて珍しいね、とか思ってたら一時間目隣の教室からかな「Eィね まさみの C カップ！  
！！！」なんてたつきーの声が聞こえてきたからびっくり……  
ひさ子さんとかプルプル震えてて気が気じゃなかったねアレは  
しかもなんかそのあと凄い音してたし……マジで何やってんの？

んで三時間目、さっきから終わる度爆音がするんだけど岩沢さんが  
窓の外飛んでっただ。

……石畳のに頭からいったし絶対アレ死んでるで。そんな時のひさ子  
さんの表情凄かったね、笑ったらめられた。

あと五時間目くらいだったかな。岩沢さんがalchemy歌って  
て向こうかなり盛り上がって……テスト受ける気ねーだろ！

P・S・テスト結果（7教科）岩沢さん698点。二位。  
ごめんなさい。

— — — — —

奏ちゃん月不憫日

奏ちゃんが生徒会長辞める事になったんだって。なんかゆりっぺさん達一枚噛んでるっぽい。外道やなうちのボス。

そんなかわいそうな彼女がうちのところに転がり込んできたんだ。岩沢さんの歌聞いてついに泣いちゃった。こんなに感情だしてるとこ見るのなんて初めてだったね……

で、たつきーの一言で奏ちゃんから今までなんでうちらと戦ってたか理由聞いたんだ。……内容はちよっぴりシヨック、奏ちゃんはあたしらに満足欲しくてやってたんだってさ。……なんやこの子不器用すぎて泣けてくるで

でもやっぱりみんなおんなじなんだね。消えるならみんな一緒にいい、ってさ。まあ、ちよっぴりセンチな1日だったよ

— — — — —

直井月ギアス日

凄い光景だった。何度生き返っても痛いんだもん、何度でも殺されて……きつとみんな立ちたなくなる程撃たれてたんだ。あれはそういう血の量。

直井は岩沢さんが成仏しかけたって言った。幸せな記憶で自分があ

たしらを救ってやるって。

直井は音無に殴られて説得されて改心したっぽいけど……

余計なお世話ってやつ！今岩沢さんはここにいて、あたしらと一緒にいてくれる！

みんなで笑ってられる生活を終わらせようとしなくてよ……

――――

お魚月釣り日

やってまいりましたモンスターストリーム！今回はスーパーガール奏ちゃんもいるし絶対主釣ったるで！

岩沢さん、虚ろな目で ライブしたい ってひたすらリピートするのはやめてください。音楽キチアピールはいいので今日は釣り楽しみましょーぜ

で、奏ちゃんマジで主釣っちゃった！なんかたつきー喰われてたらしくて……救出されたけどヌメヌメで正直キモい。復活した後もお魚料理食べられなかったね、残念。とか思ってたら……岩沢さんが何かつくりにいきたい……だと？

前言撤回、お前ら消えちまえよおっ！

まあ心優しいあたしは食堂のおばちゃんに彼氏に料理作りに行きたいから材料欲しい、的な事言ったら「あらまあ、青春ねーラブラブねー。頑張りなさいよ」とか言ってタダでくれた。

……おばちゃん、うん、あたしじゃないんだ

あたしだって恋してえよ！

いいもん！今夜みゆきちとらぶちゅっちゅするからいいもん！さあ  
イチャイチャしよ……って、おやおやなんだね、そのかわいそうな  
人を見るような目は

――――

みゆきち月マジキチ日

岩沢さんの腹ぺこソング歌詞出来たっぽい。なんか今までの曲より  
明るい感じだね。

国士……無双……しかも13面？ハハハみゆきち、なぜ上家の五段  
を見逃してあたしからあがるんだい？昨日アル○オートを食べた事  
をまだ恨んでるのかい？

しかもあたしに敬語で喋れと……みゆき様今日は鬼やで……たつき  
ーは甘いもの禁止……ってうおお！？ふざけんなああ！！

でもまさにゃんが可愛いから許す、超許す

――――

真紅月マリア日

ごちそうさ（このページは後血で汚れて見えない）

— — — — —

## プール月水着日

すごくあつづい日……だからかな、みんなプールに行くんだって。作戦でもなんでもないけど色々満喫しちゃっていいのゆりっぺさん？

どうでもいいんだけど水着来た時のたつきーヤバかったね、魂どっか行っちゃってたんじゃね？っていう。

つか毎回思うけどだんだん遠慮しなくなってるよあの2人！悲しくなるからあたしの目の前でイチャらないでよ！

— — — — —

## おっきい月お風呂日

あゝ…生き返るねコンチクショ

今日だけはお調子者キャラは返上させてもらうよ

……でもここいい眺めだね……



ひさ子さんのおっばいとかゆりっぺさんのおっばいとか岩沢さんのおっばいとか椎名っちのおっばいとか。

……むにゅむにゅ、と揉めど大きくならず、じっと手を見る……

チクシヨー!!

# SCHOOL GIRL FANTASY

――反省室

奏が生徒会長に復帰した。

テストの答案がすり替えられた事を、筆跡で証明したところ、簡単にもどれたそうだ。

ということで、俺達は反省文を書くことに。

高「あの錐揉み飛行は何だったんですか」

日「だよな！」

高「おや。珍しく意見が合いましたね」

岩「でもよかったじゃない、戻れてさ」

日「ああ、確かに直井よか天使の方が数倍いいぜ……だが！飛ばされた奴にしかわからねえよ、この気持ちは。俺達は錐揉み飛行仲間さ！」

高「おっと。私を脱がす気ですか」

日「おお、脱いでやれ脱いでやれ！」

……何故脱ぐ。何故抱き合う。

半裸のせいかマジでヤバイ光景だぞ……

岩「やめなよ、うるさい」

日「そうだ！気持ち悪い！やめろ！」

竹「どっちですか」

………

滝「なあ、竹山……お前反省してるのか？」

竹「ええ、やったことは悪い事ですし真面目に反省してますが？あと僕の事はクライストとお呼びください」

ヤツの原稿用紙には「竹山 クライスト」と書かれていた……まさか「名字じゃなく名前で呼んで」と言いたかっただけなのか……?!? いやでもそんな名前なわけが…

岩「……お前今凄い顔してるぜ？」

滝「むう、いやなんでもないんだ……」

……すげえもやもやする……気になる……いつか奏に聞こう……

午後からガルデメンバーでユイの指導をしていたのだが……

ひ「ストップ！やめやめ！

こらユイ！ そんなヨレヨレのリズムで続けるな！」

演奏を止めるひさ子に入江も突っ込む

入「ユイ〜。歌うか弾くかどっちかに専念した方がいいんじゃないの？」

関根も苦笑いしながら言う

関「あーそりゃ言ってる。今のまんまじゃ酷過ぎるわ」

ユ「そんなあ〜」

岩沢さんだって弾きながら歌ってますよ？」

ひ「そりゃ岩沢はどっちも上手いからだよ」

滝「比較対象がレベル高すぎたな……」

うん、岩沢はもともと音楽で食っていきこうとまで考えてた位だし……でもユイが音楽を始めたのはこの世界に来てから……比較するのが酷ってもんではなからうか……

岩「……弾きながらはそう簡単じゃないから、まずは別々に練習して……」

別々ならそう悪くないのだ、と岩沢がフォローしていた所……

ガラッ

奏が教室に入ってきた。

大多数は奏の突然の来訪に呆然としているが

岩「ああ、奏、ちょうどいい。ちょっとユイの演奏を聞いてくれな  
いか？」

と、奏はそれに応えたかどうかは知らないがユイを指さし、一言言  
い放った。

奏「お前のギターのせいでバンドが死んでいる」

……………

ひ「一瞬にして弱点を見抜いた!？」

関「やっぱりただ者じゃない!」

入「音がわかるのよ」

岩「……まだ聞かせてねーだろ」

滝「つか口調変じゃね？」

驚いている5人とその横で絶望状態のユイ。

ユ「そんなぁ。たいていみんな気付いていないと思ってたのに！」

奏「というわけでしばらくそのギターは没収させてもらう」  
奏はギターを没収するとちょこちょこ走り去っていく。

ひ「……なんだったんだ？」

しばらく呆然としていたが岩沢が口を開いた。

岩「まあいい。ボーカルだけ練習してみようか」

岩沢の言葉に渋々だが歌い始めるユイ。

関「そうそう、ギターなしじゃ全然ヨレないじゃん」

だがユイ自身は満足していないようだ……。

ユ「でもちょっとサウンドが薄いですよね…リズムギターとかもやつぱりいりますって！」

ひ「……だそうだ。岩沢、リズムで入っちゃって？  
サウンド薄いってんなら滝沢も。」

ひさ子が今日は見てるだけのつもりだった岩沢と俺に声をかける。  
……俺は岩沢とずっと一緒にいるからか、なんだかんだでキーボードだけじゃなくギターも弾けるようになっていた。基本は彼女に教えて貰ったため俺もリズムギターである。

岩「了解。」

滝「あいよ、リズムギターだな？」

しかしユイは納得出来ていない、彼女が言いたいのはつまり…

「あたしが言いたいのはあ！

やっぱバンドはボーカルがギター背負って歌うのが一番絵面的に痺れんでしょって話じゃゴラアッ！！」

滝「……キレんなよ」

岩「ユイ、お前ちょっと落ち着」

ユ「やっぱギター取り返してくる！！」

嵐のようにユイは走り去っていった……

ひ「どうするよ？」

岩「……とりあえず解散？」

今日はユイの練習だし……と岩沢が言ったので解散となった。  
関根と入江は食堂で甘いものの食べに、ひさ子はチャーのどこ行って  
アルコール貰ってくるらしい……

ひ「切れちゃったからな」

滝「アルコール云々はもう突っ込まないけど誰一人ユイ追っかけないのな……」

岩「……いや、体力保たねーって」

……確かヤツらグラウンドに行くんだったな

滝「追っかけなくて良いなら俺らもどっか行くか？」

岩「んー、いいぜ。何処いく？」



まあ夕方近くなるまでは遊んで問題ないだろうし、

.....

滝「……何処行こう？」

コレ！っていうスポットがねえ……

今思えばガルデモのライブとかそうそうのにもちようどいいんだろ  
うなあ……

岩「おいおい、誘うならデートプランはちゃんとたてとけよ」

額をツンと押された…全くもってその通り……

滝「……すまん」

岩「でも前もって決まってたんじゃないさ、晴れてんだし外  
行こうぜ」

俺は岩沢にグイグイ引っ張られて外へ行くことに……って情けねえ  
な俺……

————グラウンド

あたしが外に出てみたら、グラウンドにユイ発見。男子どもとサッカーしてる……

……ってアイツギター取り返しに行ったんじゃないのか？

滝「……………」

光も呆れて……………ってなんで真面目な顔？  
ったく……

岩「……………今は、こっちだろ？」

頭を両手で掴んでこっちを向かせてやる

滝「……………お前って大胆になったよな」

……………

岩「……………やってから恥ずかしくなってきた」

その後ずっと2人でベンチに座ってユイの方見てただけど……………音無のヤツ、ユイに付き合ってサッカーとかプロレスとか、野球とか

……………暇なのか？暇なら私達んどこにでも歌聞きにくりゃ良いのに

岩「って光？混ざり行くのか？」

滝「違う、けど行くぞ！」

無理やり手を引っ張られて……なんなんだよ

――  
――  
――  
――  
――  
――  
――

ユイの手は慣れないバットを振り回したせいでボロボロになっていた

ユ「いいよホームランが打てなくても、こんなにいっぱい体動かせたんだから。」

もう、充分だよ。毎日部活みたいで、楽しかったな」

サッカー、プロレス、野球。ユイが望んでいたことは精一杯体を動かすこと、それがテレビで見るだけで、自分の力だけでは体を動か

せなかったユイにとっての願いだった。

音「じゃあ、もう全部叶ったのか？」

体が動かせなかった時にしたかったこと。

ユ「もう一個……あるよ」

## 『結婚』

ごくありふれた幸せだ、そして

ユ「女の究極の幸せ。……でも、家事も洗濯もできない。

それどころか、一人じゃ何にもできない、迷惑ばかりかけてる、

こんなお荷物……誰が、貰ってくれるかな

神様ってヒドイよね。私の幸せ……全部、奪っていったんだ……」

音「そんなこと……ない」

ユ「じゃあ先輩。あたしと結婚してくれますか？」

ユイ目は真剣だった。本気の願い。

音無はそれに答える事ができなかった。

日「俺がしてやんよ！」

グラウンドに姿を表したのは日向だった

日「俺が結婚してやんよ。これが……俺の本気だ」

ユ「そんな……先輩は……ホントのあたしを知らないもん」

日「現実が……生きてた時のお前がどんなでも、俺が結婚してやんよ！」

もしお前が、どんなハンデを抱えてでも！」

ユ「ユイ、歩けないよ？立てないよ」

日「どんなハンデでもつつたろ！！」

日向が声を張り上げた

日「歩けなくても、立てなくても

……もし、子供が産めなくても……それでも、俺はお前と結婚してやんよ！

……ずっとずっと、傍にいてやんよ。

ここで出逢ったお前は、ユイの偽物じゃない、ユイだ。  
どこで出逢っていたとしても、俺は好きになっていたはずだ。また

60億分の1の確率で出逢えたら、そんな時もまた、お前が動けない体だったとしても、お前と結婚してやんよ」

ユ「……出逢えないよ。ユイ、家で寝たつきりだもん」

日「俺、野球やってるからさ。」

ある日、お前んちの窓をパリーンって打った球で割っちゃうんだ。それを取りに行くとき、お前がいるんだ。

それが出逢い

話するとき、気が合ってさ、いつしか毎日通うようになる。介護も始める。

そういうのはどうだ？」

ユ「うん……。ねえ、そんな時はさ……あたしをいつも一人でさ、頑張って介護してくれた、あたしのお母さん……楽にしてあげてね」

日「任せろ」

ユイはその言葉安心して涙を流し、

岩「まだ叶えてない夢、あんだろ？」

ユイはハッとして、歩いてきた岩沢を見る

岩「いつかあたしの隣で歌いたい、って言ってなかったか？」

滝「日向と式も挙げてないしな」

ユ「……素敵ですね。どちらも。」

……もう、ひなっち先輩のせいでどっちも出来ずに消えちゃうところでしたよ?」

日「……ったく、消えちまえば良かったのによ」

日向はユイに背を向け空を見上げながら憎まれ口をたたくが……  
ユイは後ろからそっと抱きついて言う

ユ「先輩泣いてるのモロバレですよ?」

日「……うるせえな! こうしてやる!」

ユ「ギャー! それが彼女にする事かアッ!」

ヘッドロック。それを見ていると自然に笑みがこぼれてくる、技をかけている日向も、かけられているユイも、そして音無も。

滝「音無よ、1人ずつじゃなくみんなと一緒に、の方がいいだろ」

音「……見透かされてたんだな、確かにその方が良さそうだ」

じゃれあうユイと日向を見ながら、音無もにこやかな表情を見せていた……

•

•

•



――――食堂

なんか用事があるらしい音無と別れた後、俺と岩沢、日向ユイは食堂で夕食をとっていた

岩「……ユイが羨ましい」

岩沢が焼きうどんを食べるのを止めボソリと呟いた  
ユイは頭にクエッションマークを浮かべながら岩沢を見る

岩「あたしまだ光からあんなに情熱的な告白されてなければ結婚しよう、とも言われてない」

滝「ムゴフオッ！！！！！」  
思いつきりむせた。

ユ「う、嘘だあ……」  
日「滝沢、お前へタレだな」

滝「け、け結婚？」

岩「ああ。それとも遊びだったか？」

滝「んなわけねーって！」

首を思いっきり横に振りながら否定する

日「まあコイツ実はシャイだからな」

ユ「あー、わかります。無意識でしょうがなんかやるときも必ず視界の端にストッパーのひさ子さんいるの確認してますもん」

……

岩「好きなんだろう？ んじゃ、あたしらも結婚しよう。」

………

滝「俺、甲斐性無しだぜ？」

岩「いいよ」

滝「俺、だらしないぜ？」

岩「知ってる」

滝「まさみを悲しませるかもしれないし……」

岩「いいよ」

滝「浮気だっけるかもしれないし」

岩「光がするわけない」

滝「……すぐに、離れ離れになるかもしれない」

岩「ならねーよ」

………

岩「何だっていいんだ。ずっとあたしの側に居てくれるんなら。」

あたしがヨボヨボの婆ちゃんになっても、ずっと側に居てくれるなら……

何だっていい。……他には？」

滝「もう一度聞くんが、  
本当に俺でいいんだな？」

岩「ああ」

滝「こんな俺でいいんだな」

岩「ああ」

滝「いい女だなお前」

岩「だから惚れたんだろ？」

滝「……このやりとり普通逆だよな？」

岩「ああ、カッコ悪いな」

滝「そんなカッコ悪い俺は岩沢まさみさんの事が好きで好きでたま

らないんだがどうしよう」

岩「さっきから言ってるだろ？」

なるほど。

滝「結婚してくれ」

岩「喜んで」

そう言うと岩沢は俺の顔を自分と向き合わせ、唇に自分のそれを重ねた。

ユイがキャーキャー言ってた

岩沢は離れて俺を見て言う、

岩「いいよ、見せつけてやればいい」

もう一度、今度は俺から唇を重ねた

Happy  
end?

•

校長室

ゆ 「……いい加減にしろ」

滝「何がだ？」

ユイに触発された二人は人前でも指を絡めながらイチャついたり、  
今や校舎全体が砂糖成分で汚染されつつあった。

ゆりは最初こそ

ゆ「あの岩沢さんがあそこまで可愛らしく変わるとはね……」

と、感慨深く黙認していたが、流石に作戦会議室たるこの部屋でも  
毎日毎日甘ったるい姿を見せつけられてはたまらない

そこで原因の片割れの滝沢を呼び出したのだが…

滝「……しょうがないだろ。俺がふとまさみの方を見たら、あいつ  
もなんか俺を見てることが多いんだし。しかもそれで、まさみの顔  
を見たら、彼女の美しい瞳に心が奪われるのは当然なんだから、見  
つめ合っている時間も長くなっちゃう。

それに近くにいればあまりの可愛さに抱きついてるしな、たまに  
まさみからってのもあるが……まあ結果的にお互いが抱きしめ合う  
形になるわけだし……」

ゆりは続けようとするのを手で制す

ゆ「……医者に見てもらった方がいいんじゃない？」

一息でどれだけ言うつもりだ、と。

滝「いやオバケの学校に病院はねーだろ。

それに恋の病ってやつは古今東西医者には……」

ゆ「……………助けて」

ゆりの苦悩は始まったばかりだった

## Give Me

———会議室

ゆ「今年もこの季節が来たわね……」

毎度毎度抜けまくっているメンバーの前でゆりが言い放った

ゆ「『オペレーション・ラバースパーティー』を行うわよ!」

「」「うおおおお!!!!」」「」

歓声を上げる男子メンバー達…

音「なんだそれ？」

音無が聞いてくる……が俺も知らねえ

……でも、

滝「恋人達の宴だなんてハートフルな名前なんだし大丈夫だろ…」

何も知らない俺達が話しているとゆりが拳を握りしめて宣言した

ゆ「NPCからお菓子を巻き上げるっ!」



「「そっちのラバー（robber）かよ！！」」

音「見損なったぜお前ら！強盗達の宴とか夢も希望もねーよ！！完  
全悪役じゃねえかよ！」

ゆりはやれやれ、と首を振って音無に向き直る

ゆ「音無くん？今日はハロウィンよ？」

作戦内容は仮装してお菓子かいたずらか？と聞きまくって……」

音「さも学園生活を満喫しているようにする、か？」

高「その通りですね」

……アホか

藤「菓子も食えるしストレス発散出来るし言うこと無しの宴だぜ」

どうみても今強盗ヅラだぞてめえ

だがそうと決まれば……

滝「まさみ、trick or trick？」

岩「ほら、飴やるからその怪しい動きしてる手どけ……」

何て言った？」

滝「t r i c k   o r   t r i c k ? （菓子はいらない、悪戯させろ）」

ドゴォー!!

爆音とともにユイに蹴り食らって吹っ飛ばされる俺。

ユ「ゴラァ!! 岩沢先輩に悪戯するんはあたしじゃボケェ!!」

曰「お前もかよ!!」

こんな惨状であるから何故かずっという直井らも苦言が漏れる……

直「全く悪戯だのなんだのと低脳なクズどもの思考はどうなってるんだ……」

あ、でも音無さんや滝沢さんなら僕に悪戯してもいいですよ？」

音「くたばれ」

訂正、コイツもアホだった

ゆ「アホやってんじゃないわよったく……」

作戦開始は0900時、それじゃ、オペレーションスタート!」

————音楽室

とりあえずガルドメンバーに今日のオペレーションについて説明する

ひ「いい年してよくやるぜ……」ジュルリ

ひさ子もこう言っているが口元がニヤけて一筋の液体の線が見えるあたり実際嬉しいんだろう

関根 入江は言うに及ばず……

入「まあまあ、いくつになっても甘いものは良いじゃないですか」

関「いえすまむ！つか滝沢……、せーの」

「「「Trick or Treat!」」」

ひさ子も岩沢もノリノリじゃねえか……

滝「お前らな……やるからまず並べ」

そう言うと、並んで口を開ける彼女達の口に購買で買ってきたお菓子（向こうも意識してるのかカボチャパイが売られていたのでそれを買った）を押し込んでいく

グイッ      パクッ

関「はひはほー」

グイッ      パクッ  
入「やたっ」

グイッ      パクッ  
ひ「サンキュ」

……

滝「……悪戯でも構わないんだが？」

岩「甘いのが食いたい」

だよね……

滝「はい、あーん」

岩「あーん」

グイッ      パクッ

岩「ん、うまいな」

滝「そう言ってくれるならこっちでも良いもんだな」

岩「いや悪戯が良いってのもどうだよ？」

滝「いやまさみの悪戯ならっていう……」

関「ひさ子先輩、さっきの菓子のせいですかね？……口の中がすげー甘ったるいんですよ」

ひ「奇遇だな関根、あたしもだ。オマケに胸のムカつきもある」  
入「ここと学習練の空き教室に渋いお茶常備しようよ」

……殺気を感じたので残念だが切り上げて本題に入るとする。  
つまり、

滝「とりあえずさっさと仮装して菓子をいただきにいきましょうぜ」

俺はそう声をかけてみるが皆は真面目な顔で考えていた

岩「……仮装って言ってもそんな服なんかないだろ……？」

ひ「売店行ってわざわざ買うのか……？」

関「お菓子和釣り合わねーですってそれ」

e t c e t c ……

滝「まあまあ、服ならある……」

岩「……………」

ひ「まさかまたこれを見ることになるとは思わなかったぜ……」

俺がみんなの前に出したのは唯一の日本語回で岩沢に着てもらった服である

あの後俺が嚴重に保存しておいたのだ

関「でも岩沢さんが着てたんだし……どうせたっきーの『使用済み』なんだろう？」

滝「ひっ、人聞きの悪い事言うんじゃねーよ!!」

ってまさみ!?! ひくなよ! んな事してるわけねーだろ!?!」

つか使うってなんだ使うって……いやみなまで言わない

岩「……………」

滝「な、何故無言なんだ…………?」

空気が重たいぞ……

岩「使ったのか？」

私が着た服……使っちゃったのか？」

お菓子食った時のご機嫌な様子から、少し涙目になっている……  
おい、今お前の中で俺はどういう存在にされているんだ…………?

滝「だからそんなわけねーだろ!」

岩「んじゃなんで……保存してたんだよ?」

滝「いやいや、勿論着るためだって」

一瞬沈黙。

岩「……着る？」

滝「いやだからハロウィンとかするだろ？って思ってたからさ

つまり、今着るんだよ、ガル」

ガルデモメンバーがな、と続けようとしたんだが

岩「へ、へんたああああああい！！！！」

ベチーン！

滝「グハァッ！」

その言葉と意識は最後まで続かなかった



————

まさか、まさかコイツが……あたしが着た服を着てみんなに見せる、公然女装癖のあるヤツだったなんて……前回の感動を返せ……返せよ……

ああ、サヨナラあたしの初恋……

ひ「……なあ岩沢、こいつ最後「ガルデモが」って言おうとしたんじゃない？」

岩「……」

……そういや「ガル」って聞こえたような……

……マジ？

関「いいビンタでしたよ」

入「あ、私達はコレ借りてお菓子貰ってくるんで滝沢さんはよろしくお願いしますね」

ポンっ

ひ「……頑張れよ」

.....

・

—  
—  
—  
—  
—  
—

うう……まさみにどう謝ったら……  
ってなんだかこの枕柔らかいな……

岩「ん？起きた？」

滝「うお！

膝枕ありがとうございます!!

じゃねえ、あー、怒って、る?」

恐る恐る……彼女に聞いてみる

岩「いや、むしろ勘違いでビンタしちゃったみたいだし……悪い」

うーん、謝る姿もこれはなかなか……

……ってこんな状況だがふと思いついてしまった

滝「……Trick or Treat」

岩「……この状況で言っただけことはトリックがいいんだろ?」

滝「ご名答。」

ポッキーを取り出すと口にくわえて、それを指で指してみる

滝「どっちかっていうとTrick and Treatか?」

岩「……アホ」

パクッ

カリカリ……と真っ赤になりながら進んでくるのもなかなかいいんだが……と思っていると岩沢は俺の顔を掴むやいなや……

岩「もぐ、もぐ……ふ……むう……！」

滝「むぐ……！？」

彼女の唇が、あっという間に重なっていた。

ただいつもと違うのは、彼女がいつもより積極的かつ情熱的という事だ

唇が、離れた。つ……と銀の糸がかかり、細くなって消えてゆく。

岩「悪戯、だ」

一瞬。見つめ合い、沈黙。

滝「お前な……俺だって男だぞ？」

若干期待を込める、止めてくれ、ヤバい事になる、と

岩「いい……よ……？」

受諾の意思。

最後の堤防が崩れた。

これは……いくしかないよな……？

ゴクリと、俺の喉になる。

すっ…と目が細められる、首に回した腕に力が入る。  
もはや、この目には彼女以外映らない、そんな気がした。

「…楽しそうじゃねーか」

そんな気がしてた

「!?!」 「ひゃいっ!?!」

思わず悲鳴をあげる。(可愛らしい方の悲鳴は、残念ながら俺のものだ)

一瞬の後、

世界が急速に広がっていった。  
急速に思考が覚醒する。確かに声がかけられた。

ゆっくりと視線を向けると、  
見覚えのある、長ドス達麻雀メンバーが立っていた。揃いも揃って  
アホな服装をしているが……

滝「お、お前ら……なんでここに」

松「うむ、ひさ子から菓子もらおうと思ってな……」

TK「Halloween eventで get a sweet s！」

フランケン姿の松下五段にドラキュラ？姿のTKが続く

藤「滝沢よお、てめー真っ昼間から乳繰りあってんじゃねーよ。」  
野球の時からこちとらひさ子と何の絡みもねーのによ、と江戸時代の  
侠客のような藤巻が嘆く。……そこまでしてドス手放したくない  
のか……

藤「しかしまあ面白いもんを見せて貰ったぜ。ひさ子と話す時の良  
い肴になるぜ」

ハハハ、と笑う藤巻。

完全に凍り付く俺と岩沢。

藤「実際真っ昼間からこれじゃ夜は相当」  
ドゴオオッ！！

直後、岩沢が数mの距離を一瞬で詰めると跳躍、回転、素晴らしい高さからの踵落とし（いつも履いているお気に入りのブーツ、羨ましい。：じゃない、凄く痛そうだ）が、チンピラの脳天に炸裂した。

それからしばらく床に転がり頭を抑え悶える藤巻を髪以上に顔を赤く染めた岩沢が蹴り続けていたのだった（2名は逃亡）

因みに水色のストライプ柄だったのだが、それを口にするると自分もあのアホと同じ目に遭いかねないので黙っておく事にする……

オ  
マ  
ケ。

・

・



— — — — —

その背に翼を生やした天使、奏と、  
戦線メンバーは対峙していた

奏「Trick or Szechuan Style Bean  
Curd」

ハンドソニック（ver5、凄く禍々しい……）を展開すると一気に奏は言い放った

日「な……」

なんつった？」

頭にクエッションマークが浮かびまくっている戦線メンバー達……

竹「……つまり麻婆豆腐ですね」

竹山が補足する

奏「麻婆豆腐くれなきや悪戯するわ」

音「持つてるわけねえよ!! つか奏、なんの冗談だよそれは!？」

日「つかそれハンドソニックか!? それ舐めながら悪戯とか勘弁して欲しいぜ……」

音無が突っ込むと奏は首を傾げて言う

奏「今日はハロウィンよ? あなた達が普段天使天使っていうから天使になってみたのに……似合わない?」

背中をパタパタと動かしながら聞く奏に「キュウウト!!!」  
「!」と叫びながら音無が特攻して串刺しにされるのはまた別のお話。

## **G i v e M e (後書き)**

あたし頭どっか知らないうち打ったみたいだ↑

でも頭の中の壊れた糖度計はまだいける、と言っている……

……甘いもの食べてちょい思考停止します

## F a i t h f u l

――男子寮 滝沢・音無部屋

藤「これ上がれは一気に浮上できるぜ……通れば……リーチだ!」

滝「残念、チートイドラドラ6400だ」

音「お前囁ませだよなあ……」

後ろで見っていた音無にも言われているが藤巻はこういう口上を言ってリーチで振り込む事今日通算10回を超え、ついに彼は4連ラスとなっていた……

松下「藤巻、お前もうジュースも買えんのではないか?」

TK「g o b r o k e?」

そう、松下とTKはさっきからちよくちよくあがり拾っているが藤巻は未だに焼き鳥状態、その上振りまくるもんだから実際財布はカツカツである……

藤「クソッあと数日で小遣い日だからってこれじゃコーヒーすら買えねえぜ……」

ご愁傷様……

藤「しゃあねー種切れた。俺も見てるわ」

滝「あ？サンマか？別にいいが……」

あんまり好きじゃないんだよな……

『おーいひかるー入るぜ？』

ガチャ

とか思っているとか岩沢とひさ子が入ってきた……あれ俺……鍵……  
閉めて……？まあいいか……

ひさ子俺達が麻雀をしているのを見て目を輝かせる

ひ「なになに？麻雀してんの？  
なら誘えよなー」

滝「あ、今ちようど空いたぜ？

わりいな藤巻、飛ばされるにしてもひさ子の方が良かったんじゃね  
ーの？」

藤「そりゃ野郎にやられるよりやな」

ジト目……って元からそんな目だったな  
、で睨まれる

岩「つかお前ら毎日引きこもって麻雀とか灰色の青春だな……  
光も最近ずっとこれじゃないか」

岩沢は座っている俺の肩から頭を出して卓を見ながら口を尖らせる  
……

滝「わりいわりい……今度好きな時に付き合うから、な」

だって好きななんだもの、麻雀……

ひ「さて滝沢……この前のリベンジだ」

滝「この前ってのは一昨日の事か？それとも3日前のか？」

ひ「……このやろ……身ぐるみ全部剥いでやる」

——————

滝「さて始めるか」

サイコロを持つ……

とひさ子にその腕を掴まれた

ひ「……滝沢、お前積み込んだな？」

そう言ってひさ子は俺の山を開ける……

藤「うお……大三元爆弾かよ……」

ちっ

滝「んじゃこれは積み込んだじゃないのか？」

俺もひさ子の山を開ける

松「左端に風牌対子が4つ……抜こうとしてたのか？」

岩「お前らどっちも負けたくないからって何時も通り、平でやれよ……」

滝「だな。なあに、すぐ終わらせてくる。  
だから無事勝てたら遊びに行こうぜ？」

松「……こいつ負けたな」

藤「ああ、ボロ負けだろうぜ……」

—— — — — —

ひ「ロン、トイトイ三色三暗刻親ツパネだ」

滝「ウゲッ……ま、まだまだ……」

—— — — — —

ひ「ツモ、タンピンイーペードラドラツモで6100オール」

滝「……首皮一枚……」

—— — — — —

ひ「あ、それ。リーチ一発ピンフタテチンイツツードラ3バンバンで……数え役満、はい飛び」

滝「ひぎい！」

藤「……」72か。いつもはお前とひさ子平でトントンなのに今日は瞬殺じゃねーかよ」

恐るべきは死亡フラグである

音「……今日、いや最近の勝ち全部吐き出したな……」



松「ひさ子が今日ツキすぎなんだ。俺とTK何もしとらんぞ」

その後しばらく岩沢にもカッコ悪いと言われひさ子にドヤ顔でバカにされつづけた……

――――――食堂

そしてあれから部屋にいたメンバーで夕食をとることになり、食堂に來たのだが……

藤「……俺、金ねえんだった」

滝「……俺もだ」

ぐー……

と腹は鳴きまくっているが無いものはない……

岩「光、奢ろうか？

ファンの子から食券とか貰っててさ。使い切れないし」

この世界、神はわからねえが女神はいた……！

音「……ヒモだな」

松「うむ、ヒモだ」

……み、耳が痛い。背に腹は変えられん

さてどんな食券が……

・肉うどん

・天ぷらうどん（エビ天）

・天ぷらうどん（ゲソ天）

・きつねうどん

・かけうどん

・かき揚げうどん

・鍋焼きうどん

・焼きうどん

うどんうどんうどん……

滝「ちょっと待て。うどん以外はないのか？」

渡された食券の束をいくら探しても『うどん』と書かれていないものはない

岩「ああ、あたしうどん以外食べねーからな」

滝「……まさかこっちきてからずっと？」

岩「うどんだけ。好きだし」

なんという偏った食生活だろう……

いやそりゃオバケ？の世界で健康に気をつける必要なんか全くないだろうけどさ……

飽きないか？っていう

岩「毎日トッピング変えるから飽きたりってのはないな

生きてる時は全国食べ歩きもしたし」

地の文に反応しないでください……

というかいくら好きでもうどんオンリーってのは……

滝「……まさみってさ、音楽もそうだけど……一旦ハマっちゃうと他の物が見えなくなるタイプ？」

音楽キチ、食べ物ならうどんキチ……と

音「男なら滝沢キチか」

滝「そうそうだから他の男がもう見えなく……って何言わせんだ！」

藤「おい岩沢……俺にもくれよ」

俺が音無にヘッドロックをかましていると藤巻がそう訴えてきた……  
…こいつも文無しだったな……

岩「あ？別にいいよ、好きなの選んで？

……と、思ったけどひさ子が奢りたそーにしてるから奢ってもらったら？」

言われてみるとさっきから確かにソワソワしてたな……ラーメン食べながらチラチラこっちの方見てたし

ひ「い、いや別に……ただそう言うなら今日勝ったし飯無しってのもかわいそうだし、奢ってやっても……」

藤「そ、そうか？んじゃ頼むぜ……」

あれ？岩沢に奢ってもらったこのうどん、汁が甘いんだけど

松「……ヒモだな」

音「ああ、ヒモだ」

岩「ひさ子おめでと」

ひ「~~~~！」

デジャヴを感じているとひさ子はどこから取り出したのだろうか酒をコップに注ぎ始め……

滝「おいひさ子、逃げようとするな」

グイッ

うわ……ギルド製の……置いてると勝手に無くなってる程度数高いアレ一気かよ……

クラッ……ガタッ

案の定机に轟沈したひさ子を尻目にうどんを啜り続けた俺達であった

.

.

ガタッ

む、終わらせようと思ったのにひさ子が起きた……

岩「……ひさ子顔真っ赤だぞ」

ひ「んあ？

……眠い」

立ち上がったかと思ったたらまたグダーっと……ダメだこりゃ

滝「藤巻、送ってやれ」

藤「ああ」

藤巻がひさ子に肩を貸して立ち上がらせる……が無理だと悟ったのかおぶさって行くことにしたようだ

――  
――  
――  
――  
――

藤「……おい酔っ払い、寝るなら自分の部屋で寝やがれ」

ひ「あ？何も、酔うのは酒にだけとは限らねーさ。あたしの寝顔が

見たけりや別の物で酔わせてみろよ」

藤「誰が見たいつつた……」

……それに俺の方が酔ってるから無理だ

おら、着いたぞ。んじゃまた明日な、早く寝やがれよ」

ひ「ったく、酔わせてみせるの、待ってんぜ……？」



## **F a i t h f u l (後書き)**

藤ひさも好きやねん（挨拶）

f a i t h f u l、信頼出来る、まだ2人の仲はこんな感じだと思  
う。

藤巻君はアレああ見えて、ピュアなハートなんですよ。酔った時に  
は誠実に対応、ああ、これもf a i t h f u l。

余談ですがo n e o f t h e f a i t h f u lで飲んべえ的  
な意味にもなったり……

## Symphony (前書き)

すべてひとりで決めてた　すべてひとりで考えてたのに  
ふたりになって　ふたりで選んだ道だ  
いつも傍で笑ってよ　いつも傍で笑わせてあげるよ  
ずっと　ふたりで笑っていたいなあ

Base Ball Bear—symphony—

# Symphony

— — — — —

岩沢はグラスを手に微笑んでいた

その頬を薄く紅に染め、息をつく仕草が何とも艶やかである  
いつもの凜としたカッコいい岩沢もいいが今のような笑顔も凄く、  
可愛い

こんな姿を見れるのも俺だけかと思うとなんだか嬉しい気分になる  
……

俺は高まる想いを胸に岩沢の隣に移動するとその細い肩に腕を回した。

岩「……………ん」

岩沢も俺の肩に身を預けてくる、  
応えて俺も更に強く岩沢の肩を抱く。

……窓からは粉雪がふわりふわりと舞っているのが見える……  
月夜に照らされ浮かびあがる彼女の燃えるような赤との対比も美しい

岩「ホワイトクリスマス……ってやつだな」

滝「ああ……」

窓を開けると冷気が入り込んでくるが、俺達は、寒くない。

滝「まさみ」

岩「……なんだ？」

頬も今は彼女の色、赤に染めた岩沢がとても愛おしくて……

滝「……いいか？」

岩「……ああ」

岩沢は瞳をトロロンとさせながら、いいよ、頷いてくれた。

滝「まさみ……」

岩「光……」

そして岩沢は瞳を閉じる……

俺は彼女の顎に指をかけると、くいっと上を向かせ……

……そのまま、蝋燭の炎に揺れる影が一つに重なる……

——これから恋人達の時間が始まるんだ

俺達、大人の階段を駆け上がったみたいなんだ……！！

滝「……という事になる予定だったんだが……」

12月25日、楽しい楽しいクリスマス。

俺も、今年こそは人生初（人生終了しているが）のシングルベルでないクリスマス……！

と、ひそかに期待してたりもしてたんだ……

だが神に反抗する組織に属している俺に神は微笑んでくれる程甘くはなかったようだ……

一一一時はさかのぼって25日朝、校長室

日「で、俺らは今日なんかしないのか？」

ゆ「……なんで神に抗う私達が神を祝福しなきゃいけないのよ、バツカじゃないの？」

大「で、でもクリスマスなんだよ？」

大山がかく言うのも無理はない、戦線として何かイベントがあった時は必ず何かしらのオペレーションを行っていたのだ

しかし今日、ゆりは機嫌がよろしくない。

俺は何故なのだろう、と考えてみる……

そしてある一つの結論に至った

滝「ゆり、お前……」

……シングルベルなんだろう？」

野「な、なんだと？そうだったのかゆりっぺ！？なら俺が……ぐふっ」

野田は望みを言い終わる前にゆりの手刀によって沈んでいった

ゆ「そ、そそそんなわけないでしょう？  
個人的感情を戦線の活動に押しつけるわけじゃない！？」

椎「浅はかなり……」

思いつきり、凶星のようだ

滝「恋人とふたりつきりで過ごせぬクリスマス程悲しい日はないだろ？」

なあ、まさ

岩「ゆり、ガルデモで陽動とか関係無しに今日クリスマスライブしたいんだけど、いい？」

……み？」

ゆ「あー……まあ良いわよ？せつかくだし私達も今夜はそれ見に行きましょうか」

ユ「岩沢さんの歌を聞きながらひなっち先輩とイチャイチャだなんてのもいいですね」

日「そいつぁ……最高に気持ちが良いだろうな……」

ユイの言葉に顔をにやけさせる日向。

岩「何言ってたんだ？」

ツインボーカルでユイ、お前も歌うんだぞ？」

ゆ「あなた達全員イチャイチャだの軟派な事言えると思ったの？」

ユイはライブ参加、藤巻君、滝沢君、日向君は体育館外で受け付け



兼教師の足止めよ!!」

さて、ライブ会場の外にまで締め出すのか!?  
つかテメーその面子、やっぱりそういう理由なんだろう!?

滝「つか俺戦闘班じゃ……」

ゆ「うるさい」

滝「ハイ……」

――――A棟、体育館前廊下

そして、今に至る。あれから岩沢はユイとmy songのバンド  
アレンジャー教えたりするから、とかで別れ  
結局今日1日こいつら三人と過ごしているわけである

滝「……はいこちらですよー」

日「……お楽しみくださいー」

藤「……楽しい時間をー」

野郎三人ずっと棒読みで生徒達を案内、しかもどこからもってきや  
がったのかゆりの命令で服装はミニスカサント。

しかも全員が全員トランクスが見えるこんな状況……傍目で見er限りどうみても犯罪者である。

もちろんやる気は欠片も感じられるわけがない……

ライブに行けない、各々好きな子と過ごせない、野郎でミニスカ三人きり、何より……

女子生徒A「ライブ楽しみだねー」

男子生徒A「ほんと最高のクリスマスだな」

「「「……………」」」

女子生徒B「君と一緒にガルデモライブでクリスマスだなんてロマンチック……」

男子生徒B「忘れらんない夜にしてやるよ……」

「「「……………」」」

女子生徒C「岩沢さんみたいに綺麗ならもっと好きになってくれてたんじゃない？」

男子生徒C「何言ってんだよ、お前の方がずっとずっと可愛いよ！」

日「お、落ち着けバカ！！ショットガンを置け！！」

滝「離せえっ！！モブカップルどもなんかに！モブカップルなんかにイッ！！」

—  
—  
—  
—  
—  
—

そんなこんなで少しのトラブルと多大な犠牲<sup>あうあまいんず</sup>を払いつつクリスマスライブは始まった……

藤「始まったみたいだな……やっと終わったぜ……」

日「いやまだ教師を止めるっつー仕事があんだろ」

滝「近づく奴はきるぜむおーる……」

藤「いや殺すなよ……」

[illegible][illegible]

•

—  
—  
—  
—  
—  
—  
—  
食堂

食堂ではライブ終了後、上のアホ三人も加わりガルデメンバーで打ち上げを行っていた

ひ「んじやお前らお疲れって事で……乾杯！」

「  
「  
「  
「  
「  
かんぱーい  
「  
「  
「  
「  
「

カカチン、カチン

用意したシャンパンを注いだグラスをぶつけてみんなで乾杯する。俺はグラスを手にとると、岩沢は俺に向かってその手を差し出した。カチン、と澄んだ音を立ててグラス同士が軽く触れあう。

クイツ、つとグラスを傾け……つてこれシャンパンか？チャーのやつ毎度毎度アルコールたけえつて……

シヤンパンの味に若干顔をしかめていると日向がほろ酔いで泣き出す……

日「だいたいよお……ゆりの奴鬼畜かってんだよ……」

何でお前らのライブ最中ミスカサタコスの男に囲まれなきやならなかったんだ……」

ユ 「ああ……アレですか」

それを聞いてユイはニヤニヤとし始めるが、藤巻と俺も机に突っ伏した……お互い思い出したくない、一刻も早く忘却の彼方に追いやりたい記憶である……

ん？……アレ？

関「あ、それなら遊佐ちゃんから写真見せてもらいました。可愛か

ったですよ？デュフフ」

入「うんうん、滝沢先輩と日向先輩が結構似合ってて……ふふ」

……どうやらすでに知れ渡っているようだ……これを悪夢と言わずしてなんというのだろう

日「よし……ユイ、帰るぞ。お前もふたりっきりの方が良いだろう！？」

ユ「ひなっち先輩……逃げたいってバレバレですよ？」

どーしてもってんなら考えてもいいですけど」

余裕の無い日向がそう提案するのだが……ユイはニヤニヤ顔で日向にそう答える。

日「どうしても、だ！」

ユイの手首を掴んで走り出す日向、

映画のワンシーンみたいでちよっとカッコいい……ってアイツ1人だけ逃げやがった……！

――――――

日向……逃げたな

ユイは2人っきりか……

滝「あの一、岩沢さん？」

おずおず、と光が私を呼んでくる……

岩「……なに？帰りたいの？」

滝「YES！YES！YES！」

今度は即答。

仕方ない、あたしから言ってやるか……

岩「あー、ひさ子？あたしも酔ったから帰るわ。光、悪いけど寮まで送ってくれ」

滝「了解！」

嬉しそうに立ち上がる光と、あたしは席を立つ。と、ひさ子もさっきの光と同じ顔であたしを見ている……。

岩「…ひさ子も一緒に帰ろーぜ」

ひ「そうだな……」

藤「んじゃ俺も……」

関「おやおや？これはどういう事だいみゆきち？」

入「はは、置いてかれちゃったね……」

関「みゆきてい……私達もレッドホッドな夜を過ごさないかい？」

入「しおりん目がヤバイよ……私はノーマルだからごめんね……」

関「ちっくしょおお！！」



2人きりの深夜の食堂には、少女の慟哭だけが響いていた

――――岩ひさ部屋

この部屋の住人は岩沢とひさ子なわけであるが、ひさ子というと「ちょっと遊び行ってくる」と先ほど藤巻と何処かへ行ってしまった。……もう12時なのに、だ

俺は岩沢を送ってきたわけだが彼女が暇だしあがってけよ、と言うのでお言葉に甘えているのである

岩「なんか飲むか？」

酔いさましに…と、冷蔵庫を開けるとズラリと並ぶミネラルウォーターが見える。

水ばっかだな、などと笑いつつも火照った体にはちょうどいい、と彼女からペットボトルを受け取り飲んでいた所……

岩「光、パス」

目の前のベッドに腰を下ろして、渡したボトルを傾ける彼女を見ていると、上気した頬でコクコクと喉を鳴らす姿に自然に笑みが浮かぶが同時に……

ざわり、ともくる。

そう、クリスマス（既に翌日ではあるが）に恋人の部屋に二人きり、かつルームメイトもない、というなんとも出来すぎたシチュエーションだからであろうか、

無理矢理でも彼女を組み伏せ、その濡れた唇を奪ってしまえ、という衝動に駆られている。

柔らかな唇を、そして彼女を自分の色で染め上げたくなる。

……深夜、自らの部屋に俺をあがらせた彼女もそうなる事を期待しているのではないか？

(……まあそんな事はしないんだがな、これが)

無理矢理にでも事に及べばそれは俺を信頼してくれている彼女への裏切りではないか？

うん、まだ早い。大丈夫。ゆっくり焦らずその時を待てばいい。

そして当の岩沢はと言うとハア、とため息をつきながら俺を見ていた。

……おおかた俺がどんな事を考えていたか分かったのだろう。

岩「……どうせやらしい事でも考えてたんだろ？」

滝「いやいや……」

一瞬よぎったのは否定しないが。

……ってああ、そうだ

滝「本題を忘れる所だった」

首を傾げる岩沢に俺はポケットから小箱を取り出すと彼女に渡す

岩「……凄いな」

滝「元が土くれだから綺麗、と言ってもらえるかはわからんが」

中身は今日のために、と錬成したリング。彼女に合うかな、とルビ  
ーを填めてある（これも錬成した物だから不安であるが）

岩「いや綺麗だよ、嬉しい」

そう言って貰えるとは何よりだ

岩「――でも困ったな」

滝「何がだ？」

実は気に入らなかったのだろうか？

そりゃ演奏の時は確実に邪魔だろうが……

むう……ネックレスとかにすりゃ良かったか……？

岩「……何にも用意してないんだ、言い訳だけどライブの事で頭が  
いっぱい……」

ん、まあ岩沢らしいっちゃらしいかな……

と、思っていると唇に軽い衝撃

岩「でも、一番大切なのはお前だから……」

……  
そう言う彼女が愛おしくて俺は彼女をゆっくりベットに横たえ……  
……

—  
—  
—  
—  
—  
校長室

ゆ 「はい、ここから先はお子ちゃまには早いのでおしまいよ」

「えー」

何故か昼間から酔っ払っている戦線メンバーから非難の声が上がる

曰「そりゃないぜゆり

俺ら体はピッチピチの高校生だけど中身は大人だぜ？ 大きなコロン君なんだぜ？」

ゆ「いや、だって……これ以上は本人達に悪いじゃない」

戦線メンバーは振り向いて『本人達』を見る

滝「お、落ち着けまさみ！」

岩「離せ光！」

あの芋女、泣きながら謝らせなきゃあたしの気が済まないんだ！！」

顔を真っ赤にして半泣きになりながら持っていたアコギを振りかざす岩沢とそれを後ろから羽交い締めにして止める俺……

……いつも彼女が『相棒』と呼ぶソレを武器にするほど岩沢はブチギレていた

そして彼女は凄まじい力で拘束を振り払う

……球技大会の翌日一番力無く筋肉痛に苦しんでいた……おそらくは戦線幹部一、二を争う程貧弱だろう体からは想像も出来ない力だった

こんな状況でも立ちふさがる野田は頭を掴まれるとそのまま床に叩きつけられ沈黙、藤巻は顎を蹴り上げられ天井に突き刺さる

……まるでバトル漫画のような攻撃を繰り返す岩沢にゆりも真っ青になっている……

ゆ「ご、ごめんなさい岩沢さん、あたしが全部悪かつ」

ガイーン！！

フルスイング。

ゆりは窓から落ちていき、後に残ったのは白いバツテンが貼られたアコギを持つ俺と、笑顔で「忘れろ」とリピートしながら戦線メンバーに往復ビンタを繰り返す岩沢だったそうなの



B  
A  
D

E  
N  
D  
?

## Symphony (後書き)

旅に出よう旅に出よう  
あんたが全てを駄目にした

岩沢まさみ

以下、独り言。

えぬ はちに まる なな だぶりゅー

## Lazy Girl

視覚的影響がもたらす効果と元来持たれているイメージに関する研究

天上学園 ガルデモ年ベース組 関根史織

緒論。

卵アイスというものをご存知だろうか。ゴム風船にバニラアイスをつめたユニークなアレである。切り込みを入れ吸うように食べるのだがこれを失敗してしまうと小さな穴から勢い良く飛び出し、残念な事になってしまう。

ここで勢い良く飛び出る、と言うことに注目があるとあたしは思うのです。

ホースから出る水、アレの口を抑えてみてください、するとどうなるか？

そう、勢い良く飛び出るのは内側にあるものは出てくる部分が小さい程、圧力により勢い良く、飛び出るのはです。

経験は無いでしょうか、幼い頃、雑誌を立ち読みしていた時袋とじをなんとかして覗き見ようと躍起になっていた事が。そう、秘密が隠された物に僅かに隙間があるからこそ私達の好奇心は『勢い良く』溢れてくるのです。有り体に言えば見えないからこそ興味が湧くのです。

この現象はエロースにも置き換えられる事にわたくしめは着目した。本当のエロースは隠されているからこそ『勢い良く』溢れてくるわけです。私は普段ニーソを穿いていますがそれによって作り出される『絶対領域』スタイル等、これの最たるモノであります。他にもブカブカYシャツ等も同質かと。そう、肌の露出は少ない程、エロースは勢い良く溢れるのです。

実験。

よってわたくしめは普段スカートの丈が短い者を被験者として実験を行った。

|     |        |
|-----|--------|
| Iさん | 膝上20cm |
| Hさん | 膝上22cm |
| Sさん | 膝上23cm |
| Mき  | 膝上17cm |

実験内容は全員にニーソを穿いていただく、というものだったのだが、ここでわたくしめは自分が間違っていた事に気づいた。資料の写真を見ていただけると分かると思う。

確かに全員が全員この写真を売れば戦線資金は底無しになるような出来であるが、

普段脚を露出している方では、絶対的な破壊力は生めないのでは？という結論に至った。（T氏とH氏は写真を拝んでいたが彼らは普通ではないため除外）

そこでどんな被験者ならば良いか、『普段露出とは縁の無い鉄壁度がやたら高そうな人』ではいかがだろうか？

そして選出したのがTKさん（膝下10cm、男ではない）である。

そして彼女にSSSの制服、そしてニーソを穿いて食堂の階段を登っていただいた。

結果から言わせてもらおうと最高の出来だった。「麻婆豆腐はどこ？」と階段下の私を振り返り聞いた時、ハンケツは白だと私に天の声が下りてきたのだ。果たして黒が出る時があるかはわかりませんが。

結論。

つまり普段見せない子が見せるのは素晴らしい。

ですからぶっちゃけ恥ずかしいしさみーです！うちらも普段はロングでイベントの時だけミニで良いんじゃないっすか？

――――――

ゆ「却下。」

レポート用紙を丸めてゴミ箱に投げ捨てるとゆりは言った

ゆ「長々と1200文字も使ってアホな事してるとおもったら言いたいことはそれ？」

珍しく校長室に来たかと思っただけでコレである。

関「だって寒いんですよコレ！ミニどころかマイクロですし！

ぶっちゃけあたしは寒いのが嫌いなんですよ！

毎日ぬくぬくおこたでずっと居たいんですよ！

この時期、ライブの時だって長スカートに長ジャージというファッションを選びたいんですよ！」

ゆりは長スカートの下にジャージ装備でライブを行うガルデモを想像したが……

お世辞にもカッコいいとは言えない……

ゆ「……岩沢さんはどうしたい？」

陽動班リーダーの意見も聞いてみなきゃ、と

岩「あたしは歌えればなんでもいい」

……聞くだけ無駄か……

関「岩沢さんは元が細いから良いですけど、あたしらなんて寒い中生足晒し続けてたらむっちむちになっちゃいますよ！？ゆりっぺさんの足なんてすぐドムになりますよ？」

ゆ「うっ……」

ドム……いやいやいや……

松「うむ、この世界でも体格は変わるからな」

日「いやでもお前は変わりすぎだろ……！」

キリツと痩せた五段に日向が突っ込んだ

関「そのうちボンボンボンのナイスバディーですよ？」

どこがナイスバディーよ……

ゆ「うーん……まあ考えとくわ。

でも元日だし今日はゆっくりしましょ」

うーい、だのりょーかーいだの氣のない返事で解散……なんか最近  
だらけてるわね……  
近々なんかしないと……

――――岩ひさ部屋

校長室から帰ってくると、というか岩沢について行くと特にやることもなかったのか、残りのガルデメンバーはこたつを囲んで麻雀

を打っていた……

ひ「おかえりー

あ、それロン、終わりっ」

ユ「うぎゃー……」

ユイ……

そこでひよいと入江の隣に無理矢理入り込んだ関根が言う

関「ひさ子さんはいいですね……。胸にいっぱい脂肪が詰まっているから、寒くも何ともっ！！？？いぎゃあああっっ！！！！！何この足の指とは到底思えない力は！！太もも千切れちゃいますって！！！」

炬燵の中で刑の執行に、関根は端から見てすごく面白い顔をして苦しみ悶えている……ってまだ言ってたのか。

………

ツン

岩「いっ！？」

……何？」

滝「いや寒くないのかなー、こんなに華奢なのに、と」



胸に背中を預けながらこたつに入る岩沢の脇腹を指でさしてみる。

……脂肪0や

……ツン

ユ「いだっ!？」

こいつも痩せてるな

ユ「強さが違いますよね!？あと今アバラでしたよ、ゴリッていいましたし!？」

……ツン

ひ「……」

滝「あの、ジト目で見ないでください」

ひ「お前これセクハラだからな？」

……む、失礼。ちなみに普通だった。もう少し上の方ツン、としたかった気もしないではないけど俺はまだ生きていたい、いや死んでるが

入「……ふふ」

向こう側では入江も関根の脇腹に指をさそうとしているのだろうか……すげえニヤニヤしている

ツン

入「えっ……?」

関「やめろよ!そういう反応やめろよおっ!」

入江は自分の指と関根のお腹を交互に見て目を見開いて……って何があった

岩「菓子ばっか食ってっからだろ……」

……ああ。

関「ちょっとみんなそういう反応マジで傷つくんだよ!?!岩沢さんだって、いいさこちらでちょっと甘いもの食べていこ♪って歌ってたじゃないですか!?!」

ひ「限度があるっての……」

………

滝「あー、みんなで体動かし行くか?」

ユ「いいですね」

ひ「雪合戦でもしようぜ」

岩「やだ」

関「さみー、ってんじゃん」

入「しおりん……」

……綺麗に分かれたな……

関「か弱い乙女は体動かしたら死んじゃうんですよ」

岩「あたしは寝正月をエンジョイするんだ……」

滝「このもやし共……」

なんとかコイツらを動かす方法はないだろうか……

………お

滝「よし、ガルデモのアルバム作ろうぜ？ライブ音源の海賊版は出回ってるけど正式なのはないだろ？」

ひ「いきなりだな……！」

関「というかー別にイ、今じゃなくても……」

岩「よし行くぞ」

ひ「即決かよ！寝正月じゃねーのかよ！」

岩「一年のはじまりだぜ？気合い入れねーとダメだろ」

そう、要は岩沢1人落としいいわけだ

岩沢は毎度毎度どこから力が出てるのかこたつにガツチリしがみつ  
く関根をひっぺがして音楽室にひきづっていった……

関「あゝあゝーおこたああー………」

――――

夜の音楽室……時計は夜12時を回っている

ユ「……疲れました」バタッ

岩「……なんでお前らそんなグツタリしてんだ？」

……

滝「いや……そりゃお前、あれから飯も食わずにまさみ、ユイ、両  
方の3バージョンも作ったりしたからだろ……」

しかも『気分乗らねー』って言うから録音じゃなく毎回弾いてたし  
……」

それでいて歌に集中したいっていうから俺がリズムギター……  
普段弾いてるあいつらと違って指硬くなってないから今すげえ痛え  
んだぞ……

入「腕が……上がらないです」バタッ ガッシャーン  
関「……もう無理」

ああ、床が近づいてくる……

バタッ

岩「おい、お前ら寝てないでしっかりしろよ。」

まだRun With Wolvesも、My Songも録音終  
わってねーぜ？」

ユサユサ

岩「おい起きろよひかるー。ひさ子ー。」

関「ああ……音楽キチ……」ガクッ

岩「起きろー!!」

そしてたたき起こされた俺達は結局その後日が昇るまでデスマーチを敢行したのだった……

## Chocolate

――――音楽室

――――2月14日。

言わずとしたバレンタインの日である

――――バレンタインという日を過ごす人種を簡単に分けると以下の数パターンに分類されるのではないだろうか。

一つ、貰えるのは家族だけ、他には貰う事なぞなく己の嫉妬心に炎を絶やさない男共。

一つ、義理チョコをばらまくだけばらまき、ホワイトデーでのお返しを期待する女。

一つ、手作りチョコを作り、渡す相手や貰える相手が居る勝ち組。

（友チョコもこの部類か？）

今までも義理チョコの類はもらっていたが…今年は……ニユフフ！

滝「……生きてて良かった」

死んでるが。

うん、いい加減しつこいなこのネタ。

滝「というわけでまさみさん！今日は何の日でしょう！」

岩「2月14日……たしか平将門の命日だな……あと広田弘毅の誕生日でもあったはずだ」

……いや、頭良いとかそんなじゃないでしょ。何その雑学。というか俺が望んだのはそんな解答じゃない。

入「……滝沢さん、せがむのはみっともないですよ？」

滝「ほっとけよ！」

岩「……???」

ええい……みっともないとか言ってられるか……！

滝「まさみ！今日はバレ……」

遊「岩沢さん、ガルデモメンバー全員集合だそうです。」



岩「了解。ほら光、行こうぜ」

遊「あ、ゆりっぺさんが女子メンバーだけ呼んでこい、男子は来たら殺す、だそうです」

.....

岩「.....だ、そうだから話はまた後で、な？」

・

一一一 校長室

校長室にはガルデモメンバーにゆり、椎名、遊佐、ユイが集まり戦線幹部女子勢揃いといった状況だった

ひ「で？今日はどういう集まりなんだ？」

ゆ「よく聞いてくれたわ。

今日は……『オペレーション・スウィートアタック』を行うわ。

如何にも普通にバレンタインを楽しんでいるようにみせかけ……」

ひ「……ゆり、最後まで言わなくて言わなくていいぜ」

ひさ子、なんかめんどくさそうだな……というかポジションが音無みたいだ

ゆ「……コホン、要は男共に夢見させてやりましょう、ってことよ  
男子達の士気低下はそのまま戦線戦力の弱体化に繋がるわ、従って  
……」

遊「私達も面白いですし家庭科室で作っちゃいましょう」

遊佐……結構ノリノリだな

ゆ「まだよ。

あなた達……ぶっちゃけ誰に渡すの？全員告白、命令よ」

沈黙。

ひ「マジか……」

椎「浅はかなり」

……あたしに今更聞くのか？

岩「光だ」

ゆ「あ、岩沢さんやユイ、ひさ子さんはわかってるからいいわ」

ひ「な、なんだよ、あたしはだな！」

ユ「わかってますってひさ子さん、まず黙ってましょ？」

ゆ「私が聞きたいのは……あなた達よね」

ゆりは顔に悪役のような笑いを浮かべながら残りのメンバーを舐めるように見渡す

椎「……浅はかなり」

ゆ「はいはいどうせ言うことになるんだから無駄に字数とらないで  
ゲロっちゃんないさいよ」

逃げ場なくなってるなあ……

でも椎名の好きなヤツいるとしたら誰だ……？

五段……無い、とはいいきれないが……ちょっと違う気がする

TK……うん、日常会話からままならないのが予想できるな

藤巻……あれはひさ子くらいだろ……

竹山……ジェネレーションギャップがありそうだ

と、なると……

岩「……大山か？」

よく一緒に子犬の人形と戯れてたりしてるし

椎「あ、浅はかなり!!」ポウン

と、椎名が床に何か投げつけると辺り一面が煙につつまれる……

ゆ「ゴホッゴホッ………逃げたわね

後でお仕置きしなきゃ……まあいいわ次遊佐ちゃん」

遊「私ですか？」

……私は特に彼、という人もいないので全員に渡す気ですが」

ゆりは面白くなさそうに振り向くとビシッ！と、入江を指差す

ゆ「次、入江ちゃん」

入「えっ、あたしは別に……」

関「あれ？みゆきち『音無君ってカッコいいよねー』とか言ってたじゃん」

入「ちよっとしおりん！！あああ……」

入江は顔を真っ赤にしてしゃがみこんでしまった……  
に、しても音無かあ……まあ顔はいいけど……ちよっと意外。

関「あ、あたしはゆっさゆさと同じっすよー？

ぶっちゃけ戦線男子って3枚目キアラばかりであたしと釣り合うようなのはいな」

入「……しおりん……あたし知ってるんだよー？

しおりんの机の3番目の引き出しに滝沢さんの写真「わーわー！！  
！なんでもないっすよ！？」

……

岩「……渡さねーぜ？」

関「いや、まー……渡す位は見逃してください

それから先は来世に期待ですが……そんなときや岩沢さんより先にツバつけといてやりますよ」

……満面の笑み浮かべやがって……  
関根らしいっていやあらしいけどさ

関「……余裕じゃないですか」

岩「余裕だからな」

関「いただいちゃいますよー？」

岩「やれるもんならやってみな？」

ゆ「はいストップストップ。

時間もないしさっさと作るわよ」

ひ「ゆりは誰にやるんだよ？」

ゆ「！！」

さ、さっさと行くわよ！移動開始！」

……逃げたな

――食堂

戦線男子が集まって夕食を食べているがそこはまるでお通夜のようにだった……

滝日「ハハ……藤巻（音無）……ほら、あーん……」

藤音「やるわきゃねーだろうが！」

……加えるなら一部ではチョコレートケーキ（120円）を男同士で『あーん』、しようとする程、失意を通り越して狂気に染まっていた

日「夢見た俺らが悪いんだよね……チョコ貰えるような人生ならここにはこねーもんね……」

藤「義理チョコすらねえぜ……だがそれ以上に謎なのは……」

なんでTKはあんなにモテんだ？」

……彼はNPCから山のようにチョコを貰っていた……それを隣の机で五段や高松、大山にもわけているわけだが……

彼らも自分の個数とどうしても比較してしまうわけで……こうしたドンヨリとした空気になってしまったのである

奏「結弦、これ……」

音「お……奏、ありがとな」

……俺らがTKのモチっぷりを確認していちら後ろの方から甘ったるい会話が聞こえてきた……

「「裏切り者……」」

音無……お前『チョコ無』じゃなかったのかよ……滅びろよ畜生……

直「……立華さん、生徒会長がこんな時間に食堂にいてはいけませんよ？寮に戻ってください

あ、音無さんに滝沢さぁん！僕からのチョコ受け取ってくださいあい！」

なんか奏だけじゃなく直井までがチョコ持って現れた  
……てめー男だろうが……



藤「ほら、貰ってやれよ」

滝「……………」

断固お断りである。バレンタインの戦利品が野郎からの1個だけってどんだけ悲しいんだろう……

というかそもそも岩沢達は何で姿すら表さないんだろう……

……まさか

『ねえどうして私がゆりって呼ばれてるかわかる?』

『や、やめろよ……』

『ほら、貴女の体に塗りたくったチョコ……こんなにも美味しい』

『ひゃ!やめ(自主規制)』

滝「男じゃなくて女同士とイチヤイチヤして……!」

岩ゆ「「なんでそうなるんだっ（のよ）！」」

突如現れた2人にハイキックを見舞われた、白と水色。ありがとう  
ございました。

ゆ「まったく、せっかくあんたらにチョコ作ってきてやったのに  
……ホラ男子共並びなさい！」

「「「「おお……」」」」

野「……一片の悔い無し」

ゲシッ

……なんかアホが成仏しかかっているのでとりあえず蹴り入れておいた  
つか野田のだけデカくね？気のせい？

ゆりと遊佐、関根は全員に渡しているようだ

関「ほらたつきー味わって食えよ？」

滝「なんか入れてねーだろうな……」

関「入れたのは変なもんじゃないから安心ですよ」

何時にもまして関根はニヤニヤ顔をしていたが何なんだろう

どれ……

滝「おお！うめえよ関根！サンキュな」

関「えへへ……当然じゃん」

関根の頭をワシャワシャしてやったのだが……

……

なんだこの背後から感じるプレッシャーは……

岩「……光」

滝「ふぁい!？」

岩「私達の関係を言葉で表すと、何？」

滝「俺の自惚れでなければ……恋人です」

岩「そうだね。あたしもそう思ってる」

凄く優しい声、

しかし騙されるな……プレッシャーは相変わらずのままだ。

岩「……私のチョコはいらないかな」

滝「そ、そんなことはないデス。今日一日ずっと待ち焦がれてました」

岩「んじゃ関根とかゆりにデレデレする必要はないんじゃない？」

s h i t……じゃない、嫉妬してらっしゃる？

スルスルと腕が後ろから伸びてきて口元に一口大の茶色の塊が……

滝「甘い……」

岩「オーケイ、もっと食うか？」

俺の前にテクテクと歩いてくると口元にまたチョコを運んできたので、なんか嬉しくなって指まで口に含んだらドン引きされた上、何故か関根とひさ子も加わった3人に無言でブーツキック食らいまくったけど……

(すげえ甘い……)

H a p p y   e n d !

## Changes

ユイ月お前もか日

今日はユイにみっちりティーチング。

なんかもうこの馬鹿弟子があっ！とか叫びたくなっちゃうね。いやあたしベースだし師匠でもないけど。

んでひさ子さんやみゆきちがユイにダメ出しし始めたのであたしも加わってみた。普段言われてる側だけどね、いいよね。

ユイにゃん、お前にギタボはまだはえーぜえ

岩沢監督もなんか言ってくださいよ！てな時に奏ちゃん登場。

ユイをズビシイっと指差して『自分のせいでバンド最悪やで（意味はだいたい合ってる）』とか宣言した。

んでギブソン持って走り出したんだよ、トテテテ：って。やべえ、鼻血堪えんのに必死だったよ。

あ、あたしは百合っぺさん（この日誌誰も見てないよね？）じゃないからそっちのケはないよ？勘違いすんなよ？

ユイ、弾くか歌うかどっちかなら出来るんだけどねー。

まああたしのようにどっちも完璧にショウ洒（漢字わからん）にやれるとは期待してないがねニユフフ。いやでもあたしがコーラスしちゃったら『関根with他の人』みたいなバンドになっちゃうしね、自重してるわけよね。いやあ人気者はつらいぜ！

P・S・てめーら何時の間に出来てたんだチクショー……

――――

トリック月トリート日

ハロウィンだ！ラバーズパーティー（つづりは知らない）だ！  
来たね、あたしの為にあるような日だ。

別に忘れてて衣装用意してなくて少し焦ったなんてことはないよ  
とりあえずたつきーが滝沢さんが前来た服をとってた（何に使う気  
？ナニに使う気か。）からそれ来て戦線メンバーに突撃敢行！……  
したら

ゆりっぺさん「それお化けの格好じゃない？」

「「「あ」「」」」

本日ハモった瞬間でした。

でもそうなるすれ違った藤マッキーも勘違いしてたっぽいよね……

とか考えながら、なんかちょっと恥ずかしくてイラっ☆ときたから  
ゆりっぺさんからお菓子要求された時、うま○棒（納豆味）口につ  
っこんだ。

おやおや、本気で泣くほど美味しいようだね。ほらほら美味しいで  
す関根様といってごら……調子乗りましたすみません。え？あ、は  
い、黙ります。

というか今来てる服なんだけどひさ子さんが胸がキツいとか愚痴っ  
てた、奇遇だね、あたしも腰がキツいよ。つか全員が全員腰ギリギ  
リじゃねーか。チクショー。

あと若干荒んだ心であらかた回り終えて帰ってきたら落ち武者がいた。なんだ、藤マツキーちゃんと出来てんじゃない。

――――

だらけ月てた日

結論から言うとい日中ゴロゴロ、灰色青春だぜいえー

しかしみゆきちの仮装服姿が思い出したら思いのほか可愛かったね。魔女っ子？ガルデモート？

そう「なんだっけ・・・ほら、ガルデモのドラムの『例のあの人』だよ『あの人』あー喉まで出掛かってるんだけど思い出せない」という『あの人』とはみゆきちのことを指しているのさ。背景っ子は悲しいねえ、あたしみたいな主役級目指して努力したまえチミ。

そう言って笑いながらみゆきちみたらやつは笑ってなかった。あはは、よほどピンポイントで……アカン、目がレイプ目や……あたしは死んだ。

――――

12月25日

クリスマスだー！ライブだー！

まあクリスマスなんだし楽しい気分はみんなでシェアしなきゃね（岩沢さんの表現）

んでライブ。クロウソングとかアルケミーをデュエットしてた時は良い感じだったんだけど、ホットミール。ユイがサウザントエネミーと歌詞ごっちゃになってひさ子さんに睨まれてた。

岩沢さんは……トリップして聞こえてないんじゃないの？アレ。うん、安定の音楽キチ。帰ってこいよ、気づけよ。

あ、そういや今日はミニスカサントでライブしたんだよ？ひさ子さんとかは嫌がってたけど……デュフフ！ごちそうさま！

んで楽しいライブ終わった後遊佐ちゃんが珍しくにやけて「どうぞ」って写真見せてきたのよ。みゆきち顔隠してるけど指全開やで。ひさ子さんはマジドン引き。ユイは悪魔のニヤケ顔だね、岩沢さんは「あたしらとお揃いだな、でもんじやなんでステージ上がらなかったんだ？」……やっぱりこの人なんかズレてる。

んで夕食後……キミらアレかね、そんなにあたしとみゆきちをイジメたいのかね？

帰れ、帰れよう！ってああマジで帰んのかよ！レッドホットなホーリーナイトなのかよ！！

みゆきちにも捨てられた。  
ちくしょおっ！

————————



12月26日

ライブ終わっても練習だぜイエー！

学習棟の空き教室に集まったんだけど岩沢さんは今日はユイの日、とか言うからそのとおりに合わせて練習した。

ユイもだいぶ上手くなったねー、ってそんなにハシヤぐなよー

……そう思ってたらユイがテンション上がってジャンプした時足があたし愛用のモンスターケーブルたんにひっかかって抜けたみたいで、ひさ子さんに睨まれた。なにこれ理不尽。なんで死後の世界でまで不条理を味あわなきゃいけないの？

というか机に両腕で頬杖ついてる岩沢さんに「岩沢さんはやんないんすか？」って聞いたたら「あ、ああ……ちよつと体が疲れてんのかあんまり立ってたくないんだ……」って苦笑いしてた

ふむ、あの音楽キチの岩沢さんが言うんだから本気で辛いんだろう。昨日のライブも全力だったしねー……でもなんでキョドんの？

――――

長スカ月希望日

脚寒いよ。衣替えしようよマジで  
あたしがみんなの事を思ってるゆりっぺさんに直訴したけど無視さ  
れた。ひでえ。

そりゃあたしらが必要な格好でいたら新参メンバーなんてホイホイ  
戦線に入っちゃうよ。でもそれと引き換えに脚はむっちりになっ  
ちゃうのよ、わかるドムっぺさん？

まあそれとは別に今日はガルデモのCD作ることになったよ。実際  
始めると凄くテンション上がった。でも一つだけ……

同じ曲でボーカルだけ変えるなら演奏は録音でいいじゃないですか  
！あたしの指もう限界だよ！あんまりにも痛いから途中アロンア○  
ファでガッチガチに固めたのは内緒。でもこれ効果あんの？

結局鬼と化した岩沢さんの手によってあたしは一晚中ヒーヒー言わ  
された（こう書くとなんかヒワイ）のでした、まる

――――

2月14日

バレンタインだね。

なんかゆりっぺさんはチョコ作るぞ！とか言ってるけどさ、遅くね

？普通こういうのって前日から作っとくもんじゃないの？あたしは作っというた（どや！）

まずゆりっぺさん。

みんなの分も作ってるけど量産されてる中で一個だけ形違うのあるね、おっきいし。……なんだろう？ポツキーの先に扇型の……ああ、なるほどね

アホにも春が来たみたいで良かったね

遊佐ちゃんもゆっさゆっさしながらみんなの分つくってたけど……あたしはみたで。さり気なく日向さんにちよっとおっきいの渡すのを。

日向さんはユイにゃんとラブラブ（死語）だからチャンスは無いだろうけどね……

ユイは日向さんに突撃して口にチョコ直で詰め込んだ……歯何本かいったね、アレは。作るときもすごく危なっかしい手つきだったから不安だったんだけど……心配はいらなかったみたいだね、良かった良かった

椎名っち……はどう見てもおはぎだよそれ。みんながチョコ溶かしてる横で1人だけあんこと格闘してたし。大丈夫かな？

次みゆきち。ウブやね。渡すときもオドオドしてたし。奏ちゃんがそれを見て落ち着かなくしてたのは気のせいかな？気のせいじゃないよねニユフフ

ひさ子さんはね、ぶっきらぼうに藤マツキーに渡してた。でも形は何気にハートとか、乙女だね。普段は漢女おとめなのに。

ひさ子さんも可愛いところあるんですねって言ったら殴られた、酷い。

んで岩沢さん。やべえ料理うめえ。「バイト先でやったことあるんだ」とか……便利ですねその言葉

でも何日か前にもうすぐバレンタインですね？って聞いた時本気で頭に？を浮かべてたのには焦ったわ。……この人色恋沙汰とは無縁の人生送ったんじゃないだろうか

あたし…はまあいいよね、義理だし。ライバルが圧倒的すぎるしね。はは。うん。

で、だ。一番すごかったのは渡した後だったね

岩沢さんがたつきーに小声で「後で部屋に来てくれ」って言うてるのを耳に挟んで……

正直気が気じゃなかったあたしらはつけたわけよ。君はもう！シンデレラっさ！てな事になったらヤバイわけよ。色々と。

んでひさ子さんがドア開けたら見えたのは山のようなチョコ。部屋の半分以上を埋め尽くすラッピングの箱、箱、箱。

岩沢さんが貰ったみたい、ひさ子さん宛も2割くらいあるそうで…結局みんなで食った。もう一週間はチョコいいわ

— — — — —

3月1日

たつきーと奏ちゃんが真面目な顔して話してた。

「ライブがあると……やっぱり増える一方ね、みんなが次もまた、  
って思っちゃうから……」

「……来年も行けるかと思ってたけどそうはいかないか……」

って、どういうことだろね。よくわかんないや。しかも途中からゆ  
りっぺさんまで現れて合流してたし。最近は表立って戦ってないと  
はいえ変な組み合わせだよなコレ……？

3人をつけてみるとコンピューター室に入っていた。あたしも恐  
る恐る入ったけど誰もいない……

……どこいったんだろう？

————————

パタンと、あたしは日誌を閉じてペンを置く。

関「明日岩沢さんにも聞いてみようかな……」

たつきーだって岩沢さんには隠し事しないだろうし。

関「……今日はもう寝よ」

## Graduation

— — — — —

私は寝つけずに外に出た。

綿毛のような雪は風に揺れている。そんな中、ゆっくりと深呼吸をして、冷たい空気を体に取り込む。

しっかりしろ、仲村ゆり

あなたはみんなのリーダーなのよ

— — — — —

この世界で過ごす日々はとても美しかった。

この幸せな日々を手放すのが怖かった

『次』の私が以上に幸せになれるか不安だった

ただ、それでも……

私達だけがわがままで残ってはいけない

私達のような子達が救われるために、神様はこの世界を作ってくれたんなら……

ここを永遠の樂園にすることだってできるとも『彼』は言っていた  
でも、そんな事は私の目的じゃない

みんなと仲間になり、そして守るべきかけがえのない存在へと変わっていった。

そう、彼らに抱く感情は妹たちと同じ。

私はみんなを愛してる、だから彼らをここに縛りつけるわけにはいかない

……本当はみんな納得している、ここで楽しい日々を過ごして、

けど『私だけ行くわけにはいかない』から残っている……

だから、

私達も巣立って……

「……卒業しないといけない」



————にしても、不覚だ。

お姉ちゃん、あんたたちと同じくらい、みんなのこと大切に思っちゃったんだ。

あんたたちが誇れるくらい、あんたたちだけを愛する姉でいたかったのに……

「ありがとう。もう充分だよ」

「もうお姉ちゃんだけ苦しまなくていいよ」

「長い間お疲れ様。お姉ちゃん」

ん。

――――体育館

ガルデモメンバーに加えチャールギルドメンバーも含めて戦線に所属する全員が揃う前でゆりは口を開いた

ゆ「みんな……最後のオペレーション……『オペレーション・グラジュエーション』を決行するわ。今日をもって、死んだ世界戦線は、この世界から卒業する」

流れるのは沈黙

だが嫌がる素振りを見せる者も戸惑う者も不思議と居なかった

……やがて1人が笑い出す

日「ゆりっぺ……めっちゃめっちゃ語呂わりいぜその名前」

「だなあ、門出ならもうちょつとカッコ良くして欲しいぜ」

「確かに（笑）」

つられてゆりを指差し戦線メンバーも笑い出す

ゆ「な、何よあんたたち！あたしが一大決心してみんなの前で発表したのに！

……それより、嫌じゃないの？」

ゆりはムキになって言うがすぐしんみりすると尋ねた

関「あたしたちはもう……いいっていうかね」

ひ「踏ん切りがついたっていうかさ」

入「そういうグループだよ」

滝「まったく、ムキになったりしょんぼりしたり忙しいやつだな」

岩「あたしたちは、ありはしなかった青春をさ……ただ、楽しんできたってことを考えれば、もう充分だなんて」

後ろにいるメンバーもそれに頷く

藤「わかったんならさっさとはじめようぜ？」

野「会場設営はとっくにおわってるんだ」

日「おいおいやったのは俺と音無がメインじゃねーかよ」

ユ「ユイと奏ちゃんもやったじゃないですか」

ユイと奏もえへん！と胸を張る

# 『死んだ世界戦線 卒業式』

ゆ「おー……」

改めて見上げるとゆりは感嘆の声を漏らしす

……手作りの卒業式！素敵だ。

音「俺達で作ったんだ。文字は奏」

ゆ「そうなんだ。奏ちゃん、卒業式したことなかったんだ」

奏「面白いのになって」

日「面白かねえよお」

野「でも、字を書いてる時は、楽しそうだったかな」

高「女子はたいいて泣きますね」

直「ふん。これだから女は」

松「では、そろそろ始めるか」

五段が言うところには少し慌てだした

ゆ「え、うーん、その、ホントに消えるのかなって…心の準備が…」

直「何だ。それでもリーダーか」

ゆ「な、何よ!」

ただ直井の言うこともまったくもってそのとおり、

音「お前、なんかリーダーっぽくなくなったよな。なんか」

ゆ「えっ、そ、そう?」

大「確かに変わったよね」

ゆ「えっ、どう?」

野「より女の子っぽくなったぞ!」

野田は大声で宣言してみんなは大笑いを始める

ゆ「えっ! ちょっと…何笑ってんのよ!」

……それは喜ばしいの? 怒ればいいの?」

日「あーあ、ゆりはそんなこともわからない無垢な女の子に戻っちゃったんだなあ」

そう、戻っただけ、日向は肩をすくめる。

日「ゆりっぺも可愛いとこあんじゃん」

ゆ「な!?!?!」

野「日向貴様アア!!!!!!」

赤面するゆりと野田は日向をビシビシゲシゲシとひっぱたき始める。

ゆ「ったい！痛い！」

そんな様子を見ながら、奏は思わず笑顔をこぼす……

奏「ふふ……ゆり面白いの」

—  
—  
—  
—  
—  
—  
—

音「開式の辞！これより、死んだ世界で戦ってきた、死んだ世界戦線の卒業式を執り行います！ではまず、戦歌斉唱！」

岩「戦歌……？」

ゆ「何よそれ」

音「死んだ世界戦線の歌だよ。校歌の代わりみたいなもの」

ゆ「あたし、そんなの作らせた憶えないわよ？」  
音「それもかなでが作った」

岩「もう、呼んでくれてもいいんじゃない？」

滝「いいじゃねえか。はい、歌詞まわすぞ！」

全員に歌詞の書かれた紙が配られる

ひ「メロディーは？」

関「校歌って、だいたい似たようなもんじゃないすか？」  
入「適当に歌っとけば大丈夫ですよ」

それもそうか、とみんながなんとなく納得したところで音無が合図をかける

音「んじゃ……せーのっ！」

おそらの死んだー世界からー♪

おおくりしーますおきらくナンバー♪

死ぬまでにいー、くーつとけー、まーぼーどーふー♪

あーあーまーぼーどーふー♪ 麻ー婆ー豆ー腐ー♪

日「って何だよこの歌詞!! 先に誰かチェックしとけよ歌っちま  
っただろ!!」

滝「こらこら日向、奏が怖がってんぞ」

奏はゆりの後ろに隠れる……関根が鼻息荒くしてるがこれは無視。

ゆ「まあ、奏ちゃんなりに一生懸命真剣に書いたんだから、そんな  
に言うことないじゃない。ねえ？」

奏はゆりっぺの言葉に、こくこくと頷く。

岩「……お気楽ナンバーって堂々と書いてあるけどね」

滝「でも俺らしいんじゃないか？」

ゆ「やったね、奏ちゃん」  
奏「うん！」

再開。

ゆ「次は？」

音「次は……卒業証書授与！」

大「あ、授与する校長は？」



日「オレだよ！」

サタデーナイトにフィーバーしてそうな格好で日向が……ヒゲ眼鏡までつけて壇上に現れる。アホだ。

「「「「うわぁ……」」」」

日「なんだよお前ら露骨に嫌そうな顔すんなよ！じゃんけんで負けたんだもんしょうがねーじゃんかよ！」

一般メンバーからもドン引かれ日向も流石に傷ついているようだ

音「……始めようぜ

卒業証書授与！では……立華かなで！」

奏「はい！」

奏は元気よく返事をし登壇する。

そして日向から卒業証書を受け取ると、もといた場所へ満足げな表情を浮かべ戻る

音「次。仲村ゆり！」

ゆ「はい！」

そして全戦線メンバー1人1人に渡し終えた  
日向も音無から証書を受け取り……

卒業式も終わりへと近づく

音「卒業生代表、答辞！」

音無はその場に立ちあがる。

あー、んっん！

振り返ると、いろんなことがありました。

この学校で初めて出会ったのは、仲村ゆりさんでした。いきなり、死んだのよ？と説明されました。

そして、この死後の世界に残っている人達は、皆一様に、自分の生きてきた人生を受け入れられず、神に抗っていることを知りました。私もその一員として戦いました。

しかし、私は失っていた記憶を取り戻すことにより、自分の人生を受け入れることができました。

それは：かけがえのない想いでした。それをみんなにも、感じてほしいと思い始めました。ずっと抗ってきた彼らです。それはたいへん：難しいことだと思っていました。

でも彼らは：助け合うこと、信じ合うことができたんです。仲村ゆりさんを中心にしてできあがった戦線は、そんな人達の集まりになっていたんです。

その力を勇気に……みんなは、受け入れてくれました。

——音無は一呼吸入れて、涙をこらえ、続ける

ここにいる全員が……今日をもって卒業します。

……一緒に過ごした仲間の顔は忘れてしまっても……！

この……魂に刻み合った絆は忘れません。みんなと過ごせて、本当に良かったです！

ありがとうございました！

卒業生代表、音無結弦！

パチパチ……と初めは小さい拍手だったがやがて全員がその答辞に手を叩いた

音「全員起立！

閉式の辞。

これをもって、死んだ世界戦線の卒業式を閉式と致します……

卒業生……退場！」

一瞬、沈黙が広がるが、やがて1人が口を開いた

チ「んじゃ俺らから先にいくぜ」

チャーの後ろには工場班、と戦線メンバーも続々と集まる

斎「まあ幹部達はゆっくり感動の別れをやっててくれ。  
水辺は好きだが湿っぽいのは嫌いなんぞな」

ゆ「チャー……今までありがとう、他のみんなも」

チ「ったくよお、湿っぽい顔すんなってんだろ？」

バン！とゆりのお尻を叩くチャー。ゆりはビックリしたようだが涙を拭いて笑いかける

チ「良い女が台無しだぜ？気をつけろよ

……んじゃ『またな』」

さて、と

大「次は僕達かな？」

藤巻、大山、松下、TK、椎名、野田、高松、竹山が前に出る

大「うまく言えないけど……楽しかったよ。毎日毎日お祭りみたい  
でさ」

椎「……ありがとう、皆また会えたらいいな」

涙を目にためながら言う大山とその隣で口を開いた椎名が背を向ける

滝「会えたらいいじゃなくて、また会おう！だろ？」

椎名は振り向かず、ただ笑ったように「……浅はかなり」と言い  
……

松「俺達も行くか」

T「see you again」

高「また会いましょう」

クルッと回転して指をビシッと指したりポーズをとると3人も背を向ける

T「最高の日々だったぜ」

直「……喋った。」

藤「台無しにすんなよテメー」

直井をはたき倒しつつ藤巻と野田、竹山が前に出る

竹「まったく、最後までアホな事しないで消えられないんですか」

音「そうだな、クライスト！」

日「え？消えた！？ここギャグ入れなくていいだろ！？」

日向が騒ぎはじめるが、

やれやれといった感じで2人はそれぞれ向き直ると：

野「それじゃ……」

藤「俺らもいくか」

と言うやいなや藤巻はひさ子、野田はゆりの唇に自分の唇を重ねると走り出す

藤「次も予約したからな！忘れんなよ！」

ひ「……馬鹿」

ゆ「逃げるなんて……ずるいじゃない」

・

—  
—  
—  
—  
—  
—  
—

岩「ゆり、あたしらは……あたしらの場所で『いく』からここでお



別れだ」

ゆ「そう、わかったわ

また聞かせてね？」

「「「「もちろん!!」「」「」

あたし達は一斉にそう答えて体育館を後にする

ユイは……日向達といくらしい。ちょっと残念だが、考えればなるほど、そういうもんだろう

——————————学習棟A棟空き教室

そう、ここがあたしらの場所。

カラフルに落書きされた黒板も、出しっぱなしのマイクスタンドも、そして……

## Last Song

— — — — —

3月2日

朝イチで岩沢さんに昨日見たこと聞いてみた。結果だけ言うと……知ってみたい。

しかも卒業式やろう！って結構衝撃的な内容だったけどね、不思議と嫌な気持ちは起きなかった。

前たつきーが言ってたんだよ、この学校はNPCとあたしら足して2000人のマンモス校だ。となるとあたしらが増えたらNPCは消えるわけじゃん？

つまり私達みたいに消えないようにしていると、新しい人がここにこれないんじゃないかって。NPCが0になればね、うん、確かにそれじゃ教室も寮もいくらあっても足りないよね。

いつかはみんな、『次の世界』に行かなきゃいけないんだ。

判ってる。

でもその勇気が今までなかっただけなのかもしれないね。

次の世界も辛いかもしれない。理不尽な人生を送ることになるかもしれない。

けどあたしらは知ってる、そんな人達の集まりの中で励ましあって、バカやって、頑張ってこれたんだしね。

ならさ、次の世界でもきつと同じ事が出来るよね？

— — — — —

3月3日

ゆりっぺさんから全体にお話して、卒業式をやったよ！

みんな……良い笑顔でここから卒業していったよ……

辛いことも悲しいことも、もちろん楽しい事も全部、全部が全部今  
思えば最高の日々だった。毎日が毎日お祭りみたい、って本当にそ  
うだと思う！

だから、みんなあんなに笑って巣立っていったんだよね。

しかし藤マッキーと野田さんなんて最高の去り際だったろうねー、  
まったくひさ子さんを涙目にさせやがって……おめでと。

もちろんあたしも今日卒業します

この日誌を見るキミ！一緒にCD置いとくからさ、こんなあたしら  
が此処で生きた証、しっかり確かめて欲しいんだ。良い曲過ぎて涙  
流しても知らないけどね（ついでに消えても知らない）、ちなみに  
あたしはベースをブリブリ弾いてるから特に重点的に聞くように！

ふう、もっと書くことあるんだけどおしまいにするよ、みんな待っ  
てるんだ。

最後に1つ、ガルデモ最高！

そして、こんな素晴らしい世界で出会えた奇跡にありがとう！

— — — — —

あたしがペンを置くとみんなが覗いてきた

おいおいキミたち、人の日記見るとか悪魔の諸行だよ？

岩「……何だよコレ？」

関「活動日誌、岩沢さんが書けって言ったんじゃないですか!？」

ちよっと岩沢さん、そうだっけ？みたいな顔するのやめてくださいよ

入「かなーりフィクションが混じってるね……」

ひ「……別に泣いてねえよ!」

ちよ、痛い! 痛いよひさ子さん!

えへへ……でもなんか嬉しいや

—  
—  
—  
—  
—  
—

岩「さて、それじゃまああたしらしく一曲弾いて……終わりにしようぜ」

岩沢はそういうと俺に『相棒』を渡して微笑む……

岩「さあ……始めようぜ」

そうして観客のいない、最後のライブが幕をあけた

俺たちは黒板を背に楽器を持つ……

岩沢はマイクスタンドを握って……俺は静かに目の前の彼女の『相棒』を弾き始める

————苛立ちをどこにぶつけるか探してる間に終わる日  
空は灰色をしてその先は何も見えない

常識ぶってる奴が笑ってる 次はどんな嘘を言う？  
それで得られたもの 大事に飾っておけるの？

でも明日へと進まなきゃならない  
だからこう歌うよ————

そしてアコギだけだった演奏に、ひさ子や関根、入江も加わって  
くが……

——泣いてる君こそ孤独な君こそ

正しいよ人間らしいよ

落した涙がこう言うよ

こんなにも美しい嘘じゃない本当の僕らをありがとう——

入「本当に楽しかったです……ありがとうございました」  
ドラムにスティックが当たり不自然な音を立てる……

——叶えたい夢や、届かない夢がある事、それ自体が……  
夢になり、希望になり……人は生きていけるんだろ……  
扉はある、そこで待っている  
だから手を伸ばすよ——

関「たつき……岩沢さん泣かせたらぶっ飛ばすからな」  
……また楽器が床に落ちる……  
しかし岩沢は振り向かず歌い続ける

――――挫けた君には、もう一度戦える、強さと自信とこの歌を

落した涙がこう言うよ

こんなにも汚れて醜い世界で出会えた奇跡に――――

――――ありがとう

ひ「……次もバンドやろうぜ」

もう、響き渡るのはアコギだけだった……

2人きりの教室、俺は岩沢を後ろから抱きしめて耳元で語りかけた。

「……俺はただ、俺のことを必要だと思ってくれる人を求めてたんじゃないかってな。……まあアタックしたのは俺からだけだよ……

……でも、ありがとう」

「……ああ、こちらこそ、

……ようやく2人きりになれたな……次はお前の歌も聞かせてくれ  
……」

「ああ、また2人きりになったら、な」

「好きだよ」

「俺もだ」

俺はありったけの想いを込めて、振り向く彼女の唇に自分の唇を重ねた……

そして………



.

.

.

――――生徒会室

……ちょ……いちょう……

奏「起きて会長」

滝「む……どうした奏ちゃん」

せっかく人が春の陽気をめいいっぱい感じてたのに。

滝「今日入学式だったろ？慣れない固い挨拶しただろ？疲れたんだ

よ、書類は副会長のキミに任せる…」

奏「……その新人生がさっそく問題を起こしてるのよ……」

♪

……俺は耳に入ってきた音を聞くといってもたっても居られずに、生徒会室を後にした……

心臓がドクンドクンと脈打っていた。熱い血液がエネルギーを全身に行き渡らせていく。

あっという間に体育館についた

聞こえるのは懐かしい歌。昔、俺が生まれる前から知っていた歌。

周囲の音はよく聴こえない。俺は拳を握り締めて人ごみの中心へ向かう。

そして一人の女性が目の前に現れる。

「よ！元気？」

と、俺はギターを持つ少女に走り寄って、それに応えて飛びついてきた彼女をしっかりと抱き止める

周囲の声が騒がしいが気にするもんか。

俺は彼女の顎に指をかけ……………

第二部  
了

## **Horseplay (前書き)**

このお話はフィクションです。実際の人物、団体、執筆過程とはな  
んの関係ありません

このお話はフィクションです。実際の人物、団体、執筆過程とはな  
んの関係ありません

## Horseplay

関「はいお疲れ様でしたー」

「「「お疲れー」」」

滝「やっと終わったなー」

岩「駆け足な上に最後やつけたけどな……」

ひ「つーか思ってたけど誰だよこいつら……特に岩沢なんて岩沢の皮被った誰かじゃねーのか？」

岩「酷いなひさ子……」

関「はいはい最後の挨拶何ですからもうちょっとしっかりしてくださいよ。」

まあこんなメンバーだけだとわかってるのでキャラ座談会的なコレの台本を作ってきたこの関根しおりであります！」

入「そんなの作ってきたの……？」

関「まあまあ良いじゃん、ハイ、ハイ、ハイ、ハイ！じゃあいきま  
すよ、スタート！」

岩「まずうちからいくわ、なんでタイトルに『らすと そんぐー』  
って堂々と書いとるっちゅーに歌ってるの my song やねん？」

滝「そら自分『ようやーくふたーりきりにーなーれーたーなー、お  
前のうたーもきーかーせてくれー』ってのをエンディングにしたい  
からに決まっとるやん」

ひ「それだけか？それだけのためにあんなにみじっかい話にしたの  
か？」

滝「そや、つかお前らぶっちゃけ脇役やん？最後まで残してやった  
だけでワイに大感謝もんやで？」

入「いやまあ私は影の主演ですしい」

岩「うちは真の主演やからな。モブはひさ子だけや」



ひ「それ聞いてたらガルデモ抜けて体育館で消えてたよ……」

岩「お前の友情ってんなもんかい!!?? ずっとこけたで! 座談会っちゅーに椅子からずるうーって!

ひさ子オ、お前とうちの仲やん、めっちゃ長い時間を過ごしてきたわけやん?」

滝「ちよっと待ちイや! そのポジションはワイのやろ!？」

ひ「そうだぞ……岩沢お前ちよっと落ち着け……」

滝「もうひさ子の肉体も心もワイ無しじゃ生きていけんやろ?」

ひ「あたしかよ!」

岩「滝沢、オメーもたまにはキッスも交わしたわけやん? 朝起きたら素っ裸のオメーが隣で寝てたりしたわけやん? オメーうちの体の虜やん?」

入「だいたい合ってますね」

岩「うちのライトハンドがテメーのあそこを激しくつま弾いてたりしたわけやん?」

ひ「下ネタかよ……最低だな」

岩「ちげーっよ! あいつにリズムギター教える時後ろから優しく、

『ライトハンドって、こーやで？』  
って教えたわけやん？」

ひ「紛らわしいな！」

滝「つかオメーら脱線し過ぎやで？何キャラコメネタ引っ張ってき  
とんねん」

入「そうでしたねげっへっへ  
んじゃあたしからなんですけどおぶっちゃけ光さんのAB知ってる  
設定意味あったんすか？」

岩「何下の名前で呼んどんねんボケが

そんなんサイツコーにキュートなのに三話で消えちまううちを危険  
な目にあわせんで自分がイツチャイチャするため決まってるやん」

滝「ぶっちゃけ他のフラグ折りまくるから苦労したで。アニメ版8、  
9話あたりからもうごつつキツかったわ」

ひ「よく終わらせられたな……普通こういうのって全体の構想練っ  
てから書くもんじゃないのか？」

滝「いやぶっちゃけ毎回書き終わる度に次ドウシヨツカナーとか考  
えてたわ」

ひ「お前他の小説書きさんに謝れよ……」

滝「だってこの小説って小説の出来だけ見るならこんなに閲覧つく  
わけ無いやん？自分でもわかつとるわ……」

岩「ぶっちゃけうちやろ、うちとのイツチャイチャ目当てやろ？」

滝「せやろな」

ひ「少しは否定しろよ……」

滝「他にあるか？」

入「はいはい光さんの名前ってどうやって決めたんですか？」

岩「……何下の名前で呼んどんねんちゅーとるやろ鳥頭が」

滝「あー滝沢ってのは岩沢だし主人公もく沢にしとこうかーって思ってたな。語呂いいし。某戦国ゲーやってた時ちようどよさそうなのがいてなあ、それからとった。光はめっちゃイケメンの友達がいたからそいつからパクった。」

ひ「すげえ行き当たりばったりだな……」

入「でもやたら厨二な名前よりマシでしょうしね」

滝「最終的に滝沢光、巴光、マサミチュツチュ||ガルデモスキーの3択まで絞ったんやけどな、悩んだ末滝沢光や。」

ひ「絞り切れてねーよ！3番目とかあからさまにアウトだろ！」

入「巴マサミ……ってなってもアウトじゃないっすか！3話で良い笑顔で消えませんかよ！」

岩「でもきつと胸はデカくなるで？」

ひ「いやマスコットが関根って時点でアウトだろ……」

滝「タイトルも『ふぁーいどあうえーい』って口ずさんでたらフツ  
と思ひ浮かんだだけやで。いやー過去話とか最期らへんで反映させ  
んの苦労したわあ」

ひ「お前マジで他のライターさん達に土下座してこいよ……」

岩「つかこんな小説でよく閲覧いくって思わんか？」

ひ「まあギャグパートとかで少し面白いとか思ってくれたんじゃね  
ーの？あと岩沢好きのやつが岩沢ヒロインなら見てやろうか、的な  
感じだったりさ」

滝「次のヒロイン関根だけどな」

ひ岩「ハァ！！？？」

滝「いやさあ次は転生後の世界編なわけじゃん。そこでは関根とち  
ゅっちゅする予定なんや」

岩「なんで!？」

ひ「関根がない理由って…」

滝「ああ、気合い入れておめかししてる

まさみもハーレムに加えてやってもええで？」

岩「……」

ひ「お前……最低じゃねーか……クソあたしは関根を探しにいくぜ、  
岩沢、お前もいつまで沈んでんだよさっさといくぜ！」

入「その必要はないです」

めりめりめりめりい！

ひ「入江が顔を剥いだ、その下から現れたのは……関根！」

関「フフひさ子さんもハーレムに加えてあげましょうか？ 正妻はあたしですが。ほらほら僕と契約してただの女になってよ？」

ひ「このやろう……これ見よがしに抱きつきやがって」

岩「…それに、」

関「ん？」

岩「それに触るなアアア……！！！！」

ガッ、ギイイイン！

関「痛ア！（ガッ）ちょっと岩沢さん台本と違っ！（バキッ）やめっ！」

入「……しおりんもうちょっとまともな台本書けないんですかね？」  
ひ「『あたしとたつきーらぶおーえばー』で終わってるしな。」  
滝「……まさみもまた関西弁キャラやらされてる上に俺までか……」

岩「触れるモノを輝かしていく……」

ガッ、ガッ

関「痛い痛い！輝きませんよ！赤く腫れ上がるだけですよそれ！」

岩「全力でもう（関根は）倒れそうだ  
指もすり切れて痛い……でもね、殺るよ……」

関「ひいやあああああ！……！！！」

H a p p y e n d ?

ひ「てゆーか第二部やんの？」

滝「さり気なく最近目次の最初に

◆本編

って書いてんじゃない」

入「ではでは本当にお疲れ様でしたー」

## News

――――体育館

燃えるような赤い髪が目の前一杯に広がり……彼女は俺に飛びついてきた

……俺もこの久しぶりの感覚に身を任せたくなるのだが……

後ろから声が聞こえるので身を離す

奏「……岩沢さん、久しぶりね……でも事前に生徒会の許可をとらないとライブとかはやっちゃだめよ？」

岩「奏……か？お前もこの生徒なのか？」

口では奏もこう言うが……満面の笑みを浮かべているあたり相当嬉しいのだろう

滝「まさみ、という事だから残念だが撤収だ……生徒会室で詳しい事は話すよ」

岩「……了解」



――――生徒会室

奏「というよりいきなり抱き合うってのもどうかと思うわ……  
他の生徒が呆氣にとられてたわよ」

岩「ああ、悪いな……それより奏とも同じ高校か……嬉しいよ」

滝「おいおい俺は……？」

とりあえず笑いながらバカ、とデコピンをしておく……

滝「……俺、三年生だぞ？生徒会長だぞ？偉いんだぞ？」

……

岩「……マジかよ」

奏「マジよ。結弦も副会長だし……」

滝「何の因果かこの学校に日向、ゆり、藤巻にひさ子も……ほぼみ  
んないるな……あと残念ながら直井も見つけちゃってる」

それを聞いて思わず身を乗り出してしまった

岩「ひさ子もいるのか！」

オーケイ、楽しくなりそうだ……

滝「あー……ただな、」

岩「ん、なんだよ？」

光が何か言いよんどんでいるのを見てあたしは少し不安に思う……  
いったい何だ……？

まさかひさ子……両親が喧嘩ばかりで止めにはいったら父親に殴ら  
れて失語症に……

滝「まさみ……お前に言うのもなんだがな、そんなヘビーな人生送  
る奴は身近にそう何人もいないからな」

そ、それもそうか……  
それじゃあいったい……

奏「紙に纏めてみたわ、戦線メンバーの学年別の所在よ」

あたしは奏から1枚のルーズリーフを受け取る……

何々……

~~~~~

3年

滝沢君、結弦、日向君、野田君、ゆり

2年

藤巻君、ひさ子さん、遊佐さん、高松君、TK、松下君、私（奏だな）

1年

岩沢さん、関根さん、入江さん、大山君、椎名さん、竹山君、チャーさん、直井君

~~~~~

岩「ちょっと待て、あたしは関根達と同学年なのか？ ひさ子まで先輩なのか？」

滝「ついでに言うならチャーも姿形変わらず1年だ」

……………

岩「……おかしいぞこの世界」

滝「残念ながらあっちと違ってコンティニューも出来ない本当に普通の世界だ」

何度ゆりっぺのせいで退場しそうになったか……と嘆く……ってお前は何してたんだよ……？

……

岩「よし、とにかくみんなと会いたいしゲリラライブやろう。関根と入江も呼んでさ、そしたらひさ子も……戦線メンバーだった奴ならきつと来る、ガルデモも再結成だ

そしてこの世界でもだんだん人気ゲットしていつて目指すは武道館！」

最高じゃないか、とガッツポーズしたあと腕を広げアピールしてみる

滝「だから許可とらんとダメちゅーとるでしょうが……」

岩「だめか……？」

精一杯上目遣いで……（お母さんが『こうすれば男なんてチョロいものよ、覚えておきなさいませみ』って言ってた。ちなみに『今回』

は夫婦円満、だ。神様いるならありがとう)

滝「よし、許可す」

奏「独断で決めちゃだめよ、職権乱用はいけないわ」

……厳しいな

奏「……というよりゲリラライブは無許可でやるからゲリラライブじゃないの？」

……ああ、なるほどな

オーケイ、確かに学校側から認めてもらったライブなんてあつちでも無かったしな……

派手にやるか!!

――――体育館

楽器は軽音部から借りてきた、観客もいる……

岩「メンバーもいる、ライブが出来る！」

あたしは振り返ってみんなを見る、うん、何一つあの頃と変わっちゃいない（強いて言うならみんな身長伸びたか？）

関「だからって入学式当日にやりますか！？」

入「はは……あたしお母さんと写真撮ろうとしてたところ拉致されたよ……」

ひ「……久しぶりに感動の再会かと思ったらコレだもんな」

全く……これからライブだったのにテンション低いな……

岩「せっかく全校生徒集めたってのに」

ひ「ハァ!？」

……どうしたんだ

岩「顔が近いぞひさ子先輩」

ひ「先輩はやめろ、前みたいに呼び捨てで……ってそうじゃない

……何をしたんだ？」

何って……

岩「『全校生徒は体育館に集合してください』ってアナウンス流しただけだぜ？」

ひ「……誰が、どうして」

岩「生徒会長が、デート一回で」

ひさ子はそれを聞いてアイツか……と頭を抱える

入「……アホは死んでも……生まれ変わっても治らないんですね。」

関「黒っ、みゆきち黒いよ!」

……なんかキャラ変わっちゃってるな……

滝「お前程じゃないがな」

と、光が幕の裏（あたしらが裏にいるから表だが）から首を出してきた

……地の文に反応するなよ

滝「準備出来たよな？日向と音無の漫才じゃもう繋ぐの限界だぞ」

ひさ子が凄いジト目でお前ら何してんだよ………みたいにしてるけど………

岩「オーケイ、さあ派手にやろうぜ!!」

……垂れ幕が上がりひさ子はギターをかき鳴らす

最初の曲は………crow song!



—  
—  
—  
—  
—

『お前達、何をしている！』

c r o w s o n g、a l c h e m yと歌ってみんなも盛り上がっ  
てきた（聞くの初めてなのに、だ）ところで入口の扉が開かれ腕章  
をつけた生徒が現れる

ひ「やべーな、風紀委員だ

……岩沢、逃げるぜ」

岩「そうだな……今日はこれ位で良いだろ」

本当はもっと歌いたいけど捕まって説教をくらうのは正直勘弁だし  
あたしらは逃げる事にしたんが……

……入口は一つだしな……強行突破しかないか

『滝沢、お前は生徒会長だろう？何故止めないんだ』

滝「落ち着け香織」

香「これが落ち着いていられるか大体貴様は……」

そんなこんなであたしらはなんか修羅場ってる横をひよいと……

岩「ちよつと通るぜ」

ひ「お疲れ」

香「待てお前達」

……行けなかったな

岩「……光、後は任せた」

まあ行かせてくれないなら突破するだけだが……

あたしら4人はそう言うのと猛然とダッシュ。後ろであの女の声が聞こえた気がしたがとりあえず気にしないでおく

岩「歩いてきた道、振り返らない、し、な？ ひき子」

ひ「それ絶対使うとこ間違ってるからな」

しっかしやっぱりライブは楽しかったな  
初見であれだけつかめたなら成功だろう

もちろんまだまだ歌いたい曲は沢山ある、新しい曲も書いたし光や  
ひき子……そしてみんなにきかせるのが今から楽しみだ

そう希望を、ここから見つける！

今度こそ素晴らしい人生を生きてやるんだ！

—  
—  
—  
—  
—  
—

俺は岩沢が無事に逃げたのを確認すると羽交い締めになっていた香織を離し……

—  
—  
—  
—  
—

—  
—  
—  
—  
—

……殴られ蹴られ現在は説教されている……

コイツは俺と同学年で男勝りな風紀委員長なんだが……何かと俺に突っかかってくる。入学して最初の試験からずっと3位……俺のいっこ下キープが相当気に入らないようだ（1位は音無だが睨まれるのは俺だけ……理不尽だと思う）

そして関係ないが無乳だ、ユイとタメだ。どうあがいても絶望だ。  
イケメンな男子と言っても誰も疑わない

香「大体貴様は何時もそうだ、私の苦勞等知らずに……」

滝「今度いちご買ってやるから今日は勘弁してくれ」

千「なっ………クッ………仕方ないな……あと、あま○うだと嬉し  
いぞ」

あといちご好き、説明はこのくらいか。

香「だがあの1年共には貴様からちゃんと言っておけ

……大体貴様も仮にも生徒会長なのに新入生に呼び捨てにされるな  
ど……ナメられているのではないか？最近の若い奴は礼儀が……」

滝「いや、うん、まあ彼女だし呼び捨てでもいいんじゃないかな  
ナメられてはいないだろうし……まあ舐め……げふんげふん」

……風紀委員長の前で、加えて『ココ』で口にしたら色々マズい事  
を口走りそうになったところでふと彼女を見ると……

香「……100ペン死んでこい」

滝「あーそれ確か野田の」

ドゴッ

台詞だったな、懐かしい……

とっていると顎に凄まじい衝撃が加わるのを感じて……

—  
—  
—  
—  
—  
—  
—

日「懐かしいな、椅子が飛んだときもこんな感じだったぜ？」

音「首だけ廊下の天井にな……何してんだこいつ」

……

ゆ「うわ、キモッ。足とかジタバタ動いてるし……」

日「露骨に引くなよゆりっぺ、かわいそうじゃねーかよ？」

ゆ「だってビクンビクンしてて気持ち悪いじゃない」

音「確かに見ていて気持ち良いもんじゃないが……」

……お前ら話してないで誰か助けてくれ……

弦きが彼らに届く事はなかったのであった……

## **Newdays (後書き)**

はい、オリキャラ登場です

そんなに活躍しません(オイ)

ちなみに一応イメージした方はいます。好きな物とか名前とか身体特徴は……性格、口調は違いますけど

では、新章引き続きぶっ壊れた彼らの日常をお楽しみください



# Hello

――――1年A組

岩「……はあ、やっと放課後か」

入学式の翌日、一日中休み時間の度に昨日のライブのせいかあたしらの周りに人が集まってきて……邪険にするわけにもいかないし応対に疲れてクタクタだ

……あっちの世界でもこんなにじゃなかったよな……？ってあまた集まってきた

『昨日凄くかつこよかったよ！』

『三人ともいつから一緒にやってんの？』

『ところで三人ともフリー？』

有無を言わすないマシンガントークに思わずピンク色の後輩が頭に浮かんだ……

……ユイがいつばいいるみたいだ  
岩

関「残念ながらあたしはフリーじゃないんだよ。ホラ、生徒会長の滝沢さんが恋人なのさ」

『『『おおー』』』

……………

岩「……あ？」

入「しおりん……」

・

関「いひゃい、いひゃい！」

岩「……つかお前ら練習だ、行くぞ」

両頬をつねられてうなる関根を離して言う

ここで時間潰すんだったらこっちに来てから書いた曲の練習した方が……

入「……練習って岩沢さん、どこでやるんですか？」

………

……不味い。……そういう部活にでも入ってなきゃ音楽室は使えな  
いだろうし……

かと言って自由な時間減らしたくないから帰宅部したいし……

空き教室とか……ないかな

岩「そうだ」ピカッ

入「えっ？岩沢さん今の何ですか？頭の上で電球光りましたよ？ど  
うやったんですか？」

岩「とりあえず光に聞き行く」

関「別にそこまで凄い閃きじゃないし！」

――――生徒会室

岩「というわけで練習したいから空き教室を貸してくれ」

滝「……お前は俺を便利屋か何かと勘違いしてないか？

……しかし練習に使えそうな部屋か……あいにくそういうのは俺の管轄じゃ……

……そうだ」ピカッ

関「だから何なんですかその電球は！？ あんたら2人おかしムガッ」

うるさい関根の口を抑えて黙らせる  
順応性が足りないぜ？

滝「SSSの部室なら大丈夫だろう」

岩「……戦線あるのか？」

死んだ世界でもないのに。というか部室貰えてる事が驚きだ

滝「ああ、『素晴らしい再出発を飾ってみせる戦線』略してSSSだ。

もっとも学校側には『素敵な将来の為地域に貢献する青年の集い（SSS）』という長ったらしい略がSSSになるかも疑問な名前で通してあるんだがな、これが」

関「……アホだ」

岩「光も入ってるのか？」

滝「ああ、戦線メンバーだった奴は全員強制参加だ  
加えるならまさみ達の入部届けも既に出てる」

「「は？」」

……ちょっと待て

岩「あたしそんなもん書いた覚えはないぞ？」

関根達も頷いてるし……

滝「ああ、俺が代わりに書いといった

住所とか諸々は先生から聞いてな。うちの先生らなんかゆるいし」

臆面もなく色々言ってるけどどうなんだこれ……

滝「あ、今度の土曜まさみんち行くけど空いてるよな？」

岩「……いや、お前な……」

入「コレ絶対そういう目的メインでやったんですよね」

滝「いやゆりんとこに全員分集めさせられてんだよ……」

関「ゆりっぺさんとか……終わった、あたしの人生終わった」

いやそれは大袈裟だけど……

岩「そんな事より練習したいから場所教えてくれよ」

関「……そんな事、でいいんすかこの音楽キチは!!」

ペシッ

ワシヤワシヤワシヤ……

関「うおお、ーやめろお……」

滝「ほらアホ言ってないで行くぞ」

岩「うわっ

……わかったって」

そう言うとき光に腕掴まれて引っ張られ……

っと、光に頭を叩かれて髪をグチャグチャにされたりしてぶーたれてる関根を逆の手で引っ張っていく

入「あっちよっと置いてかないでくださいよ〜!」

—  
—  
—  
—  
—  
—

ったく……あたしのサラサラヘアーが台無しだよ

関「……つーかあんたらちよつとした移動ん時まで腕組まなくていいですよ」

滝「良いじゃないか」

ずっと会ってなかったんだし……ってそーですか。

関「だいたい岩沢さんとか精神年齢なら数年前から前の記憶思い出し始めたとはいえあっちの世界と前世合わせてもう三十路はゆうに超えてるでしょーに高校生と腕組むとかよくや」

ドゴォ

関「痛ったあ!!」

あたしのパーフェクトな頭脳になんて事するんですか!?

文句言おうとしたけど岩沢さんが「お前一回死んどくか?」みたいな目で見るからやめといた。

やめて、この世界じゃ復活出来ないんだって

なんか悔しいからあたしもみゆきちと腕組んだ。

入「……………」



みゆきちやめて、本気で可哀相な人見る目をするのは。マジで傷つくんだって。

――――SSS部室前

ガチャッ

滝「おーいゆりいる…（ドスッ）…か？」

ゆ「危ないわね  
急に入ってこないでよ」

滝「いやいやいやそれより先にまず言うことがあるだろ！！手帳無かったら大惨事だぞコレ！」

光は胸に刺さった……ダーツの矢か？  
を指して叫んでる

ゆ「岩沢さん達ようこそ戦線本部へ！ね」

岩「ああ……」

……暇なのか？」

滝「挨拶じゃねーよ！何で謝罪するって考えがない why!？」

音「日向かよ……つかそれ流行らねーって」

奏  
コクコク

滝「うるせーよ！つかテメーら書類書かず到处行っと思ったらこんなところでイチャイチャしてたのかよ！！こちとら書類地獄で絶惨禁欲生活を送ってるつてのによ！！キミら真面目な学園生活送れよ！！」

つかテメーらだけチチ繰りあつて羨ましいんじゃチクショー！！」

ぶっちゃけたな

音「マジ……天使だったぜ」

滝「見たのか！！見たんだなコノヤロー！！！！」

――――

ゆ「まあアホしてる彼らは置いておくとして……本当に何にもしてないのよね、集まってたむろしてるだけ。

だから兼部も普通にOK。日向君とか松下君、藤巻君、野田君あたりなんかは野球してたり柔道したり剣道……いえスポチャンしたりしてるわ」

入「グダグダじゃないですか」

ゆ「だから暇つぶしも兼ねてね……練習とかここで良いわよ、って」

ひ「ちょっと五月蠅いけどまあ許容範囲さ

何より改装して防音性は無駄にバッチリだしな

難点を言うならちょっと蒸し暑いつてことだな、夏場とか特に。」

ああ、確かに暑いよなこの部屋……ひさ子もなんか胸元開けてるし……エロいよひさ子……

……まあいいか。あたしも開けよ

……でも確かに五月蠅いつて踏み込まれる事もないのは魅力的だな

岩「よし、んじゃここで練習するか」

という事で、早速新曲の楽譜を渡していく  
うん、我ながら良い出来だ

ひ「やけに明るい曲調だな……」  
入「……………あれ？」

関「……岩沢さんこれドラムもベースも入ってなくないですか？」

岩「ああ、あたしだけだったからさ、まだバンドアレンジのバージ

ヨン全部出来てないんだ。関根今日はサビのコーラスだけ頼む、入江は……休みだ」

入「はい」

関「わかりましたー

あ、歌詞は？」

あたしは歌詞カードを差し出す

――――

人の目氣にして 良い子のふりして もうどれが本当の自分なのか  
わからなくなったの

こんなんじゃないかったはず 愛想笑い得意になったのは  
大人になったから？ なんか違うくない？

こんなのあたしじゃない

グルグル迷路出口探す

つまずいて転んで泣いて立ち上がって この繰り返し 嫌いじゃない  
もう少しで抜けれる氣がする、あともうちよっと

迷路の途中で鏡を見つけた 廊下に映るあの子は誰？

そっと近づいてみた 笑顔のないキミは何処かで見た、何時かで見  
た自分

久しぶりだね 元気だった？

キミに良い知らせがある

無理して笑う必要なんてないよ　ありのままのキミでいい  
ごめんね　もっとあたしがすぐ気づいてあげれば良かったね  
でもありがとう

鏡の中のキミが笑う　じゃあねってあたしに手を振った　出口だった  
キラキラ光るあの太陽に手を伸ばして笑う新しいあたしに　H e l  
l o !

H e l l o ! H e l l o !                      H e l l o !

— — — — —

関「明るっ!?!何コレこんなん書けたんですか!?!」

岩「……あたしを何だと思ってんだ」

……まあいい

うん、後はキーボードだから……

岩「光?ちょっと新曲の……」

—  
—  
—  
—  
—

滝「だから奏のより岩沢のおっぱいのが天使だってんだろうが！」

音「何言ってんだ奏のはマジ天使なんだよ！マジ天使！」

滝「…ほお、話すだけじゃわからねーようだな……」

なら！岩沢の事だからな、あいっらしく俺もどれだけ素晴らしいか歌で伝えてやる……ゴホン」

そして俺は歌い出す、ありったけの想いをこめて……

やっとひとつわかりあえた

そんな気がしていた

急ぎ過ぎても仕方ないし

ずっと続けたいな

痛みのない時間が来て

涙をなめあった

僕は君の身体じゅうに

泥をぬりたくった  
泥をぬりたくった

Oh…

滝（そう、ここからだこの曲は……）

岩沢のおっ（メキヤ）

そして俺は目の前が真っ暗になった

———

ハ———ハ———

ひ「……お前のその力は華奢な体の何処から出てくんだ？」

入「パンチの音じゃありませんよね……」

関「なんの曲かは知らないですけど心こめて歌ってたのになんで止めたんです？」

歌好きな岩沢さんが珍しい、って……

……………

岩「……誰のなんていう曲か聞いたらわかるさ……  
というかなんて話してんだよ……」

奏「……結弦、最低よ」

音「ああ、どうかしてたよ……すまん」

全くだ……

滝「むう」

起きたか、早いな……

……でもまだ寝ぼけてんのか？

まあいいや

岩「ほら、さっそくだけど楽譜。新曲のキーボードやってくれよ」

座ったままの光の前で中腰になって楽譜を渡す……と



滝「……おっぱい？」

……あたしはさっき暑いから、と胸元を開けたのを思い出した。  
そして座ってる人の前で中腰になるということはつまり……

岩「~~~~~!!!!!!」

グシャ

そして彼の意識はまた旅立って行ったのだった

## Hello (後書き)

いいさここらでちょっと病院へ行っところ (挨拶)

一曲のお話一

一曲目

marinaさんの曲、Hello。  
ガルデモの歌じゃないけどmarinaさんのオリジナルは素晴らしい曲なので布教に……

『myspace』さんでフルで聞く事が出来るので今すぐGO。

二曲目

誰の歌かって？

スピッツ。

本当にスピッツ。

嘘じゃない、スピッツです。

残念ながらスピッツなんです。

くどいくらい言いますがあのスピッツです。

ひどい。

滝沢が何を伝えたかったか、調べてみれば (調べなくても) わかります

一内容のお話一

いつかやろうと思ってたけど本編終わっちゃったどうしよう！本編後でも別にいいか。

というわけで音無のマジ天使発言。これをやりたいがためにどういう文にするか考える↓普通には無理↓岩沢キチの出番か（日本語でごめんなさいという意味）

でもきつと次は真面目なお話に出来るよう善処します……

ご期待ください（日本語で『Alchemy!?!?こんな序盤で!?!?』という意味）

## 意気地アリ（前書き）

というか別に本編終わってんだし日本語タイトル曲でもええやん  
トラゼロでもあつたし↑

## 意気地アリ

————岩沢家

岩「13日の金曜っていつでも特別ななんか起こるわけじゃないし」

綺麗だな……と、あたしは窓を開け満点の星空を見て思う。

岩「例えば見上げた夜の星空が　いつもより多く輝いているなら……」

……

うーん……続きが出てこないな

まあパツと浮かんだフレーズだししょうがないか……メモっておこ

……

忘れないうちにシャーペンを走らせるけど……

春とはいえまだ寒い

あたしは窓を閉めると思い浮かんだフレーズを机からルーズリーフを引っ張り出して書き込んでいく……

岩「……よし、寝るか」

ベッドに潜り込んで毛布を被るとイヤホンをつける。ひさ子に話したらそれでよく寝れるな……って言われたけど逆にこうしないと寝れないんだから仕方ない。

こういう時に聞く曲はK A B. みたいな静かなリラックスするにはちょうど良いやつだけだしな

~~~~~♪

だんだん眠くなってきた頃、窓が音をたてる

ああ、そーいやさっきのまま鍵かけんの忘れてたっけ……

風強いのかな……と閉じきった瞼をようやくの事で僅かに開けると

ガラガラ……

……

滝「まさみ……起きてる？」

岩「……寝てる」

滝「そうか、それならちょうど良い」

……入って来たのは、光だった。ここ2階のはずなんだが……

滝「いやー今晚は特に冷えるからさ、温もりいっぱい抱き枕が欲しいと思ってただけだな、寝てるならわざわざ断りを入れる必要もないよな？」

光は（窓から入るのを除けば）丁寧に靴を脱いで入ってくる……つてちよつと待て

ベッドから飛び起きる

岩「……脳みそとろけてんじゃないのか？
今何時だと思ってるんだ」

滝「……あれ？2、3日前言ってなかったっけ？土曜遊び行く、って」

「岩……………」

あたしは携帯を開く。

……画面には4月14日（土）00時01分の文字。

岩「……やっぱりお前頭おかしいぞ
で、何してきた？」

この前のアレを除けば会ってからずっとおとなしいな……と
思ってたのに、……これだ

滝「自分の部屋にずっと離れ離れだった恋人が訪れたというのに……
酷くないかまさみ？」

ああ、何し来たかって？そりゃお前夜ば」

岩「オーケイ、お前ちょっと黙れよ」

この小説にR－18タグをつける気かこの男は

岩「……来るならせめて半日後にしろよ」

滝「OK半日後だな！わかった、待ってろよ！？」

そう言うともた窓からヒョイと帰って行く……

岩「はあ……あのバカ何しに……」

……寝よ」

無論今度はキッチンと鍵を閉める

よし
……5
7、
5
8、
5
9、
1
2分。

—
—
—
—
—
—
同日12時11分、岩沢家前

・

・

ピンポーン

『はい……』

ガチャ

滝「こんにちはー

まさみさん居ますか？」

応対に出てきたのはまさみの母親だろうか、凄く若々しくて綺麗な人だ

母「ああ滝沢さんね、まさみから聞いてるわ
どうぞあがってくださいな」

……すんなり入れてもらえたが年頃の娘の部屋に野郎を通す事に抵抗はないのだろうか？

そう思いながら靴を脱いでいると

『おい誰が来たんだ？』

奥から声が聞こえた。

母「まさみの友達よ」

ガラッ

「……男じゃないか
おい貴様まさみとはどういう（ドスッ）……ぐっ……何をする絵莉
子……」

母「あなた、少し落ち着きなさい
お客様に失礼でしょう？」

……どうやらまさみの父さんらしいが……

……何でだろうこんな光景を普段見ている気がしてならない。……
はて、何処でだろう

父「し、しかしだな……まさみに悪い虫でもついたら（ドスッ）う
ぐっ……」

母「失礼でしょう？」

………

……とりあえず階段を上ってまさみの部屋に行く事にする。
途中『まさみは渡さんぞ!!』と声が聞こえた気がするが……聞こ
えなかった事にして俺は足を進めた

ガチャ

滝「お邪魔するぞ」

ひ「お、来たな」

関「早いねー」

入「ご飯中ですよちら」

岩「……きっかり12時間後に来たな」

………おや？

滝「なんでお前らいるんだ？」

……そりゃこれだけいたらまさみのお母さんも通すわな

ひ「朝岩沢に電話したらのメモーの事聞いたからな、来てやったんだよ」

……オメーか……

関「大体岩沢さんと2人きりだなんて天や読者が許してもあたしらが許しませんよ」

入「岩沢さんが汚されちゃいます」

お前らは何を言っているんだ……

岩「……わざとじゃ……ないよ？

……ただ朝だったし……あたし低血圧気味だから寝ぼけて……」

……

岩「いや……だから……」

……

岩「……そんな人生の理不尽を呪った目でこっちを見るなよ」

——
——
——
——
——
——

ひ「つかお前は結局何しに来たんだ？」

滝「いや、フツーに遊びに……って言わなかったか？
健全に。そりゃあもう、KENZENに。超KENZENに」

いや言い方からして嘘だろコイツ……

関「はい、建て前はそれとして本音は？」

滝「イチヤイチヤしに来ました。あわよくば赤面したまさが

『今日……親居ないんだ……（酷い裏声）』

とか言ってくれるんじゃないだろうかとか淡い期待を持ってました。
ええ」

……来て正解だったな

入「でも岩沢さんですしね……」

関「無いね」

岩「……どういう意味だ」

滝「はぁ……」

昔のお前らの方がもっと性格良かったぞ？」

と、滝沢と岩沢があたしらを見てため息をつく

ひ「昔のあんたはもっと純粹だったと思うんだけど？」

滝「……今は違うみたいに言うな」

本当に最初だけだったじゃないか

岩「……そう言うなよ、光だって良いやつだったんだぞ？ 今だって、うん、良い奴だ」

入「岩沢さん頭どっか打っちゃったんですね……」

関「ここらでちょっと病院へ行つときましょ」

滝「……お前らが俺達を応援してるのか邪魔したいのか時々わからなくなるよ」

——————

というか少しでもコメディ入ると途端に敵に回る気がしてならない

入「だって岩沢さんはみんなの岩沢さんですしー」

関「その岩沢さんが狼さんに食べられちゃいそう、って状況なら元カレのひさ子さんが黙ってるわけない、という事ですよ」

岩「……いつからあたしとひさ子が彼氏彼女の関係だったんだ」

ひ「女同士じゃねーかよ……つか元カレってなんだ元カレって」

あたしは男だったのか？ と関根を睨む2人……

関「だってひさ子さん……ハグったりしてたんでしょ？」

滝「おいおいハグなら俺だって……」

関「いやハグならあたしだってしたことあります（ひさ子さんにシメられましたけど）」

んじゃたつきーは岩沢さんの脇の下とかかいだ事ありますか？」

はい！！？？

………

予想の斜め上すぎて言葉が出ない………というかそれは恋人とは違うんではなからうか………？と、思いつつも聞くのをやめられない

滝「こいつは……ひさ子はあるってのかよ………！」

関「あるそうですよー？脇の下に鼻をこすりつけてやったそうですよー？」

ツくそおおっ！ジェラシィー！！

……脇の下とか……脇の下とか……

ひ「……見てて面白いなコイツ」

岩「……あたしちよっとお茶煎れてくるよ」

床でのたうち回る男を見てられない、というか次にあいつがどういう行動に移るかが読めた岩沢はそういつて一階へ降りていった

――――

母「まさみ」

岩「ん？何、母さん？」

あたしがレモネードを作っていると母さんが笑みを浮かべながら近づいてきた

……………これはヤバイ…ヤバくない

母さんがこういう表情を浮かべるのは大抵何かあたしにとって良くない事を考えていることが多い。

母「ふふふ……1人男の子がいるけど……」

予感的中。神様、もう理不尽はいらないんだけど……

母「まさみ……親は知る権利があるわ」

岩「……いや、友達だって」

母「……本当に？」

岩「ああ、友達だよ」

母「二度は言わないわよ？」

岩「……ちょっと仲の良い……」

……マズい……手に持ったカップが震えてる

母「それで、その仲の良い友達と手は繋いだの？」

……ダメだこれ絶対順番で最後まで言わされる

岩「そ、それよりみんなを待たせてるから早くいかないと行けないんだけど」

母「あら残念ね……」

なら滝沢さん、まさみとはどこまで行ったの？」

滝「はいお義母様、Cまでかと……」

あと名字はいずれ変わると思うので出来れば今から下の名前でお願
いしますお義母様」

岩「!？」

いつの間に……って

光あんたいきなり出てきて何しでかしてくれてんだ……!」

ひ「岩沢が遅いから様子見に来ただけど……なんてったらいいんだろ……」

……公認じゃん、おめでと」

岩「ちよっとひさ子……」

親友にまで裏切られるとは……

父「C、だと？Cと言ったか貴様……」

………父さん、何故ビール瓶を持っているんだよ

………なんか『前の』フラッシュバックが……

岩「父さん……まずそれ置いて」

滝「まさみが怖がってますお義父さん

………っていうか何？誰この人？まさみの過去話のお父さんと全然違うくね？」

つまり……

なんつーか……溺愛してね？と、耳元で聞いてくる……

………まあ確かにそうだな

父「む……すまん

なら……貴様、一杯付き合え」

滝「いやお義父さん俺まだ未成年」

父「お義父さんと言うな！

……黙って付き合えと言っているんだ」

あー……連れてかれちゃった

関「ねーねー暇だし男ら帰ってくるまで遊んでましょーよ」

……まあいいか

結局光と父さんが帰って来たのは夜になってからだ……
あっちで何があったのか知らないけど、肩組んだりして仲は良くな
っていたようだ

父「うむ。やはり可愛い」

滝「ええ、美少女に分類しても誰も文句は出ないです。

目付きと雰囲気は気だるげとか言う奴もいますがそれがまたたまら
なくgoodではないでしょうか」

父「貴様……わかってるな」

……この2人は公衆の面前でどんな事話してきたんだろう……

17才（前書き）

いやあ、わたしはまだ15ですけどね

17才

どうも、FMLの影のヒロインにして真のヒロイン。関根しおりであります。

今日は全国60億の関根ファンの為、あたし達の楽しい学園生活の様子を朝から追って、お見せしちゃおうと思います！

――――

AM8…15

登校。ギリギリ。

走ってきたから汗かいちゃいましたよ、って言ったら岩沢さんに近づくなって言われた。

開口一番がそれですか、酷いでこの人。

AM9…20

早弁したら先生に見つかって没収された。みゆきちは早すぎるよ……と隣でボソッと呟いてすぐ授業に戻る。

AM10…05

みゆきちの弁当（サンドイッチだったから食べやすかった）をこっそりいただいてたらまた先生に見つかって没収された

みゆきちは、またなの？ 的な視線で見てたけど没収されたのが自分

の昼食と気づいたらしくがく然としてた。
ええでその表情、もっと見せて。

P M 0 .. 0 5

みゆきちをパン買いに誘おうとしたら岩沢さんのお弁当分けてもらってた。

何それズルい！羨ましい！出汁巻き卵はおいしかった

P M 0 .. 1 0

結局1人パン買いにいったらひさ子さんと遭遇。一緒に食べることにしたけど……よくそのお腹に大盛りチャーシュー麺（ライス付き）とか入りますね。なんで太んないんですかこの人

ひさ子さんのため明日から岩沢さん達も昼こっちに誘おう。

ああ、あたしマジ良い奴……だからチャーシュー2枚奪って食った。シメられた。

P M 3 .. 3 5

6時間目終了！

お前昼からずっと寝てたじゃないか、って岩沢さんに叩かれた。結構痛い。

え？食べて寝て、じゃ太るよしおりん……だって？あたしの精神に大ダメージ。身も心もボロボロや。

P M 3 .. 5 0

ふと4月17日、いいなの日ですね、って気づいたからなんかプレゼントしちゃうか、とか考えてたらみゆきちと岩沢さんが笑いながらあたしのカバンについてた犬のキーホルダーを椎名っちに渡してた。こいつらマジ外道！というかキミ達はあたしをわざと放置する

趣味でもあるのかい？

つか椎名っち面白い。「く、くれるのか!？」って目を輝かせてたと思ったら「いやコイツ（あたしだ）の変な思いつきだしいらぬなら……」↑ここで椎名っちの目からハイライトが消えた。レイ○目。

「……いや、やるから」そして瞳に星がまた輝いた。やべこの変化笑える。

あれ？というかそれあたしのだよね？

P M 4・10

ひさ子さんと合流しようとSSSの部室行ったらひさ子は今日部活だってゆりっぺさんが言ってた。……部活？

とりあえず聞いた場所にみんなで行ってみたらたつきーとひさ子さん、藤マッキーと知らない人が麻雀打ってた。

あれここ高校だよね？麻雀部とかいいのかよ？どこの漫画だよ？

たつきー曰わく「今日はまさみが成仏した日だからな……記念大会だ」話が繋がってねーよ！何の話だよ！なんで岩沢さんの遺影置いてんだよ！生きてるよ！

岩沢さんも「青春だな」みたいな目で見るとやめなよ！めっちゃ不健全だよ！

「いやあ麻雀部全国大会近いからさ……」ってひさ子さんまで何言ってるの？ねえ？おかしいでしょそれ？

結局6時まであたしらも混ざって麻雀打ったりしてた

P M 6・05

岩沢さんとたつきー、藤マッキーとひさ子さんも家同じ方向だから
って一緒に帰ってった。何この設定？神様サービスしすぎじゃね？
あたしもみゆきちと一緒に帰る。途中今日1日頑張ったあたしは自
分自身にご褒美○ールケーキ（え、隠れてない？）を買って食べた。
やっぱり最高だよコレ

ところでみゆきち、お腹プニプニつつくの止めてくれないかな？あ
たしのモチモチ肌が羨ましいのはわかったからさ

P M 7..30

ご飯食べ終わったあたしはベボベのCD聞きながら（アルバムタイ
トルは17歳、でも曲名は17才、変なの。まあいいや、17才い
つつあせぶんていーん！ぱんぱーん！）軽くCDに合わせてベース
弾いた。しばらくして隣の家の兄ちゃんにうるせーって怒鳴られた、
さーせんした

— — — — —

P M 11..08

こんなもんかな。

しっかしどうしよ…また日記書こうかな……なんだかんだで楽しい
んだよねコレ。

……まあ明日からでもいいか、とあたしは眠りにつくのだった

終わりっ！

……まあ明日からでもいいか、とあたしは眠りにつくのだった

終わりっ！

game

――――SSS部室（以後戦線本部）

入学式から10日……ゆりの召集命令に戦線本部内はピリピリとした緊張感に包まれていた。

既に主要メンバーはこの場所へ集結している

……でも光とか奏がいないな……生徒会忙しいのか？

ゆ「遂に今年もこの時期がやってきたか……」

岩「何？ なにか始まるの？」

天使の猛攻が……ってのが一瞬頭によぎったけど気のせいだろう

ゆ「运动会よ」

入「……それがどうかしたんですか？」

召集命令となんの関係があるのか、と入江が疑問の声をあげる

――この学校は進学の道を選ぶ生徒も多く通うことから、運動会等のイベントは三年生の部活引退前のこの時期に極力詰め込んでいる

……しかし入学してこんなにすぐ運動会か……

――もちろん新入生を早く学校に慣れさせる、という目的も含まれているが……

ゆ「……………組み分けは三年生の代表者2名による取り合いよ。じやんけんで勝った方から1人ずつ交互に延々と選んでいくわ」

関「……………ダルいつすね」

ちなみにこの方式、何代か前の生徒会によって決められたものである。

能力のわからない一年等は待ってる時間がとても長くて退屈極まらない事で有名。

……ってそんな事どうでもいい

岩「面倒だけどそれがどうかしたのか？」

ゆ「せ、戦線部員として活躍を祈るわ、という事を伝えたかっただけよ？やるからには全力を尽くしなさい、という事を！」

高「個人MVP、と言いましようか大活躍した個人の所属する部活に対して部費が支給されるのです」

遊「そのせいか毎年組内でも熾烈な争いが繰り広げられますね。

怪我人は毎年二桁は常識ですし」

…ここ本当に公立校だったよな？

藤「要は大活躍すれば打ち上げが豪華になるっつーわけだ」

ゆ「……まあいいわ。やるからには全種目一位をとる気で頑張るなさい

豪華な飲み会が私達を待っているのだから!!」

「「「「「おぉー!!!!!!」」」」」

ゆ「……と、言うよりね。みんなコレ見てくれる？」

そういつてゆりが取り出したのはSSSの制服である

日「おぉー懐かしいな！作ったのか？」

ゆ「ええ……作ったから部費もうないのよ」

大「それってつまり……」

ゆ「そう、活躍出来なきゃ打ち上げも無しよ……」

だからみんな死ぬ気で戦って戦って、死になさい。みんなのアルコールのために！」

グッと拳を握りしめる

そして会議はそんな高校生としてはいかなげな挨拶で幕を閉じたのだった

――――体育館

同日、放課後。

関「そして組み分けの日、私達ガルデモは何の因果か組み分け帽子によってバラバラの組にわけられたのです。」

岩沢さんはグリフィン○ール、賢いあたしはレイブンク○ー、地味なみゆきはハッ○ルパフ、凶悪、邪悪の代名詞なひさ子さんはス

リ○リ…って痛い！痛いです！」
ひ「いきなりわけのわからない事始めてんじゃねーよ……」

……と、

関根がアホな事言っているうちに男子の組み分けが終了したようだ

リーダーは白組は光、赤組は音無……

組員は……と、白組は藤巻、松下、大山、TK……赤組は日向、野田、高松……ああ竹山もか

岩「綺麗に分かれたな」

ひ「だな」

次は女子か……

滝『よっしやあああ！！』

音「あー負けちゃった……椎名か？ゆりか？どっちだ？」

滝『……まさみだ！』

音「なっ!?! んじゃこっちも奏だ!」

— — — — —

……………って感じに、最初なんか相変わらずのバカなやりとり（ちなみに直後同じ組の男子から2人とも袋叩きにされてた）があったけど……

白組はあたし、ひさ子、椎名……赤組は、奏、ゆり、関根、入江、遊佐と決まった

— — — — — 白組本部

香「……ゆりも奏もあっちじゃないか! 女子戦力は圧倒的に低いぞこっちは!」

滝「む……まず落ち着け、久しぶりの登場なんだから……」

胸ぐら掴むのは女子としてどうだろうと思うよ?

香「……岩沢と言ったか、そんなに戦力になるのか？」

岩「いや……椎名やひさ子はともかくあたしは……」

そう、香織は知らないだろうが椎名はかなり戦力になる！抑えられなければ完全に負けだったろうな……

藤「いいじゃねえか

なんだかんだでいつもこいつはやってくれてんだからよ」

……まさみは完全に私欲だが。

藤巻……お前だけだよ俺の味方は……

松「……藤巻、お前ひさ子がいるから文句を言わないだけなのではないのか？」

藤「……さ、さて早く練習しようぜ」

香「……ったくこれだから男どもは……」

……とそんなこんなで組み分けも終わり練習が始まったのであった
……

Addicted To You

……せんせー

僕たち生徒一同はー 本番3日前から始まった練習の成果を十二分に発揮しー

自分自身の勝利の為に、全力でプレーする事を誓います
生徒代表ー滝沢 光ー！

ぱちぱちぱちぱちぱち

岩「アイツは真面目にやる気あんのか？」

入「……今更ですよ岩沢さん」

そりゃ高校の運動会だし見にくるような親とかあんまりいないだろうしけど先生とか気にならないのかな……

『まさみー頑張れよー!!』

……聞き覚えのある声だがあたしは振り向かない

関「……いいんですか？」

岩「……いいよ」

……加えるなら来るような親も居なくはないんだからもう少しでも

……

というかお父さん今日仕事じゃなかった？

・

・

《まずはプログラムナンバー1番、障害物競争です》

滝「俺は二組目……って痛い、痛いって」

柔軟するからってこうして押してるわけだけど……光めちゃくちゃ体固いな……

直「滝沢さん、僕の活躍をご覧ください」

直井……いたのか。すっかり忘れてた

滝「おー、頑張れよー」

直井は一組目らしい……他のメンバーは日向に大山、野田か

直『

……さあ、ポゴスティックの有能さに気付くんだ。

ホッピングの楽しさを知ってみるがいい……』

日「おお！？ポゴスティック……。

跳ねれる……跳ねて跳びまくれる……！」

野「最高だっ！！走るよりも楽しいに違いない！みなぎってきたぜ！！！」

……

……結果だけ言うと直井、大山の順にゴール。日向と野田は平均台の上にホッピングで飛び乗って、滑って落ちて台に腰を強打して医务室に搬送された

岩「……いいのかあれで」

滝「目的の為に手段を選んではいけない……仕方なかったんだ」

岩「や、戦線で仲間割れしてどうすんだよ……」

滝「……戦線以前に俺は組頭だからな

ところでまさみも柔軟した方が良いんじゃないか？」

岩「ん？ああ……そうだな」

そういつて座ってるあたしの足側にきて……

……

岩「……背中押す方が楽じゃない？」

両足を持ち上げて胸の方に押してくる

滝「いやこっちの方が目の保養に……

おまえによし 俺によし うん、よ」

岩「まずその卑猥な歌を止めろ」

……太ももにあたる手の動きがいやらしく感じてしまうのは気のせいではないと思う

滝「俺と違ってまさみは体柔ら……ぶべらっ！！？？」
バキッ！！と目の前の光の首が消えた、ように見えた

ひ「さっさと走れってんだバカヤロー」
滝「…ハイ」

—
—
—
—
—
—

滝「…クラクラする、地面が揺れる」

ネットをくぐって…残るはパンを食ってゴールへ駆け込むだけだ
……

しかしこんなフラフラな状況で平均台とかよく渡れたものだ……
ツクソひさ子のやつ久しぶりに手加減無しできたぜ……
順位も三位確定じゃないか……？あーカッコわりい……

藤「おい滝沢！こっち見ろ！」

……んだよ、こっちは疲れてるっちゅーに……

………

ラヴィ。

—
—
—
—
—
—
—
—
—
—

岩「ほひ、ふひはひ。はんはほへは

(おい、藤巻。なんだこれは)」

なぜあたしにパンをくわえさせるんだ

藤「まあ見てろって……来るぜ」

来るって何が……（バッシュ！）

……振り向いた瞬間、一位独走中だった椎名まで追い越してきた『何か』が目の前に現れたかと思うと、パンを奪い去っていった……

――――昼食

結局午前中、目の前の”下心ダシ夫”は終始あのペースだった。

……藤巻やひさ子もスゲーって感想言うばかりじゃなくさ、毎回付き合わされるあたしの身にもなって欲しい。

でもこんな感じだし全体的には楽勝かな？って思ってたら直井はあの後音無に怒られてフツーにやったから？出る競技全部日向達にボロ負けしてたし……結局マトモにとれたのは男女騎馬戦（光や松下、TK。女子は椎名や風紀委員の彼女が凄かった、あとひさ子も）だけだったと思う。

……何がいいたってつまり点数的には負けてるわけだ

赤組陣地ではゆりが高笑いしていた

ゆ「この調子なら勝てる！やるじゃないあな達！こんなフェアによよ？滝沢君の思うままにならないことなんてかつてあったかしら！いい気味ね！オーホッホッホッホッ……」

奏「ゆり、悪役みたいよ？」

音「というかデジャヴを感じるんだが」
つーかそういう事言うとなんか負ける気しかしねーんだが……

音「残りのなんだっけ？」

日「あー……応援合戦と、借り物に……リレーだな」

……借り物だって何故か高得点なうえに運絡むからな……

だが周りを見渡してみるとゆりを中心に既に買ったようなワイワイ

ムード……

(……勝てるんだろうか)

——
——
——
——
——

《次はプログラムナンバー10番、借り物競走です。出場する生徒は……》

というか高校にもなって借り物競走とかなんでプログラムに入ってるんだろう……

一組目

岩沢、ひさ子、関根、入江

関「あの2人絶対話し合って決めてますよね？」

入「でも負けませんよ」

まあ借り物だしな、別に変わらないだろうし……

さっきからの流れから少し嫌な予感がしたがスタート位置について始まるのを待つ

《位置について、よい……》

パァン！！という音と共に4人は紙の置いてある中間地点へ走り出す。

うち3人はトントン、といった感じだが1人、ひさ子は抜け出していた。一番に中間地点にたどり着くと近場にあった紙を開く

ひ「何々……『COUNTDOWN TO EXTINCTION』

……なんだこれ？」

ひさ子が首を傾げていると岩沢も遅れて到着する

岩「ああ、メガデスのアルバムじゃないか。あたしのバックに入ってるから持ってきたよ」

ひ「お前がメガデス聞いていることに驚きだよ……つかなんで持ってきてんだよ……」

岩「光から借り……っていいから早くいかなきゃ」

そう言ってあたしも紙を開く

だってマーティのリフとか……くるじゃないか

まあいい。えっと……『蜚』

ひ「……頭おかしいんじゃないか？この時期に、というか借り物で蜚持ってくるアホが何処にいるんだ」

岩「いや、ひさ子一緒に行こ。LOST IN TIMEの蜚も確かバックに入ってたハズだし」

ひ「あんのかよ！ヘビメタの後にロキノンとか音楽性幅広過ぎるっつーか統一性無さすぎるぜ……」

岩「今度一緒に光んち行くか？TSUTAYA並だったぜ？」

ひ「いや遠慮しとくわ……」

……そうか。まあいいや、今はひさ子と陣地へ向かって走らなきゃ……

結局1分後、ひさ子と一緒にゴールしたんだけど……

関「お疲れ様でしたー」

入「お疲れ様です」

ゴールには2人の姿があつた。

岩「負けたか……」

関「いや、あたしらリタイヤです。」

……2人の話を纏めると、関根の紙には『彼氏』と書いてあり、関根は泣きながら『いねーよ!!』と地面に叩きつけたそうで、入江の紙には可愛らしい字で『麻婆豆腐』と書かれておりこれまた当然無理だね、とリタイヤしたそうだ。

……この学校は競技を真面目に行う気があるのだろうか（後になつて聞いたが生徒会が用意全般を行っていたらしい）

— — — — —

関「酷い目にあった……音無先輩も日向先輩も気をつけなよ？」

奏「結弦、頑張って」

……借り物の紙は滝沢と奏が用意した物だし不安に思っていたがまさかこれほどとは……

つかアイツ絶対最悪してんだろ。麻婆以外ならあっちの2人しか持つてこれないもんだっかし

奏「大丈夫、今度は簡単なものばかりだし問題ないはずだから」

奏が言うなら……

音「……麻婆はないよな？」

一応聞いておいたが『ないわ』と言っていたし大丈夫だろう……よし、やるか

二組目

音無、日向、香織、藤巻

音「そういや日向お前腰もう大丈夫なのか？」

日「おう、もう完全に復活だぜ
一位でゴールしてやんよ！」

……

藤「……またそんなこと言っちゃもうと……」
香「音無……お前も頑張れよ……」

相手にまで慰められたしな……

《位置について、よいい……》

パン！

日「よっしやあ！」

4人の中で抜け出したのは、やはりというか日向だった
そしてそのまま紙を拾い上げて開く、と日向が固まる
何事だと思って見てみると……

ユイ☆にゃん

の文字。

藤「……ほら、行ってこい。俺は『組頭』か」
香「よくわからんが頑張れよ、私は……『あたり、ゴールへ』
……悪いな」

日「なんでこんながあるんだよ!! why!？」

親友の不幸を横目に見つつ俺も紙を見る

……

音「そんなのってねえよ……ねえよ……!!」

『初音』……!？」

奏えっ……!!

――――

ユ「岩沢さんお久しぶりです☆」

岩「ユイ!？」

結局あいつら2人が帰って来たのは一時間程経ってからだった。
日向がユイを負ぶさって来た時はビックリしたが……

話を聞くと入院しているそうだけどもうすぐ退院出来るそうだ

……よし、ユイと一緒にやれるなら演奏にも幅が出てくる、入院中も練習してたって言ってるから退院したら早速……

音「……で、どう、なったんだ？」

初「……急にどうしたのお兄ちゃん？」

ん？後ろに……妹か？を背負った音無が疲れて息も絶え絶え、といった様子で聞いてくる

岩「ああ……あたしらが勝ったよ？」

お前らが帰って来ないからゆり達苦戦してたし」

日「こちとらわざわざ病院までいったのにコレかよ!」

ユ「ひなっち先輩カッコ悪いですね」

日「この口かそういう事いうのは〜!」

ユ「いひゃい、いひゃいです!ギブギブ!」

音「まあでもどうせ戦線の誰かがMVPとったんだろ？」

……

岩「……………ああ、女子は椎名で男子は光だ……………」

日「なんで今間があったんだ？ 万事OKじゃねーかよ」

岩「ああ……………あいつら、兼部してたって知ってた？」

—
—
—
—
—
—
—

今聞いた話を要約すると、椎名は部費の大部分を手芸部に、滝沢に至っては麻雀、戦線はOで今年作ったGDMFC（ガルデモファンクラブ、顧問不在のため同好会扱い）に全振りしていた

副会長だつてのに俺はそんなのあったことも知らなかった上に、設立して日も浅いのに現在部員100人強のマンモスクラブに成長し、戦線メンバーからも藤巻、高松、松下、遊佐、チャーらが所属しているそうだ

岩「：んじゃあたしらも打ち上げ呼ばれてるからいくけどさ

ゆり達によろしく」

ユ「んじゃあたし達も行こうか初音ちゃん」

なんだって!？」

初「ユイにゃんさんに誘われたから行ってくるねお兄ちゃん」

日「俺もFC入ってるからな：じゃあな、親友!」

音「奏がいてくれたらさ、こんな世界でも、俺は、寂しくないから

……

前にも言ったかもしれない。俺はお前と一緒にいたい。これから先も、居続けたい」

奏「結弦、元気を出して」

奏……お前は一緒に……

奏「悩みがあるなら今日はガルデモFCの打ち上げがあるから明日聞いわ」

音「ず、ずっと……、ずっと一緒にいよう……!」

奏「うん。離して結弦」

音「愛してる。奏……!」

奏「うん。すごくありがとう。
だから離して?」

音「かなでえ……っ!」

奏「愛してくれて、ありがとう
だから離して?」

音「消えないでくれっ!

奏……かなでえ……!」

そんなのってねえよ……。

ねえよ……！

死にきれねえよ……！！

奏……！！

Wait & See

――――

放課後、関根がなんか甘いもの食べに行きましようよ、と言って……ひさ子も入江もユイまで行くって言うもんだからあたしも行くことにした。

岩「……その代わり明日は練習するからな。いつもの2倍、4時から8時までだ」

関「えー……マジですか」

岩「関根……今日だってあんたがいつも間違ってるよ練習しようとしてたんだからな？ いいか、お前はいつも」

関「わーわー！ 今日くらいストップ、ストップ！ 甘いもの食べて思考停止しましょう？」

……そんなつもりであの歌詞考えたわけじゃないんだけどな……

岩「で、何処行くの？」

ユ「えっとですね、ひなっち先輩から聞いたお店です。戦線の男子もよく溜まり場にしてるお店だそうで……」

それは気の毒な店だ、と思った。

あんなにアクの強い客ばかりの相手をしなければならいなんて……

ひ「岩沢……お前なんかすげえ失礼な事考えてないか？」

岩「……………いや、考えてないよ」

入「だいぶ間がありましたね……」

入江も苦笑いしている

……いや、だってそうじゃないか

そんな事を言いながら歩いているうちにやがて一件の店の前に着く

ユ「ここです！」

……？

喫茶店……いや、というより……

ひ「……居酒屋じゃねーのか？」

ユ「んと…昼は喫茶店、夜は居酒屋といった感じなんだそうです」

なんだそれ…

岩「……まあ入るか」

ガチャ カランカラン

とカウベルが鳴ると同時に聞き覚えのある声。

滝「いらっしゃ——うお、まさみ！？ いらっ……」

ボタン、ビタッ

ドアを閉めると同時にドアの向こう側に何かが勢いよくぶつかる音

が聞こえた

ひ「どうした岩沢？」

岩「……いや、何時も通りだよひさ子
どうもしてない」

……ただまさか会うと思ってなかっただけで。

深呼吸。

よし。

ガチャ

滝「いらっしやいませ、ま——」

ボタン。

閉める、

振り返る

帰ろう。

それが一番いい。

ガチャ

ゆ「あらガルデモ勢揃いじゃない。あなた達も来たの？」

ドアを開けてゆりが出て来る……って達？

チラッとドアの後ろを見ると一般客に混じって日向や音無もいる

滝「……なあ、さっきからそこまで無視されると流石に悲しいぞ」

岩「ああ、悪い……」

関「いやでもそのエプロン姿はどうかと思いますよ？
しかもフリル付きとか犯罪者です」

そう、それが言いたかった。

暑いからだろう着ているランニングシャツとハーフパンツにエプロン（フリフリ）……正面からじゃ（何処から見てもだろう）どう鼻
屑目に見ても変態以外の何者でもない

滝「いやぁ洗濯したらコレしかなかったんだわ

それはそうと、んなとこで突っ立ってないでさ、汚い店だけど入れ
よ」

岩「あ、ああ……」

頷いて足を踏み入れようとした時奥から声が聞こえた

『汚い店で悪かったな！』

……というよりずいぶんと綺麗な娘さん達じゃないか。俺の店にも久しぶりにこういう客が来たな』

恐らく店主なんだろう、カウンターの向こう側で元気な男性がこっちを見て笑っている

ゆ「ちょっと、私は綺麗な娘さんに入らないのかしら？」

『いやいやそうは言っていないぞ？おじさんはこういうの新鮮だなんて話をしてるだけだ』

滝「いいからさっさと注文されたもん作ってくれ親父」

親父？

岩「……光の？」

滝「ああ、秋生さん並に若いだろ？」

ひ「いや誰だよ」

と、ユイが後ろから顔を出しておじさんに叫ぶ

ユ「おじさん、とりあえずいつもの！」

父「ユイちゃん……今日は客なのか？」

その言い方だといつもは客じゃないみたいに聞こえるんだが……

ユ「大丈夫です、ひなっち先輩が払ってくれます。今までのツケもそっちに！」

父「そうか、甲斐性のある彼氏でよかったな

という事でほら日向君、コレ」

日「俺のいないとこで何勝手に決めて……ってなんでこんなにたま
ってんだよ!? why!?!」

0が4つ書かれた紙を渡されて背中から汗を滝のように流しながら日向は叫ぶ

そしてユイを捕まえるとガツチリ関節をキめにかかるのだった

ユ「コブラは痛いですってええええ!!!!!!!!!!」

[illegible]

滝 「まあ座って待っててくれ」

音「……なあ岩沢の椅子だけクツションあるのは気のせいかな？」

滝「H A H A H A何を言っているんだ偶然だよ」

軽く質問を流した後注文を受けたケーキやらを取りに行こうとする
と…

直「ああ、滝沢さんが自ら手を下すまでもありません
こんな愚民どもには全てセルフでさせれば良いんです」

いやそれ店としてアウトだからな

いやしっかし…注文の組み合わせを見ると自分の働いている
場所が何処かわからなくなってくる

滝「奏、今何時だ？」

奏「5時30分よ。暗くなってきたわね」
ケーキとジュースの組み合わせの中に異色を放つ麻婆豆腐の注文、
無論それだけではない

滝「まさみ？お前も夕飯済ませるのか？」

岩「ん？ちよっと小腹がすいちゃってね」

注文は安定のうどん…うどんとモンブランと一緒に頼むやつなん
て日本全国探してもコイツだけだと思う

岩「——あと、店員のスマイル。あんた疲れた顔してるからね」


~~~~~!!  
バンバン!!

入「滝沢先輩……悶えて机叩かないでください。岩沢さんもしてやったり、みたいな顔しない」

いやだって、ねえ？

えっへっへ……

直「あ、それじゃ僕もスマイル1つ」

滝「……………」

直「何か言ってください」

滝「すっこんでろ？」

直「ええ！？何この差!？」

まったく、流石恋人といるとき会いたくないやつランキング上位ランカー（独断と偏見による）は見事にぶち壊してくれる……

――――30分後

ユ「あーお腹いっぱい」

関「もう食べられないや」

ひ「お前ら：2人でホールケーキ食いきったのかよ  
そんなに食ったら太るぜ？」

岩「ひさ子は栄養が全部胸に行くから関係ないだろ」

見ていて腹立たしく感じる程の親友の胸をフォークでつついてやる

ひ「ひゃ！？や、やめろ岩沢」

ユ「……ちつくしょー！」

ここか！ここがええんか！？」

ひ「っだぁ！お前ら離せ！」

関「ユイ！そこだよっちゃんえ！」

まな板代表ユイも憎しみをこめて参戦、ちよっとしたイタズラは泥  
仕合へと変化しつていく

――――

父「……いいなあ」

『だなあ……』

『やっぱり若い娘さんがいると場が華やかだなあ  
そこのキミらおじさん達と飲まないか？』

滝『人の女に手出しちゃいけないよおっちゃん  
……奥さんに言いつけるぜ？』

酔っ払いどもの席にビールのジョッキをドカッと置くとそう言うってやる

『うははは！そいつぁ勘弁だぜ光君』

『というかやるもんだねえ、どの子だい？』

『隠すな隠すな。大丈夫、俺の口は堅いぜ？』

なんで語尾が疑問系なんだろうな？

中学生かこのおっさんどもは

滝「いいからさっさと飲んで寝ちやいな！」

ささやかな一杯のつもりでよった居酒屋をハンバーガービルに変えてくれようか

『田中さんあの赤髪の子かわいいと思いませんか？』

『だなあ、でもピンクの子も…』

よし、※す

—  
—  
—  
—  
—  
—  
—  
—  
—  
—  
—

滝「ようやく帰ったか……」

おっさんどももようやくいなくなって店内も静かだ

Z  
Z  
Z  
……

あいつらも騒ぎ疲れたのか全員寝ているようで……

……

……

どうする……？

言うなれば目の前の禁断の果実に手を出すかどうか。

無論バレればどうなるかは火を見るより明らか、いい例はアダムとイブ。

『そういう事』を行えば、きっと自分は『神様』に叱られてしまうことだろう。

ああ、けど、イタズラしたい。

あの赤い髪に手櫛を入れて悦にひたりたい。

それはとてもとても気持ちのいいことなのよ。……青い髪の少女が脳内で囁く。

うん、幸せな気分になれることは間違いない。

「ん……」

狼がどんな事を考えているかも知らず、少女は気持ちよさそうに眠っている。

そして口元からは微量の涎。

……………ゴクリ

滝「い、いやーアレですな。オチどうしようとか考えてたけどここはやっぱりクリスマス（Symphony参照）の時のように、イチャイチャエンドで終わらせるべきだよね、うん」

そつと赤い髪に手を伸ばす

……ああ、良い。パーフェクト。これに勝る赤はこの世になし。

そう、表現するならばそれはほとぼしる情熱、あるいは生命の鼓動だろうか

ずっと昔から求めてきた究極がここに――

ひ「……楽しそうだな」

滝「ああ、楽しい」

ひ「ったく、お前の頭の中どうなってんだ？」

滝「ん？ 心の中見てみるか？ バラ色だぞ」

ひ「いやいやドピンクの間違いだろ？」

滝「酷いな、まるで俺の頭の中が性欲まみれみたいじゃないか」

ひ「違うっていうのか？」

滝「心の中にはまさみしくないから赤だけだぜ」

ひ「……突っ込まないからな」

滝「ああ、確かに俺も今日は突っ込まないな。こっちだとまだ未経験だし初めてはもうちょっとムードある時にしてやりたい」

ひ「……お前は何を言っているんだ？」

滝「いや、だから突っ込まないっていう事をだな……」

ひ「誰もそんな事聞いてないからな、というか聞かせるな……！  
ったく昔より酷くなってるぜ……」

滝「男子、三日会わざれば何とやらだな」

ひ「それは良い変化に使うもんだからな。

……昔が恋しいぜ、ずっと昔のまんまの方がお前の頭も幸せだったんじゃないか？」

滝「ううん……しかし口淫矢のごしと言うしな」

ひ「言わねえよ！確かにお前の口は淫らと表現出来るだろうけどそんな卑猥なことわざがあつてたまるかよ！」

滝「お前の方がいやらしいぞ、コウインヤノゴトシをどう受け止めたんだ？」

ひ「これ視覚媒体だからな、しらばっくれても無駄だから……！」

ん？



振り返る

滝「うお！ ひさ子いたのか！？」  
ひ「気づくのがおせえよ……！」

ひさ子が仁王立ちで立っていた。  
ちなみに彼女の声は震えていた。その理由は怒りだろう。  
顔に青筋も立ててるし。

さつまずい。

禁断の果実に手を出そうとした所を、神様に見られてしまった……。イチジクの葉で気づかれるというレベルではない、現行犯だ。

ひ「……長ったらしく変態さ見せつけやがって……」

今まで読んできた人達をドン引きにさせる内容だったぜ?、と

滝「お、落ち着けひさ子!」

ひ「……もう一回向こうの学園行ってきたな」  
グシャ

—  
—  
—  
—  
—  
—

ゆさゆさと誰かが肩を揺らしている……  
岩「ふぁ……」

……おはよひさ子」

ひ「起きた? ホラ、帰るよ」

岩「ああ……そうだな」

くおらお前ら起きろ！

（眠い……）

でもひさ子の声が聞こえる中、あたしはまた眠りに落ちていく

……また来よう

今度は1人で、他に誰もいないような時に……

そしてアイツと……

何があったか知らない無垢な少女はそんなふうに思うのでした。

## 番外編；50の質問＋α

1 あなたの名前を教えてください

滝「滝沢 光、読みはひかるだ」

岩「岩沢 まさみ」

2 年齢は？

滝「コレ何時で言ったらいいだろう？」

岩「物語の進行に合わせていいんじゃない？あたしは16」

滝「了解、18だ」

3 性別は？

岩「女だよ」

滝「見て分らんか。男だ」

岩「まあ文字しかないからな……」

滝「しー！！」

4 貴方の性格は？

滝「こういうのって言っちゃうと自慢みたいに聞こえちまわねーかな……」

岩「言っちゃえばいいじゃない。アホだって」

滝「ひ、酷え……じゃあまさみは……」

岩「音楽好き、でいいよな。次」

5 相手の性格は？

岩「変態。アホ。後先考えない。優柔不断。普段はアレなのに肝心なところはいつもあたしから……」

滝「ストップ、ストップ！！そこまで！！つか性格じゃないよ最初！！……まさみは優しいよな、うん。後時々凄い天然。」

6 二人の出会いはいつ？どこで？

岩「戦線の本部だったよな」

滝「俺があっちの世界に行ってすぐ、だったな」

7 相手の第一印象は？

滝「ヤツベ可愛い」

岩「……ゆりから変な新人だって聞いてたけどそれよりあの時は練習の事考えてたな」

滝「酷いなあ……」

8 相手のどんなところが好き？

滝「どんなところって……全部好きだし」

岩「そ、そのコメントの後であたしは何を言えればいいんだ！？」

9 相手のどんなところが嫌い？

滝「強いて言えば時々ジト目で素直になってくれないところかな？  
いやあそこも好きなんだけど」  
岩「TPOをわきまえない所」

10 貴方と相手の相性はいいと思う？

岩「ああ、いいと思うよ」

滝「だよねだよね！」

岩「光のギターもキーボードも歌あわせやすくて凄くいいからね」

滝「あ、そういうこと……なんか望んでた答えと違う……」

岩「……何故悲しむんだ？」

11 相手のことを何で呼んでる？

岩「ひかる」

滝「まさみ」

12 相手に何て呼ばりたい？

岩「別に今のままでいいよ」

滝「同じく。一日だけならご主人様とかったのも——」  
岩「……はあ」

13 相手を動物に例えたら何？

岩「犬だな。子犬。構って構っていつも来る」

滝「crow songとか歌ってるし昔はカラスだったよね、孤高ってオーラ出してたし。今は俺がいないとさびしくて死んじゃううさぎ」

岩「アホ……」

14 相手にプレゼントをあげるとしたら何をあげる？

滝「ギターのピックとか……？」

岩「お菓子とか作ってみたいね」

15 プレゼントをもらうとしたら何がほしい？

岩「さっき言ったようにピックとか消耗品はありがたいね。……別に女の子が喜ぶようなものを貰っても嬉しいんだけど」

滝「まさみ！まさみが欲しい！！」

岩「ば、バカ！！腰に手を回すな！！」

16 相手に対して不満はある？それはどんなこと？

滝「不満……はないな」

岩「働き過ぎてトコだね。生徒会にバイトにそれで夜中に出歩いて……体壊すよ？」

滝「心配してくれてたり？」  
岩「あたり前じゃない」

17 貴方の癖って何？

岩「つい音楽の事考えてたり、ってのはあるな」  
滝「ついまさみのことを考えちゃうことかな？」  
岩「お前……恥ずかしくないのか？」  
滝「全然？」  
岩「……………」

18 相手の癖って何？

滝「オーケイ、とか了解、とかよく言うよね」

岩「それは口癖でしょ？」  
……「そーいゝふと見たらいつもこっち見てニヤニヤしてる時あるよな」  
滝「む」

19 相手のすること（癖など）でされて嫌なことは？

岩「公衆の面前でそういう事するのは……な。人前ではちよつと困る……」  
滝「まさみが望むなら何をされても」  
岩「んじゃガムテープで口をふさいでいいよな？」  
滝「ごめんなさい」



20 貴方のすること（癖など）で相手が怒ることは何？

滝「なんだろう……いきなり抱きつくこととかか？」

岩「……自覚してるなら止めろ」

滝「止めてもいいのか？」

岩「……！！」

滝（可愛い……）

21 二人はどこまでの関係？

岩「……言わない、言わないぞ」

滝「お察しください」

22 二人の初デートはどこ？

滝「あれじゃないか？ほらユイの……」

岩「そうだね……全然それっぽくなかったけど」

23 その時の二人の雰囲気は？

滝「……俺ヘタレ？」

岩「無計画だったよね……」

24 その時どこまで進んだ？

岩「どこまで？グラウンドまで……最後は食堂か？」

滝「いや距離とかじゃなくて……あー……婚約？」

25 よく行くデートスポットは？

滝「そもそもあんまり行かない……って改めて考えるとダメだなあ俺……」

岩「じゃあ今度二人で行かない？」

滝「もちろん」

26 相手の誕生日。どう演出する？

滝「そりゃあもうクリスマスのシミュレーション通りに……」

岩「お父さんが許してくれるかな……」

滝「……やっぱ家に突撃して一緒に祝うよ」

27 告白はどちらから？

岩「どっちだっけ？」

滝「ほらライブの前キスしてそのまま……告白はユイの時のじゃないか？」

それかいつも好きだって俺が言ってたし」

岩「そういうのはノーカン」

28 相手のことを、どれくらい好き？

滝「言い表せない位。さあゝて、まさみの答えが知りたいな」

岩「……………人間の中では一番」

29 では、愛してる？

岩「あ、ああ…………」

滝「愚問だね」

30 言われると弱い相手の一言は？

岩「言われるとっていうより言い方かな。時々真面目に言われると頭が回らなくなるんだ…………」

滝「だめか？っていうアレは反則だ。なんていうかもうはぁーんっとなる」

岩「アホ」

31 相手に浮気の疑惑が！ どうする？

岩「…………ないだろ、信じてるよ」

滝「こっちもそういう輩は近づこうとする前から教育してやってるからな」

岩（……何をしてるんだ？）

32 浮気を許せる？

岩「やったら、か。考えた事もなかったけど……わからない。失恋の歌でも書くかもしれないし」

滝「とりあえず浮気相手をめる、生まれてきたことを後悔させて、まず眼球をえぐり——」

岩「……しないけどさ、犯罪者にはならなくてくれないか？という  
かまず、って……」

33 相手がデートに1時間遅れた！ どうする？

滝「というか5分遅れた時点で家まで迎えに行くし」

岩「夜中まで時間きっちり？に来るのに1時間遅れるなんて心配になるね……あたしも連絡とるか探しに行くと思う」

34 相手の身体の一部で一番好きなのはどこ？

滝「指、かなあ。ギター弾いてるから指の腹はちょっと堅いけど細くて綺麗。」

あと唇、変な意味じゃなく歌ってる時とか凄く色っぽい……2つ言  
っちゃった」

岩「目元だね。いつも光があるっていうのかな、元気がでる」

35 相手の色っぽい仕種ってどんなの？

滝「ライブ後とかさ、汗で濡れた髪を払ってるとこ」

岩「ギター弾いてる時……一生懸命やってる姿は別人に見えて焦ったことがある」

滝「ああ、あの時のほ可愛かったね」

岩「み、見てたのか!？」

36 二人でいてドキつとするのはどんな時？

滝「いつも、じゃなくて……そうだな、デレた時っていうかまさみの方から好きだとか言ってきた時」

岩「突然、だったな。抱きしめられたとき。しかもいつもと声色が違つてて心底焦ったよ……」

滝「ああ、あのときのまさみは……」

岩「それも覚えてるのか……?」

滝「全部覚えてるよ」

岩「っ……!!」

37 相手に嘘をつける？ 嘘はうまい？

岩「言ったら何でもコロツと信じそうだな」

滝「まさみもだろ？俺なら隠し通す自信もあるよ」

岩「それがウソなんじゃない?」

滝「ホントだぜ？だってまさみは俺と関根が昨日何してたか知らないだろ?」

岩「な……!!」

……何したんだよ……?」

滝「な、涙目になるな!冗談だって!」

38 何をしている時が一番幸せ?

滝「こうしてまた一緒にいられるだけで幸せだな」

岩「……二人っきりで抱きしめられた時」

滝「やっぱり嬉しいんじゃない」

岩「……バカ!」

39 ケンカをしたことがある?

滝「……あっちの世界で一回、まさみの部屋のプリン食べた時……」

岩「あれはあんたが悪い。……2人で食べようと思ったのにひさ

子と2人で食べちゃってさ……」

滝「本当にごめん……」

40 どんなケンカをするの?

滝「3日間ずっと無視された」

岩「……正直やりすぎたかな」

41 どうやって仲直りするの?

滝「抱きしめながら謝った」

岩「そう、だったね……」

42 生まれ変わっても恋人になりたい？

滝「また人間に生まれ変わったなら、絶対探し出す！」

岩「あ、ありがと……」

43 「愛されているなあ」と感じるのはどんな時？

滝「なんだかんだで一緒にいて笑ってくれてる時」

岩「……あたしも同じようなもんだよ。いつも側で笑ってくれてる時」

44 「もしかして愛されていないんじゃない？……」と感じるのはどんな時？

滝「……遊びに来たと思ったらCDばかり漁ってる時……いや、らしいっちゃらしいんだけどさ、ちょっと寂しい」

岩「……ごめん。」

あたしは……いつもがいつもだから構ってこないとちょっと不安になるかな」

滝「四六時中ずっとの方がいい？」

岩「ホドホドにだ」

滝（……どれくらい？）

45 貴方の愛の表現方法はどんなの？

岩「……………キス、かな」

滝「いつかラブソングも聞いてみたいけどな」

岩「なっ……………!!」

滝「俺は抱きしめたりってのが一番落ち着くかな」

46 もし死ぬなら相手より先がいい？ 後がいい？

滝「先。見取らせるのは可哀想だと思うけどさ、俺もまさみを見取るのはやだ」

岩「あたしだっていやだよそんなの……………」

滝「難しいね」

47 二人の間に隠し事はある？

岩「あたしは無いと思うけどさ……………光あんた本当に昨日、関根と何もしないんだな？」

滝「だから何もしてねえって!!」

……………とかまさみも俺に隠し事してるじゃんか」

岩「何をだよ？」

滝「スリーサイズ……………ってギターはやめっ!!」ガイーン

48 貴方のコンプレックスは何？

滝「劣等感か……………今はないな、体も鍛えたし」

岩「ひさ子みたいに大きくない」

滝「……………」



49 二人の仲は周りの人に公認？ 極秘？

岩「こいつは隠す気もなかったからな。公認だ。強制的に」  
滝「嫌だったか？」

岩「嫌ならとっくにあんたから離れてるよ」

50 二人の愛は永遠だと思う？

岩「あの世界もそうだけど永遠に変わらないものなんてないと思うんだ。けどね、生きている限りは変わらないよ」  
滝「俺もずっとまさを好きでいるからな」

51 貴方は受け？ 攻め？

岩「ハァ!？」

滝「攻め」

52 どうしてそう決まったの？

滝「ここで俺が受けと言って誰が信じる？」

岩「ちよ、ちよっと待って。質問がおかしいよ！？  
残りの質問内容見せ……………（絶句）」

53 その状態に満足してる？

滝「まあ満足だね」

岩「…………残りのは無理だからな！ここで終わり！」

滝「そんなもったいない…………」

岩「うるさい！」

## 番外編；50の質問＋a（後書き）

配布元はこちら。<http://bianca77.easter.ne.jp/100/100|date.html>

後半は……アウト（、；

というか最近コレ見なくなったよね、昔は結構見たのに書いてたのしいんだよこういうのはさゝ

## Goodbye Happiness

――戦線本部前

音無や日向、ゆりを始めとする数人は息を殺して中の様子をうかがっていた：

ユイに至っては目を血走らせながらドアに耳を当てている……  
何故こうなったかというと先ほどから部室内から聞こえる会話のせいである

入「どうかしたんですか？」

関「なにに？　なんかあるの？」

ゆりは口元に指を寄せると喋るな、とジェスチャーし部室を指差す

『……俺、うまく出来るか分からないんだけど……』

『ああ、なるべく…優しく、してくれ』

関「!?!??.」

『んじゃ…：力は抜くんだぞ。痛かったらすぐに言ってくれよ?』  
『あ、ああ…：…』

2人は口をパクパクしてあんたら何やってんだ、といった感じだが、もうお気づきかと思うが無論そんな事はないわけで…：

—  
—  
—  
—  
—  
—  
—  
—

耳かきを彼女の耳の中へ。  
部屋は明るくしてあるし、多分大丈夫だろう。

岩「うぁ……は、入ってくる……」

少しずつ耳かきが侵入していく。  
なるべく痛くないように、慎重に奥へと進めるが……いかんせん初めてなので、勝手がよく分からない。  
もう少し奥へ入れても大丈夫かな？

岩「っ、痛っ……！」

滝「だ、大丈夫か？」

あぁ……本気で謝りたい  
ミュージシャンの鼓膜を傷付けたら大変だから……

……む、大きいの発見

岩「ひ、光……ま、まだ出ないか？」

滝「もう少しだ……」。

まさみは気持ちいいか？」

岩「最初は痛かったけど……変な感じ、でもいいかもしれない」

うーん、もっと上手くやれりゃあなあ……

滝「ん、まさみ……出るぞ」

岩「あぁ、出してくれ……」

バタッ

ゆ「あんた達部室でなんて事を……！」

「ん？」

—  
—  
—  
—  
—  
—  
—  
—  
—

ゆ「……このように弛みきった精神を叩き直すため久しぶりに実践  
訓練を行うわ」

何故だろう、俺は今頭にたんこぶを作りながらゆりの話を聞いている

岩「……実践訓練？」

同じく頭にたんこぶを作ったまさみも理不尽を呪ったかのような目でゆりを見る

ゆ「そう、実戦訓練。」

タマの飛び交う中時にそれをかいくぐり、そして立ち向かって敵を制圧するのよ」

拳を握りしめゆりは力説する。

死んだら生き返る、なんて事はできないこの世界で何をするつもりなのだろうか

音「具体的に何をするんだ？」

ゆ「ドッジボールよ！」

松「それはまさか……！」

日「……明日のクラスマッチの事じゃねーのか？」

ゆ「まあそうとも言わね」

……まあ「球」をよけたり立ち向かったりはするわな

奏「ゆり、ちょっと待って」

滝「『クラス』マッチだからな？」

クラス毎の試合に部活として乗り込もうというのだろうか。  
だがゆりはそれを聞いて顔をしかめる

ゆ「……そこはサプライズって事で『クラススリーエス』として登録しなさいよ。」



何のための生徒会なのよ」

まるで子どもの理屈である。そしてその名称を覚えている人がどれだけいるだろう

音「少なくとも……」

奏「ゆりの為の……」

滝「生徒会じゃないぞ」

岩「……何でお前らポーズとってんだ？」文字にしないと伝わらないような細かい事を気にしてちゃいけないぞマイラヴァー

無駄に自己アピールする会長と副会長2名だった……

ゆ「んじゃエキジビジョンでもいいわ。枠を作りなさい、それ位ならいいでしょう？」

滝「面倒な事を……」

5、6時間を潰してもらって実行するのだ、部活にも影響が出て騒ぐ生徒も出てくるだろう。

ゆりの言うこととはいえ、簡単に決められる事ではない

ゆ「ちなみに駄目だというなら生徒会室のあなたの机の2番目の引き出しの二重底の中をバラすわ」

滝「……っ!!」

……………何故、何故こいつはアレのことを知っているんだ、机のガードは完璧のはずだ。

アレが、アレが俺以外の目に映ったことは無いはずだっ……！

キリキリと胸が痛む

岩「……光、あんた何してんの？」

関「……あの様子はきつと岩沢さんは知らない方がいいような事じゃないですかね？」

………

ゆ「で、返答は？」

ゆりを見るとニヤニヤと、心から楽しむような顔をしていた

滝「……わかった」

――――

胃が痛い。

窓を見ると外は晴れ渡っている、普段は気分のよくなる天気さえも今は鬱陶しい。

藤巻が「そーゆうもん学校に置いてっからだぜ」と漏らす。

椎名が「あさはかなり」と呟く。

大山が「はは……」と同意する。

ああ、胃が痛い。

ニヤニヤしているゆりを照らすかのように太陽はよりその輝きを増す。

もうとつくに夏になってきてるんだなあ……。

明日もまた晴れるんだろうか。

最近梅雨真っ只中だからな……雨は嫌いだ、ジメジメして心までモヤモヤしてくる。

晴れは好きはずなのに……

ああ、それにしても、

滝「胃が痛い……」

岩「…い、大……か？」

だんだんと床が近づいて来たような気がして……結局そのまま床と口づけを交わした

—  
—  
—  
—  
—

ずいぶんと懐かしい雰囲気とする場所だった。

だが意識がハッキリしない、もしかしたら夢でも見ているのかもしれない。明晰夢というやつだろうか、Lucid dream。好きな曲のタイトルにそんなのがあって辞書で調べた事を思い出した。

見渡すと全体的に白い、明るい階段。そう、ここはよくライブをしていたあの食堂だ。

なんだかあの頃を思い出してしまう、そうずっとバカやっていた（今もやっているが）あの頃……………を？

滝「…………？何故此处にいるんだ？」

あの世界？死んだ世界？何故死んだ？そもそも死んだのか？

俺は食堂を飛び出すとすぐその連絡橋へ、いや正確には連絡橋の横に広がる崖へと走り出す。疑問なら確かめるのが一番早い。

もしあの世界なら復活してコンティニュー。

ダッ

跳躍、そして眼下の光景に多少の恐怖を覚える。だが、いや、ああ、もし夢だったら？

滝（死ぬ夢とかだったら目覚め悪いだろうな……）

そんなことを思いながら俺は急激に近づいてくる地面と熱烈な口づけを交わした

—  
—  
—  
—  
—  
—  
—

バッ

「うわっ」

何故か重い布団を跳ね上げて起きるとキリキリと痛む胸。酷い寝汗。白い部屋。そして床には尻餅をつく赤い彼女。

岩「いたた……」

ストレス性の急性胃潰瘍だって……大丈夫なの？」

凄く軽度だから今日帰っていいらしいけど……って  
胃潰瘍で死にかけたのか？聞いたこと無いぞ

滝「ああ……そっちは？」

岩「うん、大丈夫だよ」

で、起きた時に布団に寄りかかって寝ていたまさをはねのけてしまったようだったのでそっちも大丈夫か確認する  
看病してくれていたのだろうか、と時計を見ると7時をまわっている。（後から聞いたが俺の親はまさがいるのを確認するとすぐ帰ったらしい、なんて親だ）

滝「で、結局どうなったんだ？」

岩「ああ、あの後？」

————

滝沢が倒れると岩沢とゆりは表情を一転させ側に駆け寄った

ゆ「岩沢さん、病院に電話お願い」

岩「……了解」

そしてゆりは滝沢の口元に耳を寄せたのち、立ち上がるとこう言う

ゆ「……みんな、滝沢君は最期にこう言ったわ、

『皆、精一杯戦って、勝ってくれ……』と、

滝沢君の最後の意志を無駄にはしていないわ。明日に向けて練習よ！」

「「「「「おおおおお！！！！」」」」」

何故か涙を流して盛り上がるメンバー

滝「うーん……」

苦しそうに呻く滝沢

ひ「いや、殺すなよ」

静かに呟くひさ子 e t c e t c ……

— — — — —

……無論そんな事言った覚えはない、というか原因は貴様じゃ悪魔め

滝「こっちは胃潰瘍で死後の世界行きかけたうちゅうに……」

悪びれずそれすら利用するかあの女は

岩「まあ……元氣出せよ」

応えてはやりたいが、はあ……とため息の一つも出るってもんだ

岩「明日頑張らなきゃいけないんだし」

滝「……………はあ……………」

……天使は何処にもいなかったし

はああああ……

と、また、大きなため息をつきながら胃の痛みを感じるのだった



## Janie Jones

……せんせー

僕たち生徒一同はー 何者かの悪意にも負けず戦いー

クラスの勝利の為に、全力でプレーする事を誓いまーす  
というかみんな頑張れよー

生徒代表、審判長 滝沢 光ー

あー胃イ痛ってー、ッの悪女が……

壇から降りようとするそんな声もマイクは拾っていたが生徒達は  
ぱちぱちぱちぱちぱちぱちぱち  
と拍手を送る

岩「この始まり方にデジャヴ感じんだけど」  
入「ですね」

まあいいや……さて一回戦はどここの組だろ？

滝「棄権したい」

岩「……全力でやるんじゃないのか？」

一回戦は滝沢、日向、香織の所属する3年A組対岩沢、関根、入江、ユイ、椎名の所属する1年A組。

ユ「ゴルフ！！ひなっち先輩覚悟せえや！！」

ちなみに退院したてのユイも編入してきた。ずっと入院してたんだし戦力になるかはわからないけど……というか椎名を除いたらあたし含めて戦力なんてロクにいないんじゃないだろうか

今更ながらひさ子の存在の大きさに気づかされた気がする……

そして日向がボールを持ってゲームが始まった。  
ユ「かかってこいやあひなっち先pひぶっ!？」

日「よっしゃあ！」

岩「うわ、最低……」

日向のやつ思いっきり投げやがった……

ユ「岩沢さん、痛いですう……」

ユイを胸に抱くと日向に刺さる視線、味方からも非難の目が向く。

滝「顔面セーフ。ついでにユイ、やつちまえ」

日向を羽交い締めにしつつ光も言う。審判長、それはいいのか？

日「……悪かったなユイ、すまなかった」

ユ「ひなっち先輩……」

……そう、なんだかんだ言っでこいつらも仲良いしな、ふざけあつて時々傷つけてしまうこともあるかもしれないけど本当は……

ユ「あたしの痛みを知れっ！」  
日「うごっ!？」

.....

全力投球、至近距離で顔面……

ユ「顔面セーフですよね☆」

滝「あ、ああ。」ビシュッ

日「うぼあっ!？」

.....

————

結局あの後日向の顔はそれは酷い事になった（光もドン引きして途中から離れたけど）

まあ試合は椎名が善戦したけど地力に勝る3年に負けてちゃったけど……

ユ「楽しかったですね☆」

関「ユイもやるね☆」

入「そ、そうだね」

ちなみに途中から関根もそれに混ざっていたりしたからか、コイツら負けたのにやたらイキイキした表情をしている

そして優勝はゆりや音無のいる3年B組となったわけだが……  
ゆりが壇上で賞状を受け取るとマイクを手に宣言する

『これより！エキシビジョンマッチを行うわ！』

SSS対……全校生徒！』

……我らのリーダーは頭おかしいんじゃないだろうか

――  
――  
――  
――  
――  
――

改めて見ると壮観だ

酷い戦力差過ぎて笑えてくる

「まあなんとかなるって」と私の親友様は笑い飛ばすがどうなるというんだろう

そして審判役の生徒が笛を鳴らして……ゲームは始まった

関「心配いりませんって。

ギャグシーンですもん」

……?

どうということだろう?と思っていると

光「『かんつうしゅーと』おおおお!!!!!!」

という声と共に投げられたボール、当たった瞬間宙に吹っ飛ぶ一般生徒達……

――――

死屍累々。そう表現するのが一番だろう。

あれほどいた一般生徒は全滅、かたやほぼ無傷で勝利を喜び合う戦線一同。訳がわからない。

戦線メンバーの脱落者は光と関根だけだが、関根はユイが『もろはのしゅーと』と言い投げたボールに巻き込まれた形だし、光もあたしに飛んできたボールを顔面ブロックして撃沈しただけで（妙に満足げな表情を浮かべていた）直接やられたメンバーは0だった。

滝「戦いとはいつも残酷だ、一般生徒達は身をもってそれを教えてくれた……」

岩「いや、綺麗に終わらせようとしてもあんな状況にしたのあんただからね？」

以下本編より長いオマケ

――――生徒会室前

そこには頭にバンダナ……でなくタオルを巻きつけた少女が辺りを見回しながら物陰に隠れていた

♪サツマシーン ユアサツマシーン ユアサツマシーン 灰にな――  
――p!

ポケットから携帯を取り出して開く、飾り気のない携帯には関根、の文字

岩「……なに？」

『マチャミ、生徒会室の中には誰もいないようです。あとその着うたは好きだからって雰囲気壊れるのでやめてくださ――』

通話を切って、サイレントモードにした後ポケットに入れて生徒会室のドアノブに手をかける、鍵はかかっていない。

……まったく誰がマチャミだ。

というかなんであたしがこんな事を……



———

それはクラスマッチ終了後の事だった

関「スネーク」

岩「誰がスネークだ」

関「んじゃ岩ーク」

岩「……誰がポケモンだ」

とりあえずひっぱたいておく。

関「痛い！MOTTO！じゃなくて…

岩沢さん、スニーキングミッションです。MGS、マチャミギアソ  
リッドです。」

岩「……」

頭がおかしいとは思っていたがこうもおかしいと反応にも困るとい  
うものだ。

今日の晩ご飯はなんだろう？と考えていた方がよっぽど有意義だと思  
う。なんだろう？うどんだったら嬉しいんだけど———

関「聞いてくださいよ！」

岩「手早くね」

関「つくう！まあいいです。」

岩沢さんには生徒会のたつきーの引き出しの中身を明らかにしてき  
てもらいます」

岩「やだ」

なんであたしがそんな面倒くさい事しなきゃならないんだ  
結構距離あるんだぞ？

関「拒否はやっ！

岩沢さんだって興味あるでしょう？」

まあないと言えは嘘になるが……

……仕方ないな

岩「……わかったよ、やってくればいいんでしょ？」

——  
——  
——  
——  
——  
——  
——

………なんで引き受けてしまったんだろう？さっさと終わらせて  
借りたCDでも聞こう……

岩「光の机は……これか」

作業に入る前に無理やりつけさせられたタオルも窮屈だし椅子にかける、関根はそれっぽいじゃないっすか！と力説していたが意味がわからない

とりあえず一番上の引き出しから……中身は……本？

『人をおちよくる50の方法』

……どうもアイツのセンスはわからない

ちよつと気になったけど閉めて次の引き出しを開けようとしたとき生徒会室前に人の気配を感じた。

とっさに部屋の隅にあったダンボール箱を被って隠れる。とっさとはいえ何故こんな行動をとったのか自分でも疑問だが。

『誰も……いないな。ふん、まあ当然だろう。神の邪魔を出来る者が存在する訳がない』

話し方だけで誰か特定出来る、というのはいいんだけど何しに来たんだアイツ（ダンボール被って隠れてるあたしが言える立場じゃな

いけど)

『さて、今日は何を持って帰るか……』

盗みか……しかも今日はって常習犯かよ………そういや光がハンカチとかよくなるって言ってたけどまさかコイツだったとは……

『む、これは……滝沢さんのタオル？ふむ……良い香り、だっ!？』  
……気づいたら思い切り頭を蹴り飛ばしていた。そのまま床で寝てる変態め……タオルは……後で処分する、……お気に入りだったのに。

さて、こんな変態はともかくとして二番目の引き出しの中身、いよいよ確かめてみよう。

ガラツと引き出しを開けると中から出てきたのは30×20×10cmほどの金属ケース……キーボード付き。

開けようとしたら『パスワードを入力してくれ』とチャーの声。小さいけど頑丈だ、いっちょ前にセキュリティ、加えて音声付き。生徒会予算？それとも一生懸命バイトしてこんなもん作ってたのか？どっちにしても泣けてくる

無駄な技術力発揮して何作ってるんだろうアイツら。

岩「パスワードね……」

とりあえずアイツの誕生日、119。

『パスワードが違うぜ』

アイツの名前も違った。

思いつく単語を何度か試してみるがどれもこれも空振りだった。

もしかしてあたしに関する言葉とか？  
光ならありえる。

少しそうだったらどうしようとか考えたけど試してみることにした。

「masami」

『パスワードが違うぜ』

違った

「62」

『パスワードが違うぜ』

誕生日も違う

「my song」

『パスワードが違うぜ』

一番好きだと言ってくれた曲も違う

「iwasawamasami」

『パスワードが違うぜ』

……本気でわからない

「takisawamasami」

『そのパスワードはもう使えないぜ』

……今までと違うメッセージ。これは昔は使っていたという事だろうか

「iwasawahikaru」

『正解！』

名前と名字の組み合わせ入れ替えると案の定というかロック解除。

……なんか目眩がしてきた。

———こんなパスワードで固めている箱、中身がマトモな物だとは全くもって考えられない。

岩沢からするともはやこれはパンドラの箱に等しかった。正直なところ最後、箱の中に希望が残るかも怪しい

ゴクリ、と喉を鳴らして蓋を開けると……

関「あ！岩沢さん酷いじゃないですか！何回も電話したのに出てくれないし……」

そう言われ携帯を開くと20件以上の着信、履歴画面は関根オンリーになっていた

岩「どんだけ電話してんだよ……」

関「というか何があったんですか？」

岩「ん、秘密だ」

関「あ、ズルい！」

――――― 高校生の誕生日祝いには無理すぎるじゃないかな、  
とは思うけどね

楽しみにはしておこうかな、と思う岩沢だった

――――― オマケのオマケ

何してんだコイツ……

俺の机の横で何で直井が寝てるかはわからないけど……

とりあえず早急に机の『アレ』を片づけなくては……二段目のプレ  
ゼントもそうだがなにより、『二重底の下』のアレをこれ以上ここ  
に置いておくわけには……

だが俺は二重底を開けた瞬間気づいていなかった。直井がもう起き  
ていて後ろで見ていた事に。



直「いたた……」

ん、滝沢さん、なんですか？その、詩集と書かれた禍々しいオーラがあふれるノートは……」

直井の意識はまた刈り取られたのだった

## 光芒

――――滝沢亭

貸切の店内で岩沢は戦線メンバー、両親に囲まれていた

ゆ「おめでとう」

ひ「おめでとう」

滝「おめでとう」

入「おめでとうです」

関「おめでとっ☆」

ユ「おめでとうございますっ」

野「めでたいな」

藤「おめでとさん」

直「神が祝福してやる」

遊「おめでとうございます」

奏「おめでとう」

音「おめでとう」

椎「……めでたい」

大「おめでとう!」

T「Congratulation!」

チ「おめでとさん!」

高「おめでとうございます」

松「おめでとう」

竹「おめでとうございます」

岩親「おめでとう」

岩「ありがとう」

父に、ありがとう、母に――――

日「また出オチかよっ!？」

ゲシッ

ハイキック……良い角度で決まったのか日向はしゃがみこんでこめかみを抑える

滝「日向あテメーちよつと黙つとけやあ……まさみの一大イベントやで？」

ひ「なんでまたエセ関西弁なんだよ……!」

ひさ子のツツコミがはいるが滝沢の言う事ももつとも、何を隠そう今日は岩沢の誕生日。それを祝って滝沢の父が店を貸切にしてパーティーを開いた、というわけだ

滝「さあアホは放っておいて続きだ、」

店内の照明の大部分が落とされケーキに立った蝋燭に火が灯されるそしてせーの、とかけ声を出すと全員が合わせて歌う

「「「「「はっぴばーすでー♪とぅーゆー♪」」はっぴばーすで

ー♪とーゆー♪  
はっぴばーすでー♪でいあまーさみー（岩沢さーん）♪はっぴばー  
すでーとーゆー♪」「」

岩「……ふっ」

パチパチと拍手が止み、火は消された。

と、それと同時にきゅるる……とかわいらしい音が静かな空  
間に響く

岩「……は、早く食べようぜ？」

……恐らく電気をつけたら顔は真っ赤だろう

滝ひ関「「……ツクク……ププ!!」「」

静かぁゝに大爆笑している3人、電気をつけたらこいつらの顔も凄  
いことになっているだろう

――――

関「というか凄いねゝこんなに料理作っちゃってさ。経営大丈夫な  
の?」

確かに、これだけの人数が集まっちゃったわけだし……

滝「いや、残念ながら俺の奢りだから気にせず食ってくれ」

……日本語としてちよっとおかしい気がすんだけど

滝「400円毎時という低賃金で1日4時間働かされて……でも毎

日だからそれなりに金はある」

ひ「……親の手伝いでそれだけ貰えりゃいいだろ」

関「年に…60万？うわ有り得ないって」

滝「でも使う先あんまないから金粉入り歯磨き粉とか無駄なものまで買っちゃったりしてる感じ」

ああ、あのTSUYOAYAの供給源はこれか……とか考えながら天ぷらうどんを食べる。

うん、海老が美味しい（誕生日くらい別のもん食べよ、ってひさ子に言われたけど周りだって似たようなものだ）

—  
—  
—  
—  
—  
—

誕生日パーティーがいつの間にか飲み会に変わってしまったのは当然の流れだったのだろうか。

ちよっと足りなくなった料理を作り、目を離している隙に店内は酔っ払い不良学生達の溜まり場となっていた。

日向の「俺ん時も頼むぜ？」

という寝言（いや、戯言か）にバカヤローまさみだけだったの、と返す。

高松が「この筋肉は誕生日を祝うために————」

意味が分からない……外に叩き出した。

そしてぐでんぐでんに酔って入江とひさ子の胸を揉みしだく関根とユイ、とその隣で寝息を立てる主賓。

……寝てんのかよ、まだプレゼントも渡しちゃいないのに。

どうしたものか、と思いつつ……

(……おっと)

自らもだいぶ酔っているだろう。料理（と、言っても酒のつまみになるような簡単な物だが）をテーブルに置いた瞬間ふらつとよろける。

酔い醒ましに、と近くにあったドクターペッパーの缶をもって夜風にあたりに外に出た

――――

薬品臭い、がなかなかどうして好きなこの味。もう一口、嚥下する。消耗した体に、20種類のフルーツフレーバーがしみこんでいく。たまらん。

そんな事を思っただけでいると……

「……お前か。ちょっと付き合え」

まさみの親父さんの声が聞こえる。振り返えると……酔い醒ましに散歩でもしてきたのだろうか、店に向かって歩いてくる姿が見えた

滝「まさみさんとなら付き合ってますがお義父とは……」

「お義父さんと言うな」

滝「……なんでしょう？」

「歩きながら話す……ついて来い」

滝「まだ歩……」

くんですか？今帰ってきたのに……そう続けようとするが、こちらを見る目はいいからついて来い、と言っている

滝「……わかりました」

—  
—  
—  
—  
—

「まさみとは……何時知り合っただ？」

突然そう聞かれる、が俺は答える事ができない。

……生まれる前から、なんて言うわけにもいかず……。何かとつさに当たり障りのない答えを考えると、返答を待たず親父さんは



続ける。

「まさみは昔っから歌が好きだった。

そして中学の時だったか……ある日突然ゴミ捨て場からギターを拾ってきたかと思うと、それ以来音が鳴らない日なんてありやしねえ。学校からすぐ帰ってきてはずっと部屋に引きこもってるか駅前の路上でギターを鳴らしてたそうだ。」

……二回目もそれだったのか、もうちょつとなんとかならないのか  
おい……

どんな生活か想像するに容易い、それでいいのかまさみよ

「別に親子関係がギクシャクしてる気はなかった。

だが母さん……妻がまさみの部屋を掃除していると机の上に一冊のノートが開かれてたんだと、書いてあったのはまさみが作った歌だろう。

歌の事は俺にはよくわからねえ、だがな……」

——衝撃だった。本当にこれをまさみが書いたのだろうか、俺は考えた。紛れもないまさみの字だ。しかし、だとしたらなんなんだったんだ。

俺達は娘にこんな事を言わせてしまったのか？ 知らず知らずのうちにまさみは苦しんでいたのか？

俺達に見せていてくれた笑顔は無理に作っていたものだったのか？

一呼吸、そしてまた続ける。

一一一一泣いてるやつこそ、孤独なやつこそ人間らしい？

違うだろ……みんなで、友達や家族と笑ってこそ人間らしいはずだろう？

一一一一だがページを捲れば……

”歩いてきた道振り返ればイヤな事ばかりで？”

”どんなふうに感情零したらここから消えられる  
どんなふうに許したらあの日々を愛せる？”

”生きてる事が不幸でこんな僕なんて誰も必要としてないんだ？”

……………胸が痛かった。

明るく振る舞っている裏で涙を流させているのだろうか、

しばらくは眠れなかったよ、と自嘲気味に笑う。

「……だが高校に入ってからそんな心配が杞憂だったかのように元気だった。

友達を連れてきたりする事も増えて、自分から喋らないのに学校の話とかをするようになった

……挙げ句いきなり男を家に連れてくるようになった……お前だ」  
指で鳩尾をグリグリさされる

「んで今日は誕生日パーティー、高校で知り合った友達と聞いているがお前も、そいつらもまるでずっと昔からの親友みたいだ。

……正直ホッとしているよ、あんなに心から笑っている、心配はない、とな」

……そして、さあーてそろそろ帰るぞ、と立ち上がる

滝「心配いりません、あなたもこんなにまさを愛しているなら、何も」

「そうか、ありがとう坊主」

「つかお前、いいか体力だぞ体力。体力ねえと女ってのは喜ばねえぞ。ああ、だが避妊はちゃんとしておけよ……しくじってみろ、殺すだからな」

「お義父さん？ シリアスな話しに何故下品なオチをつけるのですか？」

—  
—  
—  
—  
—  
—  
—

•

•

夢を見た。

それも強烈な悪寒を感じ、目を覚ましたのだろう。店内の殺風景……な景色がぼんやりと目に入ってくる。

どんな夢だったかは、ほとんど覚えていない。

……少なくとも良い夢ではなかったのは確かだ。今、私の体を襲っている……恐怖に似た感情が教えてくれている。  
……ああもう、酷い汗だ。下着まで濡れちゃってるみたいで正直気持ち悪い。

どんな夢見たんだっけ……  
ぼんやりと浮かぶ、夢の景色、

……ああ、そうだ

一面の白。

思い出したくもない、機械的に身の回りの世話をしていく看護士。振り絞れど、言葉にならない感覚。

絶望。何度椅子を蹴ろうと考え、それすら自由に叶わないと思い知らされたか。

そこに1人きり。

バツ

岩「なっ!?!……ひ、光?」

突然後ろから抱き締められて何が何だか一瞬わからなかったけど、こんなことする奴はコイツしかない。

岩「ど、どうしたんだ?」

滝「お前な……今凄い顔してたんだぞ?心配したんだよ」

……抱き締められていると安心した、のか不思議とさっきまでの感

情も消え失せていた

岩「ありがと……」

滝「おう。ってああそうだ、ちょうど良い。プレゼント渡してなかったろ？」

そう言って取り出したのは指輪だった。あの時……あっちの世界のクリスマスに貰ったような、ルビーがはめられたシルバーのリング。

滝「芸が無くて悪いが……何送ったらいいかわかんなかったから前と同じだ」

岩「いや、嬉しいよ？」

あたしだって女の子だ。こういう物を貰って嬉しくないわけがない。

滝「そうか。」

震えも……なくなってるようだしな、良かった。

どんな怖い夢見たのか知らないけど枕を涙で濡らすような夜ならこの体何時でも貸すぜ？」

そう言って腰に手をあてながらニヤニヤと笑う。……なんだ？からかわれてるみたいでちょっと悔しいな

……

岩「……んじゃ早速借りようか」

滝「ん？」

岩「……目、閉じてくれる？」



岩「……目、閉じてくれる？」

滝「なっ、こ、こうか？」

な、なんだ？何時もより積極的じゃないか？

……いや、でもそういや再開して最初にキスして以来全くそういう事をしていない……まさみも寂しかったのか。

そして怖い夢を見てしまつてセンチな気分……

ほほお。なるほどなるほど……うい、うい奴じゃ。ここはたつぷりと余裕をもつて紳士な心持ちで対応しようじゃないか

岩「……やっぱりあんたの事好きだからな」

す、「好き」だって奥さん！

目閉じてるからどんな表情してんのかわからないのがもどかしい！  
は？紳士な心持ち？何それ食えんの？

うん、やっぱり俺の方が背高いし？正面に立って上目遣いに「好き」って感じか？

それともちよつと恥ずかしくて涙目になりながら、目閉じてるとわかってても言う瞬間に目をそらして「好き」なのか？

俺としては首か腰に腕をまわしながら耳元で「好きなんだ」が好みのシチュなんだが、いやでもそんな事されたら俺はもうブレーキが以下自粛。（この間約2秒）

滝（……………）

そして目を閉じて唇に感じるだろう、幸せな感触を待つ……

滝（……………）

待っていたんだが

パシャ。

……何故シャッター音が響くのだろう。

岩「ツ…クク……」

目の前には笑いを押し殺しきれていない……口元を抑えながら肩を

揺らす少女。

――――

アイツはこれ以上にないくらい赤面していて、久しぶりだからかな……緊張する  
ゆつくりと顔を近づけていくと目を閉じた。

滝「……………」

……なんだろう、なんでこんな恥ずかしいことしてんだろう。  
普通こういうのは男からだろう。なんで男が目を閉じて待ちなんだ、  
ああ、いや、あたしが言ったからか。ん…………

あたしは急にあたしの中で悪戯心が鎌首をもたげてくるのがわかった。ワンピースの小さなポケットに手を伸ばして携帯を取り出し、音を立てないようにして画面を開く。

そして携帯側面のボタンを押してカメラ機能を選択。

「……………」

ピントが顔に合った、そして

パシャ。

滝「ん……？」

疑問符とともに光が目を開いた。

その目に映るのは、携帯のカメラのレンズ。

笑いを押し殺しながらとりあえず今撮った写真を見せてみる

滝「なっ!？」

その写真は真っ赤に顔を染めた青年が瞼を閉じて唇を差し出している。(それもドアップで)

滝「そ、それを今すぐ消せ！」

岩「ん？聞こえないね」

あ、ヤバい。これ楽しい……少しそんなふう思ったんだけど……

滝「……消してくださいお願いします」

もはやプライドも何もあったもんじゃない。土下座までされてなんだか浮ついた気持ちが一気に下がってくる

岩「どうしようかな……」

待ち受け……にするのは流石にちょっとバレた時恥ずかしい……

あ、保存したままにするのは当然として……

パシャ

ん？

足元を見るといつの間にか土下座から仰向けに体勢を変えて携帯を構える男の姿。

滝「……ブルーか」

……

岩「それを今すぐ消せ」

滝「ん？聞こえないねえ？」

————————

あ、ヤバい。これ楽しい……

やられるとやるのとじゃ大違いだ。

きつとまさみも同じ事考えてた（つか今考えてる）気がする……

岩「なあ……」

滝「えー」

岩「そんな写真何に使うんだよ……」

滝「私的利用以外には使わないから安心しろ」

岩「HENTAI……」

滝「今更？」

ヤバいゾクゾクしてきた。好きな子をイジメるっていうのはこうい

うことかつ……

|| || || || || || || || || ||

5 minutes after

|| || || || || || || || || ||

岩「うっ……あっ……」

……やりすぎた

正直全く余裕が無いくらいの罪悪感が押し寄せてくる。全身から血の気が引いていく。

岩「光のアホ……変態！うっ……そんなにあたしをいじめて……ひっぐ……楽しいか！」

滝「……すまない、俺が本当に悪かった……だから、出来れば、その、皆が起きるからもうちょっと静k」

岩「うるさい！誕生日なんだから……お前とただ一緒に……うあっ……過ごしたかっただけなのに……！いじめる……あんたが悪いんだ！ふえええええ……」

泣き出した彼女を止める術など俺になく、とっさにとった行動はと言えば彼女をおぶさって完全防音の俺の部屋に避難する事だった……涙は女の武器とはよく言ったもの、こんなふう泣かれるのはいかんせん初めてだ……とりあえず謝罪と時間経過を待つしかないだろう

## ――滝沢の部屋

……現在、俺は占拠されたベッドを前に正座中。

今は泣き止んだけど……枕は鼻水までかんでたしビチャビチャな様だ（ちなみにビチャビチャのソレは壁に投げつけられ床に転がっている）……

滝「あー……岩沢さん？」

岩「……………」

……そして泣き止んだとはいえ先ほどからガン無視、この気まずさは俺の精神をガリガリ削っていく

滝「おい……」

岩「……………」

どうしてこうなった。どうしてこうなった。

滝「写真なら消したから……って」

岩「……………むう……………」

近づいてわかったが……………ぐっすりお休み中らしい。ベッド……………彼女の近くに腰掛けながら何の気なしに頭を撫でてみる。……………思えば最低な悪戯を————

岩「……………あつ……………ダメ……………触るな……………」  
思わずビクツときて手を離れた

が、起きる様子はない、寝言か？というか脳内で反芻してみたらなんかエロい。どんな夢見てるんだHENTAI少女め。

岩「……………それに……………触るなあ……………あふう……………」

……………変な場面じゃないんだろう、でもなんかやっぱりエロい。と、寝ているのを良いことに好き勝手思ってみる。

岩「……………でもあんたなら……………えへへえ……………」

何やら楽しい夢を見ているようだ。

岩「……………ああ……………だからエフェクターいじんなって……………」

……………なんだこの小さな悲しみは

滝「幸せそうな顔しちゃって……………」

幸せ……………か。……………ああそうだ。俺は今幸せなんだな。それがむず痒くて意地悪しちゃったりもするがこの気持ちは本物だ。それだけで俺は充分だった。

彼女は今、ここにいる。



滝「お前を愛してる。今も。これからも」

愛しい彼女の髪をそっと撫で

「おやすみ」

と言って部屋を後に……

クイツ

……うん。今言った事は嘘偽りの無い事実だが……もしまさみが聞いてたら恥ずかし過ぎるなあコレ、と思う

岩「……枕、濡れたから……」

……さっき言ってたじゃん……」

振り向いて袖を引っ張る少女を確認すると思わずククツと笑いながら、毛布の下に潜り込んだ

— — 翌朝 — —

毛布は二枚あった。6月に入っただけとはいえまだ寒いからな。だが起きたら一枚が腰付近を覆うのみ……

俺の頭には……枕は使えなかったから代わりに2人で使おうとした大きめのクッションが一つ。

横を見ると俺の腕で腕枕状態になったまさみ。

眠っている間に崩れたのだろうか、ワンピースの肩紐が外れて肌色  
を晒す胸元。

俺の手の位置は……うん、『禁則事項』だ。（しかも抱き留められ  
て動かせない。ああでも、なんだ、やわこい……）

加えて脚も絡みあっていて……朝だとその……当たる。

だがやってない。

……ちよつとマズいんじゃないかコレ？

と、そんなとき扉の向こうから声がする

ひ『あいつの部屋ここか？』

ああフラグ回収早いって……

ひ『おい滝沢！』

滝「頼むから目を覚ましてくれまamiい……」

岩「むう……まだ眠いって……」

そ、そうやって甘い声出されても駄目だからな！起きてこの状況を  
打破してもらわねば命が危ない。このままだと情け容赦無く、何の

抵抗も出来ずに※されるは確定的に明らかだ。ヤバい日本語がおかしい、落ち着け、クールになれば、どうすればこの状況を打h

ガチャ

ひ『滝沢ー？岩沢どこ行ったか知ら……な、い？』

ひさこヴィジョンから見るとどんな感じだろう？

ああ、変わらないな、俺が理解してるだろう状況と。

毛布一枚が腰付近を覆うのみで、腕枕状態になったまさみ。

着崩れて肩紐が外れて胸元は露わになっていて。

野郎の手の位置は一枚の布の上でしっかりホールド。脚は絡みあっている。

どう見ても朝チュンです。

本当にありがとうございました。

滝「それでもボクはやってない……！」

ひ「……元になった事件、結末知ってるか？」

滝「え、冤罪だ！俺は無実だっ！」

だが指をパキパキ言わせながら近づけてくるポニテの悪魔。

滝「というか仮に『そういう事』があったとして何故お前に怒られる必要があるんだ！」

ひ「……岩沢ばっか充実しててずるい」

お、おのれはあっっ！？

つか藤巻てめえのヘタレのせいじゃねえか！！

ひ「って言わせんじゃねえよ！」

テンパったひさ子の、キレのある右ストレートのおかげで俺は最近自分の彼女よりも口づける機会の多い愛人（床、地面）にまたキスをプレゼントしたのだった。

おまけ

滝「あー顎いってえ……」

岩「よくわかんないけど……大丈夫なのか？」

滝「大丈夫だろ……多分。あ、そうだプレゼントもう一個あんだよ。大したもんじゃないんだが……お前路上ライブやって……おまわりとか来たら逃げてんだろ？」

岩「まあ……そうだな、聞いてくれるおじさん達とかあんたがバリケード張って逃がしてくれたりするのが救いになってる」

滝「ほら、許可書だ。道路使用許可書。（※本当にあるよ!）

時間と場所と常識さえ守ればある程度好き放題やらかしてもいい、ああ、でも流石にエレキはやめとけよ？取ってきた場所はそういうのはキツそうな場所だし……」

岩「……」

ん？ミスったか？

岩「……光」

滝「な、なんだ？」

岩「ありがとう……」

滝「喜んでくれたなら良かった」

.....

.....

こいつ指輪やった時よりいい笑顔してないか……？

何か悲しくなってるものを感じながら目をキラキラ輝かせながら  
書類を手につ少女を見るのであった……

## 光芒（後書き）

Q 岩沢の誕生日何故この日？

A 沢城嬢に合わせました。m a r i n aでも良かったけど近かったから。

Q 何故こんなに遅れた？

A 6月2日に投稿しなかったからさ！

Q で、本音は？三行で

A 大学

バイト

眠い

Q 何か言うことは？

A 更新してない間もあんなに読者いたとかマジありがとう。



# Mail #1

— — — — —

4 / 10 22..16

from 光

sub ライブ

お疲れさん

腕は錆び付いてないみたいだったな、流石だ

— — — — —

4 / 10 22..24

to 光

sub Re;ライブ

ありがとう

：ってあたしを誰だと思ってんだよ

— — — — —

4 / 10 22..26

from 光

sub 音楽キチで、

Girls Dead Monsterのリーダー、ギタボの滝沢  
love子さんですねわかります

もつとも腕は錆び付いてなくとも唇は錆び付いていたようだけど↑  
ちよつと体固くなつてた

\_\_\_\_\_

$$\begin{array}{c} 4 \\ \diagdown \\ 1 \\ 0 \end{array} \quad \begin{array}{c} 2 \\ 2 \\ \dots \\ 3 \\ 3 \end{array}$$

to  
光

Sub Re; 音楽キチで、

返信はやいな……

つか変な言い方すんな

歌の練習もしてたつもりだったけど……声出てなかった？

[illegible]
$$\begin{array}{c} 4 \\ \diagdown \\ 1 \\ 0 \end{array} \quad \begin{array}{c} 2 \\ 2 \\ \dots \\ 3 \\ 4 \end{array}$$

from  
光

sub  
歌↓くち○唇×

いや歌じゃなくだな、キスだよキス。

い、言わせんな恥ずかしい

\_\_\_\_\_

$$\begin{array}{r} 4 \\ \hline 10 \\ 22 \\ \dots \\ 38 \end{array}$$

to  
光

sub 実際唇×ってわけでもないけど

そ、そっちの練習もやんないとな

[illegible]

ん、練習相手ならつとめよう。んじゃまたよろしくな

[illegible]

イロイロスミマセンデシタ

[illegible]

642

いいよ、別に気にしてない

なんて言うわけないだろ  
もうちょっと自重してくれ……

—  
—  
—  
—  
—  
—  
—  
—  
—  
—

4／1 1 2 2 .. 1 3  
from アホ  
sub すまん

でもさあ……気のせいかな？こっちはまだ成長途中？

—  
—  
—  
—  
—  
—  
—  
—  
—  
—

4／1 1 2 2 .. 1 8  
from アホ  
sub Re；すまん

え？何が？

—  
—  
—  
—  
—  
—  
—  
—  
—  
—

$$\begin{array}{c} 4 \\ \diagdown \\ 1 \\ 1 \\ 2 \\ 2 \\ \dots \\ 2 \\ 0 \end{array}$$

f  
r  
o  
m  
  
ア  
ホ

sub  
胸とか

身長だよ身長！なんか頭1つ小さいような……

ギターとか感覚違うんじゃない？

[illegible]
$$\begin{array}{c} 4 \\ \diagdown \\ 1 \\ 1 \\ 2 \\ 2 \\ \dots \\ 3 \\ 0 \end{array}$$

t  
O  
変態

sub  
殴るよ

まあそうかも……関根達と目線変わんないし

ギターの感覚はこっちで慣れるほどやっただって

\_\_\_\_\_

$$\begin{array}{c} 4 \\ \diagdown \\ 1 \\ 1 \\ 2 \\ 2 \\ \dots \\ 3 \\ 3 \end{array}$$

from  
変態

sub 一方ひさ子なんか更に……

へえ……まあ可愛いし良いんじゃない？ っと思うがな

[illegible]
$$\begin{array}{c} 4 \\ \diagdown \\ 1 \\ 1 \\ 2 \\ 2 \\ \dots \\ 3 \\ 7 \end{array}$$

t o 変態

s u b ちよつと待て

機嫌取ろうとしてもダメ、→の事、なんであんたがそんなのわかるんだ

……まさか

— — — — — — — — — —

4 / 1 1 2 2 .. 3 8

f r o m 変態

s u b 違う

勘違いだ。去年の夏だったか、学校に行く前ひさ子がコインランドリーで服乾かしてたんだよ。あれは絶対自分で忘れててしかもちよつとヤバいと思ったんだろ。じゃなきゃ仮にも年頃の女がスパッツとスポーツブラだけになってランドリー内で仁王立ちなんてしてないし、加えるなら俺がそれを見る事もなかった

— — — — — — — — — —

4 / 1 1 2 2 .. 4 0

t o ひさ子

s u b (無題)

光がひさ子の下着姿のぞいたってゲロったんだけど  
ていうかお前また大きくなったのか……

— — — — — — — — — —

4 / 1 1 2 2 .. 4 3

t o 変態

s u b R e ; 違う

……返信早すぎんだろ

まあ過ぎた事とはやかく言わないよ。

今すぐ忘れて、そして痛い目見ればいい

— — — — — — — — — —

4 / 1 1 2 2 .. 4 5

f r o m 変態

s u b 痛い目……はやだな

ん？嫉妬しちゃってたり？可愛いヤツめ☆

— — — — — — — — — —

4 / 1 1 2 2 .. 4 8

t o 変態

s u b R e ; 痛い目……はやだな

あんたが他の女の裸見てるってのが嫌なだけだ。

別に嫉妬とかそんなんじゃないから

— — — — —

4 / 1 1 2 2 .. 5 1

f r o m 変態

s u b つまり……

他の女のゝ

←

見るならあたしだけにしろ、と。こういう事だな  
クールキャラと見せかけてツンデレ乙。

っと、ああ、ちょっと来客みたいだ。また後で

それと……ゴメンな。傷ついたなら謝る

— — — — —

4 / 1 1 2 2 .. 5 2

f r o m 変態

s u b (無題)

ちょっと待てなんでブチギレたひさ子が凸ってきた!?

まさみお前まさかひさ子にさっきのめー



— — — — —

4 / 1 1 2 3 .. 1 5

f r o m ひさ子

s u b (無題)

……もしかしてコインランドリーの時か？時々使ってたんだけどもう止めるか……

まあ滝沢のアホな行動なんて何時もの事だし大目に見てやるよ

大きくなりたい、大きくなれたのなら全て叶う  
って歌ってみたら？ (笑)

— — — — —

4 / 1 1 2 3 .. 2 0

t o バカ乳

s u b ……バレバレ

シメて携帯奪ったんだな……大目にも見てない気がする

……嫌な事ばかりでもううんざりだよ！

— — — — —

4 / 1 1 2 3 .. 2 5

f r o m バカ乳

s u b バレたか

叶えたい夢や届かない夢があることそれ自体が  
夢になり希望になり人は生きてゆけるんだろ？

つかそういう事気にするようになったんだな

— — — — — — — — — — —

4 / 1 1 2 3 .. 3 8

t o バカ乳

s u b 別に気にしてるんじゃない

ていうか届かないって言うな……

泣いてるあたしこそ……人間らしいんだ

— — — — — — — — — — —

4 / 1 1 2 3 .. 4 2

f r o m バカ乳

s u b R e ; 別に気にしてるんじゃない

涙拭けよ

— — — — — — — — — — —

4 / 1 1 2 3 .. 4 6

t o 光

s u b ひさ子が苛める、けど

強くなれると思う、ふたりだったら……

[illegible]
$$\begin{array}{c} 4 \\ \diagdown \\ 1 \\ 1 \\ 2 \\ 3 \\ \dots \\ 5 \\ 0 \end{array}$$

f  
r  
o  
m  
光

sub ……そんな言葉が弱い

涙拭いてやるよ

[illegible]
$$\begin{array}{c} 4 \\ \diagdown \\ 1 \\ 4 \end{array} \quad \begin{array}{c} 0 \\ 7 \\ \dots \\ 2 \\ 1 \end{array}$$

f  
r  
o  
m  
  
ひ  
さ  
子

Sub さつきの電話の件

関根と入江にもメールしたからさ

そのうち行くと思うから準備しときなよ？

[illegible]
$$\begin{array}{c} 4 \\ \diagdown \\ 1 \\ 4 \end{array} \quad \begin{array}{c} 0 \\ 9 \\ \dots \\ 0 \\ 1 \end{array}$$

to ひさ子

sub  
ゴメン二度寝した

おはよ

朝の……ってなんだっけ？

よく覚えてないんだけど……

って関根達くんのかよ

— — — — — — — — — —

4／14 09..01

from 関根

sub 突撃マチャミの朝ご飯！

私しおりんさん

今あなたの家でご飯食べてるの

早く降りてきてウィンナーと目玉焼きパクつきましょーよ（＊。ω  
。y！~

— — — — — — — — — —

4／14 09..10

to 入江

sub ひさ子から聞いたけど

来るのか？

良いけど朝ご飯はすませてから来いよ？

— — — — — — — — — —

4／14 09..13

from 入江

sub ????

ですって (≡Δ≡)

って今起きたか？

[illegible]
$$\frac{4}{14} \quad \frac{0}{9} \quad \frac{1}{6}$$

to  
入江

Sub  
Re; ? ? ? ? ?

そうか、そうだよな、それが普通だよな  
んじゃまた後で

\_\_\_\_\_

$$\frac{4}{14} \quad \frac{1}{7} \quad \dots \quad \frac{1}{3}$$

to  
光

sub  
今

何処？何してんの？

[illegible]
$$\frac{4}{14} \frac{1}{7} \dots \frac{5}{0}$$

to  
光

sub  
(無題)

ひさ子達もいるし暇、って訳じゃないけど返事くらい返してよ

— — — — —

4／14 18..21

to 光

sub みんな帰った

おい

— — — — —

4／14 18..28

from 光

sub すまん

ようやく解放された……  
今から戻る

— — — — —

4／14 18..30

to 光

sub Re; すまん

バカ。

早く帰ってこい！

さんさん待たせたんだからCDの2、3枚でも貸せよな

— — — — —

$$\begin{array}{c} 4 \\ \diagdown \\ 1 \\ 4 \\ 1 \\ 8 \\ \dots \\ 3 \\ 3 \end{array}$$

f  
r  
o  
m  
光

Sub  
Re;  
Re;  
すまん

そこは女の子的にスイーツ奢れとかじゃ……いやなんでもない。明後日あたり一緒帰ろーぜ、そんなときうちで貸すからさ。

[illegible]
$$\frac{4}{14} \frac{1}{8} \dots \frac{3}{6}$$

to  
光

sub  
Re; Re; Re; すまん

いいから早く帰ってこい

一緒歸るつてのはいいよ、変な事しなけりやね

[illegible]
$$\begin{array}{c} 4 \\ \diagdown \\ 2 \\ 4 \\ 1 \\ 5 \\ \dots \\ 5 \\ 1 \end{array}$$

from  
光

Sub  
G  
D  
M  
F  
C

の打ち上げるから多目的教室Bにガルドメンバー集めてくれなう

[illegible]
$$\begin{array}{c} 4 \\ \diagdown \\ 2 \\ 4 \end{array} \quad \begin{array}{c} 1 \\ 5 \\ \dots \\ 5 \\ 5 \end{array}$$

to  
 ひさ子  
 関根  
 入江  
 ユイ

sub 打ち上げ

こちら誘われたんだけど、多目的教室Bに来てくれ、だつてさ。

というわけで現地にガルデモ集合! hurry up!

—  
—  
—  
—  
—  
—  
—  
—

4/24 16..01

to 光

sub つか

GDMFCって何?

—  
—  
—  
—  
—  
—  
—  
—

4/24 16..03

from 光

sub Re; つか

Girls Dead Monster fan clubの略…

…あとはわかるな?

—  
—  
—  
—  
—  
—  
—  
—

4/24 16..03

from ひさ子

sub Re; 打ち上げ



了解、藤巻から聞いたのと同じヤツっぽいな

— — — — —

4 / 2 4 1 6 .. 0 3

f r o m ユイ

s u b わぁ！

打ち上げとかはじめてでドキドキです（。D。）

一緒にいきませんか？

— — — — —

4 / 2 4 1 6 .. 0 4

f r o m 入江

s u b ( ^ | ^ )

v

わかりました！

隣にいるしおりんもOKだそうですO ( ^ \_ ^ )

— — — — —

4 / 2 4 1 6 .. 0 8

t o ユイ

s u b R e ; わぁ！

いいよ。光見つけたからいったんグラウンド来てくれる？

||  
||  
||  
||  
||  
||  
||  
||  
||  
||  
||  
||  
||  
||  
||

## **Keep it real (前書き)**

書いてる途中ふと怖くなってメアリ〇スーテスト受けてみた。

20、セーフ。

## Keep it real

まだ誰もいない部室、見てみると手は震えている……。

ギターを弾き、歌い始めて何年経ったろう、ステージに立った時以上かも……こんなドキドキした感覚はこれが始めてだった

初めてギターを拾って、修理して、変な音を必死になって出していたあの頃以上の胸の高鳴り。

あれよりも今、ずっとドキドキしている

キュッ

岩「ふふ……ふ……」

そのままギターを構える。

……なかなかカッコいいんじゃないかコレは？

ガチャ

岩「今日は、いつもより調子いいわ。声がクリアに聞こえる」

関「ちゃーす……ってえっ？」

入「えーと、遅れまし……た？」

ひ「よお、岩……沢……」

ユ「え？どうかしたん……で……す、か？」

「「「「………」」」」

|| || || || || || || || || ||

――――生徒会室

ナーイーテルー♪キーミーコソープ

滝「ハロー」

香「おい滝沢、引き継ぎまで間もなくて忙しいんだから真面目に……」

ひ『滝沢？岩沢が……岩沢がだな……あー……とりあえず部室これるか？』

滝「オーケー、待ってろすぐ行く」

音「おい！」

香「おのれは人の話を聞いてたか！？」

ええいお前らこそ二重かつこの中の内容を見たのか。まさみに何かあったかもしれないんだぞ！？（そのわりには様子が変だったっぽいのは認めるが。）

滝「奏、香織、今度うちのなんでも奢るから……後は任せた」  
奏「向こう1ヶ月ね」

香「……し、仕方ないな。……って出番コレだけか？」  
やはり女子高生、好きな物にはあっさり釣られる

音「お、お前らな……」

つか俺はないのか」  
滝「残念だが野郎に奢る金はないのだ」

筆記用具をしまうと急いで駆け出す。ドアを開けた時、毎日晩御飯は麻婆……最高だわ、だの毎日DXイチゴパフェ……だのと聞こえた。

……ん？麻婆豆腐定食は850円で……イチゴパフェ……2人前サイズのDXは750円で……毎日？

1ヶ月無給なうえ1日でも休んだら即赤……？

……冷や汗を背中に感じつつそれを振り払うように足をさらに早める。

だがそれでもまさみの危機……行くに決まってるしましてや金なんかと天秤にかけられるわけがない！

—  
—  
—  
—  
—  
—  
—  
—  
—  
—  
—

岩「だが、あたしはあたしが間違っているとは思わない」

結論から言おう、金返せ。

岩「ああ、この湧き上がる高揚感……」

ひ「……原因はなんなんだ」

ひさ子が耳元に口を寄せ聞いてくる

入江は耳に手を当てあーあー岩沢さん聞こえないです、と連呼している

関根はなんかビクンビクンいつてる

ユイは岩沢さんの神々しさが消えていきます、って泣いてる

滝「……多分俺だ」

ああ、そんな顔をしないでくれお前たち……

別に何もおかしくないさ

とりあえずムービーにこの様子を収めつつひさ子らに説明する事にしよう……

岩「そう、光が貸してくれたあのCDがきっかけ」

……つまるところそれだ。先日……俺は学校帰りまさみと歩いていて……いつものようにあいっは俺の家によってCDを借りていく事にした。

最近はワンオクとかがお気に入りのように彼らのアルバム数枚をチョイス。だがその日はそれで終わらなかった。

俺がまさみにはあまり見せない、言うなればちょっとイタイ系に分類できちゃうCD群の収まった棚に興味をもってしまったのだ。この際何故そんなCDを持っていたか等は聞かないでくれるとありがたい。

ひ「……で？」

滝「うむ……全部持ってた。」

音楽性広めたいから、とかなんとか。

ぶっちゃけそっち方向に広がって欲しくなかったが未知の音楽に目をキラキラさせる彼女の頼みを無下に突っぱねることは出来なかつ



たのだ……。

関「ちなみにイタって例えばどんな？」

滝「……サンホラとかアリプロ、筋肉少女帯に混沌頭の挿入歌とかあといわゆる同人CD……」

まさみのカバンを開けると案の定出てくるソレ。『罪過』だのと書かれた、V系少女が礫になってるジャケやらを見せると皆一様にうわぁ……という表情をしながら、なんとなく納得したようだ

ひ「で、その結果がこれだ」

小刻みに肩を揺らしながら鏡に映った姿——変な黒基調の衣装（……羽だ、背中にカラスみたいな羽がついてる）に……黒い革製指出し手袋をつけている——を見て目を輝かせている

……まあその兆候がなかった訳ではない。いつもリストバンドしてるし。友達作るより曲作りに熱心だったし。

滝「更に加えるならKなでさん（仮）と聖神伝エターナルとかいう漫画読みながら一緒にホーリースティンガー！とか他に誰もいないっぽい校舎裏で言いながらポーズとっちゃってたくらいだけど……！」

ユ「本当に岩沢さんの事好きなんですか！？私だったらそんな黒歴史バラされたら吊りますよ！？」

……そう、誰もがかかるともしれない病氣、ちょっと遅い発病というだけだ。

ちなみに現代医療の世界においてこの病氣に対する治療法は確立されていない……

滝「だがKOMOWATA式治療法ならばあるいは早期治療が可能  
なはずだ……」

入「えーと、4コマ見てない人にもわかるようにお願いします」

滝「とどのつまり自分がどれだけ痛々しいか他の痛々しい奴を見て  
もらって実感してもらう」

治療後は大抵恥ずかしくなって部屋に引きこもってしまう、という  
副作用付きだが

さて、と。ここは『あいつら』に電話して登場いただくか――  
ーと思ってコールしていると……

岩「次のライブ…この服でやろうかな」

後ろの方ではそんな声が聞こえた。

「「「「!!!!!!」」」」

一斉に目を見開くガルデモメンバー。

冗談じゃない、と。

普通の制服、普通のガルバンの中心にそんな服、浮きまくりなこと  
この上ない。さらにもしかしたら自分たちも着るハメになるかもし  
れない。

いつもの少しダルそうな目を輝かせつつこれ着ろよ、とゴスロリ服  
を手渡してくるリーダーを想像して真っ青になる面々。

ユ「き、着ませんよそんなゴスロリ服なんて……恥ずかしい」

いや、お前は鏡を見て言った方がいいと思う……いやユイはキャラ

だからしょうがない、イタいとか言っちゃだめだ。

バターン!!

直「滝沢さん！？何があったんで……す？」

と、ここでバターン！と、やかましい効果音をあげながらコールした直井が現れ、同時に岩沢を見て固まる。

ひ「……まあやっぱりそうなるわな」

直「……カッコいい」

「「「「！！！！！？？？？」」」」」

……あれ、なんで類友状態？いや呼んだのは俺だが

直「流石神を統べるに相応しき滝沢さんの想い人、身に纏う衣服も素晴らしい……。」

……すまなかった、今まで滝沢さんにつきまとう下賤な阿婆擦れだ  
と思っていたが……それが真の———」

岩「あんたうるさい

発言がいちいちイタイしさ」

( ( ( ( ( ……あんたが言うかつ……!! ) ) ) ) )

直「……ぐふっ……」

バタッ

直井でも勝てないのか……というかもっと粘ってもらう予定だった  
のに……メンタル弱すぎだろ……

ひ「何し来たんだこのアホは……」

岩「きつとあたしのこの『力』に引き寄せられてしまったんだな……  
…哀れだ」

「「「「「!!??」」」」」

ヤバイ。なんかビンビンきた。つか確実に悪化してきてる。こら関  
根、ビクンビクンするな。

電波放射を開始しだしていいいよヤバイ、という状況だが……

奏「お邪魔するわ。何? 滝沢君」

そんな状況でガチャリと扉が開けられ奏が入ってくる

滝「おお奏！いやまさみがだな……」

ポーズを決める岩沢を横目に奏に事情を説明する

奏「つまり道化を演じればいいのね、かつて私にした事を彼女にもする、と」

察しがいい……

奏「成功報酬はお昼分も麻婆ね」

………

滝「……『成功』報酬だ。」

苦渋の決断だが致し方ない……それ位の事を頼んでるんだからしやうがないが……

奏「忘れないでね

さて、岩沢さん」

岩沢に向き直ると奏は空気？というか表情を変える

奏「あなたがどうしてもその『力』を使うというのかしら？」

岩「愚問だな、使わずしてなんの『力』だ」

奏「そう、あなたがその気なら私も……」

腕を胸の前に持ってくる和一氣に振り下ろす、すると彼女の袖から

……

「「「は、ハンドソニック！」「」「」

飛び出してきたのは昔さんざんお世話になった、F〇8の黒人も御用達、カタールっぽい例のアレ。無論APはこちらの世界に等あるわけもなく、なんとなく、という理由でチャーに作って貰った。殺傷力はほとんどない、雑草位はなげる（斬る、ではない）、という程度。費用は滝沢持ち。

ちなみにこのカタールというとコレを想像するだろうが、コレは本当はジャマダハルでありカタールはただの短剣で……

## 閑話休題

奏「このエターナルセイバーを使って止めさせてもらうわ。あなたが暗黒の力に支配されるならいっそ……」

岩「……は？」

……下がった。

奏「この神なる力、エターナルセイバーがあればたやすいこと。」

それこそが神の遣いである私の使命……」  
岩「ふえ？か、奏？何を……」

……今だ、たたみかけるのは今。

滝「上手いじゃないか……」

岩「え？え？」

一呼吸

天使（また泣かせるのか？言ったら多分帰って泣くぞ？）

悪魔（だがそれはそれで……）

天使（……GO）

悪魔（言え、言ってしまえ……！）

なんと頼りないんだろう俺の脳内天使は

滝「まさみの真似するのが」

奏「それほどでもないわ」

岩「!!!!!!!!?????」

おお真っ青になった。

……と思ったら真っ赤になったな、首から上赤一色。

岩「っ!!!!」

まさみ は にげだした! ▼

……あ、転んだ。んでこっち見て……うわ涙目なってる、可愛い。今すぐ抱き締めたい、ぎゅーってしたい。

……っと立ち上がって涙拭いて……また走り出した

奏「んじゃ行くわね……直井君起きて」

滝「おお、すまんかったな。」

財布はキツくなったな……チャー達にも我慢してもらうしかないか……

ひ「……っは！な、何だったんださっきの？」

後ろを見るとさっきのアレを見てフリーズしていた面々。ようやく再起動したようだ。

関「あたしなんか疲れたんで帰りますわ……」

入「私も……」

ユ「私もー……」

よほどショックが大きかったんだろうな……

ひ「滝沢……そういうのはもう貸すなよ？」

滝「無論だ。これ以上泣かせる気はないしな……」



—  
—  
—  
—  
—  
—  
—  
—  
—  
—

•

•

次の日岩沢さんは学校を休んだ。

その次の日、登校したかと思っただけで保健室で寝てた。

三日目、ようやく現れたかと思っただけは見せないような凄惨な笑顔であたしやみゆきちやユイに接してきて奢るからなんか食いたいぜ、とか言ってきた。ありえない。

なんかちょっと怖いけど口止めのつもりなんだろうな、と思った。

あと奏ちゃん見る度にビクってなってさり気なくあたしの後ろに隠れる、やべ可愛い、抱き締めたい、ナデナデしてあげたくなくなるけどたつきーが嫉妬しちゃうと悪いからやめとく事にする。

あーアル○オートが食べたいなー岩沢さん買ってきてくれないかなー。みゆきちにステイックでおもいっきし叩かれた。すげー痛い。  
crow song 刻むな。みゆきちマジキチ。

## Keep it real (後書き)

数日前

友「○○ってさABの小説書いてんじゃん？」

私「（（。㇏。何故バレたし）なんのこと？」

友「心理学の講義のあと、携帯忘れて届けてあげたのは誰？蓮さん。ユーザーページをお気に入りはずかったねー」

私「（人の携帯見るとかマジ外道……）」

……何が目的？」

友「別にー。ただイチャイチャばっかで食傷気味じゃない？ギャグかシリ阿斯も書こうよ。」

私「シリ阿斯とか難しくて書けないし……。つか今日ちようどギャグ書いたところ。」

友「あ、そうなん？まあいいや、ハーゲンダッツ食べる？」

私「だから次は口から砂吐かせる気で、読者が思わず舌打ちする位の甘さにしようと……」

いや、物なんかに釣られないから。」

友「そういやずっと欲しい、欲しいけど無いーって言ってたキリングボーイのアルバム、定価だけどいる？」

私「甘いのは次でもいいか。あとハーゲンちようだい。」

## 酸化空

――――戦線本部

いつものようにひさ子達が部室に入ってくると滝沢と岩沢がいた。

―――なんか岩沢の両肩に手え乗せて……

ったく2人でイチャイチャすんのは構わねーけど今日はみっちり練習するつつたのは岩沢だろうが……

ひ「よお岩沢ー」

滝「ひさ子っ!？」ドゲシッ

……な、なんだこいついきなり飛びついて来やがって気色わりい……  
…思わずおもいきし殴っちまったじゃねーかよ

滝「痛いよひさ子……」

床にも顔面打ちつけてマジで痛がってるし……何時もみたいに受け身くらいとれよ

関「つかどうしたのたつきー。岩沢さんの見てる前でひさ子さんに手え出そうとするとかさ……

胸か！胸に飢えたのか！」

岩「いや、そうじゃなくてだな……」

……

………（ニヤリ）

光、あたしは悲しい。女は所詮胸って考えだったのかよ」

……あ？なんだ？変な違和感を感じる

滝「ちよつとお前も悪ノリしないでさ、早く元に戻してくれって言  
ってんじゃない！」

肩、というか胸ぐら掴む勢いで岩沢を揺する滝沢、……こいつこんな事するっけ？

入「な、何の話？」

ユ「さあ……？」

てゆうーか岩沢さんに何しとんじゃボケ！！彼氏だからって容赦せんぞゴルァ！！」

……更に加えるなら地味に内股の滝沢に……ドヤ顔で揺すられる岩  
沢……ん？あの表情普段からどっかで……

……まさか

ひ「なあ……どっちが岩沢だ？」

疑念を抱きつつ『岩沢』の耳元に口を寄せて聞いてみる

岩「おおー、流石順応性が高い？ なひさ子」

小声で返してくる『岩沢』。

つまりこういう事らしい。

——————————

チ「暇だぜ」

← 滝「暇つぶしがてら前みたいになんか作るか？」

← いろんな物制作

滝「ところで前元祖A Pのデータを見てだな、それに使われてた技術ここんとこ応用して色々作れないか？」

← 竹「これは面白いですね、やりましょう」

←  
← いろんな物↓ヤバい物へ

— — — — —

岩「そして出来上がったのがコレだ。元は相手がどんな夢見てるか  
わかる、的なもん作ったハズだったんだが……」

寝てる岩沢に使って、気がついたら中身が逆になってた、と。  
つかよくそんな訳のわかんねーもん作れたなおい。何でもアリ過ぎ  
てどうツツコミいれたらいいかわかんねえぜ……

岩「いいか、SSというのはようするに特定のキャラや人物を使い  
妄想を書き綴ったものだ。APという謎の技術が隅々までリーダ  
ー達に解明できていない以上ネタの宝庫として使った方がいい」

あー、確信した。こういう小難しくてメタな説明は滝沢以外にあり  
えない。つかそうなると岩沢をおもいつきし叩いちまったのが……  
やべー。

ちなみにこの前の奏のアレも暇つぶしに作ったもので、他にも奴は  
リクエストに応じてねんどろい○っぽいままみの人形とか、ひさ子  
のマウスパッドとか色々作ってくれた。って聞いてねーよ。つかな  
んだあたしのマウスパッドって。

岩「ちなみに藤巻のリクエストだ」

聞いてねーって

入「何の話ですか？」

関「愚問だよみゆきち……岩ひさが復活したのさ。百合ップルだよ。」ベシッ

軽くひっぱたいといた

ひ「んなわけねーから」

ゴツッ

……ひっぱたいした後机の角にぶつけたみたい……

関「痛いです……ひっぐ

岩沢さーん……いつもみたいに抱き締めて背中ぽんぽんしてくださいよー……」

涙目になってるしちょっと罪悪感が無いわけでも……まあいいか関根だし

滝「まったく仕方ないな（ぎゅっ）

ほら関根、泣きやめ（ぽん、ぽん）」

関「ふえっ！？な、な、なんでたつきーが！？」

入「えっ！？」

ユ「うわぁ……岩沢さんの見てる前で」

………

———



……………あ。

体はあいつでも意識はあたしだから……………うん、セーフ。仕方ない。  
不可抗力だ

滝「冗談だーわりい関根ー（棒）」

関「へっ？だ、だよねー！あっはっは

……………ははっ」

いやしつかし、なんだ、良い匂いだったなあ……………

……………って変態か私は……………！いや、光（変態）の体なんだから仕方ない？セーフ？不可抗力、きつと。でも光は関根の近くにいると良い匂いとか感じてんのか？なんかそれはそれでなんか腹立つな……………

……………ああ、もう……………だから問題はそこじゃない

滝「……………本当にはやく戻してくれ」

岩「うん……………無理」

……………え？

岩「ちょっといくつか焼き切れてるところあってチャーに今部品取り  
にいつてもらってるんだよな……………修理も必要だし……………

今日は無理。」

———

今日は無理、そう言った瞬間。

……

頼むから俺の顔で涙目にならないでくれ。涙目になるな。キモい。更に生きてる事が不幸とか歌わないでくれ。低いキーしかだせなくて歌い方はあってるはずなのにやっぱりなんかキモい。もう自分の事なのに涙出てくる……

関「……2人ともなんで泣いてるのさ」

滝「気にするな関根……別に今日1日の辛抱なんだ。声でなくて歌えないってのが辛いけどね……

声は出なくてもギターは弾ける、曲だって作れるんだ。別になんの問題も無いハズだ」

ひ「その意気だ……さあ練習しようぜ！」

滝「おう！」

普段は殴ってばかりなのになんか新鮮っすネ。差別よくない、俺にも優しくしてよひさ子様

クイックイッ

ん？

ユ「なんかよくわかりませんが練習しましょうよ」

よし、と『彼女』のストラトを手にし……

岩「さあ、派手にやろうぜ！」

ひ「スタアアップ!! やめやめ!

こら『岩沢』! そんなヨレヨレのリズムで続けるな!」  
ニヤニヤもせず言うひさ子。なんかデジャヴを感じる。

入「岩沢さん……体調悪いなら休んでも良いんですよ? 好きなのはわかりますけど……」

関「ですね、今日はちよつと……あはは」  
リズム隊も、

ユ「なんか声安定しませんね……体調悪いなら本当にしっかり休まれた方が……」  
ユイも心配してくる。

滝「……だな、気分転換にちょっと付き合え」

………

———

岩「すまない……」  
滝「気にすんなって。初めてだろうし仕方ないよ」

歌う事の大変さが、というより弾きながら歌う、という事の大変さがわかった。

何時も弾くだけより何倍も疲れて、更に手元が覚束なくなる

岩「……凄いなだなお前は。こんな小さい体であんなに頑張ってるだもんな……」

ユイだってそうだ。ああ、あいつも凄い……どっちも華奢だったのに好きだから頑張って……

そしたらふと抱き締められる感覚、

岩「な、何だ急に？」

目の前一面に広がる冴えない顔、

滝「いや……抱き締められるとホッとするっていうか……落ち着けてたから……」

真っ直ぐな目で見られつつそんな事言われて、だんだん近づいてきて……ああ、なるほどコイツはなかなかカッコいい。自信が湧いた……

……って近い近い近い!!

岩「何故キスしようとする!？」

滝「? いや、あんたも安心出来るかなって」

いや俺は男と唇を合わせるなんて真似したくない、というかお前は自分とキスするのになんの抵抗もないんか? いやそりゃこんだけ可愛いきりゃ抵抗は……って俺は何を考えているんだアホ。

滝「まあ良いじゃないか。最近やってないし……それとも嫌？」

岩「嫌ってわけじゃ……うんにゃ、やっぱり嫌だろう、それは」

どう足掻こうが野郎とマウストウマウス。この事実は変わらないだろう。

滝「ああもう面倒くさいな…中身はあたしなんだからさ、いいだろう？」

では何故明日しようと思わないんですか。昨日しようと思わなかったんですか。ってああ力強い、強いって。クソなんで頑張って鍛えた事が裏目に出てんだよおい。つか嫌がる女の子に無理やりキスしようとする男って絵柄的にコレ俺（の本体）捕まるって！ってああそんな事思ってる間に近い近い近い！目は閉じた方がいいな、キスの時目を閉じる、普通の…アレとは全く意味が異なる気がするけど……ってあああ心配が！心配が！！心配が…あ。

滝「……ふう」

岩「何充実したような顔してんだ……」  
なんだろう……大切な物をなくしちゃった気がする

滝「気にするな、結構楽しいじゃないか」

これはあくまで一男子からの意見だが……百合はいい。可愛い同士  
だったらむしろGJだ。だが薔薇、テメーはダメだ。

一部男性諸君、俺の言いたいことがわかるだろう？ わからない方は  
流してくれ。

滝「……もう一回していい？」

岩「ダメ。絶対にだ。」

まさみよ……何時もやってくるし無意識なんだろうが……眉を下げ  
て上目遣いというのはお前みたいに可愛い女の子がやるから効果が  
あるんだ。

決して男がやっちゃいけない。ああ、さっき少しでも俺カッコいい  
とか思ったのは幻だったんだ。やっぱり俺キシヨイ。泣ける。

滝「良いじゃないか減るもんじゃない」

まさか、俺の精神が現在進行形でガリガリもってかれてますよ。さ  
つきからこちとらずと半泣きだよ。ってああにじり寄るな！

岩「……それ以上近づくならこの胸思いつき揉みしだく……！」  
滝「……や、やめろよ？」

自分の体の人質にするなんて追い詰められてピストルを頭に向ける  
犯人のようだがあいにく自分の体じゃない、手を胸に当てて言う  
体の持ち主も流石に動きが鈍る。ああ、それとやっぱりやわこい。

しかしアレだな……体勢的に覆い被さる一歩手前の男と半泣きで  
胸に手をやる女、って絵。やっぱりどっか犯罪臭い。実際俺の顔周  
りが暗いとちよつと怖い。

ってああアホな事考えてたらまた泣きそうになってるし……

岩「じよ、冗談だって。そんな事しないし、なんだったら今日風呂  
も入らないから」

滝「なあ!!??」

そ、それはそれで汚いけど……そうした方がいいな、うん。」

別に今更な気もしないでも……ああこっちじゃ今更じゃないか……

そりゃ見たくないと言ったら嘘だが望まれないなら見ない、という



考えはある

だが……今回ばかりは無理そうだ

深刻な問題だと思っていなかったのが悪いんだ……蝶の羽ばたきが  
竜巻を生み出す、というわけでもないが些細な事でもきちんと対処  
すべきだったのだ……

岩「だがな一つ……空気ぶち壊す事はわかってるんだが……これ  
だけは伝えなきゃいけないんだ……」

滝「なんだ？」

岩「……怒らないでくれよ？」

滝「歯切れが悪いな……どうしたんだ？」

岩「お花を摘みに行きたいんだが……」

滝「え？あ？なあ……そ、それは……いや、み、見ないで欲しいって言うか……うああ……」

だから頼むから俺の顔で涙目にならないでくれ。やめてくれ。キモい。泣きたいのはこっちなんだ……

チ「おい、スピアの材料が家にあったから思ったより早く直ったんだが……」

「「それを今すぐよこせえっ！……！」」

——————————

後日

滝「完成だ……！」

岩「廃棄しろ、今すぐだ」

滝「まあ待て今度は大丈夫だ」

岩「……何が出来たんだ」

滝「エレキ三味線とエレキ琴だ。和楽器におもいつきしディストーションかけたりなんかしちゃって……和と洋の究極の融合……」

岩「へえ……」

滝（どやぁ……）

岩「で、誰が使うんだ？」

分解後、再利用可能部分を除き廃棄処分

岩「あ、それと加えるならどっちも既存品あるからな」

滝「え……マジ？」

岩「マジだ。オリジナルだと思っても誰かが既に、なんてしょっちゅうある。曲とかもな」

滝「そうか……んじゃこの本人の声をサンプリングして作った『喋るまさみちゃんぬいぐるみ』も誰かが既に……」

『ソレニサワルナー』

岩「廃棄しろ、今すぐだ」

## 酸化空（後書き）

もうフツーにらぶちゅっちゅする、ちゅっちゅ成分が足りない。ジャンルコメディじゃなければましてやトンデモ科学でもないんだよ？ねえ私、ジャンルを口に出して言え。恋愛？ごめんなさい。

さて木曜のリアルひなっちのライブまでどれだけ考えられるか

## 眩暈

――――滝沢宅

率直に言おう、なんかよくわかんないんだけどヤバイ。

光の両親に2人揃って呼び出されたと思ったら……あいつの両親は見たことないくらい怖い形相で待ち構えていた。そして居間で正座させられている……

……なんでこうなったかは全くわからない。別に2人で夜遅くまで出歩いてたなんて事一度も……いやあんまり、ない。路上とかは除いて。

岩「おい……なんでこんなに怒ってるんだ？」

滝「わからん……さっぱりだ」

『今日、』

小声で話していると威圧感たっぷりの声が聞こえる

『お呼びした理由は……わかるわね？』

というかお母さんには初めて会うけど「はじめまして、光君にはお世話に」どころか挨拶すら言える流れじゃない  
綺麗な人だな……胸も……ってそんな場合じゃない、さっぱりわか

らない。肘で光をつつくけど小さく首を横に振るあたり同じだろうな……

「……事情はユイちゃんやしおりちゃんから全部聞かせて貰った……」

その名前を聞いた瞬間さらに冷や汗が止まらなくなる  
何したんだあいつら……

「光、お前はまさみさんの両親に申し訳ないとは思わないのか？」  
？

クエッションマークが2人の頭の上に浮かぶ  
……何かされたっけ？

「今日呼んだのはお前たちの子どもについての話だ」

.....

「……はい？」

何言ってるんだろう、予想外すぎて何が何だかわからない。子ども？光との？そりゃ親としては呼び出すだろうな……

「彼女たちが言うには……」

[illegible]

—  
—  
—  
—  
—  
—  
數時間前、滝沢亭

まだあまり人のいない時間帯、ベルを鳴らしてユイ、関根、入江の3人が店内へと足を踏み入れる。

「いらっしやい、今日は3人だけかい？」

入「ええ、ひさ子は藤巻先輩と遊び行っちゃいまして……」  
ユ「岩沢さんも滝沢さんと2人でイチャイチャしてますね」

———ほほう、息子よ、充実した学校生活を送っているようじゃないか……  
というかいつも彼女たち5人と一緒にいるような……案外モテているのか？

関「だよねー『遂に俺達の子が出来た』って言って……終わった後  
もまた2人きりかよ!」  
入「ちよつとしおりん……」

「ほー俺達の子かあ」

そんなもんまでなあ  
まったく光も隅に置けな……

な、なんだって？

ユ「岩沢さんお陰で眠れなかったって言ってたし休めばいいと思う  
んだけどなあ……」

……どういうことだ？  
店の冷蔵庫からマウンテンデューを取り出すと一気に飲み干すが……  
相変わらず喉は乾いている

ええい落ち着け俺よ……

関「今度ユイにも作ってやるって言ってたじゃん」  
ユ「うん、私も頑張らないとね!」



岩「光!!!!!!」

し、締まってるって……！

「というかそもそもお前との子、  
 つて時点でおかしいんだよ！」  
 処○と童○で出来てたまるか。

岩「んじゃあいつらの悪戯か……？」

滝 「……まさかアレか？」

――――

滝「遂に出来たな……」

岩「ああ、曲名は……god bless you、だ」

俺のせいかはわからないが孤高といったイメージがあるこの曲やI  
ast songはだいぶ完成が遅れていた。加えるなら歌詞もメ  
ロディラインも少し明るくなってきている……

岩「やっと満足に眠れるな……あんたのおかげだ、ありがと。特に  
後半コーラス入れたりとかサビの入りのとこのアドバイスがすごく  
ありがたかったっていうか……」

口を出してる時、僕はビートルズ気分があつた事は否めないし、果  
たしてそれが本当に良い事だったかもわからなかったが……  
岩「それにメロディとサビでも聞いててうおおーってなる感じの……」

滝「ストップだ、音楽キチモードストップ」

まあ興奮を抑えきれないあたり気に入ってくれたんだろう、制止し  
てもそのまま彼女は続ける

岩「そう言うな光、この曲は私達努力の結晶、愛情こめて作りたい  
わば子どもみたいなものだろう？」

滝「……ちょっと大袈裟じゃないか？」

~~~~~

……これか！？これのせいなのか！？

岩「……あ。」

まさみも思い出したようだな……原因はお前じゃないかまさみい……

えーと……この後はたしか……

~~~~~

ユ「いいなあ……私も新曲作りたいんですけどなかなか……ひなっち先輩なんか手伝ってくれるわけないしうらやましいです」

岩「んーそれじゃ今度ユイにも作ってやろうか？

そうだなあ……ユイらしい明るくてポップな感じでさ……。あ、でもメロウな感じにした方がいいか？いやそれともあえてイメージにとらわれないでゴツゴツ切ないバラード……。いやでもこれこそロックーって曲最近書いてないなあ……。AmFGっていういわゆる黄金コードもバシィツと使って」

滝「スタアアップ！！ストップだ！

わかった、オーキードーキー。そんな時も手伝うからとりあえずまた今度、な？それよか久しぶりにどっか息抜き行こうぜ？」

そんでそれでもマシンガントークを止めないコイツを半ば引きずるようにして部室から出て遊びにいったんだっけな……

――――

岩「……言ってたな」

滝「ああ……」

『まさみさん、この事親御さんには話したの？』  
首を横に振る。

当たり前だ、存在すらしてないからな。

『それで……何ヶ月なの？辛いことを言うけども学生だし堕ろす事も……』

岩「いや、ですから誤解と言いますか……」

ていうかもう産まれてますし、とか矛先があっちに向いているのを  
良いことに好き勝手思ったり出来るあたり、やっぱこの頭どうかし  
てるのかもしれない

『産まれ……って

親に何の相談もなく！？

あんたが馬鹿だとは思っていたけどどうしてそうなる前に……』

岩「……頼むからややこしくしないでくれないか」

……また思った事が口に出ていたようだ

それからまた更に熱が上がっていく、あなた達はまだ高校生、学生



ていかないかしら？」

「そ、そうだな。よし、父さん頑張って作るぞー」  
……………この親は。

岩沢も最初は断って帰ろうとしたが……立ち上がったその足はプルプル震えて冗談抜きで危なっかしかったため現在こうして光の部屋で休んでいるのだ

滝「……今度からもうちょつと言葉選ぼうぜ？」

岩「……そうだな」

滝「あと子どもはもう何年か待ってくれ。苦勞かけさせる訳にもいかないし仕事見つかってからじゃねーと……」

岩「……バカ」

そう言って上半身を起こすと仰向けに横たわる男に軽く触れるだけの――――

ガチャ

『まさみさんご飯出来た……けど』  
ベッド

息子に覆い被さるようにする息子の彼女  
MK1。

『……ご飯よりそっちを食べるのね……光、避けなさいよ』  
「「……………」」

その後パニックに陥って半泣きになりながら手当たり次第に物を投げってくる彼女を、理不尽を感じながら、小一時間かけてなだめる事になったのは言うまでもない

—  
—  
—  
—  
—  
—  
—  
—  
—  
—  
—  
—  
—  
—  
—

**星に唄えば（前書き）**

前半↓やりたかっただけ



## 星に唄えば

――――本部

ゆりから部室に集合、とメールがきたのがほんの十分前だろうか  
正直暇してたし来てみたわけだがまだ椎名しかきてないみたいだ

岩「おはよ椎名」

椎「あさか、確かにまだはやいな……」

とりあえず挨拶をしながら部室に置かれた長机に腰掛ける

岩「……そういや今日は土曜だよな」

椎「ああ、さ様だ……」

部屋の真ん中の机に腰掛けるあたしと隅っこで腕を組んで佇む椎名。  
まあこれが何時もの定位置ってやつだ

岩「急に呼び出して一体何するんだろうな」

椎「ああ、さあわからない……」

……？

岩「どうしてあさはかなりって言わないんだ？」  
椎「ああ、さあ何でだろう……いや……」

とういか『あさ』縛り……？

椎「ああ、さいスタートを切って私も変わった、というアピール描写だ」

……

ガチャ

滝「……グッモーニン」

と、ここで光がドア開けて入って来た。全くもって、欠片も良き朝とは思ってなさそうな仏頂面、無精ひげも生えまくっている。

……でも

岩「……それはそれでカッコいいな」

椎「！？……あさはかなり」

……あたしってお父さんっ子なのかもしれない。

椎名が首を横に振りながら憐れんだような視線を送ってくるのはな  
んでだろう。つか今あさはかなりって言った

岩「でもひげはともかく笑顔の方が魅力的だぜ？」

椎「あさはかなり……」

滝「……お前ら今日が何の日だか忘れてるようだな」

今日？

7月7日、ああ七夕か。

岩「七夕だからってどうしてそんな不機嫌になるんだ？」

大方また馬鹿騒ぎに巻き込まれるんだろうけど別にそこまで嫌がるイベントでもないだろ……

滝「……そうかお前は何も知らないんだったな……今日は――――

――

Bannon!

と、やかましい音をたてながら上機嫌なゆり、大山、それにダルそうな戦線メンバーが入ってくる。

ゆ「あら、早いわね感心感心☆  
じゃあ早速始めようかしら」

……???

「「「ええー……………」」」

……何を？

岩「……意味がわからないんだが」  
とりあえず椎名に聞いてみる  
椎「あさはかなり……」

聞く相手を間違った。

光にでも聞こうと思っているとゆりが言葉を続ける。

ゆ「一年生はまだわからないだろうから今日の活動を教えるわね  
いい？七夕は願い事をする日……つまり、

『あたしの叶えたい夢をみんなで叶える日』よ！」

――――

ああいやだ。帰りたい。

滝「……すまんゆり、頭と胸の奥がキリリと腹痛で痛いから今日は  
帰る」

日「あたた……俺も腹が頭痛で……」

ひ「あたしもちよつと眩暈が……」

ゆ「訳わかんないわよ。却下。」

撤退を図るも許される訳がない。

滝「いいかゆりに大山……お前らは楽しいだろうがぶっちゃけそんな  
企画売り上げもとい読者数には貢献しない！」

ゆ「うっ……そんなわけじゃない。読者だって本当はみんな『  
ゆりっペサイコー！』って思ってるんだから！」

大「どうでもいいよ。読者数？適当に今旬のアニメを3つ4つ原作  
欄に加えれば増えるんじゃない？僕はただ表舞台で暴れられればいい  
だけさ。」

こいつら好き勝手言いやがって……

滝「そんな事するか！ぶっちゃけまさと俺のイチヤイチャらぶちゅっちゅな物語でそもそも大山が大暴れする必要なかないんだよ……っておい聞いているか？」

大「聞いちゃいないよ。さあ早く始めようよりっぺ」

くそ……なんてやつらだ……日向が『明日俺休むわ』とか言って笑顔でちよつとヤバイ量の睡眠薬飲もうとしたのを思い出したぜ……

滝「……どうするよ」

日「……は？何をだ？」

ひ「テンション低っ！

まあ突っ込まないようにして普通に七夕の準備しようぜ……」

ゆ「へえ面白いじゃない。んじゃ勝負しましょ。

あなたが突っ込んだら私達の勝ち、突っ込まなかったらあなた達の負けよ」

また無茶苦茶を言うなこの女は……！

ひ「いやそもそも勝負なんかじゃないしそれどっちにしてもあたし達の負けじゃ————」

慌てて羽交い締めにして口を塞いだ

自分で言っておいて早速突っ込んだらもうとしてんじゃねーよ！

ゆ「ちっ……」

岩「……………」ゴリッ

痛っ!?

何だと思って見るとまさみが睨みつけながら足を踏んでその上踵でグリグリしていた。ブーツは冗談無しに痛いから止めてくれ

岩「何時までくっついてんだ!」

滝「いったあっ!!」

……ああそういう事ね。手を離して解放すると深手を負った右足をさすりながら言い放った。

滝「と、とにかくそのコーナーはダメだ。」

そういうとゆりは渋々ながら……

ゆ「んじゃ今日もいっくぞー!」

「「おい!!」「」」

止めるわけなかった

—  
—  
—  
—  
—  
—  
—  
—  
—  
—  
—  
—

ゆ 「んじゃこんな七夕は嫌だ  
はい、GO」

「ゆりっぺの夢を叶える日」

ツツコミ3 「「お前らも結局嫌なんじゃねーかよ!!」」

[illegible]

早くもあつさり、本当にあつさり突っ込んでしまいツツコミ3人はその他全員のボケの前に敗北を喫した。

滝「やっぱ無理だったんだ……」

日「まさか大山まで言うとは予想外だったぜ……」

ひ「いやでもさ、んじゃ普通に七夕っぽいことしていいんじゃないね？」

…確かにそうだ。

椎「それは、あさはかではない」

肯定意見と考えよう

大「ちよつと待ってよまだ僕が個人的に活躍してないよ」

……あれは無視として、他に反対意見もないようだな……

滝「んじや適当に紙に願い事書いてこーぜ」  
そしておーだのうーいだのだらだらした返事と共にようやく本来やるべきだった事を行っていくのだった……

――――

……とは言ったものの

滝「……さて何を書いたものか。」

あらかた今の状況に満足してるしな……  
まさみもペンだけ回しながら無表情に目を細めて固まってる。

……他の奴らはどんな事書いているんだろうか。チラリと目と耳を  
傾けてみるとする

直「ふん……『甲子園にユイを連れて行きたい』？  
目先の事にしか目を向けられない上に身の程を理解できないとは相



変わらず消化器官と生殖器に足が生えただけの下等な生物だな貴様は」

日「何時にもましてひでえ……」

……なぜ奴はマトモな内容なのにとんでもない言葉をかけられているんだろう

滝「直井……日向をそう苛めるな……」

つかそういうお前はなんて書いたんだ？」

直「え？やだなあ……恥ずかしいですが……」

どもりながら紙を差し出してくる。ふむ……『同性多重婚の国に――』

最後まで読むことを拒否して紙を破き捨てると喚く直井を尻目にその場を離れる。

そしてまさみの隣に戻ると『来年もこうして一緒にいられますように』とペンを走らせる。

むう……まあ普通だが結局のところ何処にでもある幸せを享受出来るのが一番良い

でも『笹がないから各自持って帰って自分の家に飾れ！』とか言ってたしなあ……親に見られたらちよつと恥ずかしいか？

岩「なあ光なんて書いた？」

とここでまさみが興味津々、といった感じで聞いてきた。

滝「秘密だ秘密。他の人に言うようお願い事は叶わないって話を聞いた事があるしな。」

これが叶わない事になったら正直泣く自信がある

岩「……ヒント」

ヒントくらいなら……

いやここは軽くイタズラしてやろうか。

毎回毎回懲りないな、とは思うが別にこれで泣かすことはないだろうし

滝「まさみも叶えたい願いだと思うぜ？」

岩「……は？」

いやもちろんここで音楽キチ発揮されてボケられたらそれはそれでちよつと悲しいが……

まあ軽く赤くなった顔でも見れたら成功だろうな。このくらいのイタズラは許してもらおう

•

•

•

はて、何故こんな沈黙が続いているんだろうか  
プニプニと頬をつついても幸せな感触が返ってくるばかりで返事は返ってこない

滝「おい」

岩「……はっ！

お、お前なんて事書いてんだ変態！……そ、そりゃちょっとプラトニツクな関係じゃないかとは思ってたけどさ、そんな……あたしにも心の準備ってもんが……」

………こいつは今自分が何を言っているか理解しているんだろうか

滝「……ああ、なんだ、すまん」  
非はないと思うけどここで勘違いを指摘なんて出来るわけがない。  
俺は見えてる地雷をわざわざ踏みに行く程馬鹿じゃない

—  
—  
—  
—  
—  
—  
—  
—  
—  
—

関「たつきー何かずい分と面白そうな事書いてるっぽいけど？」  
入「え、えっちなのはいけないと思います！」

ああもう……人がなるだけ穩便に済ませようとしとるっちゅーに……  
岩沢の言葉を聞いてガルデモ勢が寄ってくる。

岩「……はあ、ったく……変態」  
顔は赤いが酷い言われ様だと思う

ほ、ほおー……！そうか、そーゆー事言ってくるか……！

滝「……まあさあみい……これを見ろお……」  
岩「……は？」

・

何故かまたひっぱたかれた。

・

## D o l l

――――本部

いつもどうり、かはわからないが暑くなり始めたこの時期、いや気象庁が言うにはこの時期としては異常な気温でくだとかなんとか。部室に置かれた温度計は37度、湿度計も絶惨（誤字に非ず）95%の表示、ふざけるな。「湿度100%って水の中って事なんですかね？」と何時だか関根に聞かれたのを思い出す。違う、そもそも湿度は飽和水蒸……ってそんな事どうでもいい、考えるのも億劫だ。

部室にいた2人は何をするわけでもなく、それこそ幽鬼か何かかと思う程力なさげにぐったりしていた

と、ここでまさみが団扇をパタパタと動かしながら、見ていて悲しくなるほどダルそうに話しかけてくる

岩「……なあ、他のみんなは？」

滝「……この前のテストの追試じゃなかったか？顔出さないヤツらも部活とかだと思う」

……言っちゃなんだが基本みんな馬鹿だから……

竹山やチャーあたりはまたせっせとなんか作ってるだろう



つか暑い

岩「……奏もか？」

滝「……音無と勉強してるっばいな……学部は違っても同じ大学行くって今から張り切ってらっしゃる」

夏は受験の天王山、誰が言ったか知らないがその通り、勉強は厳しいのだ。

もつとも、地方の普通の高校でこの時期から勉強してるのはそれこそ難関大いこうとしてる連中だけだろうが……いや、そういうヤツはもつと前からやってるか

にしても暑い、ここでダラダラするなら間違いなくクーラー聞いた部屋で勉強する方が楽だ。

岩「……お前は勉強しなくていいのか？」

滝「……別にそこまで難しいところこうってんじゃないしな……

それにセンター数日前からふとした思いつきでとあるアニメの二次創作小説を書き始めたアホ、俺知ってるしな……結局そいつこそこの国立大行けたらしいが……

アイツ思い出すとどうも簡単に思えてしまう」

いつか失敗するな、アイツ。

岩「……屁理屈じゃないか」

滝「……ちゃんとしてる。冗談だ、ベストを尽くすさ」

岩「……というか暑いな」

滝「……ああ、暑いな」

団扇をパタパタと動かしながら、見ていて哀れになるほどダルそう  
だ、とバックから取り出したゲータレードを口に含んで思う。……  
ぬるいと相当アレな感じだ……多分もう今夏は買わない……

岩「……なんか……飲み物ない？出来ればその絵の具溶かしたよう  
なヤツじゃなく……」

滝「……ぬるーいみるくちーでいいなら、やる」

真っ青でナニ入ってるかわからない興味本位で買ったソレを全部呷  
ると、バックからまたボトルを取り出し投げてやる。

サンキュ、と消えそうな声で言うのとボトルに半分程入っていた液体  
を一気に飲み干す

ああ、暑いししょうがないよな……もやしっ子め……

……つか冗談じゃなくこれは……

.....

・

滝「こんなクソ暑いとこにいられるか！俺はクーラーでキンキンに冷えた自分の家に帰るぞ！こちとらもう会話文にダルさ表現の三点リーダ入れるのも面倒になってきたんじゃ！！」

岩「……よくわかんないけどさ……うち今エアコン壊れて……行  
っていいか？」

どこことなく嫌な予感のする台詞やメタな台詞を吐きつつ立ち上がる  
滝沢に、岩沢はついて行くことにしたようだ  
暑さで機能していない、普段の聡明さは欠片も残っていない頭では、  
クーラー、その甘美な響きには勝てるハズもない

滝「オーケー、チャリ後ろ乗るか」

岩「……あれ？お前歩きじゃなかったっけ」

滝「……いや手繋いで帰ってたからチャリはあるけどいつも歩いてた……って言わせんな恥ずかしい……」

今日は暑いから早く帰りたいんだよ」

※2人乗り、ダメ、絶対。

岩「……んじゃ頼む」

――――――――――

外に出ると直射日光は厳しいものがあるけど風があるからかそこま  
ででもない

自転車置き場まで行き、光の自転車の荷台に横に座ろうとして……  
バランス悪くてあぶねーよ、と普通に跨らせられる

滝「ちゃんと掴まってるよー？」

岩「ん」

……でもコレってどこ掴んだらいいんだ？腰？

よくわからないまま腰を掴むとゆっくりと自転車が動き出す……

……ちよつと怖い

学校を出て数百メートルも走ると手で掴むだけだったのが、だらしなく出されたワイシャツの裾を抑えるように腕全体を掴まって抱き締めるようになっていた

——お二方へ、ただでさえ暑苦しいのにそんなに引っ付かない  
でください

滝「……その、なんだ。当たっているんだが」

岩「……当ててんだよ？」

言ってしまった。

何時だったか関根達が言ってた一度は使ってみたい台詞シリーズ、  
フツと頭の中に浮かんたあたり深刻にもうこの頭ダメかもしれない

滝「……それを言うにはちよつと足りないんじゃない……って痛い痛い  
！ゴメンって、危ない、事故る！！」

抱き締めたまま親指立ててわき腹に突き刺してやると自転車が蛇行  
しだす、わき腹刺されるの、光は弱いタイプか……どうでもいいな  
……

——お二方へ、うんざりする程暑苦しいのでアホなやりとりは控えてください

——————————

そしてその後も何事もなく？進み信号に引っかかって止まるとやってみたかった、と岩沢は後ろ向きに座って背中を預けるような格好になる

岩「ドラマとかでやってるような事、試してみたくないか？」

だそうだ

信号が変わりまた漕ぎ出す。

いやシャンプーの匂いがして俺としては非常に良いんだが……

岩「うわっ！？ダメだこれ段差とか何時来るかわからな、っ！？」  
……恐くないか？

うん、暑さで頭がやられてしまったんだろうか……これ以上壊れられても困るのでペダルを漕ぐ足に更に力を入れる

岩「ばっ、速いから！」

額に張り付いた髪を舞わせる風が気持ちよかった

――  
――  
――  
――  
――  
――  
――  
――

んぐっんぐっ……ぷはぁ……

岩「……生き返るな」

滝「……ああ」

クーラーをつけた部屋は5分も経つと楽園と化した。設定温度はそれほど低くないが汗に濡れた制服のせいで体感温度はむしろ寒い位だ

というか俺が大量のドリンクを入れている冷蔵庫からさも当然のようにボトルを幾つかだして投げてきていた。ヴィッテルにコントレックス、エビアン、ボルヴィック、ペリエ、サンペレグリーノ、バル

ヴェール……

水、水、水。怒涛の水チヨイス。なんでこんなに買ってしまったか聞かれるとなんだがやはりボルヴィック以外はどうも合わない。彼女も一応知らない銘柄に興味があるようで一口飲んだものの、顔をしかめると次へ、を繰り返して結局ボルヴィックに落ち着く。……その他大勢の硬水群は甘露へと昇格したようだ。

岩「お前はドリンクキチか？」

滝「……」

ぶっちゃけどうでもいい……と、冷蔵庫から飲みかけのセブンアップを取り出し缶を傾ける。

ほとんど残っていなかったからかすぐ空になった。再度冷蔵庫を開けてみるが今飲みたい……そう思わせる物がない。小さく舌打ちすると飲み物を買ってくる旨を伝える。「ドリンクキチ……」と言う声が聞こえたが聞こえないふりをした



滝「ただいま」

[illegible]

•

•

一言声をかけて扉を開くと、彼女はベッドで仰向けになっていた

……なんだ、また寝てんのか。

と、軽く流そうとしたがどうにも様子がおかしい……

うなされている。

眉間に皺をよせて体にかかったタオルケットの上から胸を抑えて苦しそうに……

滝「おい！起きろ！」

肩を軽く叩く（こうするのが寝ている人を一番覚醒させやすい、  
と思い出す程度は冷静さを保てていた）

滝「おい！」

岩「……う……光？」

目を覚ました、汗が玉をつくって額から顎に流れていく。

岩「光！」

滝「おっと……」

……どうした？また怖い夢みたのか？」

そう言いながら片膝をついて、俺の胸にしがみつくように抱きついてきた彼女を受け止める。

——

——

―――怖いんだ

最近よく夢を見る……  
気がついたら病院で、  
誰も……あんたもない。

凄く、怖い夢

……ずっとおかしいんだよ、  
十年以上待って、  
ようやくまた会えてバカな、でも幸せな日々を過ごせるようになったのにさ、  
会う前は不思議と不安なんて何一つなかったのに……  
今はただ、そんな日々を失うのが嫌。  
みんなに、光に会えなくなるのが怖い。

―――ひさ子にはあんたに依存しすぎて言われた。最初は冗談半分で流してたけど、最近は納得出来るようになった。

いや、指摘されるまでもなく自覚していた。  
光が居なくなったら、あたしはどうすんだろう、  
……考えたくもなかった

『前の』あたしの人生を捧げた音楽という存在も、言ってしまうと両親の喧嘩のせいで失った、自分の居場所を求めてやってたのかもしれない。

『あたし』という存在は確かにここにある、ってそれを誰かに伝えなかったからかもしれない……

いや、もちろん今も昔も、純粋に音楽は好きだ。それは変わらない。

……でもね、あたしは一度知ったから。

心から好きなものを失ってしまう悲しさ、辛さ、怖さをね。

もし。あくまで、可能性の話だけどさ

また声を出せなくなっ、あんたまで失ってしまったとしたら？

ビシッ

—  
—  
—  
—  
—  
—  
—  
—  
—  
—

俯いて喋るこいつの頭にデコピンを叩きこむ。

岩「？」

「???」

何があだかわからないか、真面目に話してる時にこんな事されりや  
そりゃそうだろう

だがこれだけは言ってやらないといけない

滝「アホ。

いいか、失うのを怖れながら何かやろうとしても何も出来やしねー  
よ。声が出なくなってもお前はお前だし、俺はずっとお前の側にい  
てやる、だから何も心配すんな。」

岩沢は目をパチクリしながらやがて息をつき、やがて小さく笑った  
岩「かなわないな……まったく」

……でもさ、あたしかわいくないぜ？

取り柄と言ったら音楽だけで……

ゆりや遊佐みたいになんでもハッキリ決められない、奏や入江みたいに女の子らしくもない。ユイや関根みたいに明るくて元気なわけでもないし、椎名みたいに運動神経が良いわけでもない。……それにひさ子みたいに胸が大きくもない。それでもお前は……」

なんだそんな事か……

何故答えがわかりきった事をわざわざ聞くのか、今言ったばかりだと言うのに。

滝「……お前は自分の事を好きじゃないと思う奴の部屋に入って、ベッドで横になって、抱きつくのか？」

岩「……そんな事……しない、お前だけだ。」

眉を下げて指をいじりながら言う。

滝「俺もだ。」

いいか、お前以外にそういうことした事ないし、する予定もない。お前が音楽キチで、基本的に音楽以外何事にも無頓着な性格で、ボーイッシュで、いつもダルそうな目してても、戦線一運動神経が悪くてちよつと走るとすぐ息切れしようが、」

肩に手を起き一呼吸。

滝「それでも好きだ。ずっと側にいる。」

お前の愛想がつくまで、頼まれなくてもいてやる。だからもうそんな事考えて怖い夢なんか見んな。わかったな」

瞳を潤ませていくのがわかる。

いつも照れ隠しに憎まれ口を叩いて、慣れたフリをしていても……  
そして涙を指でそっと拭う、と手をとって掌に唇を重ねてくる。

たしか意味は……

「あっ」

一度首を振ってやると今度はこちらから瞼と唇に、自分の唇を重ねた

—  
—  
—  
—  
—  
—  
—  
—  
—  
—  
—

岩「なあ……さっきの……」

滝「……行動に関しては我ながら恥ずかしいから言わないで欲しいんだが」

岩「っ！いや、ああ、わかったけど

……胸は？さっきそこだけ言われなかったような……」

滝「……今後に期待だ」

岩「む……」

滝「未来は明るいから気にすんな」

岩「うるさい」



そう言ってデコピンしてやる、さっきのお返しだ。

――いつか聞いてほしいこの思いも

言葉にはならないけど

力の限りを振り絞って

生きていくことを知るから

ありがとう　そう伝えていくから

## Doll（後書き）

タイトルでだいぶ悩んだ……

This is me / Demi Lovato

ちよっと違う。つたない和訳能力動員したけどちよっとイメージと違う……、もっと明るさ少なめでいい。でもいつか使いたい。

ひとつだけ／みつぎ

使いたい衝動に駆られた。というか最終回はコレ使うとFMLって題名決めた時から考えてた、というか影響受けたのモロこれ。そんなこんなでボツ。ん、これネタバレ？

Doll / Lia

だーまえ。あたしにこの感情を与えてくれたのは……みたいな妄想を受信したらもう止まらなかった。GO。私きめえ。

鍵っ子なら知ってたよな？（ごめん、これガンスリの曲）

やっぱり無理。ギャグじゃないと書けない……と言いつつ訳したい気分（ジャンル恋愛？知らないな）。

## 気分はエトランゼ

— — — — —

暑いってレベルじゃない、気温的にももう完全に夏だ。

扇風機の前でヘッドホンをつけてCDを聞いていると、ふとポケットから振動を感じる、震える携帯を出すとディスプレイには光の文字。

P i

岩「もしもし、光？なに？」

手に持った携帯の向こう側からは荒い息づかいと共に、弱々し気な声が聞こえてくる

『まさみ……お前は無事か？

……さっきの反応じゃ無事なようだな……

という事は無事なのはお前とひさ子と入江くらいか……

ユイも関根も……

戦線は、ほぼ全滅だ……

無事なお前らは……いやお前だけは……」

岩「光……？よくわからないが大丈夫なのか！？」

何処だ？家？すぐそちに……」

『駄目だ来るな！

俺は……お前までこんな事になってほしくない……！

お前が無事だと確認できただけでいい……だから、ゲホッ……とにかく……お前は自分の事だけ考えて—————」

ツーツー……と電話が急に切れる

岩「……………！」

気がついたらあたしは走り出していた———

—  
—  
—  
—  
—  
—  
—  
—  
—  
—  
—

……まだ喋ってる途中だったというのに電池が切れてしまうとは  
……なんか誤解してなきやいいんだがな……  
とりあえず充電器にきちんと繋いでおく

それはともかく、だ

……頭痛がする、は……吐き気もだ……くっ……ぐう  
な……なんという事だ……この滝沢が……気分が悪いだど？  
この滝沢が熱がでてフラフラで……立つことが……立つことができ  
ないだど！？

………

クソ、ふざけてたら更に悪化した気がする……  
そう、風邪だ。風邪をひいた。なんか戦線メンバーほぼ全滅っぽい。

……夏風邪をひくのはバカとかそんな話をきいた事ある気がするが……まさかこうも一斉に全滅するとは思わなかった……どんだけだよお前ら……

コンコン

と、ドアがノックされる。

はて、薄情な両親は昨日の夜から息子をおいてプチ旅行に行っていて帰るのは明日だそうだし今家には誰もいないはずなんだが……

ガチャ

「誰だ？」と聞く前に扉を開けて入ってきたのは予想通りというかなんというか……

岩「はあ……はあ……ひか……無事……」

……?」

そしてまさみは肩で息をしながらキョロキョロと視線を泳がせて首を傾げた

滝「来るなって言ったのに……風邪ひいただけだったの……」

岩「……はあ……なんだ」

ぺたんと床にへたり込んで息を吐く。

岩「……紛らわしい電話しないでくれ」

滝「いや1人で暇で暇でしうがなかったから電話したんだが……お前はアホ側じゃなかったんだな」

アホというか少しアホの子になってきているような気がしなくはない。

岩「……せっかく心配して来たら……」

滝「あーすまない、だがうつるといけないから……今日は帰れよ、な？ゲホッ」

岩「……」

軽く殺意の波動を感じたので素直に謝っておく……が本人は何故か踵を返そうとはせず、その場で立ち止まっている。

……なんぞ？

突然何かを考え始めた岩沢を前に思わず体を覆っていたタオルケットの端をつかんで顔の下半分を隠す滝沢。……キモい。女の子だったら可愛い仕草だが、身長170後半のむっさい男がやればキモい以外の言葉など出るはずがない。

岩「よし、決めた」

――――

滝「……何を？」

ん？どうしたそんな捨てられた子犬みたいな顔して。あたしより頭1つ背が高いのも相まって気持ち悪さとキュンとくる感覚が同時に襲いかかってきたぞ

岩「今日はおとなしく寝てなよ、あたしが看病位してやるからさ」

滝「だから！……帰れて……」

急に大きな声をあげ、起きあがろうとした光の肩を抑えてベッドに戻す

岩「なんて顔してんだよ、たかが風邪だろう？彼女らしく心配してもいいじゃない」

滝「……たかが風邪でも、いや風邪だからうつったら喉とかに悪いだろうが」

ああ、なんだそういう事か……

そういやずっと喉とか意識してくれてるよな……自分は体に悪そうなもんばかり飲んでるクセにあたしが飲もうとしたら全力で阻止しにかかる。おかげでいつも水と紅茶ばっかだ。

でも、

岩「そんなの関係あるかよ

ここで弱ってるあんたをそのままにして帰れる訳ないだろう……そ



れとも逆の状況なら帰る？」

滝「ぐ……う……」

そう言っつてやると渋い顔をして黙り込んだ、ぐうの音は出たけど。

岩「ふう……薬は？」

首を横に振る、と同時にグー……と音が聞こえた。思わず吹き出してしまった。

岩「昼もまだなんだな？」

また顔をタオルケットで半分隠しながら、今度は縦に首を振ってくる……はじめから素直にしとけばいいんだ。……しかしいつもは見上げてるアイツがこんな可愛く見えちゃうとはね……

―――なお岩沢のようなフィルタを無しに、一般的に見ればキモい光景である。

―――キッチン

さて、台所を借りた訳だが……どうしよう  
お粥なんて作ったことがない……今まで作った事のある物を思い出  
す。

うどんは煮るだけ、チャーハンも炒めるだけだし、チョコ？……ア  
レは溶かして固めるだけ

……壊滅的なレパートリーの無さだな……

レシピもないし……とりあえず、煮る？イメージ的に煮れば出来る

と思う。

というか料理自体久しぶりだ、お母さんいるし。中学校の頃の家庭科以来か……

……よし、と気合いをいれりと鍋に向かい合った。

—  
—  
—  
—  
—  
—  
—  
—  
—

岩「……どうだ？」

滝「おー……いけるいける。つか、普通に、うまいよ。」

不穏なフラグを立てていたにも関わらず滝沢はあっという間に皿を空にした。

それを見て思わず岩沢も息をつく。

岩「正直初めてで不安だったけど、うまくできたなら良かった…」

「なあと、愛情は最高の調味料、ってな」

岩「ばっ馬鹿だな、恥ずかしい事言うんじゃない……！」

否定しないんだな、  
 と言ってどちらからともなく笑いあう2人。

——ちなみに滝沢は月曜休むこととなるのだが、この時はまだ誰も知らなかった。

誰も知らなかった。

[illegible]

その後岩沢に促され眠りについた滝沢だったが、思ったより体は疲れていたようで起きたのは翌日の朝だった。

滝「……流石に寝過ぎだろ……」

だがその甲斐？あつてか熱は完全にひいたようだ

……と、額に違和感、手を伸ばすとすっかりぬるくなった濡れタオル。

……自分が寝た後までしっかり看病してもらったかと思うと胸が熱くなる。顔を横に向けて目で見ると枕までしっかりと……氷枕の……準備……ま

………？

毛布から見える『アレ』はなんだろうか。俺は赤いタオルケットなんて持つてはいない。だんだんと頭が覚醒してくる。

……現実から逃げるのはやめよう、今までこの光景は何度か見ただろう？

頭を思いっきりCOOLにして毛布の端を掴むと上に持ち上げる。

……ソーキュート。

下げる。

……………この光景に慣れちゃった感があって怖い。……………しかし何故俺のジャージをきて寝るかな……………何処から探してきたんだ。つかブカブカで腕の先隠れてて可愛いなチクショー！

ってc o o lになれといったばかりだろうが。

滝「起きろ、」

ゆさゆさと肩を揺らすとめんどくさそうに片目を開けてこっちを見てる。

岩「……………おはよ光。……………すう」

寝た！また寝やがった！

滝「起きろと言ってるだろう！」

半ば覆い被さるように両肩を揺する。また若干犯罪臭い絵だが別にどうでもいい。

岩「む……………んじゃ起きるからおはようの……………」

……………まだ寝ぼけてるか。……………が別に満更でもないし

岩「へくしっ……………！」

滝「のわっ……………？」

翌日、2人は揃って熱を出し学校を休む事になるのだった……………

P.  
S.  
拭って舐めたらひっぱたかれた。

## **M a i l # 2 (前書き)**

ところで新しい話書いて少し前に挿入したの気付いてる人いる？  
(´・ω・｀)

# Mail #2

$$\frac{4}{11} \frac{2}{0} \dots \frac{5}{9}$$

from  
佐藤

Sub  
バイト終わったよな

何なんだよお前、なんで昨日ライブしてた女子と腕組んでんだよ！俺と一緒に生涯魔法使い貫くって約束忘れたのかよ！

[illegible]
$$\begin{array}{c} 4 \\ \diagdown \\ 1 \\ 1 \\ 2 \\ 2 \\ \dots \\ 0 \\ 0 \end{array}$$

t o まさみ

sub  
今日は

イロイロスミマセンデシタ

[illegible]
$$\begin{array}{c} 4 \\ \diagdown \\ 1 \\ 1 \\ 2 \\ 2 \\ \dots \\ 0 \\ 5 \end{array}$$

to  
佐藤

Sub  
終わった

彼女が現れなければ約束は果たしていただろうが、すまない友よ。  
だが俺は魔法使いにはなれないんだ。

お前はまた音無藁人形に釘を打つ作業に移ってくれ

[illegible]
$$\begin{array}{c} 4 \\ \diagdown \\ 1 \\ 1 \\ 2 \\ 2 \\ \dots \\ 0 \\ 8 \end{array}$$



f r o m 佐藤

s u b (無題)

しね。

あとで

藁人形で音無とか含めて

生徒会幹部全員

に呪いかけてやる

頑張れ

— — — — — — — — — —

4 / 1 1 2 2 .. 1 0

f r o m まさみ

s u b R e ; 今日は

いいよ、別に気にしてない

なんて言うわけないだろ

もうちょっと自重してくれ……

— — — — — — — — — —

4 / 1 1 2 2 .. 1 3

t o 佐藤

s u b R e ;

サンクス。

も う 出 番

が う 思 と い 無

[illegible]
$$\begin{array}{c} 4 \\ \diagdown \\ 1 \\ 1 \\ 2 \\ 2 \\ \dots \\ 1 \\ 3 \end{array}$$
t  
o  
まさみsub  
すまん

でもさあ……気のせいかな？こっちはまだ成長途中？

[illegible]
$$\begin{array}{c} 4 \\ \diagdown \\ 1 \\ 1 \\ 2 \\ 2 \\ \dots \\ 1 \\ 4 \end{array}$$

from 佐藤

sub  
Re;  
Re;

しね。

[illegible]
$$\{ \}$$
[illegible]
$$\begin{array}{c} 5 \\ \diagdown \\ 10 \\ 23 \\ \dots \\ 21 \end{array}$$

f  
r  
o  
m  
姐御

sub  
お前ら

イチャつくのはいいけど場所を選べ場所を

— — — — — — — — — —

5/10 23..26

to 姐御

sub Re; お前ら

お前も藤巻とイチャつきやいーだろー……サラッサラで気持ち良かったのによー……

— — — — — — — — — —

5/10 23..30

from 姐御

sub 藤巻はかんけーねー

相変わらず変態だな……もうちょっと直せよ

— — — — — — — — — —

5/10 23..37

to 姐御

sub はいはい

いいかひさ子よ、黒いインクを缶ごとぶちまけられた紙があるとする。

かなーりびちょびちょにインクで濡れているがまだ一部白いところがちらほら残っている。

だがその白を広げて、黒を消し去ることなど出来はしないだろう？紙に染み込んだインクを完全に取り去る術もありはしないからな。

何を言いたいかわかるな？

— — — — — — — — — —

5／10 23..41

f r o m 姐御

s u b R e ; はいはい

なげーよ

つか開き直んな

紙交換してやろうか？

— — — — — — — — — —

5／10 23..45

t o 姐御

s u b むう……

ごめんなさい

|| || || || || || || || || || || || || || || ||

5／24 21..49

f r o m まさみ

s u b 具合

大丈夫か？

— — — — — — — — — —

5／24 22..00

to まさみ

sub なんとか

もうやだあの悪女

— — — — — — — — — —

5／24 22..04

from まさみ

sub でも無事で良かった

急に倒れるから……背筋が凍ったよ

— — — — — — — — — —

5／24 22..06

to まさみ

sub 危うくその歳で未亡人か

ギャグパートで死んでたまるか

あとまさみよ、広○苑様は背筋は寒くなるもので凍りはしない、とおっしゃっている

— — — — — — — — — —

5／24 22..10

from まさみ

sub いや結婚してない

どうでもいい、本当にどうでもいい……！

あとさ、体の為に休んどいた方が良く早いし早く寝ないと

— — — — — — — — — —

5/24 22..13

to まさみ

sub あと8日で出来るだろう？

えーまだ眠くない

— — — — — — — — — —

5/24 22..17

from まさみ

sub でもあんたが1月にならないと

それにまだ高校生徒だし……

は、早く寝なよ

— — — — — — — — — —

5/24 22..18

to まさみ

sub ほほう

何も俺達、とは言っていないぞ？まさみはあと8日で可能だ、と言っただけで。

むしろ目が冴えてきた

— — — — — — — — — —

5/24 22..31

from まさみ

sub Re;ほほう

[illegible]

t o まさみ

かわいいなあ  
(笑)

[illegible]

f  
r  
o  
m  
  
ま  
さ  
み

誕生日期待してるよ

[illegible]

t o まさみ

悪い寝てた……ってプレッシャーかけるなあ……き、期待してろ

[illegible]

f  
r  
o  
m  
  
ま  
さ  
み

S  
u  
b  
サ  
ン  
キ  
ュ

758

— — — — —

6／3 18..10

to まさみ

sub Re;サンキュ

そりゃ良かった

つか結局全員撃沈したし……土曜であることに感謝したぜ

— — — — —

6／3 18..15

from まさみ

sub Re;Re;サンキュ

いいじゃん。

そのおかげで安心して眠れたし、今日だって1日付き合ってもらえたしね

— — — — —

6／3 18..18

to まさみ

sub よく眠れたな……

多くは言えないが強いて言うならごちそうさま、と言っておく  
2人カラオケはちょっと疲れたぞ……

— — — — —

6／3 18..23

from まさみ





……それは、いや何も言うまい

— — — — —

6／3 18..36

from まさみ

sub Re; Re; Re;

……通報して今のメール見せたらあんた実刑くらうかな？

今度みんなで行く？

— — — — —

6／3 18..38

to まさみ

sub Re; Re; Re; Re;

合意の上？だろう、無罪だ。だからやめろ、やめてください

通報しないなら。

|| || || || || || || || || || ||

6／12 8..39

from 関根

sub 岩沢さんが

来てないよ……

— — — — —

6／12 8..45

to 関根

sub Re; 岩沢さんが

……傷は深いのか

あと携帯の電源はきっておけ、うちはそこらへん厳しいのだ。

— — — — — — — — — —

6／12 21..57

to まさみ

sub 元気だして気にするな

だから明日は学校来い、顔がみれないと……その、なんだ、とにかく来い

— — — — — — — — — —

6／13 18..13

to まさみ

sub こら

保健室登校はやめなさい

……毎朝迎えが必要か？

— — — — — — — — — —

6月13日 18..31

from まさみ

sub Re; こら

憂鬱だ……

えっと、たまになら来てほしいかも……

[illegible]

## ドラマチック（前書き）

誕生日おめ。とか昨日投稿しようと思ったら寝落ちした。ごめんよ観鈴ちゃん。

## ドラマチック

—  
—  
—  
—  
—  
—  
—  
—  
—  
—

果てしなく青い空

さんさん照らす太陽

千差万別に煌めいている波の色……

滝T 「ハッ！ ダンシン！」

ひ 「アホだ……」

消えていく飛行機雲を、俺達はただ見送っていた……

ユ「が、がお……？」

日「そういうのが一番ムカつくんだよお！」

ユ「ギャーギブギブ！」

吹く風に裸足をさらして、焼けた線路の上を歩き続けた……

滝「俺はお前のそばにいて、お前が笑うのを見ていればそれでよかったんだ……！」

まっすぐ交わりあう眼差しのように……  
どんなに汗が滲んでも手を離さないから

岩「もう、ゴールしてもいいよな……」

—  
—  
第3章  
—  
—

— { —  
— } —  
— } —  
— } —  
— } —  
— i —  
— m —  
— m —  
— u — A  
— t n g  
— a e l  
— b e  
— r s  
— e o  
— s n  
— } b  
— } e  
— } a  
— } t  
— } s!  
  
— —  
— —  
— —  
— —  
— —



—  
—  
—  
—  
—  
ありがとうございます……

今年もまた夏が来た――。

滝「なんて夢を見たんだが。」  
ひ「パクリじゃねえか！」

読者一瞬『えっ？なに？予告編？』みたいな流れになっちゃったから！

サブタイの頭文字でバレバレだから！

岩沢とユイキヤラ被ってたから！

鳥○詩地味に改変しただけのナレだったから！

ツツコミ役のアたしが疲れるからあっ……！」

ゼーハーゼーハー肩で息をしながら突っ込んでくるひさ子。つかツバが飛んできた、近い。

岩「……はあ、頑張りすぎだひさ子」

あれ、というかどうしてこんな話をしてしまったんだっただろうか？ふむ、と顎に手を当て、コンクリートの防波堤を歩きながら考える

……ってつまり今がなんかそれっぽい絵になってたからか、なるほ

ど。

何故防波堤なんかがあるって？それはだな、  
俺達は……海に来たのだよ。

—  
—  
—  
—  
—  
—  
—  
—  
—  
—

気を取り直して描写し直すでしょう

果てしなく青い空  
さんさん照らす太陽  
千差万別に煌めいている波の色……

砂浜にたどり着くと着替えに行く女子メンバー達、残された野郎共はパラソルの設置等の任務をテキパキとこなすとその場で服を脱ぎ捨てる。

無論下には水着をはいているので問題はない……小学校とかで水泳がある日は海パンをズボンの下にはいてくるアレだ。

例によって例のごとく野郎の水着描写は極力スルーの方向でいく……高松がブーメランパンツマツチョからふんどしマツチョにクラスチェンジした事なんて果てしなくどうでもいい事なのだ。誰かアイツを通報してしまえ。

トントン

……と、出来うる限り最大の蔑んだ表情を浮かべていると肩を叩かれた。首だけ回してやると満面の笑みを浮かべた日向と藤巻……

……いや、満面の笑みと言うのはちょっと違う。アレだ。いやらしい事を考えている、そういうオーラがある。俺にはわかる。

藤「へへ……見ろよ女子が行った先……海の家だ」

日「そしてシャワー室あたりで着替えるってさっきゆりっぺが言ってたのを聞いたわけだ……」

……

滝「いや……俺も、と言いたいが……まさみは下に着てきてたみたいだしそっち合流するわ」

まさみに遊佐、関根ら一部メンバーは下に着てきたようだ、正直残りに用はない。……言い方が悪いか、訂正だ。好きな女放っておいて他の女の着替え覗きにいく奴がどこにいる。

……というか

滝「もうこっち歩いて来てるぞ」

……早着替えは戦線女子として必須なスキルのようだ。

全く、大体何故服脱ぐだけに近いだろうとこを狙うかね……帰りの時の方が圧倒的に時間の余裕もあるだろうが

日向や藤巻よりよっぽどいやらしい笑みを浮かべつつ踵を返す滝沢の姿は……お世辞にも主人公とは言えそうになかった

—  
—  
—  
—  
—  
—  
—  
—  
—  
—  
—

……はて、

滝「何故俺は埋められているんだ？ スイカ割りやるとかじゃなかったか？」

関「海に来たら誰かを埋めるのは当然じゃん」

人の体に砂をかけつつぺちぺちと固めながら関根が言う。……まあやるのは構わないけど上に乗らないでやって欲しい、少し重い。

ドンッ！

そんな事を考えていたら顔のすぐ横にスイカが置かれた、いや落とされた。

滝「……まさみ、当たってたら相当痛いと思うぞ」

岩「ああ……ずいぶん楽しそうだったからな……」

返答になっていないと思う、訳が分からない。

ユ「岩沢さくんどっちですか？」

岩「こっちだこっち。あと5歩くらい」

………首だけ向けると棒を上段に構えながらこっちにふらふらと歩いてくるユイ。

目隠しをしているところから察するにやはり恒例のアレなんだろう。

滝「ってこっちくんな!!」

冷静に観察してる場合じゃない。冗談抜きであれば死ぬ。

振り下ろされる棒。

失敗をしながらもついに目標を叩き割る姿に周りの人も盛り上がる。  
飛び散る赤い汁、少し中身も出ちゃうのもよくある事だ。

夏の風物詩。

ただし割られるのはスイカか俺か。  
どこのスプラッターだ。

岩「ユイ、思いっきり振り下ろせ」

ユ「はい!」

滝「ヒッ!」

俺は必死に首を動かす、ドッ!と鈍い音とともにさっきまで俺の頭  
があった場所に棒が振り下ろされた。

滝「」

言葉にならないとはこういうことだろう。

岩「惜しいぞ、頑張れ」

けしかけた本人は当世風にカットした髪を指先でいじりながら声援  
を送っている、セミロングまで伸びた髪は似合っていて可愛いんだ  
が……目が怖い。

あれは人生の理不尽、じゃなくて浮気した男を呪う目だ。

滝「お、俺が何をした……」

岩「ずいぶん仲良さそうじゃないか。イチヤイチヤイチヤイチヤと

……」

未だに俺の上に跨りながら砂をかけては固め、を繰り返している関根を見て言う、お前まだいたんか。

関「あ。すみません岩沢さん」

岩「……いや関根も関根だけど……ムカつくのはそのまま受け入れてたこいつだから」

睨まれた。

……女っておっかない、どっかのリーダーのようなおっかない女ではないだけありがたいが。

……俺は上にいた関根もいなくなったこともあり、砂を払って起きあがると不機嫌顔の彼女の体を抱きよせた。  
滝「お前が思ってるようなことはないから、な。だが悪かった、すまん」

……なんか最近謝ってばかりな気がする。加えてキザだ  
情けない、壁とか殴りたい  
後で正座だ。んで石とか抱かないと

岩「……まあいいよ

ほら、あっちでバレーやってるらしいから行こうぜ」

そう言って離れるとすぐ後ろを向いて前を歩いていく。

うーん……こういう心配を抱かせない程に俺がまさみ一筋だという事を再認識させてやらねばなるまい……

メレンゲにクリーム、蜂蜜、トドメにこれでもかという量のサツカリンをたあっぷり混ぜたような激甘な台詞を『誰だお前は』と言い



たくなる程連呼してやる、第三者があーもうお前ら勝手にヤツてくれふざけんな！と叫び逃げ出す程度に。

—  
—  
—  
—  
—  
—  
—  
—  
—  
—  
—  
—

滝「うおお……」

………

こいつは何見てんだ？

視線を追ってみるとやはりというかなんというか……

ビーチバレーでジャンプしたりする度にぶるんぶるんと揺れる、あの二つの肉塊。

あそこだけ重力から解放されたみたいに動いて、跳ねて、改めて見ると凄まじい。そういや90の大会に乗ったとか……加えて最近また「下着がキツイ」だの言っていた。ふざけんな、まだ成長すんのか。理不尽はもうたくさんだ。

……

グリッ

滝「い、痛いぞ」

とりあえずこのアホの足を踏む

痛い？うるさいあたしの心の痛みを知れ。

ユ「仲良いですね……」

岩「……は？」

誰がどうみても喧嘩の真っ最中だと思うんだけど……

ユ「なんだかんだで距離近いじゃないですかー……ひなっち先輩なんてさっきから構ってくれないしずっとカメラマンになっちゃってるんですよ……」

それは……災難というか、最低だ。

……って光、さり気なく肩抱き寄せんな。肌が直接当たって……ったく……

滝「……すまん一瞬心が乱されたが俺は大きさより形派だ……ッ！」

岩

あたしは無言で足にもう少し力を込めた。

[illegible]

日もすっかり傾いてきた。

寄せては返す波

半分程沈んだ夕日

浜辺で海を見ているコイツ

なんかドラマのワンシーンみたい

岩「何してんの？シャワー浴びて帰るよ？」

そう言いながらも光の隣にぼす、と座る。

滝「いや、なんかこういうのっていいなってさ。ロマンチックじゃん」

岩「まあ、ね。確かに綺麗だ」

トン、と

……肩に頭とか乗せてみた、似合わない事したかな

……コイツがロマンチックとか言うから悪いんだ

滝「……ここはお前の方が綺麗だよ、とか言うべきか？」

岩「……聞くな」

台無し。言われたら言われたでキザ、とか憎まれ口を叩いちゃうんだろうけどさ……

滝「ん、まさみの方が綺麗だぞ」  
撤回。

……か、顔が熱い

にやけてないかな心配だ

滝「……お前もまだまだ子供だな」

人をからかって楽しむとか……

少し心地が良かったのは事実だけど。もうずっと子供のままで良いかもしれないとか我ながら馬鹿みたいな事を考えながら、

岩「悪い？」

と笑いながら頬に口付けると立ち上がり、手をつないで帰ることにした

ちなみにその様子をパ<sup>日向</sup>パ<sup>ラ</sup>ッ<sup>チ</sup>に撮られ、後日戦線メンバーにバラ  
まかれる事を2人はまだ知らない。

## ドラマチック（後書き）

イケナイ太陽

↓いやこれは流石にねえわ。

ドラマチック

↓B B B ……使いすぎではなからうか。まあいいや。

ボツネタ。

？

滝「俺ならいつでもまさみを気持ちよく出来る！」

↓R指定かかりそうだからやめた。

？

滝「俺がまさみを気持ちよくしてやる！」

↓R指定かかりそうだからry

改めてこのアニメヤバいな、とか思った

？

海の家に来ると「いらっしやい、かき氷はいかがなお嬢さん」と  
世紀末からきたような見た目の店主（CV・銀河万丈）が俺達に  
話しかけてきた

↓想像したら思った以上にひどかった上にR－G指定かかりそうだったからやめた

# Smash

――深夜、滝沢宅

タツ、タツとかジャラジャラとか音をならしながら、ポンとか通れ！  
！だの言いつつ男達は卓を囲んでいた

滝「なあ……こんな事聞くのもなんなんだが……」  
部屋の主がそんな何気ない空気の中、牌を切りながら口を開いた。  
ちなみにこの部屋には彼を含めて4人がいる。

藤「ポン。ああ？なんだ？」  
だりい、といった目つきの藤巻

音「ん？リーチ、だな」  
keyコーヒーを傾けながら目線を向ける音無



日「歯切れ悪いじゃん、どうしたんだよ」

大げさに手を広げながら何時もの調子で反応する日向

滝「ロン、5800。」

いや……実はな……」

日向が騒いでるが流して続ける

滝「俺まさに嫌われてねえかな……？」

「「ねえよ」」

3人は無言で牌を混ぜる作業に戻った

—  
—  
—  
—  
—  
—  
—  
—  
—  
—

滝「ちょ！うえいうえいうえーい  
待て、なんで断言出来る」

日「つい先週もあれだけイチャイチャしてたじゃんかよ！」  
いやーむしろあれだけいちゃついて嫌われてるかもとかノロケん  
のも大概にしとけよ？

滝「ああ！そーいやあの写真焼き増してくれないか？」

……嫌ってる？岩沢もまるつきり同じ事言いに来ましたけど？  
もうヤダこいつら。

ユイも岩沢にずっとくっついてるし。

なんで俺だけロンリー？why？

日「……で、なんでそれを俺達に言うんだよ？」

滝「いやだってお前ら……そういう相手いるだろ？」

……ああ、なるほどね。ふんふんよおーし、そういう事なら手伝  
ってやろうじゃん！

音「……あれ？んじやなんで大山と野田はいないんだ？」

滝「野田は役に立たないし大山は先日的一件以来椎名の評価がかわ  
いから怖いに変化してちょっと距離おかれ気味だ。」

そ、そんな事になっていたのか……

滝「だがそんな事は今はどうでもいい」

いいのかよ……

滝「……最近受験勉強ばっかでメールもあんまりしてないしさ……」

いやそれ麻雀打ちながら言うとぶち壊しじゃねーの？って思ったけど……

ぶっちゃけ俺もなんだよなー……最近ユイと……あれ？会ってすらいねえ。

日「……」

もしかして人の事心配してる場合じゃなくねーか？

滝「帰りも学習会あるからあんまり一緒なれねーし……毎週路上に顔出して、それくらいだ……」

………

滝日「うええー！！どうしたらいいんだ音無いいいい！！」

音「……なんで日向まで？」

———

音「とりあえず……そこまで切羽詰まってないなら勉強から離れて

もいいんじゃないのか？」

滝「おお、元生徒会副会長とは思えない発言だ」

藤「元生徒会長はいつでもこうだったかな」

……オーマイゴツシュ。

事実なので言い返せない。同学年だとこんな悩み生まれないだろうしねー……余裕なんですかそうですか……

日「なあキスってどんな味するんだ？」

藤「……マジかよ」

なんかアレな事口走ってる奴は放っておくとして……明日、いや今日か。路上あるし聞きに行くかな……

っていうか、え日向、お前それマジなの？

[illegible]

朝が来た。

カーテンに隙間から光の波が入り込んでくる、眩しい程直接当たりはしない、そんな明るさで覚醒する彼女ではないが「ん、朝？」くらい認識はできる。

上半身を起こすとやわらかな光に美しく映える紅の髪は、繊細にして華麗。長さは肩にかかる程に切り揃えられている。

岩「んん……ふわあ」

可愛らしく、無防備な息が漏れる。

パジャマが少し捲れて、へそが出ていたがはしたないと言うより、ただただ艶かしいばかりだ。

んー、と腕を伸ばす。この一瞬が、どうにも気持ちいいと感じる。だが休みの日だからって惰眠をむさぼってばかりではいけない。

低血圧気味なせいかまだ寝ぼけながらパジャマのボタンをゆっくり外す、するりと小さな衣擦れの音。

軽く折り畳むとパーカーとスカートを出してきて身につける。白を基調とした、ゆったりとした雰囲気のある服。湿っぽくなく、派手すぎる訳でもなく、好みの服

と、ガチャ、と扉が開く

滝「ご飯用意出来たから早く降りてこいよー」

岩「んー……」

生返事をしながら髪に軽く櫛を入れる。

少し伸びたかな……でもまあ校則違反とかじゃないし別に伸ばしてもいいか。自由ってやつは素晴らしい。

母「こら、夏休みだからってちゃんと1人で起きなさいよ？」

岩「うー……」

一階に降りると洗面所で顔を洗って歯を磨いてから食卓につく。

昨日は路上行って全身筋肉痛……むしろもっと寝ていたいところなんだけどな……

目玉焼きに塩胡椒をふりかけると、箸で切り分けてご飯と一緒にしつかり噛んで呑み込む。やっぱり黄身は固まっていた方が美味しいと思う。

滝「おかわりは？」

岩「半分ちょうだい」

目を擦りながらお椀を差し出す、一口残しておくのがマナーだ。親しき仲にもくって言葉もあるし……

……ん？

……

………は？

岩「え？なんでいんの？」

滝「ん？」

思わず二度見してしまった。

滝「まさみ、朝の挨拶は『おはよう』だぞ？」

聞けよ。人の話を聞いてくれよ。

滝「最後に『だーりん』とかつける奴もいるそうだが、むず痒いだろうから俺はそこまでは求めない。安心しろ」

何を安心しろと言うんだ。というかあんたが求めなくてもあたしは説明を求めているんだけど無視か

滝「よし、決定だ。  
夏休みなんだし久しぶりに今日はずっとお前と過ごそうって思っ  
てな。寝間着の用意も完璧だぜ？」



岩「ちょっと待て光。

あんた今ちようどその話をしていたかのように言ってたけど、あたしは今初めてきいた、つか今さり気なく凄いこと言わなかったか？」

光はちつつちいゝつ、と微妙に格好付けて言いながら、一本だけ立てた指を振り、あたしの目をしっかりと見て、言う。

滝「悪かった」

岩「謝るのかよ」

謝られた。

滝「だがそんな些細な事は良いじゃないか」

舌の根乾かないうちに開き直った。今日はなんかやたらハイテンションだな……疲れる

滝「今日は例え某国の大統領がうっかりヤバイ弾頭のミサイルの発射スイッチを押して世界が核の炎に包まれたとしても一蓮托生、ずっと側にいるからな……」

間違はなく史上最悪のうっかりだ、そんな人生の終わり方なんてまた学園に逆戻りだ、向こうも2000人なんて軽くオーバーしてしまうと思う

……というかあたし達どころか何千万の人が一蓮托生……笑えない。

母「仲が良いわね」

……何たわけた事を言っているんだこの母は

そして光、あんたはどうしてそんな満面の笑みを浮かべて聞いているんだ

しかもいつものニヤニヤ、じゃなくてニッコーっていう感じで、久しぶりに見た。

滝「ああ、どうもお義母さん。お出かけですか？」

母「ええ……それで夫も私も今夜は遅くなるから……申し訳ないけどもまさみの事頼めるかしら？」

な、何たわけた事を言っているんだこの母は

岩「いや、ちょっと、お母さん？」

母「んじゃ頑張りなさいよ」

言うや否や行ってしまった……え、何を？

岩「んーと……今日は部室行って練習しようかと思ってたんだけど、一緒にいく？」

……光？聞いて――――

滝「ん？あ、ああ、チェリーコークとシエラミストはそれなりに好きだぞ」

何か動揺してるみたいだ。全く会話が続いていない。

岩「いや、部室行くけど一緒に行くか、って」

滝「ああ、うん、行くか」

そう言うが……

岩「……何してんの？」

滝「部屋だろ？頑張れとのお許しまで出たのだから頑張らないと」  
岩「脱ぐな……おい脱ぐな」

滝「暑いじゃないか。オペレーショントルネードを実行しないと。俺は一回くらいはお前も巻き上げられる側の気持ちを知った方がいいと思う。」

それはとてもいい気分だからな。

な。

そう思わないか？

思わないなんて言わないよな？

思わないなんておかしい……。

お前は思ふべきだ。

思つて。

思ふだろ？

そう思ふだろ？」

あ、ヤバい。これはヤバい。

何がスイッチになったかはわかんないけど目が据わっちゃってる。

前にあつちで二回くらいこうなったけど、とんでもないメにあつたのはよく覚えてる。

岩「ちよ、ちよっと落ち着けよ。何をする気なんだよ」

滝「はは……何言ってるんだ。これだけずっと一緒にいてきて俺の思考のパラダイムをお前が知らないとかありえないだろ

つまりわかつてるんだろ？

わかつてるに決まってる

わからないなんて言わせない

わかつてなくちゃおかしい

わかつてるよな？

わ・かっ・て・る・よ・な？」

両肩に手を置かれて一気にまくしたてられる、正直怖い。

怖くてとっさに近くにあったギターを手にとって、振ってしまった

……

—— ——— ———

滝『コレ見ろよ……壊すためのギターが5000円で売られているんだってさ』

岩『……ギターは大事に使うべきものだろ』

滝『同感だ。修理と手入れを繰り返していると愛着もわいてくるしな』

岩『そういうパフォーマンスしてる人は欲しがるんだろうけどね、

あたしは……』

滝『でも音はどうなんだろうな？』

岩『……』

—— ——— ———

そんなこんなで光が買ってきた『コレ』

一振り5000円……か……少し気持ちよかった。

あと叩きつける音の良し悪しはわからないが……イマイチだった、  
と加えておく

—  
—  
—  
—  
—  
—  
—  
—  
—  
—  
—  
—

滝「何が駄目だったんだろう」

音「……途中で欲望に負けたところだろ」

ああ……あそこか

日「お前んとこの兵士、砦を攻略出来る日はくるのか？」

なんつー危ない喻えをしてくるのか。

しかしこいつら人がどんな羨ま危ない状況に置かれていたかわかり  
もしないで散々に言ってきやがりますね

滝「……はっ、日向に音無、お前らは砦以前にあの壁を突破してやれるのか？」

壁も壁、あの絶壁を」

ちなみにうちのは見た感じB位ではないだろうか、うん、控えめ。だがそれ位がちょうどいいと思う。

後日、滝沢は自分がうかつにも口に出してしまったこの言葉を、ユイと奏に襲われてから、文字通り死ぬほど後悔する事になる

――  
――  
――  
――  
――  
――  
――  
――  
――  
――

一発ネタ

奏「……………何かしら？」

……………70前半。負けませんから

入「ん、どしたの？」

……………80くらい……………チッ

関「ユイ……………何処見てんの？」

……………ん180くらいかな。チッ

岩「もっと正確に、集中しな！もう一回！」

……………78、55、はとおっとこれは禁則事項でした。

遊「…………………………」



70後半？チッ

椎「……浅はかなり」

85くらい……浅はかな胸ですね。ペッ

ゆ「さあ今日も張り切って行くわよー！」

85くらい……クソッ

ひ「そこよれんな！歌うか弾くかどっちかに――――」  
90……こ、これほどとは……

松「お、俺はロリコンではない……！」  
100cm over!?

ユ「クソッド畜生がああっ！！」  
日「松下五段いるのかソレ!?」

## **S m a s h**（後書き）

ぶっ壊したギター、リサイクル可能だそうです。  
ただし間違っても人を叩いてはいけません

次は普通にイチャろう

## お知らせ

“『引用』とは、著作権法第32条に、「公表された著作物は、引用して利用することができる。この場合において、その引用は、公正な慣行に合致するものであり、かつ、報道、批評、研究その他の引用の目的上正当な範囲で行なわれるものでなければならない。」”

……………あれオワタフラグ？

“一般には、次のようなことが求められています。”

“引用することが、オリジナルな文章（本文）を表現するために必要であること 他人の文章などを引用することで自分のオリジナルな文章がクリアになる（補強される）、など引用することが有用であることが求められます。”

“自分のオリジナルな文章が主（量的にも質的にも）であり、引用部分が従であること”

“引用された著作物の出典が明示されていること（著作権法第48条）”

引用と転載 (<http://www.geocities.jp/Milkyway-Kaigan/2534/quoteation.html>) より

さて、どうしたものか。

とりあえずオリジナルが主、と言いたい。これがダメと言われたら一から書き直し……？

無理です(＊・ω・＊)

その時は匙投げます

一応『曲名のみ掲載は問題になり「にくい」』そうなのでサブタイトル全変更は流石にない、と考えたいです……

というかサブタイトルとかただの英単語の羅列ですよと開き直ってryごめんなさい嘘ですどうしよう大丈夫だよねこれからも続けないよね

……今冷や汗ダラダラ。

えーとまず引用で、作中に歌詞出てきた曲名全部……？書けばいいのかな？

Girls Dead Monsterから  
crow song  
alchemy

my song  
last song  
hot meal  
god bless you

……あと他にはMarinaの星空から引用しました、hello  
も……あ、これは前書いてたっけかな

……あとある……？  
わからない……

……前から万が一の時に備えてバックアップは取っております  
が……いや弱気になってどうする。

正直480KB書き直せとか無理だし（・ω・、）

えーと……上に書かれてない曲の歌詞とか見かけたら連絡をお願いします（ゝA、）

あと考えたらgod bless youとか歌詞書いてないよう  
な、、いや一応書いてところ。不安。

失敗した失敗した失敗した失敗した失敗した失敗した失敗した失敗した失敗した私は失敗した失敗した失敗した

消されたら何処にいくのか……

そんなこんなでクレバスランプが去年だったCD聞きながら現実逃避しつつ色々見苦しい事書き綴ってみた……ああああマジどうしよう  
うふふRain song-another episodeは  
いいなあ……歌詞とか含めてものっそいい良いアレンジやろコレ。は  
はは、は。

## 夏祭り

――――

なあー、と小さな鳴き声。

ベッドでうつぶせになりながらちらり、と鳴き声がした方を見ると、窓の外で機嫌良さそうに尻尾を振りながら猫がこちらを見ていた。思わず笑みがこぼれる。いいな、かわいい。

夕暮れ時のこの時間帯、涼しい風が部屋の中に入りこみ、読んでいた雑誌がバラバラと音をたてる  
慌てて指を挟むが時すでに遅し。……何ページだっけ

滝「なあー」

……今度は猫の鳴き声ではなく、随分と慣れ親しんだ声。

岩「……」

うつぶせのままちらり、と声のした方を見ると、窓の外……屋根の上で機嫌良さそうに（尻尾は見えないが）光がこちらを見ていた。

思わず乾いた笑みがこぼれる。何やってんだ、こいつ。

近寄ってデコピンを叩き込むと、冷たい汗をかきながら、滝沢は足を滑らせてバタバタと音をたてながら岩沢の視界からフェードアウトしていく。

滝沢は慌てて指を、手を、窓枠とか触れるものを何でもいいから掴もうとするが時すでに遅し。

……うーん、本当に何ページだったけ

滝「って殺す気か!？」

今度はドアから入ってきた。

さっき見ていたページに今度は指を挟んでから客の対応に当たる

岩「いや前窓から夜這いに入って来た奴がいてさ、それ以来窓から入って来ようとする奴にはお引き取り願ってるんだ」

滝「また結構古いネタを……」

つかお引き取り願うってお前へタしたらアレ息を引き取っちまうわ  
!」

岩「……うまいな」

滝「やかましいわ!」

相変わらず元気だなあ……

滝「ああ、そうだ。本題なんだがな

……今日花火大会がある、で、行かないか?と誘いに来たわけだ。」

そんな事を思っていると、光は思い出したかのように言ってきた

花火大会……そういや今日だったか

この部屋からじゃ見えないのは去年確認済みだからな……いいかもしれない

岩「相変わらずいきなりだな……」

滝「慣れろ、んじゃ外で待ってるから準備終わったら行くぞ」



……いつももうちょっと時間に余裕をもたせてほしい……というか頼むからイエス、ノーの意志表示をさせてくれ。

そういやあっちの世界でYES／YES枕を渡された事もあったな  
 ……顔真っ赤にしたひさ子に意味を教えられてあたしも真っ赤にな  
 りながら2人でボコったのを思い出した……って何の話だったつけ

ああ、そうだ。準備か。

今の自分の服装をしてみる、ジーパンに半袖のシャツ……

岩「別にいいか、着替えなくても……」

花火見るだけだし、  
 と思っていたところでドアが開いた

母「話は聞かせてもらったわ。」

正直ドアの外でずっと待っていたの？と聞きたくなるくらいノタイミングで登場してきた母親。……最近周りのテンションが高いような気がしてならない。

え、  
 とうか何でそんな笑顔なんだ……？

[illegible]

……遅い。

準備って言ってもまさみの事だし……ぶっちゃけ財布と携帯みたいな何時も持ち歩くもん（あとウォークマンとか）だけ持ってすぐ来ると思ったんだがな……ああそれ探してんのか？まったく、部屋の掃除はきちんと……ん？してたような気が……

1人でそんな事を考えていると玄関のドアが開く音。同時に

岩「悪い、待った？」

と、……声。

………

……思うに浴衣を考えた奴は天才だと思う。

上半身のラインは隠し、下半身のラインは出す。

普段丈の短いスカートばかり穿いてるっつのに見えないのがこれほどまでに色っぽいとは……ちなみに浴衣も着物も豊かでない方が似合うらしいが、あ、いや、なんでもない。

岩「あ、いや、これは母さんがだな

……あーもうニヤけんな馬鹿……」

ああ、もお……にやけんなばかあ……に聞こえるあたりもう末期か

もしれない。

あとチラ、と後ろの玄関を見ると満面の笑みで親指を立てながらグーを突き出す姿が見えた。こちらでも親指を立てて返すと腕を突き出したまま親指の位置を人差し指と中指の間に替えてきた。満面の笑みのまま。無視しよう。似なくて良かった。

滝「……いや、すごく似合ってる。綺麗だ」

岩「ほんとか？……サンキュ」

そう言っていると手をとって屋台が出店している方へ歩き出した。

……親御さんが見てるんだからわざわざ恥ずかしい思いをする必要はないだろう……

—  
—  
—  
—  
—  
—  
—  
—  
—  
—  
—

ひ「よお岩沢来てたのか……って浴衣着てきたのか」  
日「おおーすげーカワイイじゃんか！」

やっぱりというかいるんだなお前らは。あまり邪魔にならない場所に、だがそれなりに大きなシートを広げて集まって飲み食いしている姿を見て少し乾いた笑いが出てくる。

日向に軽く、いや割と本気で一発入れようと思ったがユイが既に制裁を加えていたのでやめておいた。いいざまだ。でも女の子がロマロスペシャルなんて使うもんじゃないと思う……やめなさいはしたない。

して言われた本人を見てみると何時もみたいに無表情というか素っ気ない。

岩「別に日向に言われても嬉しくもなんともないし……」

滝「……まさみ、すげー可愛いぞ」

岩「馬鹿……みんながいるじゃないか……」

……む、ぐ、おお……

ゆ「よくそこまで露骨に反応が変わるものね……ほら、野田君行くわよ」

花より団子、と言った様子で出店の方へ歩いていくゆり。

滝「俺達もなんか買いに行くか？」

岩「……鼻血拭いてからな」

なかなかの破壊力だったとは言っておこう

\_\_\_\_\_

滝「……で、なんでお前らにも奢らなきゃならないんだ？」

財布の中身を根こそぎ持つていった元凶達は唐揚げやら焼きそばやら綿あめやらたこ焼きやらケバブやらフルコースに舌鼓を打ちつつ

花火を見てキャーキャー黄色い声を上げていた。

関「そう言いながらも買ってくれるたつきー流石だよ」

入「すみません……ご馳走になっちゃって……」

……関根はともかくとして入江とか口では申し訳そうにしてても光るブレスレットと光るネコミミまで買わせてきたのを俺は忘れない。

ユ「ユイ☆にゃーん、ほら岩沢さんも！」

岩「……ま、まさ、にゃん？」

無論軽く嫌がられたがまさみにもつけてもらった。

岩「……やっぱり外す……」

「「「「えー」」」」

周りの一年女子同盟（＋１）からは黄色いブーイングがあがる。

こんな機会そうそうないんだからちゃんとつけてもらわないといけない。

滝「猫が耳を取るなんてそんなの駄目だろう、まさにゃん」

岩「……割と本気で殴りたい」

それでも耳はとらせない

滝「もしとったら某国民的猫型機械人形が耳を失って黄色から青に変わったように、俺達のハイテンションな黄色い歓声も青色吐息に変わってしまうぞ？」

無茶苦茶な事言ってるような気がしないでもないがそれはそれで嫌らしく、視線を交わしながら（片方はジト目で）見つめ合う２人……

とその時3尺玉が爆音と共に花を咲かせた。

衝撃波というのは大げさだろうがそういうものを感じて、結構びつくりして音の鳴った方を見、またゆっくりと視線を交わす。

そして吹き出した。

今日はコレを見に来たんだろ？とお互いに言うかのように、肩をすくめながらシートに腰を下ろ……した岩沢の膝に滝沢は頭を下ろした。

岩「ったく、何を見に来たんだよ」

滝「綺麗なもんを見に来たんだよ」

花火って言えよ……と、花火の色だけだろうか、赤に照らされた彼女に手を伸ばし、その顔を引き寄せようとして……

またも鳴った大音量に2人して驚かされてビクツとなったのは言うまでもない

―――終了後、帰り道

滝「そういやだな、今日は8月9日でハグの日でもあったな」  
手を繋ながら静かな夜道を歩いていると、突拍子も無く訳のわからない事を言い出した。

は？、と顔を向けると普段あんまり見せないような凄い真面目な顔をしていてほんの少しドキッとした。



頭でピカピカ光っている耳と子供に人気らしいキャラクター型のジュースが入ったボトルが首から下がってなければ「ほんの」と「少し」がなくなってると思うくらい。はずせ。

滝「だから今日は8月9日でハグの日だった。俺はハグを要求する10cm位まで顔を寄せてきた……近い。そして目が結構マジだ。どうしてこうさっき思いついた、みたいなネタでここまで真剣になれるのだろうか。

岩「……残念だが『今日』は過ぎちゃったみたいだけど？」

えゝと顔をしかめる光に携帯を開いてやる。ディスプレイには8／10 00・01の文字。

岩「惜しかったな……」

ハグの日とかよく思いつくもんだな……でも別に周りに誰もいないみたいだしハグの1つくらいしてもいいかもしれない……

そう思って半歩踏み出そう、としたが肩に手を置かれてそれは叶わなかった。

……なに？相変わらず目がマジだ。

滝「ハグの日は終わってしまったのか……」

いや、うん。そう言ってるんだけど。

滝「なら今日は『ハグの次』の日だな」

岩「なあ、それ区切る所間違ってるのか？」

滝「で、まだ財布には一万弱残っているわけだが……俺の部屋とどっちがいい？」

岩「急に何を言い出すんだこの歩く超展開が」

何度も繰り返すが目がマジだ。

滝「まさみ、青の中に蝶が舞ってる浴衣が実に似合っている、似合っていた。」

岩「あ、ああ、ありがとう」

滝「だがな、さっきから鎖骨とかが浴衣から覗いて眼福……ではなく、目に毒だ。」

そのくせお前結構無防備に抱きついてきたり……俺はここ数ヶ月ずっとだな」

え、えーと……つまり？

滝「……そろそろ、だ。覚悟を決めてもらっていいか？」

岩「え……いや、ちよつと」

滝「……嫌か？」

……そこで真面目な顔をするのは反則だ

4 R ダブルノックアウト

## 無題

—  
—  
—  
—  
—  
—  
—  
—  
—  
—  
—

・

……何時ものように重たい瞼を開くと、

光の顔の超ドアップだった。

え、なに？

自分が置かれた訳のわからない状況に声が出てこない。

頭もごつごつした腕に乗っかって……おまけに、着てないっぽい……

……色々耐えられなくなって離れようと身体を動か――  
岩「……………いッ！」

そうとして、下腹部の鈍痛に思わず顔をしかめる。痛みのせいか意識が一気にクリアになった。

やってしまった……

凄い事してしまった……内容的にはノーマルだったけど、うん。

でもわかってはいたけど痛い。初めては2回目でも痛い。それをわかるやつなんていないだろうけどさ……まあ次からはそこまで――  
――

と、そこまで考えて次を期待している自分に気づいて頭を抱えた。

……はあ

……いや、でもあの時の幸せな気持ちをなんて言ったらいいんだろう……あれがあったから、今はこの鈍痛すら愛おしく感じてくる

そしてふと思う

……母さんと父さんも……お互いの事愛し合って、こんな朝迎えてたのかな……

今の母さん達も……「前の」母さん達も出会った頃はお互いの事盲目的に好きだったのかな……

こんなに幸せなのに不安になるのはどうしてだ？世の中に絶対なんてありえないから？

……あたし達は今の母さんや父さんみたいに、なんだかんだで楽しくて、幸せと言える人生を送っていけないのかな……？

岩「……どう思う？」

返答がないとわかってても頬をつつきながら話しかけてみる

……相変わらず気持ち良さそうに寝たままだ。

……いや、返答はないって思ったけどさ、少しくらい反応してくれ  
てもいいじゃないか

今度は引っ張ってみた

痛そうにはしてるけど起きる気配が無い

鼻を摘んでみた

ふがつ、と一瞬反応したけど何事もなかったかのようにすぐ口で呼  
吸しだした

白髪を見つけたから思いっきり引き抜いた

……それでも起きない

こいつは人がセンチな気持ちになってるってのに、どうしてこう空気が読めないんだ

……寝てる相手に空気を読めってのもアレか

滝「ノリツツコミよりも俺の苦しみの事を考えて頂きたいわけだが……」

……心の中の呟きに突っ込んでくるな、しかもそこだけか

岩「狸寝入り？」

滝「狸で結構。でも眠ったお姫様を起こすのは何時だって王子様のキスと相場が決まっているだろう？」

……でもする気はないみたいだから苦しむだけなら、って事で起きた」

岩「……というかヒーローがあたしでヒロインがお前なのか」

……違和感が無さそうなのが何かやだ

滝「まあその時はつい舌入れてやるつもりだったが」

岩「何がつい、だよ。そんなお姫様がいてたまるか」

滝「美女が野獣、っていうボケだったんだが……」

岩「……ずいぶん私欲にまみれたボケだな」

つい1分前までの気分は何処へ行ってしまったのか……本当に頭が痛くなる

滝「……いや、さっきからずっとそんなお前見てたらな……」

岩「は……？」

—  
—  
—  
—  
—  
—  
—  
—  
—  
—  
—

は？ ってお前何でそんな驚いたような顔をするんだ……  
当たり前じゃないか……

滝「俺がお前の事をどれだけ考えてるとおもってるんだ……」  
岩「な……お前、ずっと考えてたとか……」

急に胸元をタオルケットで隠したかと思うと睨みつけてきた。

……あれ？

岩「人の気も知らないでお前はそんな事ばかり……」

片手はそのままにもう片手を振り上げる、というかそれでも俺の片手というか片腕は未だに枕にしたままなのか



……あと俺はグーかパーで気がすむなら理由はわからなくても受けてもいい、と思っっているが……チヨキは勘弁してくれると助かる

岩「ずっと見てたとか考えてたとか……欲にまみれたってのも否定しなかった……！」

滝「いや！な！ち、違うから……」

なんか俺を見る目が変わったと思ったらまた勘違いしてるし……しかも悪い方向に……

滝「いいか……お前がなんか悲しそうな顔してたから、なんとか笑わせようとしてたんだよ……」 私欲にまみれた” じゃなく” ボケ” がメインだっつーに……

いや、確かに改めてそう言われるとお互い結構ヤバ気な格好ではあるけどさ……

滝「今が楽しければいい、ってわけじゃないけどさ……今が楽しくなちゃ、損だろう？」

だからウダウダ1人で悩んでないでんじやないと言うことをだな————

あたふたと弁解しているとあげていた腕を引っ込めてバツが悪そうにこっちを見てきた。

岩「な、ならいいけどさ……」

そしてトン、と頭を俺の胸に軽くあてて、小さな声で「ありがと……」と呟く。

俺はうなじの良さってのを初めて知ったわーとか場違いな事を考えながらその小さな肩を包むように抱き————

岩「……光？」

滝「なんだ？まだ不安な事でもあるのか？」

岩「……いや、1つ聞きたいんだが」

———寄せようとしたまま硬直した。

……頭を抱くようにすると抱かれた側の視線は当然下を向くわけで……

岩「———本当にお前、『悲しそうな顔』しか見てなかったのか？」  
滝「」

……俺は健全な男の子なのだ。

ないわー……とか言われそうだとしてもそうとしか言いようがない。

ごくり、と唾を飲みこもうとして……

俺は喉がカラカラになっている事に気付いた。そのくせ汗は次から次に流れ出てきて、イロイロな事情（情事？……ってやかましいわ）で汚れたシーツを更に汚してくれている。

岩「あ、相変わらず変態だな……」

……クソっ、反論したいのに100%そういう理由がない訳じゃないから反論出来ない……

てかコイツも顔真っ赤になってるじゃないか……熟れすぎたトマトのようにくみたいな表現が出来るくらいに。……歯槽膿漏の表現では断じてない。

……こうなってしまった俺がどうするかは、選択肢はこんな所か

？平謝り。無様に変態だと認め謝る

？戦略的転進。つまり逃げる

？開き直る。変態で何が悪い？

ノン。

この状況でそれって何のプレイだ。それに男の子なら仕方ない事なのだ。謝ってはいけない、だって僕は悪くないもん———  
？、ナンセンスだ。

？、ナンセンスだ。

何故かつて、捕まる。Q. E. D.

と、  
いう訳で……

[illegible]

滝「結局そのまま第二ラウ……って死ぬ死ぬ死ぬ！」

岩「うるさい黙ってて」

ひ「よくんなこと喋りながら出来るなおい……あと藤巻切り下がりをめろって」

藤「おお、わりい」

某携帯ゲームの中では猫○事場を発動させていたShineがMasamiの振り回した狩○笛に小突かれたり、槍を構えていたHisaがMarkieにこかされていたりしたりする。

岩「光はshine……」

滝「間違ってないけど……悪意を感じるのは何故だろうな……」

MasamiはShineの近くに大タ○爆弾や小○ル爆弾を置いていく。

……なんでわざわざひさ子達の目の前で言うのかコイツは。

……コイツの頭はエロスで出来ている、体も同じだろう。

ただの一度も自重せず、ただの一度も自制しない。そうしていつも、恥ずかしがるあたしを見ては楽しんでる変態。

……等と、この前本人がそう言っていた。

加えて自分で言っただけで悲しくないか？と聞いたら

滝「見苦しく否定するより本当に自分がおもってる事を言う方が人間らしく生きていけるだろ？」

岩「……内容にもよる」

何言ってんだよ、頭大丈夫か？といった顔つきで返されてつい拳を握ってしまった事を思い出した。  
どっちかって言う则自分の頭の方がヤバい事を自覚してくれないかな、と思う。

藤「別に今更だがな……」

滝「……そーいや藤巻だつてこの前朝電話したらなんか誰かのいびきが……つてひさ子おま、何してんだ！」

槍を構えて突進してきたのにひかれて溶岩まで吹っ飛ばれる、そして起き上がった瞬間力尽きました、の表示が画面に流れた

ひ「いいざまだぜ」

ポニーテールを揺らしながら、ひさ子はケタケタと楽しそうに笑う。  
……鬼。

その隣でぐっじょぶ、とまさみが親指を立てた。

ふと思う。

こいつらは意識してないだらうけれど……

滝「恋人がいじめられてる姿見て楽しむとか良い趣味してるぜ……」

岩「あんたにだけは言われたくないね」

親友につられてこっちもくっくくと笑っている

こーやってくだらない事をしているだけに見えても、それは実は掛け替えのない事なんじゃあないだらうか。

くだらない事もそうでない事も全てひっくるめての青春時代を今、送っているのだ。

そんな時代を送れなかった“彼ら”が“俺達”であり……いや、俺達『だった』。

藤「そろそろ終わりにして……麻雀でもどうだ？」

岩「ちよっと、ひさ子はこれからギターの練習付き合ってもらうんだけど」

ひ「どっちにすっかな……」

今こうしてそんな人生で最も幸せな時間の一部を送ったら、子どもの時代を終えたら？

将来なんてもんはずいぶん近くにあるってのに、見てこなかったのは大人になりたくなかったからじゃないのか？

あの世界だって言わばそんなネバーランドに近いものだったのかもしれない。

ひ「まあ、とりあえず滝沢、なんか飲み物おかわりよろしく」

滝「……へいへい」

でもいつかは大人になるとして、ウダウダ悩んでもしょうがないか。

今が楽しけりゃ良いってわけじゃないけれど、今が楽しくなけりゃ損だ。

なあ、そうだろう？

岩「あ、光。美味しいなこの冷蔵庫に入ってたチョコ、何処で買った？」

滝「俺のデルレイがあっ！！？？」

……細かいことは考えずのんびりと行こうか

## 無題（後書き）

山無し落ち無し意味無し。

書けるかつ……！前回のあの終わりに続けてなんてっ……！消した文字約10KB……！なんという行き当たりばったり……！

とまあ正直ネタが切れ、げふん。グダグダが続く予感しかしないの  
で……しばらくは死後の世界編の追加エピソードみたいな感じのを  
書いてこうかな、と。

終わったあとにネタが思い浮かぶとか有りすぎて困る（ゝ・ω・  
、）



## **Free star (前書き)**

時系列はdepartureとangelの間あたり

## Free star

――岩ひさ部屋

ひ「あちい……」

一体何度なんだ……？と温度計付きの時計に目をやる

……38度

うわぁ……。

その2桁の数字を見ただけであたしの体感温度も何度か跳ね上がった気がする

最近ずっと熱帯夜ってやつを満喫しているが死んだ後くらい快適に過ごしたいもんだ（いわゆる地獄なら諦めるけど）。神様がいるなら融通を利かせたいほしい

加えて蝉の鳴き声がやかましい。

あれのせいであたしのストレスが上昇カーブを描いていると言っても過言ではない。

……あの鳴き声を出すときに摩擦熱が発生しているはずだ。きつとヤツらもこの気温の上昇に一役買ってるに違いない。……ねーよ。

やかましい鳴き声を聞きたくないし窓を閉めたいけど……そんな事したら弱い女の子は絶対蒸されて死んじゃう。残機無限でもそんな死に方選びたくはない。でもこのままこの部屋にいても、やっぱり干物になる気がする。

やかましい鳴き声の他にも聞こえてくる音がある。

ザーザーと、ルームメイトの岩沢がシャワーを浴びている音だ。

……羨ましいぜ、ったくよお……

だけど羨ましくても今のあたしには待つ事しか出来ない……ルームメイト、同性とはいえバスルームに乱入なんて出来ない、あたしにそっちのケはないし。

だから羨みながら、あの時グーを出さなかった過去の自分を恨んで待つしかない。

岩「なあひさ子」

ひ「うわ！……ってびっくりした」

振り向くとハーフパンツとTシャツを着た岩沢がいた。

いつの間にあがってたんだよ……いやボーっとして気づかなかっただけか。

でもこれでようやくこの空間から逃げ出してべつついた嫌な汗を流せる、38度の気温と38度の温水じゃ心地よさが段違いなのだ。

岩「ちょっと聞いて欲しい事があるんだ……」

ひ「……何？」

ああこんな状況で、やだ、と言うのをぐっところえて友人の話聞くあたしはなんて良い奴なんだろう……というか捨てられた子犬の

ような目をしたコイツを横目にバスルームにいけるほどあたしは図太く出来てないだけだが

岩「あのな、さっきからなんか胸がざわざわするというか……ムズムズするというか……」

……なに？

岩「そこでひさ子、これがなにか教えてくれないか？」

ひ「色々すっ飛ばしたな……さっきってメシ食った時か？」

……つかなんであたしに聞いたんだ？」

少なくとも暑いときに聞きたい話ではないような気がする……

岩「ああ。あと理由だっけ？胸がざわざわする……胸に関することならひさ子に聞くのが一番だろうからな。」

ひ「また珍妙な喧嘩を売ってきたな」

濡れた髪をタオルでワシワシしながら表情を全く変えずにいきなり右ストレートを打ち込んでくるとは……

岩「ひさ子もこんなざわざわを経験してFになったのか？」

ひ「だから勝手にFとか決めるなって言っとろーが！！」

岩「え……じゃあまさか……Gなのか？」

ひ「なんで人の話を聞かないんだ……」

天然。アホの子。

そんなワードが浮かんできた。

……目の前の人物を普通の奴だと思っではいけない。

初対面の奴はキワモノ揃いの戦線の中で数少ない常識派に見える事だろう。

……だがその実、常識派というよりは常識「破」。音楽キチで天然。

音楽以外はぶきつちよな女の子。クソ、可愛いじゃねーかチクシヨ  
ー。

岩「……で、どうなんだ？」

ひ「ねーよ、なかったよ……」

関係ないのか……と岩沢は落ち込んだ……落ち込むな。岩沢はその  
ままでもいいんだよ……いや、だからこそいいんだよ。

岩「んじゃこれは何なんだろう……」

ひ「具体的にどうモヤモヤするんだよ？」

岩「いや、なんか滝沢……あいつの事が妙に頭から離れないって  
うか……こう……ダメだ、わからない」

ひ「……ほほお」

それはまさかアレではないだろうか。

ごめんな岩沢、さっきはアホの子とか思っちゃまって。

ひ「岩沢、お前滝沢が気になってんじゃねえか？」

岩「気になる？」

ひ「だから、好きなんじゃないか、って」

岩「……わからない」

でもそのうち陳腐なラブソング歌い始めたらどうしようか、とか心  
配してしまう。近年のJ-POPのようなアップテンポで軽めのメ  
ロディーにキャピキャピ（死語）した媚びた歌声で……いや、ない  
な、こいつに限ってそれはない。

……でももし歌ったら……想像してみる

find a way あなたと♪

found out 見つける♪

息継ぎさえ出来ない腕の中♪

……うわあー。

やだ、こんなの岩沢じゃない。  
でもずっとモヤモヤされても困るしなあ……

岩「サスペンションブリッジエフェクトってやつかもしれないし……」

ひ「吊り橋効果って言えよ。」

……うだうだ言ってないで吐き出して来たらどうだ？ そう考えるくらいなら……要するに、そういう事なんだろうしさ。

案ずるより産むが易しって言うだろ？」

岩「……」

コクリと頷いたものの……こりゃダメだね。岩沢がそんなに器用じゃないのは知ってるし……どれ、一肌脱いでやるとするか。  
ここまで考えた所でじわりと目に汗が入る

……うん、明日。今は風呂に入る。

朝、相方は低血圧のせいでまだまだ覚醒していない。

飯でも食おうと思って食堂に行くところちょうどよく目的の人物を見つけた、日向と音無のオマケ付きだが。

四人掛けのテーブルの空いた席に座り、当たり障りのない会話をしながら朝食をとらせてもらう。……そして本題。

ひ「お前さ、岩沢の事どう思うよ」

ブツ、と隣で日向が音無の顔に半熟気味のスクランブルエッグを吹き出したようだ。

でもそれにはきたねえよと言いながら一瞥しただけで、すぐ滝沢に向き直ると目を見て返答を促す。

ひ「……とりあえずおちつけ」

滝「……おう」

魚の骨と頭もまとめて口に含んでバリバリしていた滝沢に突っ込む。そしてたっぷり1分程経った後こいつはまた口を開いた。

滝「子どもは野球が出来るくらい欲しいな……」

ひ「はぁ？」

……過程とかを場外までかつ飛ばして何をほざいているんだろう。

文句無しのホームランだよアホが。

滝「大体セ・リーグ規模で」

日「岩沢死ぬって！……いやもう死んでるんだがな……」

しかも神宮球場で場外、くらのの当たりだった。

……だんだんあたしの中の評価が下がっていく。既に騒がしいけど面白い奴、からアホにクラスチェンジ済み。人間見てくれだけが全てじゃないのだ、間違はなくコイツは日向と同じ残念なイケメン、そういう分類。岩沢、やっぱやめとけて……

滝「あ、すまない、変な事いっちゃったな。

岩沢か、普通に友人として好意を持っているぞ」

なんて爽やかな笑顔なんだろうか

音「……いや、説得力ねーって」

まさにその通りなあたり残念極まりない。

滝「それに俺は岩沢専属ストーリー……じゃない、岩沢の歌を1ファンとしても好きだしな」

また見ていて気持ちよくなる程の笑顔だったけどこいつ最初なんて言いかけた？ストーリーとか言いかけなかったか？

滝「まあぶっちゃけ可愛いと思うんだけど競争率高そうだしなあ……

……近くにいろただけで幸せだよ」

音「お前さり気なく好き宣言しちゃったな」

……岩沢のためにあたしはどうするべきなんだ？

日「……ぬっふっふそういう事なら善は急げだ。岩沢呼んできてやんよ、当たって砕けてみろって」

滝「いや、だから……おいやめろばか」



日向を止めようとする滝沢と満面の笑みで逃げる日向、女子の嗜みに大ウケしそうな光景だがひさは頭を抱えてしまうだけだった。

岩「ん？あたしがどうかした？」

そしてこいつは呼んでないのに来たし。

その手にはきつねうどん、ああ朝ご飯ですかそうですか

日「おお岩沢ちょうど良かった実は滝沢がな……むががっ——」  
滝「ななななんでもないぞ岩沢！」

そこまで喋った時滝沢が日向の口を押さえて……そのままトイレに引きずっていき、それを見たNPC女子が数人黄色い悲鳴をあげた。

————タタアン

女子達からは黄色が消えて青い顔になった。ドラ○もんではない。

20秒後、さっき以上に満面の笑みを浮かべた滝沢がトイレから出てきた。1人で。

ひ「……おい、日向は？」

滝「お腹が痛いそうだからそっとしといてやろう」

……お腹が痛いという状況で何故銃声（二発）が鳴ったのだろうか。

岩「ああひさ子、ゆりから呼ばれてさ、ギルド行くなって言ってたんだけど。何か足りない部品とかある？」

ちょうど食器を片づけてきた岩沢にそう聞かれた。

ひ「いや、当面の間は必要ないかな」

岩「そうか、んじゃ行ってくるから。また後でね

滝沢も一緒行こうぜ？」

滝「ん、お、おう」

滝沢は手をハンカチで拭きながら（……何を拭いている？）岩沢と歩いていった。

……あ、手つないだ。

……はあ、朝からあちい。

## ミス・レイディ(前書き)

時系列は前回の後くらい。  
バトルは書けないなあと思った。

## ミス・レイディ

逢魔ヶ刻。

大禍時とも書く。

幽霊に出会うのが丑三つ時で魔物だとか悪魔だとかに会うのがこの時間帯だと言われている。

幽霊なんか言ってしまうえば俺達なわけだから丑三つ時どころかいつでも会ってるし、悪魔も校長室に行けば会えるが、とにかくそんな時間帯。

赤橙と紫の境界で半分程沈んだ太陽が照らす連絡橋、そこに伸びる影が2つ。

俺は天使……立華奏と1人、相對していた。

なんでこうなったと聞かれたら『悪魔』の思いつきと答えるしかない。ファツ○ンジーザス。

「……ハンドソニック」

そう呟きながら当社比130%の速さで腕を突き出してくる天使。引けた腰でなんとか避ける俺。

……帰りたい。食堂の方から聞こえるcrow songを背景に俺は先ほどもまでの出来事を思い出していた。

—  
—  
—  
—  
—  
—  
—  
—  
—  
—

……5時間前

ゆりが「やわらかステーキ定食（＼900）」を食べたいとかいう理由でまだ前回のミッションから数日しか経っていないのに急遽、オペレーショントルネードを実行する事となった。

こちらとら2、300円のうどんやらで毎日済ませているのになんだか泣けてくる。というかそんなもの買うNPCがいるんだろうか。

「だって食べたいんだもの」の一言で片付けないで欲しい

だからつい

滝「つていうかー。ゆりつてばあ、あんなこと言ってますけどおー。ちよつと、せこくねえ？つていうかあ、貧乏くさいと思うんですけどおー。それくらい自分で買えよつていうかあー。したっぱの身にもなれよつて言いたいんですけどおー。」

……等と文の最後に（笑）が咲き乱れるような、聞いている腹立たしくなるような喋り方で愚痴っちゃっただけなのだ。

まさか遊佐にそれを録音されチクられるなんて思わなかったわけで、あまつさえゆりに呼び出されて正座をさせられるなんて事になるとは言った時は思わなかったんだ。

無論正座させられた俺は神妙な態度で甘んじて罰を受けるようにつとめた……ゆりはその態度を見て、何か考えてくれた部分もあったんだろう、フツと苦笑すると笑顔で

ゆ「作戦終了まで天使の足止め、お願いね。

出来なきゃ陽動班、くび。明日から戦闘班よ。」

……そう告げてきた。今度は文の最後に（はあと）とかついてるような口調だった。「く」と「び」の間には星マークとかも見えた気がする。

だから俺も笑顔でこう返した。

滝「わかりました、やりますよ。極悪非道で可愛気のないリーダー様。そんなんだから五話で人氣が落ちしたんですよ悪魔なリーダー

ー様。

っーか銃なんか撃ったことないですよどうしろっというんですかりーダー様。

あ、もっとひらがなとかふんだんにつかったほうがよろしいでしょうかりーダーさま？」

ゆ「素手で、1人で行ってきなさい」

直後タアンという乾いた音が鳴り、俺が返事をする事は（出来）なかった。

—  
—  
—  
—  
—  
—  
—  
—  
—  
—

岩「……あんたも悪い。ゆりだってそんな露骨に挑発されたら……  
というかどうかするんだ？」

ライブ開始直前に復活して岩沢に事の顛末を話してみたが……

滝「いや、まともにやったら……勝てるわけないだろう？」

椎名ですら勝てないのに……俺に素手でどうしろと。

主人公だからといって無双出来る程世の中甘くない、劉備がタイマンで呂布に勝てると思うなよ。

岩「いばるな……そうじゃなくて天使……」

あっちでご飯食べてんだけど」

滝「……はい？」

……それも既に詰みじゃないか？

たしか10人位でもものすごい弾幕を張ってようやく食堂前で足止めが関の山だったはずだ。それがなに、既に食堂内にいる？

ライブを邪魔しないでどうしろと……

挑発しておびき寄せる？

……無理、あれはぶっちゃけ聖人君子だ。軽く流すだろう

奇襲作戦？

……無理、銃は使えない。バットとかは人目について衆人環視の中じゃ使えない。無論素手じゃ奇襲しても無駄。

岩「……んじゃそろそろ始めるから行くけど……頑張りなよ？」

……

……それが、彼女が陽動班の俺に対して言ってくれた最後の言葉になった……



— — — — —

……なんて事になるとシャレにならないので頑張らなければ……

滝「かくして過去最大の危機を迎えた俺は頼まれたらNOと言えない音無君に救援を求めた。

彼は人望あふれ尊敬の対象である偉大なる同志滝沢の、助けを求める声に感じいつて涙を流しながら笑顔で頷いて——」

音「そんな事してねえ！つかお前のそれはどこの將軍様だよ」

滝「失礼だな。俺は自由を愛している、アレと同じにするな。座右の銘は『命の限り、好き勝手』なくらい自由を大切にしている」

音「自由と好き勝手は違うだろ……」

ごもつともなツツコミである。

音「つかなんで俺を……椎名とかの方が良かったんじゃないか？」

滝「ああ、それはゆりがたいして戦力にならない奴なら連れてってもって……ああ、いや、気まぐれだ」

音「全部聞こえてっからな！」

――  
――  
――  
――  
――  
――  
――  
――  
――  
――

そんなこんなで天使の近くに行くと彼女はにんにくラーメン（チャーシュー抜き）を無表情で啜っていた。

滝「生徒会長、今日は麻婆豆腐じゃないのか？」

奏「おばさんに聞いたら調味料が足りなくて作れなかったらしいわ」  
音「……」

なんだこの空間、違和感しかない、つかこいつら仲良かったのか？

滝「……生徒会長、実は麻婆、ちゃんと確保しましたよ」

そう言うやいなや1、5倍程に見開かれる天使の目。

滝「いやー実は俺、死ぬ前に『はい、あーん』を一度でもいいからやってみたかったんですよ……それが出来ずに死んだのが心残りで

……

生徒会長、俺にそれをさせてもらえませんか？」

ええー……露骨すぎるだろその嘘は……

どんな未練なんだよ……

奏「わかったわ」

いいのかよ……っ！

音無はボケしかいないこの空間で突っ込むことすら許されず1人机に頭を突っ伏していた。

滝「んじゃ目をつぶって口開けてもらえますかね？」

頷くとその通りにする天使。

……クソ、なんなんだこの子……悪い人にだまされてすぐついていっちゃいそうで見ていて凄く不安になるぞ……

……と、疑り深そうに観察する滝沢。お前は何がしたいんだ

滝「……ろっしょーい」

突如どこから取り出したかガスマスクをつけ、蓋のついたバケツのようなもの……その中身の液体を天使の顔面に思いっきりぶっつけた。

音「お前……何してんだ」

滝「……？足留め」

そんな、え？俺なんか変な事した？みたいな顔するな、もっとヤバい事したって意識を持てよ……！

首を傾げながらガスマスクを投げてくる……というかアレは何だ

奏「……甘いわ」

そのままふらついて、顔をしかめるとバタッと倒れる天使

音「……で、なんなんだそれ」

滝「ん？クロロホルム」

音「いやいやいやそれで気絶するとかドラマの中だけだろ……」

滝「高濃度、大量にを経口投与すれば流石にパターンといくし」

よいしょつ、と言いながら天使を肩に担いで食堂から出て行く滝沢。  
それは女子を運ぶ持ち方じゃない気がする。

――――

――――連絡橋

滝「だって流石に男女平等とか言って殴れないだろ……」

音「だから眠らせたのか？」

滝「あ……あー、うん。」

……なんで歯切れが悪くなるんだ

食堂の方からはcrow songの前奏が流れてきた。今日はcrow songだけだっていうからこのまま寝てればすぐ終わるだろうけどさ……

――――このまま天使が昼寝、もとい夜寝を楽しんでいれば良かったのだが現実はそう甘くない  
どうでもいい事だが昼寝も朝寝も読みはひるね、あさねで良いが夜

寝は『よい』と読む、どうでもいい事なのでこれ以上掘り下げはない。

## 閑話休題

うわぁあれ絶対起きてるよな……手足パタパタしててなんか結構かわい……って何を考えてるあの天使だぞ……

奏「降ろして」

滝「……ライブ、そのままにしてくれる？」

奏「？」

……

……ええ」

滝「信じられるかあっ！」

おおっ 投げ飛ばした……

邪魔にならないように隠れてからのんきに感想を呟く音無、なんというかゆりの評価は間違っていなかったと言えよう

滝「……ライブの邪魔はさせねえよ。

フーハアツハツハ、この先に進みたかったら俺を倒していけ!」  
ヤケになった滝沢から出た笑い声とセリフはいかにも悪役っぽいものである。しかも雑魚の。

奏「! ! ……そう、貴方も知ってるのね

それじゃ、行くわよ。貴方なんかには世界は渡さない」

ふえ? と滝沢が聞き返すと同時に天使が構える。

……ああ、もしかしてあの漫画だろうか、というかあの活き活きとした表情そうとは思えない

天使は……やっぱりのあの雑誌読んでるんだろうな……

keyコーヒー片手に音無はすっかり観戦モードに入っていた。

そして冒頭に戻る

滝「負けてらんないんだよ! あんたなんかにはいつひでぶっ!」

おお殴った。

ハンドソニックスをなんとか避けた所に間髪いれずに小さなグーを繰り出した。親指を中に入れて拳を作る、俗に言うおともだちパンチ。言い方は可愛いがくらった滝沢はきりもみして吹っ飛びながら着地、4 m程飛んだだろうか。

バウンドしたりザラザラのアスファルトに顔面やら手やら足やらを摺り付けながらまた滑走し、更に3 m程摩擦力を存分に活かしてようやく停止した。

絵がついてたとしたら三浦建太〇あたりが描いててもおかしくない惨状である

滝「……」

ゆらりと起き上がる滝沢を見て、案外タフなんだなあ……とか相変わらず呑気な事を思いながら缶を傾けるあたり音無もこの世界に慣れてきていた。

鼻血を出していたり、額から出血していたり、目蓋が膨れていたたりR15タグの本領を発揮している程度に悲惨だが……

例え全身バラバラになっても一晩で元通りなこの世界では全治1、2時間といった所だろう。

後方ではcrow songが4／4から2／4拍子に転調、そして最後のサビにさしかかっていた

そーいや俺が初めてオペレーションに参加したのもcrow songが流れるこんな夜だったな……

穏やかに月を見上げると人影が月に被さった。

今度は縦に回転しながら吹っ飛んでいた。ツカハラ、ムーンサルトとも言……ああいう感じに。ただし頭は地面に激突しているから手を使わないバックハンドスプリングか？この際言い方はどうでも

いい。

そしてそのまま10 m程滑走した所でゴキヤリと嫌な音をたてて動かなくなった。

全治4時間に伸びただろうか、うつ伏せになった滝沢を起こすと「うわっ」とか叫んでしまう位に酷い状況と言える。小学生達が大きめの石の裏を覗いてから「きもっ」と後悔するレベルで。

音「おい、生きてっか？」

滝「……器が違う、が器は器だ。中身が伴わなきゃ入れ物に過ぎない……」

音無は強がり全開なそのセリフを聞いて、中身が伴ってなくてもやばいくらい強いのにまだ成長すんのかよ……無理じゃん。と思った。同時に戦う力で言うならコイツの器はコーヒークップの下に置く受け皿程度だろうなあとも思ったりした。

奏「それじゃ、お大事に」

天使は近づいて来るとそう言って食堂の方を向き……

滝「行かせないって言っとうろが……」

うつ伏せのまま天使の足首を掴んだ。

おい、それはだめだって。

長い刃物……刀とか持つてる相手の足首を倒れながら掴むとか漫画とかじゃよくあるシーン。

9割方手首が飛ばされて終わる。

滝「麻婆豆腐の食券3枚でお願いします……」

音「結局買収かよ」

奏「……5枚」

おい天使、それでいいのかお前。なんというか俗過ぎるだろ



滝「……4枚」

奏「5枚」

滝「……4枚と缶ジュース1本」

奏「5枚」

酷くセコい戦いが続く中、食堂の方から小さい紙、食券が飛んできた。ライブは無事終わったようだ。

滝「よっしゃ勝ったアツ！」

滝沢はクビを繋いだ事がよほど嬉しかったのかすぐ復活してガッツポーズを決めていた。

と、天使は横で首を傾げながらも手を差し出す。

奏「5枚は？」

マイペースを貫き通している天使、こいつ絶対天使なんかじゃないだろ。

滝「えーあれはただの嘘っていうか……ライブ終わったならもう行っているよっていうかー」

うわっ最低だ。

今回この男、嘘に騙し討ちとおおよそ主人公とはかけ離れた事しかしていない。ジャ○プだったら即クビである。

――――

奏「そう……」

軽くうなだれる天使、なんだか悪いことした気分になってくる。…

：悪いことしたか。

滝「まあ3枚くらいならおごってやっても……」

流石に可愛いそうになってきたので、流れてきたalchemyに  
耳を傾けながらそう……

耳を……傾け、頭を傾げる

天使と目があった。

同時に食堂を見る。

アンコール！の声とギター、ベース、ドラムの音が聞こえてくる。

音楽キチ、その言葉が脳裏に浮かんた

滝「5枚受け取っていただけないでしょうか」

奏「10枚」

滝「はい……」

## ミス・レイディ（後書き）

※クロロホルムは用法用量、適切な知識を持つ人の下で使用してください。どうかそもそもそんな状況あんまりないと思いますが……劇中の使用量だと現実世界の場合眠りから目覚めなくなる恐れが……というかほぼ確実に、ええ。

大変危険ですので真似しないでください。

## 未来の破片

暑い。

ダルい。

陽動という任務柄か、戦線で1、2を争うミニなスカートを穿いた少女がそんな事を思いながらギターケースを肩にかけ、食堂の階段をノロノロと登っていく。

短く切られた紅の髪は軽く湿り気を帯びて、額から流れた汗が半分程開いた目に入り顔をしかめている。

そしてこれまた戦線でも1、2を争う……いやこれは1位。そんな健康的かつ綺麗な太腿にも汗が浮かんでいる。

滝沢はそれをローアングラー化して覗いているNPC男子の頭を掴んで「次は無い」と軽く脅してから階段を登っていく。

女子、しかも岩沢のスカート覗いて鼻の下伸ばしている奴はNPCだろうが関係ない、

死ぬがよい。

……いや、俺は別に覗こうなんて気はなかった、視線を追ったら偶然見えただけだ。俺ハ悪クナイ。

滝「練習お疲れ様、か？」

岩「……滝沢か、いや暑くてね……。練習もドラムもギターとか無いからおやすみだ。」

とりあえず滝沢はテーブルの反対側に腰を下ろしながら聞いている。涼みに来たんだ、半分程減ったボルヴィックのボトルを揺らしなが

らそういう旨を伝えてくる。

岩「それに部屋で1人いるよりあんたという方が楽しいじゃない？」  
滝「……あ、ああ」

サラッと言われて滝沢は口をつけていたペプシを吹き出しそうになる。お陰で炭酸が少し鼻に入って割と大変なようだ。

――――――――――

そんな俺を見ながら、岩沢はプツと吹き出しながら軽く芝居口調でこう言った

岩「……というのが建前でした、とさ

部屋も風吹かなくて暑いし涼みがてら暇つぶしになる事ないか、って」

滝「……さいで」

いやどーせこんなんだと思いましたがねー……と自分を誤魔化すのにも少し慣れてきた。感傷的になりながら缶の中身を呷る

岩「……ああそういうえば聞いておきたい事があったんだけどさ……

あんたとあたしは付き合ってるのか？」

今度こそおもいつきし中身をぶちまけた。

なんとか首を捻ったせいでペプシのシャワーを浴びたNPCが物凄くこちらを睨んでいる。正直すまん。

でもすぐ視線が岩沢に釘付けになる。え？岩沢さん？なんでいんの？  
みたいな……お前もファンか。

滝「場所を変えないか？」

岩「……そうだね」

――――

場所を変えと言っても特に行くアテがあるわけでもなく……外に出て歩いているとベンチを見つけたのでそこに腰を下ろす。緊張していたからドカッという擬音が聞こえた気がした。（隣のはちよこん、みたいな感じだが）  
気まずい。

ちよつと緊張をほぐしてからキッチンと言おうと思って食堂を出たのにこれじゃ意味がない。唇がカサカサする。

滝「えっと、だな。もし岩沢が嫌じゃなければ……」

岩「嫌じゃなければ……？」

次の言葉を出そうとして、俺はつい黙り込んでしまった。隣を見れば下を向いて表情を隠すような姿があるだけだ。

と、何も言わない事を不審に思っかこっちの方を向いた。微かに

笑みを浮かべている、ヤバい。かわいい。

滝「俺と――」

「いっわさわさーん！」

遠くから聞こえた声に邪魔をされた。

……ひどい。誰だか知らないがひどい。

誰だかとかどうでもいいし関係ない、俺の理性と本能と第六感、天使と悪魔達が全会一致でこう言っている。

「邪魔者を排除しろ、ふざけんな」

ユ「流石岩沢さん今日もカッコいいですね  
って、うわ。滝沢変態もいたんですか」

滝「なんだその滝沢先輩、みたいなイントネーションは。ってか『  
うわ』って言うな、どんなイメージだ俺は」

ユ「岩沢さんをたぶらかす悪い人？」

本人の目の前で酷い言われようだ。……なんか恨み買うような事したか？

岩「……ユイ、今ちょっと……そう、大事な話をしてるからまた今度にしてくれないか？」

ユ「いえいえそうはいきませんって！

岩沢さんに悪い虫がつかないようにするのもファンのつとめと言いますか。それに岩沢さんに男を知って欲しくないっていうか？」

……後者だ。絶対後者の理由だ。自分の好きなアイドルに彼氏が出来て何故かキレてしまうファン、あれと同じ部類。

岩「いや、だから」

ユ「だーめーでーすー」

岩「話したい事が」





さっつきからNPCの視線が痛い。

当たり前だ。『あの岩沢さん”に手を引かれて』いたらそりゃ注目される。

というか見られて気づいたけどなんか岩沢のファンって女子の方が多いよなあ……なんつーかカッコいいし髪とかもユニセックスな感じだからか、か？

少なくとも戦線の男子に勝てる奴なんかいない。音無と日向みたいな『そういうアレ』になると話は別かもしれないが。

岩「よし、ついたぞ」

どうでもいい事を考えていると連れて来られたのは誰もいない空き教室の前……

滝「……そーいやここで」

キスしたんだっけ……

岩「ちよつと……あんた、なんで今そーいう……」

見るとかなり困ったような顔をして頬を染めている。

可愛い、なんて破壊力だ……俺の理性に大ダメージ、もといdieダメージを与えてきた。理性即死。

滝「岩沢……」

岩「ひゃい!？」

思わず肩に手を置いて……

関「あれっ、岩沢さんなんているんすか？」

入「ほんとだー、どうしたんですかー？」

いつもなら気だるそーな顔で時間ギリギリになってから来るのに「

関「そーそー。しかもやり始めるとこの人なんかやってるんじゃないね

？ってくらい活き活きした顔なるしねー  
ってあれ今日お休みだよね？」

頭にクエッションマークを浮かべている2人を後目に、思わず手を離して握り拳をつくるとガンッと最寄りの壁を殴った。目には見えなくてもヒビくらい入ったんじゃないか？というくらい力を込めて殴った。ああ、うん、ヒビが入ったのは壁じゃなくて俺の指の骨の方だが。

隣を見ると岩沢も同じ体勢で固まっていた……というかひどい言われようだな

関「よくわかんないっすけど暇なら遊びま」  
岩「……行くよ」

――  
――  
――  
――  
――  
――  
――  
――  
――  
――  
――

倉庫

椎「小僧、何をして……岩沢も一緒か？」  
滝「次！」

自販機前

高「おや、こんにちは。……最近よく一緒にいるようですね」  
岩「……次だ」

本部

滝「お前らなんか俺に恨みでもあるのか!？」  
ゆ「何よいきなり。わけわかんないんだけど」

—  
—  
—  
—  
—  
—  
—  
—  
—  
—

あれからまたしばらく足掻いたが、まるで狙われているかのように邪魔にあった。その度に俺は壁を殴って、内心悶絶しながら澄ました顔して移動を繰り返した。それを繰り返してるうちに、だんだん痛みは治まっていった。痛いのに慣れたか痛覚が麻痺したかは、この際どうでもいい。

だが痛みは治まっても腹の虫は治まらない。何なんだよ、もう泣きてーよ、歩きながらちよっぴり泣いちゃいそうになったよマジで。

岩「……ついた」

ああ、そうなのか……次は誰に乱入されるのやら……まだ来てないヤツ的にTKとかかなあ。ああ、でもユイは2回来たからなあ、そんなのあんまりあてなんねーか。

岩「あたしの部屋だ、ここなら今は誰もいないし、邪魔されることもないはずだ」

滝「へー」

確かにねー、昼下がりの女子寮は人気なんてあんまりないし。授業は教室棟でやってるから日中は静まりかえっているくらいだ。

滝「っておい！」

俺はそんな静かな空間を軽くぶち壊した。

いつの間にか女子寮までついてきてしまっていたらしい。催眠術だとか超スピードでは断じてない。

岩「別に前にも来たんだから良いじゃない」

いやいや前とは状況が違いうだろう。そもそも何の話をしていた？

前は計5人で飲み会、今回は？

誰もいない女子寮、部屋で2人、告白。

……はい、無理。なんだかんだで一応見つかるマズいので部屋に入っていたが……。

滝「いいか岩沢、男は狼なのだから気をつけろ  
年頃になったなら慎むんだ

この人だけは大丈夫だなんてうっかり信じたら駄目だ」

まったく、俺が悪い人なら大変な事になってるぞ……

どこぞのアリスさんがSOSしそうな言い回しで言うとう立ち上がる  
うとするが、袖を掴まれ思わず体勢を崩した。

岩「あんたは……あたしと一緒に楽しくないか？」

滝「いや、それは……ない。楽しいに決まっている」

岩「あたしもあんたと一緒だとなんか楽しい……だから、その、あ  
んたが嫌じゃないなら……その、そういう関係に……」

滝「岩沢……嫌なんて言うわけないだろ……俺も————」

そんな事女の子に言わせちゃ駄目だろう

俺は彼女の両頬に手を当て……

ひ「あれ？岩沢いつから……」

首を曲げるとバスタオルを体に巻きつけたひさ子と目があった。ど  
うせこんなだとは思ってたよ……

3秒後、ひさ子によって前回この部屋に来た時と同じ方法で、端的  
に言うとう首根っこ掴まれて地上十数mのベランダから叩き出された

その後帰ってきた天使の「そう、またなのね」という声とともに前回と同様の理由で肅清されたのは言うまでもない





## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2965r/>

---

Find a Meaning of Life

2011年10月13日06時48分発行